遊戯王5D's×ペルソナ３　Episode yourself ～ Half moon

歌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王５Ｄ'ｓ×ペルソナ３　Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ　～　Ｈａｌｆ　ｍｏｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ７２７３Ｔ

【作者名】
歌音

【あらすじ】
ニュクス戦から約２ヶ月。３年生になったキタローこと神無瀬紫音＞かんなせ　しおん＜は、月光館学園とデュエルアカデミアの交流交換生としてネオドミノシティへと赴くこととなった。
新たな環境、新たな仲間、そして新たな絆が交錯し、紫音の運命は目まぐるしく変わって行く。
学園での生活が終わる頃に、紫音は何を掴むのか……

カナタヨリ（前書き）

・この作品はペルソナ３と遊戯王５Ｄ'ｓのクロスオーバー作品です。
ペルソナ３の男主人公（以下　キタロー）が、５Ｄ'ｓのキャラクター達とデュエルしたり、絆を育んだりしつつ、大切なものを探し求めて行くストーリーです。

・登場キャラクターは、ペルソナ３、遊戯王５Ｄ'ｓ、遊戯王５Ｄ'ｓタッグフォースに登場したキャラクターのみで構成し、オリジナルカードやオリジナルキャラクターなどは出さないで進行していきます。
（ただし遊戯王ゼアル初出の次世代の技術、エクシーズ召喚は使用します。
そのため、本作でのカードゲームの正式名称を、遊戯王ＺＥＸＡＬオフィシャルカードゲームとさせていただきます）

・カード及びデュエルの展開はＯＣＧに準じます。
従って、本作では『カードゲームとして実際に回るデッキ』での勝負が基本の展開となります。
各キャラクターの使うデッキも、その概念に従ったデッキ構成に多少の改変を加えていますので、
あくまで
『このキャラクターの使っているデッキ』を
『実際のカード』で

『回るように組む』際の参考として考えていただければ、
と思います。

そのため『奇抜な展開のデュエル』を期待している方には、
やや盛り上がりに欠ける点があるかもしれませんが、
できるだけ精進致しますので、
皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

・登場キャラクターの生死については独自の解釈をしています。
よって、公式で死んでいるとされるキャラクターも
ストーリー進行上、登場する場合があります。

・キタローの名前は　神無瀬　紫音　＜かんなせ　しおん＞　とします。

カナタヨリ

鼓膜をゆさぶる風の
うなりで目を覚ました。

髪が頬を激しく叩く
ちくちくとした痛がゆい
感触に、
ひらいたばかりの瞳を
すがめた。
途端、たまに自分でも
うっとうしいと思うほどに
伸びた前髪が、
後方に流れて視界をひらく。

痛いという表現が
ふさわしいほどに真っ白な月が、
両の目を焼いた。

ほんのひとかけらの
欠けもない、真円なる月。

それはこの目に宿る
小さな宇宙の星々さえも
消し去ってしまうほどに明るく、
ぽつりと、しかし大きく咲いていた。

夜闇の中、彼はただ一人立ち尽くしていた。

……

……

>i29911—3844<

0

２０１０年４月２３日　金曜日

「ねおどみのしてぃ、
ですか」

聞き慣れない単語に、
彼は眠そうに細めていた目を
どんぐりのように開いた。

小首を傾げた拍子に
重そうに垂れた右の前髪から、
普段は隠されている彼の深蒼の瞳の
一端を垣間見せた。

「そう。聞いた事ない？
『遊戯王』ってカードゲーム。
それが文化の一部として奨励されている特別区域よ」

普段はものぐさな
担任教師の早い口調に、
ともすればうららかな日差しに
持って行かれてしまいそうな意識を

気力でつなぎ止め、

「あの……何故かバイクで
走りながらカードゲームをする
っていうのが盛んな、
あそこですか」

「あぁ、そうそう。
不思議よねぇ。
なんでバイクでカードゲームなのかしら。
斬新ってやつ？
先生若いつもりだけど、
最近の流行はよくわかんないわ」

眉間にしわをよせつつ考えていたが、
ふいに彼女はこちらに目を向けると
有無を言わせない雰囲気をはらんで、

「突然でなんだけど、
君、来週の月曜日から
その街に行ってもらうから」

「……はぁ」

未だにピンと来ないらしい彼は、
どこか上の空で相づちをうった。

私立月光館学園高等部にて、
今年度の生徒会選挙が行われたのが
今から一週間前。

穏やかな時の流れに背を押されて、
この春三年生にあがった彼ら
元二年生組の５人は、
来年に控えた『受験』
という過酷な運命に、
足取り重くそれぞれの未来へと
歩を進めていた。

特に地域でも有名な
進学校として名高い月光館学園である。

受験という単語への
過敏さも一倍強く、
三年も始まったばかりだというのに
すでにシーズン終盤さながらに
各クラスは殺気立っていた。

誰もがあらゆる意味で、
自分の事に手一杯。

そんな中、
生徒会のような厄介ごとを
率先して引受ける物好きなどいるはずもなく、
誰もが想像した通り、
役員候補の選出は混乱を極めていた。

――――――が。

「……」

『……』

収拾不能の水掛け論が
あちこちで飛び交う中。

彼こと、

神無瀬　紫音＜かんなせ　しおん＞は、

自らに向けられたクラス中の
様々な視線に気づく事なく、
深い海を思わせる紺の髪を
ゆらゆらと揺らしながら

遠い夢の世界へ旅立たんと
船を漕いでいた。

時折思い出したかのように
ぴくりと震える彼の長い睫毛、
柔らかな陽光に溶けてしまいそうな
淡い色をした唇から漏れる
規則正しい吐息は、
学生のみならず教師までもを
魅了するに十分な効果を持っていたが、
時として自身の望まない方向へ
効果が及んでしまう事も少なくはないのであった。

「よぉ、お帰り紫音。
あっと、今は栄えある
我らが学び舎の生徒会長さんだっけか？」

同級生にして同寮生の
多分の皮肉を孕んだ挨拶に迎えられ、
紫音はあぁ、などと言葉少なに返して
彼の脇を行き過ぎた。

と、そんな紫音に自称親友、

伊織　順平＜いおり　じゅんぺい＞は
慌てて行く手に立ちふさがり、

「あぁ！俺っちが悪かったから、
そんな冷たくしないでくれよぅ！」

言って、ほぅら、お手上げ侍、
などと軽く両手を上げて
おどけてみせる彼に苦笑しつつ、
紫音はラウンジの手近なソファに腰掛ける。

それを見た順平はほっと息を吐くと、
やけに機嫌良く向かい側のソファに
どかりと座り込んだ。

「いやね、俺っちも
別に悪気があったわけじゃないんですよ。
たださ、お前があの桐条先輩の
後釜にすわった時は、
やっぱりなって思ったんだよ。
なんてーか、しっくりくるってか言うか、さ」

「なにが？」

紫音は特にこれといった考えもなく、
話のつなぎとして聞き返しただけであったが、
順平は大げさなほどに驚いて、

「えっ？
あ！い、いや、

深い意味はねーんだけどさ。
ほら、
お前成績も優秀だし、
地味に顔広いし、
前年度じゃ桐条先輩の頼みで
生徒会手伝ってたじゃん？
だから、流れでいくと自然かなー、
なんてさ」

順平は自身のトレードマークの帽子の上から
がりがりと乱暴に頭をかく仕草をして、
しどろもどろにそう話した。

視線を明後日の方にさまよわせるさまは、
まるで漫画のようで
思わず笑いが込み上げそうになった。

雰囲気の緩みに気づいたのか、
順平は決まりが悪そうに
肩をすくめたため、
紫音は今度こそぷっと息を吹き出した。

順平自身がどう思っているのかはわからないが、
紫音にとってこういったやりとりは
数少ない楽しみの一つだった。

彼や他の級友達との
何気ないこんなことが、

自分でも不思議なくらいにいとおしく、
なつかしかった。

何故そんな気になるのか、
紫音自身全くわからないのだが。

ただ、
紫音はこの友人を見ていて、
たまに思う事があるのだ。

自分は何か大切なことを忘れているのではないか――――――と。

「なぁ、紫音」

ふいに名前を呼ばれて、
紫音は気づかぬうちに沈んでしまっていた
思考の淵から現実へ引き戻された。

反射的に顔を上げると、
先とは打って変わって
真剣な順平の顔とぶつかった。

眉間にしわを寄せ、
じっとまっすぐにこちらを見る。
その視線に紫音はどこか、
自身の心の奥を見透かされているような気になった。

何故かはわからなかったが、
胃の辺りがひやりとした。

「おまえ、さ、去年の事――――」

なぜか、こころがきしむ音が、きこえた気がした。

「――――――ーやっぱ、いいわ」

ふっと息を吹き出して
表情を緩める順平に、
紫音は目をしばたたかせた。

ぱちぱちとまばたきを
繰り返す紫音に、
今度は順平が盛大に
吹き出していた。

1

２０１０年４月２６日　　月曜日

紫音がその街に降り立った瞬間に感じたのは、
どこか全く別の国…
いや、世界に迷い込んだような錯覚だった。

月並みな表現ではあるが、
たかだか十数年の自分の人生では
それがせいぜいであった。

街で見かけるようなチカチカとするだけが取り柄の電光掲示板や、
都会のシンボルのようにビルの壁に張り付いている
大型のテレビといった野暮ったいものはなく、
変わりに並ぶは美しい空を背景にしながらも
スクリーンに鮮明に映し出された、
広告やテレビ中継。

建物は白で統一され、
クリーンかつ爽やかで
理想の街並みを見事に演出している。

行き交う人の多さは都市の大きさに比例していたが、
都会の雑然とした空気を醸しながらも、
人の流れさえも緻密に計算されたような
確かな洗練さがうかがえた。

それはまさしく映画の中でしかまみえないような、
近未来の風景だった。

巖戸台も日本では発展を遂げた学園都市だったが、
この街には到底及ぶまい。

ここまでの道すがら
ずっと耳を覆っていた
お気に入りのヘッドホンを外すと、
街のざわめきが直に耳を通り抜けた。

ちょうど手前のスクリーンで、
先ほどまで映し出されていた
デュエルと呼ばれるカードゲーム大会の中継がＣＭに切り替わった。

今月頭から有料配信されている新譜のＣＭだった。

確か今年のデュエル大会の公式テーマソングだ。

誰が歌っているのかは忘れたが、
絆をテーマにしたアニメソングのように
力強く、熱い歌だ。

絆、か。

子供じみた夢を孕んだその歌詞を、
ふっ、と鼻先で笑った。

どうしてか、
胸がじくりと膿んだように痛んだ。

痛みを振り切るように
紫音はヘッドホンで耳をふさぎ、
新しい街の雑踏に紛れるように歩きだした。

出発は普段より2時間早かった。

本日より紫音は
ネオドミノシティにあるという、
デュエルアカデミア高等部との交流交換生として、
週3日間交流先の学校に通う事となる。

ネオドミノシティとは、

正式名称
『遊戯王ゼアル
オフィシャルカードゲーム』が
街の成り立ちと文化の基盤として
推奨されている特別都市であり、
世界中にいるデュエリストの間では聖地とされている。

この説明では、
まるで観光資源に乏しい地方都市が
娯楽を大々的に掲げて売り出しているだけのように思えるが、
実体は科学技術が異常に発展した世界規模の産業都市である。

その技術は常に
世界の３０年先を行く、
とまで言われているらしい。

「はい、じゃあ本日９時より、
デュエルアカデミアネオドミノ校
高等部の指示に従って。

月光館学園を代表して行くんだからね、
節度ある態度に基づいて行動するように。

てか、何かあったらあたしのとこに苦情くるんだからねー。
しっかりしてよー？」

前年から引き続き
紫音のクラス担任をつとめる鳥海教師は、
朝の空気を眠そうに

吸い込みながら一息にそう、
まくしたてた。

紫音が、はい、
とだけ返事をすると、
鳥海教師はよろしい、
と満足気にうなづいた。

「それと中間や学年末の試験は向こうで受けてね。
向こうの試験結果が
こちらの成績として反映されるようになってるから、
くれぐれもサボらないように。

って、まぁ伊織じゃあるまいし、
君なら大丈夫よね。

じゃ、あたしからは以上ね。
後はあっちの先生や生徒と
うまくやってちょうだい」

デュエルアカデミアまでの登校経路は
渡した紙に書いてあるから。

そんないつも通りの
アバウトな説明でくくった鳥海教師は、
手続きを済ませた紫音をにっこりと送り出した。

失礼しました、と

型通りの挨拶をして
職員室の扉を閉める。

滑りのいい引き戸の立てる音の中に紫音は、
姿が見えなくなって
安心したのであろう鳥海の独白を聞いた。

――――――それにしても彼、
春休みに入るまでは
すごくしっかりした雰囲気になってたのに、
一体どうしたのかしら。

何かまるで……

「紫音さん」

扉の向こう側の声に集中していた紫音は、
背後からの声にはっとして振り向いた。

「……アイギス」

紫音はふぅ、と息を吐き出して彼女に向き合った。
窓から注ぐ朝の弱い日差しに
煌めく金の髪、
空の色を映すビー玉のように
丸い無垢な瞳が特徴的な少女――――アイギス。
「おはようございます、紫音さん」
彼女は九十度を厳守した
折り目正しいお辞儀で
紫音に朝の挨拶をした。

アイギスは昨年秋に
紫音と同じクラスに
転校してきた少女だ。
昨年は寮も一緒で、
紫音や順平らとクラスメイトとして仲良くしてきた。
今は同じく級友の岳羽ゆかり＜たけば　ゆかり＞と共に、
月光館学園の女子寮に在籍している。
それにしてもこんな時間に

彼女に出くわすとは意外である。
紫音の記憶違いがなければ、
彼女は部活や委員会等には所属していなかったはずだ。
実際登校時刻まで一時間以上もある今の時間に、
アイギスと会った事はこれまでなかった。

「早いね。
何か学校に用事でも？」

そう声をかけると、
アイギスはびくりと
こちらが驚くほどに体を震わせて、
小さく、いえ、と答えた。

それっきりアイギスはうつむいて、
時折何か言いたそうにこちらを伺っている。

そんな彼女の様子に紫音は一瞬首を傾げたが、
すぐに自分が職員室の戸の前に立ち尽くしている事に気づき、

「あ、ごめん。
職員室に用、かな…？」

「あ、ち、違うんです！」

扉の脇に避けた紫音に、
アイギスは胸の前で手を振った。

そして決心したように、
床をなでていた視線を上げた。

「あの……、紫音さん、
今日から遠くに行かれるんですよね」

転校どころか
まるで今生の別れを前にしたようなアイギスに、
紫音は苦笑した。

「交換交流生として、
一週間の何日かを
他の学校で過ごすだけだよ」

現に寮には引き続き在籍するし、
月光館学園にも
全く顔をださないわけではない。

生徒会や部活の日程によっては、
交流先の学校の帰りに
足を運ぶ事になる日もあるだろう。

しかしアイギスは悲しそうに瞳を伏せて激しく首を横に振ってこちらを見た。

「それでも私の大切は、
あなたのそばにいることであります。
私は、

私は、もう後悔はしたくないであります……」

存外に強い調子で
叫ぶように言うと、
後ろ手に隠していた厚手の白いベルトを差し出した。

ベルトには白いホルスターがついており、
光沢のある何かが静かに収まっている。

紫音は逡巡して、
差し出されたそれとアイギスを交互に見た。

アイギスは転校当初から普通の生徒とは一線をおいた
不思議な雰囲気の持ち主であったが、
級友として一緒に過ごし、
徐々にだが紫音は
彼女の考えも予想できるようになった。

しかし、どうしてか
最近はたまにこうした
彼女の突飛な行動に振り回される事が
しばしばおこるようになっていた。

紫音はアイギスの表情から
その真意を伺おうとしたが、
どこか無機質な彼女の
ガラス玉のように光を反射するだけの瞳からは
何も読み取れはしなかった。

ただ一つ確かな事があるとすれば、
先程発した彼女の言葉通り
おそらくアイギスが紫音の身を
真剣に案じているだろうことだけだ。

紫音はゆっくりと、
差し出されたベルトを受け取った。

それは見た目よりもずっしりと手に重く、

しかしその重みに紫音は
何か途方もないものから守られているような
安心感が胸に広がるのを感じていた。

「旅立ちのお守りであります」

普段の調子に戻ったアイギスは、
やわらかく笑んだ。

まるで母が我が子を慈しむような、
慈愛のほほ笑み。

「そのホルスターは、開けないで欲しいであります。
でも、できるだけ、ずっと持っていて下さい」

耳に優しい声音が
ゆるやかに鼓膜を叩く。

紫音は一瞬、
瞬きをする事も忘れて
手の中のベルトを見つめていたが、
ふっと短く息を吐いた。

「ありがとう」

まっすぐ見つめて伝えると、
彼女は驚いたように見開いて、
泣きそうなほどに
にっこりと笑ったのだった。

朝のざわめきが遠くに聞こえる頃、
紫音はそっと、月光館学園を後にした。

＊

……なせさん

かんな……さん

「神無瀬さん！！」

ばん、と顔のすぐ近くでした物音に、
紫音ははたと意識を浮かび上らさせた。

さらりと落ちてきた前髪を左側だけ手で後ろに流すと、
寝ぼけ眼をこすって
紫音は自身の席の前に仁王のように立ちはだかる少女を見上げた。

「……まったく、
初日から堂々と授業終了まで居眠りを通すなんて、
どういうおつもりですか？」

「すみません、
つい…」

神経質そうに眼鏡を押し上げる少女に、
紫音は口先だけは素直に謝罪した。

実際に紫音が悪いのはもちろんだったが、
何よりこういった真面目な生徒には反抗せず
ひとまず素直に謝った方がいい、ということを、
度重なる転校生活によって紫音は学んでいた。

しかし彼女は紫音の考えなどお見通しだというように、
肩上で切りそろえられた髪を呆れたように揺らして
一つ大げさにため息をついた。

「仮にもあなたは月光館学園の代表であり、
生徒会長でもあられるのでしょう。

普段からもっと自覚をもって生活をして下さらないと。

模範となるべき側がこれでは、
他の生徒に示しがつきませんよ。

そもそも学生というのは……」

彼女の口から淀みなく流れ出るお説教を聞き流しながら、
まさか生徒会役員候補、
さらには生徒会長選出の際も
眠っていたら自分に決まっていました
とは口が避けても言えないな、

などとどうでもいい事を考えた。

交換交流生としてデュエルアカデミアの門をくぐった紫音は、
アカデミアの校長先生だという
恰幅のいい、にこやかな老紳士に温かく迎えられた。

期間中に在籍するクラスへと案内される途中、
すれ違う生徒一人一人から注目され、ひそひそと噂される。

まるで動物園のパンダにでもなったような気分だ。

しかも今回は転校とは違って制服は月光館学園のもののままであり、
ここの生徒ではない事が一目瞭然である。

これで目立つな、という方が無理だろう。

教室に入ると、
その視線はさらに濃厚なものになった。

ずらりと並んだ机の数と同数の生徒たちからの

好奇の視線を全身にあびながら、
紫音は簡単な挨拶を済ませて指定された席についた。

ホームルーム後に始まった現代文の授業では
教師のゆったりとした音読の中、
ひっそりとかわされる自分以外の周囲での意思疎通を遮断するように、
紫音はうつむいて目を閉じる。

学校というある種の閉鎖された世界で
外の世界を意識する機会は意外に少ないことを、
紫音は知っていた。

しかし今、その世界の外の認識を
はっきりと感じさせる　モノ　が身近に現れたのだ。

外部からの侵入者に対し、
人は自らの胸の内で選別し、
ふるいにかけ、天秤で比べる。

想像するだに、
先が思いやられた。

たとえ何度繰り返していても、

紫音はこの雰囲気が嫌いだった。

「……という、理念に沿って、意義のある学生生活を……って、聞いているのですか？！」

反省のそぶりをまるで見せない紫音に
業を煮やしたのだろう彼女の叱咤が、再び飛んだ。

ますます説教の調子をヒートアップさせてしまった彼女を、
さてどうなだめたものか。

紫音が思考していたその時。

「委員長、もうそれくらいにしておいたら？」

凛、とした声が響いた。

紫音、そして目の前の少女までもが、
弾かれたように声のした方を見た。

整った顔立ちにぴったりとはまった
意志の強い切れ長の深い鳶色の瞳。

すらりとした印象ながらも、
けして痩せぎすではなく、
健康的で豊満な肢体。

ドリルカーラーでまとめられた
深紅の薔薇ーブラックローズーのように紅い髪。

どれをとっても完璧で、
まとう雰囲気すら
他の女子生徒とは一線を画した、
華やかさのある生徒だった。

彼女はまるで紫音の胸の内を読んだかのような、
意味深な目配せをちらりと投げかけた。

「しかし、十六夜さん！」

なおも食い下がる彼女に、
十六夜＜いざよい＞というらしい女生徒はにっこりと笑って、

「居眠りくらい、
遠方から来たんだから疲れてて当然でしょう。
それに折角の交流会なんだから、
もっと他に話す事があるんじゃない？
他を知り、私たちの学校を知ってもらう機会を無駄にするなんて

委員長らしくないわよ」
流れるような十六夜の言葉に
委員長と呼ばれた少女は言葉をつまらせた。
寸の間黙していた彼女だったが、
眉間に寄せたしわをほぐすと疲れたように、
それもそうですね、と肩の力を抜いた。
そうして委員長はゆっくりとこちらを向くと、
こうべを垂れた。
「……取り乱してしまってすみません。
思えばまだ、こちらは名前もお伝えしていませんでしたね。
自分が恥ずかしいです。失礼なのはこちらでした」
委員長は数秒前の自身の態度を思い出し、羞恥にやや顔を赤らめた。
先程とは打って変わってしゅん、としてしまった委員長に、
紫音は静かに首を振り、
「今日から、よろしく」
自分でもガラではないと思うほどに、
はっきりとした調子でそう言った。
『怠惰な生徒』から

がらりと雰囲気を変えた紫音に
委員長は一瞬驚いたように目を見開いたが、
堅い空気を打ち払うように
すっ、と手を差し出した。

「ようこそ、
デュエルアカデミア　ネオドミノ校へ
あなたの来校を、心から歓迎します」

紫音はその手をためらわず
握り返した。

「申し遅れましたが、
私は、原　麗華＜はら　れいか＞と申します。
そして、彼女が、」

「十六夜　アキ＜いざよい　あき＞よ」

昼休みも終わりにさしかかった頃、
先の二人に連れられて紫音はデュエルアカデミア校内を歩いていた。

行き先は、校内にあるという、
『デュエルスタジアム』だ。

「次の授業はデュエルの実技なの。
あなたはデュエルをしたこと……
あ、それより前にデュエルは知ってる？」

「モンスター、魔法、罠、
これらのカードで４０枚~６０枚の束を構成して、
相手のライフポイントを０にして勝利する事が目的のゲーム…かな」

アキに聞かれて紫音は、
昨夜ネットで仕入れたおおまかな情報を
そのまま伝えた。

そのたどたどしい答えに苦笑してか、
委員長こと、麗華はうなずいて、

「その通り。
……ですが、今の答えは６５点ですね」
存外に厳しい採点に、
紫音は肩をすくめた。
その様子を楽しそうに見ていたアキは、
「そうね。
今日はあなたもいる事だし、
先生もルールからきちんと説明してくれると思うわ」
さぁ、ついたわ。
言ってアキは、
映画館のホールのような重厚な扉の向こうへ、
紫音をうながした。

再び、はじまりましたな。

あなたの運命の、
新たな物語が。

頭の片隅で、
聞き覚えのある老人の声が響いた気がした。

Lesson1

「デュエルディスクは全員に行き渡りましたか？」

教師の問いに集まった生徒は、
無言で肯定の意を示す。

それに教師は一つ頷いて、

「それでは、これより実戦デュエルの授業を開始します」

教師の宣言に、

よろしくお願いします！

はきはきとした気持ちのいい声が、
デュエルアカデミア　ネオドミノ校
デュエルスタジアムにこだました。

「今回はデュエル初心者の神無瀬君もいるので、
現在公認大会などで適応されている
マスタールール２の一部を確認してから実戦に入ります。
……では、十六夜さん」

教師の呼びかけにアキは、
はい、と返事をして、

生徒たちの前に出た。

「デュエルに必要なもの、『デッキ』『エクストラデッキ』について説明しなさい」

再び、はい、と返事をして、アキはすぅ、と深く息を吸った。

「まず、『デッキ』とは、
デュエルで使用するカードの束です。

基本的にどんなカードを入れるかは自由ですが、
同名カードはデッキ、エクストラデッキ、サイドデッキ合わせて３枚まで。

また、デッキは４０枚から６０枚までで構成しなければなりません。

次に『エクストラデッキ』とは、
特殊な方法でのみ召喚可能な、
『融合モンスター』『シンクロモンスター』、
そして最近追加された『エクシーズモンスター』で構成するデッキで、
枚数は最大１５枚、先にあげた種類のモンスターでのみ構成が可能です」

「その通りです」

すらすらとそらんじたアキに、
教師は満面の笑みで応じた。

「補足として、
大会などで行われる公式デュエルの場合は、
デッキへの投入が禁止されている『禁止カード』、
デッキには一枚のみ投入可能な『制限カード』、
二枚のみ投入可能な『準制限カード』がありますので、
よく確認すること。

制限改訂は三月と九月の年に二回、
行われますので注意しましょう」

教師ににこりと笑顔を向けられて、
紫音はこくり、と一つ相づちをうつ。

紫音が了解したのを確認した教師は、
次に紫音の隣の麗華に目を向けた。

「では、次にデュエルの『対戦方法』と『勝利条件』を、
原さんに解説して貰いましょう」

わかりました、
と今度は麗華が前へ出る。

「このカードゲームでは、
一度勝負がつくことを『デュエル』と呼び、
この『デュエル』を三回行う『マッチ』で勝者を決めます。

デュエルはお互いに
８０００ポイントのライフポイントを持って開始し、
先に相手のライフポイントを０にした場合、
相手がデッキからカードを引けなくなった場合、

各種カードの特殊能力によって勝利が確定した場合に
勝利することができます」

これもまた模範解答としてふさわしいほどの説明に、
教師は満足そうにうなづいた。

「よくできました。
次にターンの流れですが、
こちらは実戦で解説したほうがわかりやすいでしょう。
神無瀬君」

教師に手招きされて、
紫音はゆっくりと前へ出た。

「実際にデュエルをしてみましょう。
今回はこちらで組んだ試験用デッキを貸し出します。
十六夜さん、彼のサポートをお願いします」

「わかりました」

アキはこっちよ、
と紫音の手を引いて、
教師から１０ｍ？ほど距離をとった。

「デュエルディスクを、
利き手と逆の腕に装着して」

紫音は一つ頷いて、
授業開始直後に渡されたデュエルディスクを左腕にはめる。

ディスク裏についたベルトバンドに腕を通すと、
がちゃり、という起動音をさせて
紫音の腕を圧迫しすぎない程度にバンドが締まった。

ディスクのデッキゾーンにデッキを、
エクストラデッキゾーンにエクストラデッキを
それぞれはめ込むと、
ディスクの縁が虹色の光を発して、
収納されていたカードゾーンが展開した。

アキの指示に従って、
紫音はデッキの上からカードを五枚引いて手札とした。

こちらの準備が完了したのを見計らい、
教師はこれよりデュエルを開始します、
と高らかに宣言した。

「説明のため、
こちらの先行で始めますが、
次回からはお互いのデュエルディスクが
自動的に先攻か後攻かを決定しますので、
安心して下さい。

今回はチュートリアルですので、
ライフポイントは４０００で行います。

それでは始めます。

デュエルは『ターン』と『フェイズ』という
区切りによって進めます。

『ターン』は
各プレイヤーが行動を起こす事のできる順番のことで、
先攻プレイヤーより第一ターンとして開始します。

以降は後攻プレイヤーと交互に行います。

『フェイズ』とは、
そのターンに行う手順を明確に区切ったもので、
自分のターンではこれから行う順番に従ってフェイズを進めます。

それぞれのフェイズではプレイヤーの行動に制限がありますので、
注意して聞いて下さい。

まずデュエルが開始されると一番初めに
『ドローフェイズ』があり、
デッキからカードを一枚引いて手札に加えます。

このフェイズでデッキにカードがなく、
カードが引けなかった場合は負けとなりますので
デッキの残数には注意してください。

次に訪れる『スタンバイフェイズ』では、
フィールド上に『スタンバイフェイズに～する』と記されたカード

が存在する場合、
カードテキストに従った処理を行います。

そして『メインフェイズ1』

このフェイズでは、モンスターの召喚と攻撃、守備表示の形式変更、
各カードの効果発動と
魔法、罠カードのセットができます。

各行動はどの順番に行っても構いませんが、
レベル4以下のモンスターの『召喚』、
レベル5以上の自分フィールドのモンスターを
規定の数だけ墓地に送って召喚する『アドバンス召喚』、
モンスターを裏側守備表示で置く『セット』は、
一ターンにいずれか一度だけとなります。

ただし、各種特殊召喚、
セットモンスターを表側表示で召喚する反転召喚は、
一ターンに可能な限り行えます。

私は手札からモンスターをセット、
リバースカードを魔法、罠カードゾーンに一枚セットします。

次の『バトルフェイズ』では、
フィールド上のモンスターカード同士の戦闘を行いますが、
先行は攻撃できませんので、
説明はあなたのターンで行いましょう。

そして次の『メインフェイズ2』は、
『バトルフェイズ』を行った場合のみの発生となりますので、
こちらもその時に。

最後の『エンドフェイズ』は、
ターンエンドを宣言した後、
フィールド上に『エンドフェイズに～する』、
と書かれたカードが存在する場合、
効果処理を行います。

また、このフェイズ終了時に
ターンプレイヤーの手札が六枚以上のとき、
六枚になるように手札を選んで墓地に捨てなければなりません。

以上で私のターンを終了します」

教師の宣言でターンが紫音に移行した。

隣のアキを見ると、
彼女の大きな瞳とぶつかった。

『やってみて』と強く主張するその目に、
紫音は手元のデュエルディスクにはまったデッキに指を乗せた。

「僕のターン、ドロー」

指先に力を込めて、紫音はデッキからカードを引く。

手札のカードと入念に見比べながら、
説明の手順通りフェイズを進める。

「スタンバイフェイズ、効果処理、なし」

ちらりと相手プレイヤーを見ると、
教師ははきはきと言った。

「こちらも効果処理及び、
カードの発動はありません」

紫音は再び手元のカードに視線を落とした。

「メインフェイズ１に入ります。
手札から、『切り込み隊長』を召喚
」

アキに示されたモンスターカードゾーンにカードを置くと、
デュエルディスクの縁がまた光り、
自分の前に二本の大降りな剣を携えた
彫りの深い顔立ちの戦士が現れた。

同時にモンスターのレベルと攻撃力が表示される。

『切り込み隊長』
☆＜レベル＞×３
ＡＴＫ　１３００

実態を持っているかのようなリアルなビジョンに、
紫音はこの街の技術に素直に感心した。

「こちらにカードの発動はありません」
教師の返答に、紫音は
では、とカードの効果処理を進めた。
「『切り込み隊長』のモンスター効果を発動します。
このカードが召喚に成功した時、
手札からレベル４以下のモンスターを特殊召喚します。
手札から『コマンド・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚」
先程と同じように光の中から、
紅い豪奢な甲冑を着た女戦士が現れる。
『コマンド・ナイト』の
モンスター効果、
このカードがフィールド上に存在する限り、
自分の戦士族モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。
それによって、フィールドに並んだ
ニ体のモンスターの攻撃力の表示が変動した。
『コマンド・ナイト』
☆×４
ＡＴＫ　１２００→１６００
『切り込み隊長』

ＡＴＫ　１２００→１６００

「メインフェイズ１を終了します」

「それでは、バトルフェイズの説明をします。
このフェイズはさらに『ステップ』に区切られ、
定められた手順によって進めます。

まずは『スタートステップ』。

『バトルフェイズ』に入る為の宣言を行うステップです。
そもそも『バトルフェイズ』は必ず行わなければならないフェイズ
ではありません。

先行ターン以外にも、
フィールド上にモンスターがいる場合でも
各自の判断によってエンドフェイズに以降しても構いません。

そのため、モンスター同士でバトルを行う場合は、
必ず『バトルフェイズ』に入る事を宣言して下さい。

宣言が終了したら、『バトルステップ』に入ります。

デュエルの最もわくわくする、楽しい部分ですね。

自分フィールド上の表側攻撃表示モンスターの中から、
攻撃させたいモンスター一体と、
攻撃目標の相手モンスター一体を選択して攻撃宣言します。

モンスターがいない場合は、
相手プレイヤーに直接攻撃＜ダイレクトアタック＞することが可能です」

それではやってみて下さい。
との、教師の言葉通りに
紫音は攻撃宣言を行った。

「『切り込み隊長』で、
セットされたモンスターに攻撃します」

言うが早いか、
紫音の声に応じたソリッドビジョンの
『切り込み隊長』の剣がモンスターの影を割いた。

一刀両断されたカードが表を向き、
姿を表す。

それはーーー

「『ダメージステップ』に入ります。

ここではダメージ計算を行い、
戦闘結果を導くステップです。

さて、戦闘ダメージの計算方法は、
攻撃目標となる相手モンスターの表示形式で変化します。

攻撃表示の場合は相手モンスターの攻撃力、
守備表示モンスターの場合は守備力を
自分の攻撃力と比べて判定します。

今神無瀬君が攻撃したモンスターは、
『荒野の女戦士』」

『切り込み隊長』
ＡＴＫ　１６００
←
『荒野の女戦士』
☆×４
ＤＥＦ　１２００

西部劇に出て来るような女性の姿がゆらり、
と現れたかと思うと、
ガラスを砕いたような音を残して
砕け散った。

「神無瀬くんの攻撃したモンスターの攻撃力が
こちらの守備力を上回りましたので、
荒野の女戦士は墓地へ送られます。

ただし、こちらのモンスターは守備表示でしたので、
お互いのライフポイントに変動はありません。

それでは、墓地に送られた『荒野の女戦士』のモンスター効果を発
動します。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

デッキから攻撃力１５００以下で地属性の戦士族モンスター１体を
自分フィールド上に特殊召喚することができる。

その後、デッキをシャッフルする。

私はデッキから『異次元の戦士』を
攻撃表示で特殊召喚します」

教師のフィールドで『荒野の女戦士』が砕けた破片が
きらきらと光を放ち、
その光はやがて一振りの刀を持ち
特徴的な甲冑に身を包んだ少年に変化した。

隣でデュエルディスクの操作サポートをつとめるアキが、
紫音に声をかける。

「デュエルディスクの脇についているボタンを押してみて。
相手の墓地と表側表示のカードが確認できるはずよ」

言われた通りそのボタンを押すと、
紫音の前にレーザースクリーンが展開した。

そのスクリーンをタッチして
紫音はカーソルを相手モンスターに合わせる。

『異次元の戦士』
☆×４
このカードがモンスターと戦闘を行った時、
そのモンスターとこのカードをゲームから除外する。

ＡＴＫ　１２００

「除外……？」

首を傾げる紫音に、アキが素早く解説を入れる。

「普通、破壊されたり使い終わった魔法や罠カードは墓地へ送るのだけど、
ゲームから除外されると
デュエルフィールドの外へ隔離されて
除外されたカードに適用される効果を使わない限り、
このデュエル中では使用できなくなってしまうの」

その説明に、紫音は口許に手を当てて思考する。

教師の説明によると、
攻撃表示モンスター同士の戦闘では、
攻撃力の低いモンスターを破壊して
破壊されたモンスターのコントローラーは、
戦闘で上回った数値分のダメージをライフポイントに受けることになるという。

ただし『異次元の戦士』を攻撃した場合、
『コマンド・ナイト』のＡＴＫの差分４００ポイントのダメージは発生するものの、
攻撃したこちらのモンスターも
一緒にゲームから除外されてしまうというのである。

紫音は顔を上げると教師に、

「残った『コマンド・ナイト』は攻撃しません」
そう、告げる。
どうせ攻撃したところで、
確実な１、１交換がなされてしまうのだ。
残りライフが４００以下でもない限り、
この序盤でボードアドバンテージが削れてしまうのは、
できるだけ避けたかった。
教師はにっこりと笑い、
「それでは『エンドステップ』に入りましょう。
攻撃させたいモンスターが居なくなった時、
『バトルフェイズ』の終了を宣言して、次のフェイズに以降します。
次は『メインフェイズ２』です。
このフェイズは、バトルフェイズを行った場合のみ発生します。
行えることは『メインフェイズ１』と同じですが、
『メインフェイズ１』でモンスターの召喚など回数制限のある行動
をしている場合は、
『メインフェイズ２』では行えませんので、
注意して下さい」
紫音は手札からカードを一枚、

裏向けて魔法、トラップゾーンにセットした。

「リバースカードを一枚セットして、
ターンエンドします」

「それでは、エンドフェイズに
こちらのリバースカードをオープンします。

トラップカード『トゥルース・リインフォース』を発動。

私は効果でデッキから
レベル２以下の戦士族モンスター一体を特殊召喚します。

この効果を使用するターンは
バトルフェイズを行う事ができませんが、
相手ターンに発動している為、
そちらの効果は適用されません。

私はデッキからレベル２の『ジュッテ・ナイト』を守備表示で特殊召喚」

相手のフィールドが再び光り、
江戸時代の捕物用武具と提灯を携えた同心＜どうしん＞姿のモンスターが現れた。

『ジュッテ・ナイト』
チューナーモンスター
☆×２
ＤＥＦ　９００

「それでは私のターン。
ドロー、スタンバイフェイズに入ります」

「カードの発動等はありません」

「メインフェイズに入ります。
私はフィールドのレベル２チューナーモンスター『ジュッテ・ナイト』に
レベル４『異次元の戦士』をチューニング。

エクストラデッキより、
『大地の騎士ガイアナイト』をシンクロ召喚」

フィールドに先とは比べ物にならないほどの光の渦が荒れ狂った。

その中から青と赤に彩られた甲冑の騎士が、
こちらも重装備の愛馬にまたがり、
巨大な槍を掲げて現れた。

『大地の騎士ガイアナイト』
シンクロモンスター
☆×６
ＡＴＫ　２６００

「シンクロ召喚とは、
チューナーと書かれたモンスターと
その他のモンスターのレベルの合計とが
同じレベルのモンスターを
エクストラデッキから召喚する特殊召喚技法です。
シンクロ召喚に使用したモンスターカードは、墓地に送られます。

さらに手札から、『コマンド・ナイト』を召喚」
こちらと同じ『コマンド・ナイト』が、
相手フィールドにも現れ、
その効果によって戦士族モンスターニ体の攻撃力が変動する。

『コマンド・ナイト』
ＡＴＫ　１２００→１６００

『大地の騎士ガイアナイト』
ＡＴＫ　２６００→３０００

「バトルフェイズに移行します。
『大地の騎士ガイアナイトで、『切り込み隊長』に攻撃」

「！」

『大地の騎士ガイアナイト』
ＡＴＫ　３０００
←
『切り込み隊長』
ＡＴＫ　１６００

ガイアナイトがその巨大な槍で切り込み隊長を貫いた。
瞬間、ばりん、と切り込み隊長が砕けて光に溶ける。

ぴぴ、と電子音がして、
自らのライフポイントが差分の１４００ポイント、減らされた。

神無瀬　紫音
ＬＰ　２６００

「バトルフェイズを終了し、
こちらのターンを終了します」

「エンドフェイズにこちらのリバースカード、
『トゥルース・リインフォース』発動。
デッキからレベル２以下の戦士族モンスター
『ジュッテ・ナイト』を守備表示で特殊召喚」

光を割いてフィールドに現れる『ジュッテ・ナイト』を見つめて、
紫音はこの現状をどうしたものかと思考する。

ドローフェイズでのドローカードは、
魔法カード『地割れ』。

相手の攻撃力の最も低いモンスターを破壊する、魔法カードだ。

これを使えば相手の『コマンド・ナイト』を破壊し、
『大地の騎士ガイアナイト』のＡＴＫを元の２６００まで下げる事
ができる。

幸い伏せカードのない今なら、おそらく通すことができるだろう。

紫音は手札と与えられたエクストラデッキを確認した。

しかし、現在シンクロ召喚できそうなモンスターの中に、
ガイアナイトを越える攻撃力のものはない。

やはり『地割れ』使用後は、
こちらも同じガイアナイトをシンクロ召喚し、
相打ちさせるしかなさそうだ。

そうシュミレートして
メインフェイズへの移行を宣言したとき。

――――――我を呼び覚ませ

くらり、とめまいを感じて、
紫音は思わず右手で自らの額を押さえた。

きん、と頭に金属バットで強打されたような痛みがはしる。

ーーーーー我は汝
汝は我ーーーーー

はっと、まるで水中から浮上したように、
意識は唐突に覚醒した。
紫音は辺りを見回して状況を確認する。
しかしそこは全く変わらない世界が広がっている。
気づけばめまいと頭痛も引いていて、その残照すらなかった。
「どうしたの？」
そんな紫音の挙動をいぶかしんだアキが、声をかけてきた。
紫音はそれに、何でもない、と返事をして
先のシュミレート通りに事を進めた。
「手札から魔法カード『地割れ』を発動。
相手フィールドの最も攻撃力の低いモンスターを破壊します」
宣言してカードを魔法、罠ゾーンにセットすると、
フィールドが激しく振動して
それによってできた亀裂の中に
『コマンド・ナイト』の姿は消えた。

「さらに、手札から魔法『戦士の生還』を発動。
墓地に存在する戦士族モンスター、
『切り込み隊長』を手札に加えます。
『切り込み隊長』を召喚。
召喚成功時、効果により手札から
『Ｘ－セイバーアナペレラ』を特殊召喚」

墓地から舞い戻った切り込み隊長と
長い金髪が美しい『Ｘ－セイバーアナペレラ』がフィールドに登る。

『Ｘ－セイバーアナペレラ』
☆×４
ＡＴＫ　１８００→２２００

『切り込み隊長』
ＡＴＫ　１２００→１６００

「レベル２チューナーモンスター『ジュッテ・ナイト』に
レベル４の『Ｘ－セイバーアナペレラ』をチューニング」

宣言したニ体を墓地に送り、
紫音はエクストラデッキを手に取り――――

はらり、と手元から滑り落ちたカードが、
モンスターゾーンにこぼれた。

落ちたカードに反応したデュエルディスクが、カードを読み込んだ。

途端、フィールドに吹雪が舞った。

「――――――――ー！！」

ソリッドビジョンにも関わらず、
冷たい雪の感触と
目も開けられないほどに鋭い冷気が、
紫音を包み込んだ。

ごうごうと荒れ狂う雪けむりの中から、
巨大な流氷同士がぶつかりこすれ合ったような
何かの声がデュエルフィールドにこだました。

全てが凍るような空気の中、

蜃気楼のようにゆらめく巨大な影が姿を現した。

「『氷結界の龍　ブリューナク』……」

うわごとのように紫音はつぶやいた。

それは氷でできた表皮に覆われた巨大な龍だった。

一遍の曇りもない透過したその体は、
それを通してなお向こう側の景色まではっきりと見えるような錯覚に陥るほどだ。

つららを集めてできたような一対の翼は
複雑な模様を刻み、
そこに反射したスタジアムの光がオーロラの幻を見せた。

雪の結晶のような形をした頭からこぼれる息が、
白く、長く尾を引いている。

翼を羽ばたかせるたびに、
ダイヤモンドダストがはらはらと舞い落ちた。

『氷結界の龍　ブリューナク』
シンクロモンスター
☆×6

ＡＴＫ　２３００

殺伐としたフィールドに突如として現れた幻想的な光景に、
紫音は思わずぽっかりと口を開けてみとれていたが、

「ーーーーーっつっぅ」

まるでデュエルの先を促すように先程頭に響いた衝撃に、
紫音は痛みをこらえながら宣言した。

「『氷結界の龍　ブリューナク』の効果発動。
自分の手札を任意の枚数墓地に捨てて発動する。
その後、フィールド上に存在するカードを、
墓地に送った枚数分だけ、持ち主の手札に戻す。

僕は手札のメタモルポット一枚を捨てて、
ガイアナイトを戻します」

ブリューナクが先刻の氷のこすれるような音を立てて、
一声鳴いた。

フィールドから立ち上る
白い冷気をはらんだ濃い霧が
相手のガイアナイトを包み、
それが晴れた時
フィールドからガイアナイトは姿を消していた。

「バトルフェイズに入ります。
『コマンド・ナイト』で攻撃、

続いて『切り込み隊長』攻撃」

「いずれもカードの発動はありません」

ニ体のモンスターの攻撃が、
教師にヒットする。

その合計は３２００ダメージ。

「『氷結界の龍　ブリューナク』でダイレクトアタック」

ブリューナクは体をのけぞらせ、
自身を覆う、全てを透き通った氷のうちに眠らせるような息を吐き
出した。

三たび攻撃がヒットし
教師のＬＰが尽きた事を知らせる無機質な音が、
デュエルディスクから響いた。

それを合図に、
フィールドに並んだ全てのものが
ふっとかき消えた。

夢が終わったように、
それらは残滓も残さなかった。

しん、とした会場に、教師の声が響く。

「デュエル終了。

完敗よ。
プレイングにミスもなかったみたいだし、
とてもうまくやれていました」

「ありがとうございます」

紫音が頭を下げると、
教師はにっこりして他の生徒たちを振り向いた。

「それでは残りの時間は
各自ペアを組んで自由にデュエルをして下さい」

その指示に生徒たちは
待ってましたと言わんばかりに、
一斉に解散した。

「さ、あなたもいってらっしゃい。
デュエルを楽しんでね」

教師のその言葉に紫音は一つうなずいて、
手招きをしているアキたちの元へと歩き出した。

去り際に、教師のぽつりとこぼした独り言が、
紫音の耳に届いた。

「……でも、最後のあんなカード、
貸し出したエクストラデッキに入ってたかしら？」

それはやけに鮮明に、
紫音の頭に響いた。

Lesson1（後書き）

引用：

遊戯王ZEXALオフィシャルカードゲーム　公式ルールブック

遊戯王カードWiki

＊

放課後。

紫音はアキの厚意で
デュエルアカデミア校内を案内してもらうこととなった。

「この学校、大きいだけじゃなくて
けっこう入り組んでるから、
初めは迷ってしまう人もいるの」

一歩先を先導するアキについて歩きながら、
紫音は辺りを見回した。

ネオドミノシティと同じ白を基調とした校舎は、
中央に鎮座するデュエルディスクを模した奇抜な棟以外は、
月光館学園とそう変わらない風景を見せる。

窓から入る西日に時折瞳をすがめながら、
紫音はアキと校内をのんびり散策した。

「ところで神無瀬君、
今日のデュエルはどうだった？」

ふと思い出したかのようなアキの問いに、
紫音は素直に楽しかった、
と感想を述べた。

簡潔な紫音の言葉に、

アキは嬉しそうに笑って、
「よかった。
それならわざわざ遠くから来てもらった甲斐があったわね」

歩いているうちに中庭に出た二人は、
備え付けのベンチに並んで座った。

さわさわと、
ゆるい風が紫音とアキの間を吹き抜けた。

歩道を囲むように規則正しく植えられた
花の散った桜の枝もすでに青々としていて、
紫音たちに次の新緑の爽やかな季節の到来を知らせていた。

「それにしてもデュエルって、不思議よね」

ふいにつぶやいたアキに、
紫音はそちらに顔を向けた。

アキは自分の手元を見つめて、
ぽつりぽつりと、
そのピンク色の薔薇の花弁のような唇から
言葉をこぼした。

「デュエルをすると、

その相手と心がとても通じ合っているような気がするの。
終わった後は、何だかその人との距離が短くなったようで、
勝っても負けても笑顔になれるわ」
優しい表情でそう語るアキの横顔を、
紫音は黙って見つめた。

アキの長いまつげが細かく揺れて、
ここではないどこか遠くに想いを馳せる
彼女の心の震えを伝えていた。

やがてアキは顔を上げると
思い出したように、

「あのね、変な話なんだけど、
あなたとは何だか初めて会った気がしないの。

あなたの持っている雰囲気がどことなく、
私たちにとって
とても大切な人に似ている気がするからだと思う。

あ、勿論、悪い意味じゃなくって。

だから、お昼に委員長に怒られてるあなたを、
何だか放っておけなかったの」

迷惑だったかしら、

と言うアキに、紫音は曖昧に笑った。

自分に似ているとは一体どういった意味でなのか
少し知りたい気もしたが、
それが本当ならばきっとろくでもない奴なのだろうと思った。

両親がいないために、
親戚中にたらい回しにされて
転校ばかり繰り返し、
あげくの果てに全ての物事に壁を作って
知らないふりをしている自分なんかと似ているなんて。

紫音は知らず、
髪で隠した右目を覆うように手を当てた。

過去の記憶を映した瞳はちり、と、
かすかな痛みを表面に焼き付けた。

それは本当に瞳が痛いのか、
それとも弱い心が感じさせる

在りし日の幻影によるものなのか、
紫音にはもはや見当もつかなかった。

「そうだ！」

ぽん、と一つ、
アキは手を打ってベンチから立ち上がった。

その唐突なアキの動作に、
紫音はぎょっとして
反射的に右の目をかばっていた手を離す。

「購買に行かない？

授業で使うから、カードも扱ってるのよ。

まだ、デッキを持っていないけど、
今後この学校で過ごすなら必要だと思うし」

華のように笑って、
アキは手を差し出した。

紫音は急な展開にきょとんとしていたが、
数秒遅れで理解すると両膝に力を入れて立ち上がった。

アキは差し出した手を

少しだけ所在なさそうに振ったが、
特に気にした風もなく、
行きましょ
と、紫音を――――

「見つけたわ！！」

草木のざわめきだけが満たしていた静寂を切り裂いて、
その声は中庭に反響した。

アキが驚いてそちらを向くと、
声の主は素早く近づいて
紫音とアキの間に無理矢理割り込んだ。

「アキお姉様！！

今日は私と一緒に過ごして下さるお約束だったはずでしょう！

私、ずっと校門で張って……
もとい、お待ちしていましたのに！！

それなのに……、
それなのに！！」

若草色の髪をきっちり頭の真ん中で二つに分けた少女は

どこか恐ろしい勢いでアキに迫ると、
びっ、と紫音を指差した。

「こんな汚らわしい生き物、
いや、ゲロ以下の産業廃棄物なんかと
一緒に楽しそうに過ごして！！」

「大庭さん、人を指差すのはやめなさい」

「はっ！そうですね。

指が腐ってしまいますもんね」

言って大庭と呼ばれた彼女は、
スカートのポケットからウェットティッシュを取り出すと、
紫音に向けていた指を丁寧に拭き始めた。

しばらくして入念に手を拭き終わった大庭は
アキの手を無理矢理引っ張って紫音から距離をとらせると、
きっ、と紫音をにらみつけた。

「転校生だか交流生だか知らないけど、
可愛い女の子が増えると思った私の望みを打ち砕いたあげく、
あまつさえ『初めて』にかこつけて
この私、大庭　ナオミ＜おおば　なおみ＞を差し置いて
アキお姉様と校内を散策なんていい度胸ね！

私とデュエルしなさいよ！！

たとえ勝っても負けても、

お姉様は渡さないんだから！」

「大庭さん、
今日始めたばかりの彼に、何を言ってるの。
まだデッキも持っていないんだから」

まったくもう、と溜め息をつくと、
アキは申し訳なさそうに紫音に顔を向けた。

「ごめんなさいね、突然。
カードを見に行くのは今度にしてもらえるかしら」

お詫びはまた今度するわ、というアキに、
紫音はこくりとうなずいた。

「アキお姉様、口をきいちゃダメ。
行きましょう」

ぐいぐいという表現がふさわしいほど強く引っ張られて、
アキはつまづきながらもナオミと行ってしまった。

予定がなくなった紫音は
交流初日の疲れもあり、
まっすぐ寮に帰ることにした。

2

２０１０年４月２７日　火曜日

交流二日目の放課後。

紫音はネオドミノシティ沿岸部に位置する、
繁華街へと来ていた、
のだが。

「……迷った」

全く覚えのない裏道を歩きながら、
紫音は一人途方に暮れていた。

事の起こりは小一時間前。
紫音は遊戯王ＯＣＧ関連の
書籍を買いに繁華街へきていた。

通常の授業ならば月光館学園での授業も含め
別段問題はなかったが、
各種デュエルの授業だけはそうもいかなかった。

昨日の実技で少しさわりはしたものの、
各カードの種類や効果処理の手順、裁定など、
予備知識なしではわからない事の方が多い。

もちろんアキや麗華に聞けば至極丁寧に教えてくれるだろうが、
彼女たちがいつでもそばにいてくれる訳ではない。

せめて基礎的なことだけでも自分で掴んでおく必要があった。

そこでクラスメイトから仕入れた情報を元に、
こうして街へ足を運んだのだった。

それから二時間後、大体の買い物を済ませて
ついでに空腹もそれなりに満たした紫音は、
会社や学校帰りでにぎわう駅前の通りを
人の流れにそって歩いていた。

最寄りの駅は目の前の横断歩道を渡った先にある。
紫音は他の通行人とともに、
信号待ちをしていたのだが……。

『デュエルが開始されます。
デュエルが開始されます。
このレーンの一般車両は直ちに退避してください』

そんな警告アナウンスが流れたかと思うと、
紫音が渡ろうとしていた横断歩道の車道が
ぐん、とせり上がり、あっという間に即席のデュエル用レーンができてしまった。

ぽかんとした紫音の耳に流れるは、
歩行者用のアナウンス。

『この道は現在ライディングデュエルで使用されています。
お手数ですが、迂回して下さい』

浮かび上がったスクリーンの迂回経路を確認して、
仕方なく紫音はその方向へ歩いていたのだが……。

同じ事をさらに三回ほど繰り返した辺りで、
土地勘のない紫音はあえなく迷子になったのであった。

まさかこの年で迷子になるとは。
紫音はぽりぽりと後ろ頭をかいた。
方向音痴ではないつもりだったが、
なれない場所だ。
どこかで通りを間違えたのだろう。
こんな裏道など、
迂回経路を記したあの地図に載っていたかどうかも怪しかった。
紫音は駅までの道を教えてくれそうな人を探したが、
そもそもこんなうら寂れた路地を歩いているのは、

紫音以外には通りすがりの野良猫だけである。
雨風にさらされてすっかり塗装が禿げてしまった看板。
今にも崩れそうなほどぼろぼろな古いビル。
窓ガラスが割れた人気のない廃墟の壁にかきなぐられた
意味のわからないラクガキが、
この灰色の景色の中の唯一彩りだ。

紫音は建物の間から差し込む光がかなり弱くなっているのに気づいて、
暮れかけた空を見上げた。
ビルに囲まれた地平の彼方から迫る藍色が、
この空を覆い尽くすまであまり時間がなさそうである。
個人的には、
この辺りが完全に闇に包まれてしまう前に駅に着きたいところだが。
深い溜め息をついて紫音は再び歩き出した。

しかしそんな思惑とは裏腹に、
ついていないときはとことんまでついていないものだ。

それはうっすらとした月が中空に浮かび始めた頃だった。
ざりざりという複数の人間の足音が、
ヘッドフォン越しに聞こえていた。

「……」

紫音はしかし立ち止まらない。
何故ならその人間達がまとう雰囲気が、
普通のものとは異質のものだったからだ。

明らかなる敵意と害意。

それらは獲物を見つけた肉食獣たちのように、
慎重に、こちらの様子をうかがっていた。

そう、何も知らない子羊が、
こんな風に襲いやすそうな袋小路に入った時を狙って。

高い壁で囲まれた通路の奥で紫音が立ち止まると、
それらはぞろぞろとこちらを取り囲むように現れた。

口許の緩んだ彼らは、
いやな笑いを狭い路地に響かせながら
一様にすわった目を向けている。

年齢や服装は様々であったが、
あえて共通点をあげるなら
そろいもそろってこれ以上ないほど立派な悪人面をしていることか。

一体何の流行なのか、
顔にはそれぞれ
似たような黄色の模様が顔に刻まれていた。

こちらが無言なのをどうとらえたのか、
一団の一人が精一杯の脅し文句を口にする。

「おっと残念だったな。
ここを通りたきゃ、
持ってるカードを置いてきな」

「きひひひ。
勿論、レアカードだぜ」

そのいかにも頭の悪そうな、
しかし予想とは大幅にずれた内容に
紫音は足の力が抜けそうになった。

小学生か。あんたらは。

口には出さなかったが、
いつにもなく紫音は心中で素早くツッコんだ。

それにしても『レア』とは一体どの辺りのカードの事なのだろうか。

一般的にパックのカードの種類は
『ノーマル』、『レア』、
『ノーマルレア』、『スーパー』、
『ウルトラ』、『レリーフ』、
そして『ホログラフィック』。

デュエルターミナルにおいては
『レリーフ』や『ホログラフィック』が無いかわりに、
『シークレット』が追加されている。

他にもあったかもしれないが、
授業で聞いた中で紫音がぱっと思いついたのはそれくらいだ。

だが彼らがどの層の事を言っていたとしても、
残念ながら今の紫音にはその要望に応えられそうになかった。

はぁ、と一つ息をつくと、
紫音はぽつりと今の感想をもらした。

「……どうでもいい」

その言葉を耳聡く聞きつけた一人が、
手を片耳につけてわざとらしくこちらに顔を寄せてきた。

「はぁ？聞こえねぇよ。
それともビビって声も出せな……」

「どうでもいい」

聞こえない、という彼らの希望通りはっきりと告げると
辺りの怒気が一瞬の内にふくれあがった。

「んだとこら！」

言って襟首を掴もうと伸ばされた手を、
紫音が反射的に回避すると、
男は勢いのまま大げさに地面に倒れ込んだ。

瞬間、攻撃を受けたものと勘違いした仲間達が、
一斉に懐から武器を取り出した。

電柱に備え付けられた街灯の灯りを受け、
それらは鈍い光を返した。

構えを見たところ素人のようだが、
如何せん数が多過ぎる。

ここは何人かを倒して
できた隙間から逃走を試みるか……。

そう考えてできるだけ包囲の手薄な箇所を探したとき。

『お前達は完全に包囲されている。

速やかに投降せよ』

闇を切り裂き、白い光がぱっと現れた。
同時に耳をつんざくような、
けたたましいサイレンが鳴り響く。

「やべぇ！
セキュリティだ！！」

「逃げろ！」

口々に言い放つと、
彼らはあっという間に散り散りになって逃げ出した。
後には突然の事に反応できなかった紫音だけがぽつん、と残された。

「んだよ、ちったぁ向かってくる奴はいねぇのかよ。
まったく」

がた、とライトをつけたままのバイクから降りて、
首元に黄色いスカーフを巻いた
灰色と薄い緑が合わさったような制服に身を包んだ人物が
つかつかとこちらに歩み寄ってきた。

「おーい、大丈夫か」

言って胸にセキュリティと書かれたバッヂを光らせた彼は、
顔を覆っていたヘルメットをとった。

先の制服姿には似つかわしくない、
明るいオレンジの髪を
太いバンドで逆立てたその人物は
快活な笑顔をこちらに向けていた。

しかし先程の男達と同じ、
黄色の模様を大量に刻んだその顔を見て、
紫音は一瞬本当に警官かどうか怪しんだ。

「ん？どうした？」

紫音が顔を凝視している事に気づいた彼は、
あぁ、と苦笑して。

「この顔か。

こりゃあ、マーカーっつって、
オイタした奴につけられる、
まぁ、言わば犯罪者の証って奴だな。

あ、でも今は見ての通り、
セキュリティに所属してる警察官だぜ！」

言って彼は慌てて懐から警察手帳を取り出した。

そこには確かに、

『治安維持局　セキュリティ所属』
と書かれている。
「俺は、クロウ・ホーガン。
最近なりたての新米警官なんだぜ」
クロウというらしい彼は、
今度は紫音の格好をまじまじと見つめ、
「この辺じゃ見かけねぇ制服だけど、
こんな場所でどうしたんだ？
見ての通り、
ここはまっとうな人間の来るような場所じゃねーぜ」
紫音が今までのいきさつを話すと、
クロウはその人懐っこい顔に苦笑を浮かべた。
「そっか。
まぁ、外から来た人間には、
この街の交通事情は複雑だよなぁ。
おっし、んじゃ、駅まで送ってくぜ」
こっちだ、とバイクを押して歩き出すクロウに並んで、
紫音もまた歩き出した。

しばらくは彼とたわいもない話題で盛り上がっていたが、
ふと、思い出して、
紫音はクロウに疑問をぶつけた。

「ところで、他の人たちは放っておいていいんですか？
確かさっき、包囲してる、とか言ってましたけど」

するとクロウはぺろり、と悪びれた風もなく舌をだして、

「ははは。包囲されてるってのは嘘だよ。
さすがの俺も、あんないっぺんに来られちゃ、
たまんないからな」

そう言って、あまり警官らしくない風貌の彼はからからと笑った。

駅に着いた頃には
辺りはすっかり暗くなっていた。
携帯の画面を開くと、
時刻はすでに九時を回っていた。

「んじゃ、ここまでだな」
言ってバイクにまたがったクロウに、
紫音は丁寧にお礼を伝えた。

「いいって。
これが仕事だしよ」

照れくさそうにぱたぱたと手を振る彼は、
そうだ、と懐から一枚の紙を取り出した。

「これ、俺の連絡先。

交流生ってんなら、
これからもこの街にくるんだろ。

何か困ったことがあったら
いつでもかけてこいよ」

差し出されたメモ書きを受け取ると、
紫音はゆっくりと駅へ向かって歩き出した。

「あ、そうだ。

最後に名前、
教えてくれよ」

後ろからかかった声に、
紫音は振り向いて大きな声で名を告げた。

「じゃあな！紫音。
気をつけて帰れよ！」
ヘルメットを被り直し、
クロウはエンジンを吹かせた。
だんだんと遠ざかって行くバイクを見送って、
紫音は寮へ帰ることにした。

3

２０１０年４月２８日　水曜日

久しぶりに登校した月光館学園は、
景色や雰囲気など記憶と全く変わりなかったが、
紫音には異世界から現実へと帰還したような
何とも言いがたい感覚を与えた。

午後の授業では誰に注意される事もなく、
久しぶりに安らかなまどろみの時間を過ごした。

放課後。

生徒会の定例会を終えた紫音は
玄関を出て、校門へと歩いていた。

会長に就任してからまだ間もないが、
その多忙さや、本当に目が回りそうであった。

まず行われたのは今年度の予算決議。

それに続いて各部の部長を招集しての予算配分の話し合い。

その他今年のイベントの規模と数の調整に、
新たなイベントの企画提案、その審議など、
前任者の苦労が伺えた。

残念ながら本日行った会議では
全ての審議項目をこなすことはできなかったが、
前任者とは違う手法で役割を果たせばいいと、
気楽に考えていた。

そう。適当でいいのだ。

「……？」

午後七時を回ったこの時間にしては
やけに人の多い校門に紫音は首を傾げた。

玄関でつけたばかりのヘッドフォンを
片方だけ外すと、
紫音はその人だかりの中心を覗き込む。

約一月ぶりになる懐かしい人がそこには居た。

相変わらずの人気に苦笑していると、
彼女はその凛とした麗しい顔をこちらに向けて、
まっすぐに歩み寄って来た。

「久しぶりだな、神無瀬。

……変わりないようだな」

「おかげさまで。

お久しぶりです。

桐条先輩」

言って件の生徒会前任者、

桐条　美鶴＜きりじょう　みつる＞は優雅に笑った。

巌戸台駅前商店街、ラーメン店　はがくれにて。

美鶴と二人でここに来るのは、久しぶりだ。

初めて美鶴に

『ここでの作法を教えて欲しい』、

と連れて来られたときに教えたあの『作法』を、

彼女は今でも律儀に守っていた。

賢明に麺をすすっている彼女が微笑ましくて

じっと見ていると、

ラーメンの蒸気に当てられてだろうか、

美鶴は心なしか頬を染めて居心地悪そうに身じろぎした。

この『桐条　美鶴』という人物を、
ある人は『万能』だといい、
またある人は『完璧』だと称した。

はたから見ていれば確かにそのように感じる場面も多いのだが、
彼らの認識には彼女が自分たちと同じ『人間』である
ということが決定的に欠けていた。

だがこうして彼女と過ごしてみると、
その完璧な振る舞いが
彼女自身が自らに課したキャラクターである事が
はっきりとわかった。

人は誰しも『仮面』をつけて、
社会という名の舞台に立つのだ。

そんな事を考えると、
たまに紫音は自らのことがわからなくなることがあった。

自分の社会的『仮面』とは、
一体何なのか、と。

いや、もしかしたらそう考えることそのものが、
間違いなのかもしれない。

自分が見失ってしまったのは、
『自分自身』なのであって。

それともその無くした『自分自身』と思っているものこそ、
『仮面』であるのか。

その考えはぐるぐると巡り、
紫音の中で無限のループを形成した。

「そういえば、
生徒会長に就任したそうだな」

問われて紫音は、
ええ、歯切れ悪く返した。

すすんでその役目を受け立派に努めた彼女には、
生徒会長就任までのいきさつ上、
胸を張れたものでないことを紫音は自覚していた。

しかし美鶴は紫音の心中を見通しているかのように、
どこか意地の悪い笑顔で、

「君の事だからおそらく立派に役目を果たしているのだろうな」

言ってちらり、とこちらに目を向ける美鶴に、
紫音は頭の上がらない思いで乾いた笑いを返した。

ひとしきり後輩をいじめて満足したのか、
美鶴はおもむろに破顔し、

「ふふ、冗談だ。

しかしどんな理由であれ、
今年の月光館学園の生徒会長は君だ。

できる範囲でいい。

君自身よりよい学園生活を送る為にも
鋭意努力して欲しい」

それから、
と美鶴は表情を改めた。

「君は今交流生として
ネオドミノシティに行っているそうじゃないか。

そっちの方はどうなんだ？」

その問いに、
紫音はラーメンを掴む箸の動きを止めて少し考えると、

「とても充実しています。

ことはまるで次元の違う科学技術もそうですが、
カードゲームを授業に取り入れているところも興味深いですね」

紫音のそんな感想に、
美鶴はふむ、とすこし思考を巡らせると
何かに思い至った様に表情を明るくした。

「カードゲームか、
それならこの間テレビで見たぞ。
二人対戦のものだな。
登場人物の一人ががしきりに『イメージしろ』と言っていたから、
豊かな発想と想像力を育むいい訓練になるだろう。
確か、山札の中からグレード０のモンスターを一枚選んで中央に置き、
かけ声とともに表返すんだろう。
『スタンドアップ！
ザ・ヴァンガ……』」
「それは違うカードゲームだと思います」
「なにっ！
……そうなのか」
紫音に指摘された美鶴は羞恥に再び頬を染め、
がっくりとうなだれた。
まぁまぁ、と美鶴を慰めながら
頭の隅で遊戯王とその他のカードゲーム番組の放送時刻と
現在大学生である彼女のスケージュールを照らし合わせてみれば、
勘違いをしても仕方のないことかもしれない、
と紫音は思った。

なかなかショックから立ち直れない美鶴に、
紫音は話題を変えるように
自らの見聞を話した。

「さっき、カードゲームを授業に取り入れている、
と言ったでしょう。

桐条先輩が言ったような情操教育の面も確かにあると思います。

しかしあの学校で会った一人の生徒が、
カードゲームが相手とのコミュニケーションの手段として、
非常に有効だと言っていたんです

その言葉通り、街の路上やカードショップでは、
カードを通じて大人も子供も隔たりなく
同じ物事についてディスカッションをしていました。

そう言った面が、あの街の根底であり基盤であり、
他の街にはない大きなアドバンテージではないかと感じました」

紫音の言葉にいつの間にか立ち直った美鶴はなるほど、
とその形のいいあごに手を当てた。

「あの街は確か去年、
街独自に開発されたエネルギー供給機関の暴走による事故で、
街の存亡が危ぶまれたことがあったそうだ。

しかしそれを食い止めたのが、
当時、今の君と同じ年の少年と
その仲間達だったらしい。

事件当時のニュースで、
彼は仲間との絆を大切にしていて、
その絆が今のあの街を支えているのだと言っていたそうだ。

そしてそんな彼の意志が街全体を一つにし、
より一層の発展を続けている」

言わば、人々の絆によってできている街だな、
と納得したように美鶴はうなづいた。

「我が桐条家の家訓が、
街という広大な広がりを持った場合の未来予想図というわけか。

ブリリアント！まさしく理想の街だ」

美鶴は得心した、
というように笑みを浮かべて、
紫音を見返した。

「たった二日の交流でそこまで見抜くとは、
やはり君が交流生になって正解だったな。

……それに絆の街に行くなら、
私たちのなかで誰よりも君が適任だしな」

最後の方はごく小さな声で
紫音には断片しか聞こえなかったが、
もし聞こえた断片で形成した文章が確かなら

それはあまりにも自分を買いかぶり過ぎてはいないだろうか。
他人から目を背けて歩んできた自分なんかが、
絆の街にこのまま行き続けたところで周りから浮くだけだ。

それとも彼女は、
紫音のそんな心情を汲み取って
そう言っているんだろうか。

どちらにせよ、
今の年になって自分の中の
『絆』といった曖昧な代物に対する認識が改まるとは、
紫音には到底思えなかった。

複雑な心情を内に秘めて、
紫音は器に残った伸びきってしまった麺を口に流し込んだ。

それは自分の摩耗しきった感情のようにだらりと、
力なく口内に広がった。

「ともあれ、
ただのカードゲームと侮っていたが、
なかなか興味深いことは確かだな」

「よければ今度、お教えしますよ」

そう返した紫音に、

美鶴は神妙な様子で
『是非、頼もう』と首を縦に振った。
その表情は限りなく穏やかだったが、
どこかひっそりと心細そうでもあった。

4

２０１０年４月２９日　木曜日

交流三日目の昼休み。

本来ならば昭和の日で休みであるのだが、
今週の土曜と日曜に実施される全国学力模試に伴って、
５月１日に振り替えられてしまっていた。

順平などは三年生のみ
休みが削れてしまった事にひどく絶望して、
昨晩からずっと
オレ今日学校休む！
などとわめいていた。

昼の陽気に当てられて、
紫音は一つ大きなあくびを漏らしながら、
うたた寝に適した場所を探し求めて、
アカデミア校内を探索していた。

教室でだらしない姿を晒していると
どこからともなく叱咤が飛んでくる今日この頃。

様々な理由で足りない睡眠時間を、
こうした中休みで補わなければ
とてもじゃないが午後からの授業を乗り越えられそうになかった。

一度でも醜態をさらせば委員長こと麗華の
遠慮ないお説教が待っている。

そういった意味では確かに、
この交流期間は気が抜けなかった。

5月のゴールデンウイークの近づいた今の爽やかな気候ならば、
外でも風邪を引くこともなく穏やかに安眠できることだろう。

紫音は手頃な木陰のベンチを探し求めて、
廊下から外を眺めながらふらふらと歩いていたのだが。

ぼす、と足に何かがぶつかった。

勢いよくぶち当たったそれは、
よく弾むボールのように床に転がった。

終始外に注意を向けていた紫音は
本当にボールがぶつかったものと思ったが、
それがいってー、
と声を漏らして初めて人だと認識した。

「大丈夫？」

紫音が足下に声をかけると、
鮮やかな緑髪を後ろで束ねた１０歳前後の少年は、
尻をさすりながら
ぱっちりとした大きな目で紫音を見上げた。

「もー！！
ちゃんと前見て歩かなきゃ、
危ないだろ」

腰に両手を当ててふんぞり返る少年に、
紫音はごめん、
と謝った。

それでもまだ怒りが収まらない少年は、
プンプンという擬音が似合うしぐさで
大人が子どもをしかる時のように紫音にお説教をたれた。

紫音はそれに適当に相づちをうちながら、
そういえば交流初日もこんな感じだったな、
と漠然としたデジャヴュを感じていた。

「そういう龍亞＜るあ＞だって前見てなかったクセに。

偉そうに言えないでしょ」

前触れなく降ってきた
背後からの声に
少年はギクリとして、
弾かれたように声の主へと振り向いた。

髪を頭の左右に二つに結い上げた、
少年と背格好、
顔つきすら瓜二つの少女がそこには立っていた。

険しい中に呆れた、という表情を含ませた少女に、
龍亞少年は拳を振り上げて
慌てたように言う。

「龍可＜るか＞は余計な事言わなくていいのー！」

「もう、龍亞ったら。
お互いに悪いってわかってるなら
どうして龍亞は謝らないの？」

睨み合う二人。

やいのやいのと仲睦まじく、
喧嘩する二人は、
猫とネズミがいがみ合う
外国のアニメを彷彿とさせる。

だが今の紫音には
心底どうでもいい出来事だった。

そして注意がこちらを向いていないのをいいことに
紫音は二人を置いて再び昼寝場所を探してふらふらと歩き始めた。

兄妹だか、姉弟だかは知らないが、
そんな喧嘩につきあっている暇はない。

紫音が昼休み中にこのまどろみを解消できなかった場合、
午後の授業が危ういのだ。

「あっ、ちょ、
どこ行くんだよー！！」

紫音がいないことに気づいたのだろう二人が、
ぱたぱたと軽い足音を響かせ追いついて来た。

「まだ話は終わってないのに」

「どうでもいい」

「ん～。

まぁ、オレもさっきのことはもういいよ。
それよりさ、ウチの学校じゃないその制服、
ネオドミノシティの外の学校から来たんでしょ。
え～っと、確か放浪生？だっけ」
「それを言うなら交流生でしょ。
放浪してどうするのよ」
「そう、それだ！！」
龍可の指摘にも悪びれず
龍亜は紫音の周りをぴょんぴょんと走り回って、
行く手を阻んだ。
そして年相応の屈託のない笑顔を見せて、
「オレ、龍亞っていうんだ」
紫音の正面でぴたりと立ち止まって、
龍亞はそう名乗った。
「こっちが妹の龍可。
俺たち、双子なんだ。
ねー、名前なんていうの？
どこから来たの？

外の街ってどんなところ？
外の街の人たちってデュエル強いの？」
矢継ぎ早にそう聞かれて、
何から答えたものかと律儀に考える紫音に、
見かねた龍可が助け舟を出した。
「そんなに一度に聞いたって
答える方も困るだけでしょ」
「いいじゃん。
だって気になるし。
龍可だって知りたいだろ」
ねーねー、と迫る龍亜の瞳は純粋で、
昨年天田の質問攻めにあって辟易としていた、
無敗のボクシング部主将の事を思い出した。
星さえ宿っていそうな
きらきらと何かを期待するような瞳の前には、
なるほど逆らえない魅力というか、
迫力があった。
そんな視線に晒され続け、
何となく居心地の悪い思いを感じながら、
紫音は控えめに名乗った。

すると龍亞は何が嬉しいのか
満面の笑みをたたえて、
「へぇー、紫音か。
これからよろしくな！」
そう言って龍亞がさらに、じゃあさ、
と口を開いたその時。
校内の喧噪全てに覆いかぶさるように
昼休み終了のチャイムが響いた。
瞬間、興奮に朱がさしていた龍亞の顔が
さっと青くなった。
「うわぁ、もうこんな時間？
やばいよ、宿題やってない！
今日絶対当てられる日なのに！！」
言うが早いか、
龍亞は長い廊下を走り出した。
途中、ちらりとこちらを振り返りながら、
「またね紫音！

今度オレとデュエルしてね」
そんな木霊を残して姿を消した。
嵐のように去って行った龍亞に、
紫音の隣で同じように呆然としていた龍可が
膨らませた頬から空気を吐きだす。
「もう、龍亞ったら。
昨日さんざん言ったのに」
唇を尖らせて、しかしすぐに龍可は、
はたと表情を直してこちらを向いた。
「突然ごめんなさい。
龍亞って誰とでもいっつもああなの。
騒がしかったでしょ」
その言葉に紫音は苦笑で返した。
同時に月光館学園のクラスメイト兼お調子者の顔が思い浮かんで、
胸の内でそっと笑った。
「でも、外の街のことは私も知りたいかも。
今度あったとき、ゆっくり聞かせてくれる？」

兄と違い大人びた雰囲気をもった少女のそんな言葉に、
紫音は構わない、と簡潔な返事をした。

すると龍可は兄と似た快活な表情で、
またね、と手を挙げると、
見えなくなった龍亞の背を追って走り出した。

途端、

『くりくり～』

「！？」

不思議な声が耳をよぎった。

かすめた声は、まるで龍可の後を追うように遠ざかっていく。

それはざわざわとした喧噪の中密やかに、
しかし鮮明に紫音の鼓膜を振るわせたのだった。

午後の授業開始のチャイムが鳴るまで、
紫音は廊下の真ん中でただただ立ち尽くしていた。

結果的に昼に十分な睡眠を得られなかった紫音は、
全ての授業が終了した後
本日二度目のお説教を拝聴する羽目となった。

＊

そろそろ今期のバイトを探そう。

街頭で配られていた
カードショップのカタログに載った
遊戯王シングルカードの値段を見たとき、
自らの財布の中身と照らし合わせた紫音は、
そう決心した。

デュエルアカデミアでは
その授業の都合上、
カードを使った実習が非常に多い。

安価なものならば授業によっては貸し出す事もあったが、
歴史の深い遊戯王だ。

絶版になったものや、
デュエルターミナル限定のものなど
市場に出回っている数自体少ないものとなると、
その値段は跳ね上がる。

結果そういった理由で
人数分のカードを用意する事が困難な場合、

自腹で買いそろえなくてはならない場面が少なくなかった。

紫音はけして節約や貯金が苦手ではなかった。

現に郵便局の口座には
学生が有するには相当量の金額が入っている。

しかし近い将来『大学進学』という
大きな買い物を控えた身では、
自由にできる金はほぼないも同然だった。

アルバイト先はこのネオドミノシティのどこかで探そうと、
紫音は決めていた。

ちなみに昨年はポロニアンモールの中に出店していたコーヒー専門店、
『シャガール』にてウエイターのアルバイトをしていた。

もっとも、月光館学園自体がアルバイトを禁止していたため、
深夜枠でこっそりと、であったが。

一時期たまたま通りがかった同じ学園の生徒にその姿を目撃され、
生徒会で問題にされかけた事も今では懐かしい思い出だ。

本来なら今年も引き続き
と言いたい所だったが、
週三日のうち二日も交流でよそに出ることとなってしまうとなると、
諦めざるをえなかった。

できる事なら
昨年と似たような職種を選びたいところだが。

そう思いながら、
紫音は駅やコンビニから拝借してきた
フリーのバイト情報紙をめくった。

それが火曜日の夜。

放課後。

紫音はアルバイトの面接の為、
再びネオドミノシティ市街へと足を運んでいた。

今回のアルバイト候補地は
前回の市街散策時の反省を生かして、
メインのデュエルレーンからやや離れた地帯を選択した。

ネオドミノシティ内陸部、
郊外に位置する閑静な住宅街にある、
噴水広場のカフェ『ＣＡＦＥ　ＬＡ　ＧＥＥＮ』

ややこぢんまりとした、
しかし味わいのある店舗の前には
カフェテラスが設けられており、
天気のいい日にはオープンカフェを開いているらしい。

レンガ敷きの広場の中央に設置された噴水をはさんだ通りには、
いずれも広場の雰囲気を壊さない
落ち着いた建物の商店が軒を連ねている。

面接予定時刻五分前。

紫音がカフェの入り口をくぐると、
『いらっしゃいませー』とウエイトレスの
はつらつとした声が響いた。

明るい茶髪を揺らして駆けて来たウエイトレスに
お一人さまですか？と聞かれた紫音は、
首を横に振ると
アルバイトの面接に来た旨を伝えた。

「ああ、ウエイター志願の子ね」

ちょっと待ってね、
と前置きしてから、
そのウエイトレスは、
マスター、と奥引っ込んだ。

なかなか戻って来ないウエイトレスに
紫音は少しだけ不安に思いながら、
手持無沙汰に辺りを見回した。

少し暗めの落ち着いた照明で満たされた店内は、
天窓から差し込む光が
日中でも薄暗い印象を払拭している。

大きく開けた出窓に飾られた観葉植物が
彩りを豊かにすると共に、
強い日差しを遮る役割をきちんと果たしていた。

店内のお客の数は
日中のピークは過ぎたようで、
少しだけ落ち着きを見せていた。

と、その中の客の一人が
こちらに視線を向けていることに紫音は気づいた。

年のころは２０歳前後、
目鼻立ちの整った精悍な顔つきをした青年である。

アイギスよりも色濃い
金色の髪からのぞいた
鋭く尖った氷のような瞳が、
その精悍さに拍車をかけている。

まっすぐに、そして射貫かんばかりに
向けられたその視線を、
紫音がいぶかしく思っていると、
背後から先程のウエイトレスの声がかかった。

「奥で面接するから、
入ってもらえる？」

促されて、紫音はその客の事を意識から追い出すと、
店の奥へと入っていった。

「待て」

不意に声をかけられて、
紫音は足を止めた。

面接を終えた紫音が店を出ると、
すでに空には薄い藍色が広がっていた。
溢れる気配は夜のものとなり、
日中よりもぐっと下がった気温が肌寒い。

細かい装飾の入った街灯の光を浴びて、
紫音を呼び止めた声の主は姿を現した。

それはカフェでこちらを睨んでいた青年だった。
マントのように長い上着をはためかせたその青年は、
どこか芝居めいた口調で言う。

「この辺りでは見ない顔と服装だな。
貴様、どこから来た？」

初対面に貴様呼ばわりをされる云われは無かったが、
この手の手合いは変に気分をこじれさせると面倒だと考えて、
紫音は普段通り簡潔に答えた。

すると男は少し意外そうに、
「ほう、このジャック・アトラスを前にしても動じないとは。
なかなか興味深い奴だ。
名は何という」

いかにも有名人であるといった彼の口調に、
しかしその名前にどんな功績があるのか
皆目見当もつかない紫音は、
方々に考えを巡らせたが
思いついたのは『アトラス』という
彼とは明らかに関係性のないゲームメーカーだけだった。

別の考えに付きっきりだった紫音が
反射的に問われるがままに答えると、
ジャックというらしい青年は
その険しい表情を少し緩めた。

「なるほど。
貴様が最近デュエルアカデミアにやってきたという、
交流生か」

一体何故そんな事を知っているのか
紫音は少し気になったが、
ジャックはこちらの心情など全く意に介した様子も無く、
びっと人差し指を立てて高らかに言い放った。

「これも何かの縁だ。
今後貴様にはこのデュエルキング、
ジャック・アトラスとデュエルをする権利をくれてやろう！
この名誉、ありがたく思うがいい」

それだけ言い残すと、
ジャックはばさりと
ジャケットの裾を翻した。

石畳をブーツで踏みしめる音を響かせながら
遠ざかる彼の動作は
翻った裾の角度まで洗練されているようで、
確かに有名人なのかもしれない、
と紫音は頭の片隅で考えた。

大柄なジャックの後ろ姿を見送って、
紫音は寮に帰ることにした。

5

２０１０年４月３０日　金曜日

夢をみた。

それはそれは、
摩訶不思議な夢だった。

轟々とうなりをあげる風を肌で感じながら、
紫音はゆっくりとその世界で瞬きした。

どこまでも澄み切った、
青い世界に紫音はぽつりと立っている。

はるか眼下には、
星の光とも見間違えるほど光に溢れた街がある。

中央にそびえたつ巨大な建物が印象的な統治都市、
ネオドミノシティ。

星屑のように夜闇を彩る、
絆の街。

その街がまるで水面下にあるようにゆらり、
と揺らめいた。

だんだんと水底に沈むように
遠ざかっていく街に、
白い影が差す。

はっとして上げた視線の先には、
いつか見た真っ白な満月が浮かんでいた。

その美しさたるや、
見たものの心を奪い、
吸い込んでしまうような錯覚さえ抱かせた。

太陽のように煌煌と発光する月から
降り注ぐ静謐な光が、
まるでネオドミノシティに影を落とすように、
覆い被さろうとしていた。

星屑から光を奪うように、
穏やかな、それ故に狂気的な清らかさを持って、
それはゆっくりと迫っていた。

清浄すぎるその光を受けて、

紫音はただ延々と世界を見つめていた。

そんな夢。

……。

……

「！」

唐突に浮上した意識に、
紫音はがばっと飛びおきた。

水中から顔を出したように酸素を求めて、
紫音はあえぐような呼吸を繰り返す。

フルマラソンを全力疾走した後のように、
呼吸が苦しい。

息を吸うのも、
吐くのも、
同等に億劫だった。

狂ったように脈を打つ心臓は、
ともすればその音が周りに漏れてしまいそうだ。

そんな紫音を不審そうに
ぎょっとした目で見つめる男子生徒がいた。

荒い息づかいをゆっくりと収めながら
自席に座った紫音は、
彼を見上げた。

突然のことに驚いたように後ずさった男子生徒の手には、

紫音の本日の昼食である焼きそばパンが握られていた。

「……」

「……」

紫音が無言でその手に握られたパンを見つめると、
その人物は引きつった笑みを浮かべた。

紫音は先程見た夢のように、
ただじっと、握られたパンを見つめていた。

「いや、あれは昼休みだってのに
お前がなかなか起きないから、
食べられずにかわいそうかなーって思った
お昼ご飯さんを救出しようとだな……
あ、ハイ。ごめん。

反省してるから、
冷たいまなざしを向けるのはやめて」

あの後。

紫音らはこの人工島をぐるりと一望できる屋上で、
昼食をとっていた。

晴れ渡った空には雲一つなく、
学園からすぐ近くの海と混ざり合って
水天一碧の景色を展開している。

初夏の太陽に熱された海の水が蒸発したのだろう。

この時期に屋上を通り抜ける
生暖かく湿った風は、
かすかに潮の香りを運んできていた。

無事に奪い返した
焼きそばパンを頬張りながら、
紫音はクラスメイトその一の
言い訳を聞き流した。

まったりとしてコクのある、
少しピリ辛なソースが程よくかかった焼きそばパンは、
かつて月光館学園に在籍していた
かのグルメキングも絶賛していたほどだ。

紫音が完全に別の次元に
思考をトリップさせていることに気づいた友人は、
困ったときの癖で黒目を中央に寄せて顔をしかめた。

「まったく友近は。

あ、オレは止めたんだぜ？」

そんなクラスメイトその一こと
友近　健二＜ともちか　けんじ＞の隣で、
万年ジャージ姿の別のクラスメイトが
こちらはコロッケパンをかじりつつ
そう口を挟んだ。

カラッとあげたコロッケが、
しっとりとしたパン生地の中で
さくりとしてうまいと評判のコロッケパンは、
その見た目以上にボリューミーなところが、
主に男子生徒の間で人気を博している。

すると友近はまるで裏切られたとでもいうように、
慌ててそちらに顔を向けた。

「なっ宮本！

おまえ卑怯だぞ！」

友近の批判に紫音と同じ剣道部所属の

宮本　一志＜みやもと　ひとし＞は
はぁ？と心外そうに主張する。

「卑怯も何も、
お前一人でやった事だろうが。

オレはそんなことをするくらいなら、
神無瀬が起きているときに正々堂々と奪い取る」

「いや、
胸を張ってその主張はどーよ？」

ぎゃーぎゃーと子供の喧嘩のような
たわいもない言い合いを、
紫音は順平をしてフリーダムだと言われた
スルースキルを存分に発揮して
ひたすら無視し続けた。

延々と罪のなすり合いを続けているその隙に
友近の弁当に入っていた
卵焼きを一切れ拝借したのは、
紫音なりのご愛嬌だ。

「そういえば、
結局うなされてたのはなんだったのよ？」

ひとしきり言い合って疲れたのだろう。

話題を変えるように聞いてきた友近に、

紫音は三色コロネの袋を開けながら首を傾げた。

「……さぁ？」

「なんだそりゃ」

肩すかしを食らったように
間の抜けた顔をする宮本を再び無視して、
紫音は三色コロネにかぶりついた。

実際覚えていない訳ではなかったが、
特に面白みのある内容でも無かったため、
説明する手間を省略したのだった。

それに、あれは

自分の中でひっそりと、

だがしっかり覚えておかなくてはならないことのような気がした。

「ミヤー！！」

がたり、音を立てて勢いよく屋上の分厚い鉄扉が開かれた。

屋上唯一の出入り口から聞こえたその声に、
宮本は明らかな動揺を示した。

つかつかと歩んでくる褐色の肌をした女子生徒は、
うろたえる宮本のジャージの襟首を引っ掴むと
よく通る声を響かせた。

「ちょっと、
何こんなところでのんきにご飯食べてんのよ。

あんた今日１３時１５分から部長会だって言ってたでしょ。

……って、汚なっ！！

パンくずぼろぼろ落とさないでよ。

こどもか、ってーの！」

屋上汚さないでよね。

と、顔をしかめる彼女に、
宮本はその大きな体をこどものように縮めた。

「うっせーな。結子は。
部長会くらい言われなくったって、
気づいてるよ」
宮本のそんな言葉に、さらに怒気を膨らませた
西脇　結子＜にしわき　ゆいこ＞は、
ぴくりと眉尻を上げた。
「はぁ？
このぎりぎりの時間になっても
のんびりお昼食べてるくせによく言うわね。
アンタがヘマすると、
マネージャーのあたしにまで
とばっちりがくるんだからね！」
強い調子でまくしたてられて、
う、と言葉を詰まらせる宮本。
火に油を注ぐように
順調に結子の機嫌を損ねていく
宮本の様子を肴にしつつ、
紫音と友近は黙々と昼食を続けた。
旗色が悪くなった宮本は、
破れかぶれに話題をそらすようにこちらを指差して、
「ってか、食べ方について言うなら、

口許にクリームつけた
神無瀬にも同じ事言えよな」

「えっ」

唐突に話にのぼった紫音は
食事の手を止めて宮本、
そして結子を見た。

こちらの視線を正面から受けた結子は、
何故かとたんに頬を真っ赤にしてうろたえた。

「え、そ、その……。

神無瀬君はいいってか、
そういう一面が可愛いっていうか。

拭ってあげたいっていうか。

むしろそれにかこつけて
綺麗な肌に触りたいなー、なんて……。

あ、いや、違くて。

な、何言わせんのよ！！」

ばしっ、と宮本の背中で
痛そうな音が弾けた。

けして高くて軽い音ではなく

くぐもった鈍い音に
宮本は本気で痛そうに顔を歪めたが、
結子はまるで気づいていない様子だった。

「もう、とにかく行くわよ！」

未だに背中を押さえてうめいている宮本を引きずって、
結子は赤らんだ頬を押さえながら紫音に
今度は一緒にお昼食べようね、
とにっこり微笑んだ。

紫音は結子と宮本を、
とても仲睦まじい夫婦のようだ、
とぼんやり思いながら、
また部活でね、
と手を振って送り出した。

扉の向こうに二人が消えると、
しん、とした静けさが戻ってきた。

何事もなかったかのように
食事を再会する紫音を見て、
友近はあっけにとられたように口を開く。

「お前さぁ、
相変わらず罪つくってんのな」

言われて、全く身に覚えのない紫音が、
何の事？
と問い返すと、

友近は重い溜め息をついて言うのだった。

「とりあえず、口許をふけ」

6

２０１０年５月１日　土曜日

今日と明日は朝から全国学力模試が催される。
紫音は普段と同じ時間に目を覚ますと、
学校へと出かけた。

登校途中、
ひどい顔をした順平を見かけたが、
紫音は気にしない素振りで人ごみにまぎれた。

２０１０年５月２日　日曜日

模試を終えた紫音は
その開放感に一つ伸びをして、
学園の校門をくぐった。

ペンの動きはいつも通り
よどみなかったため、

模試のできはそこそこではないかと
紫音は他人ごとのように
大雑把な自己分析をしていた。

久々に脳を使ったためか
同じ姿勢を続けていたためか、
体が不足した糖分を要求している。
その欲望に素直に従って
紫音は駅前商店街へと足を向けた。

そんな折。

「すまない、
ちょっと道を尋ねたいのだが」

落ち着きのある穏やかな低い声に、
紫音は足を止めた。

年はおそらく紫音よりも少し上だろう。

焦げ茶色のシャツに黒いジャケットとパンツ。

左右に分かれた黒髪には黄色いメッシュが入っているが、
それさえのぞけば冷静で思慮の深そうな青年だ。

ただし何もわからない彼の情報の中にも、
紫音にわかることが一つだけあった。

「もしかして、
ネオドミノシティから来られたんですか？」

紫音は彼の左頬についた黄色いマーカーを見て、
そう問うた。

すると彼は一瞬驚いたような顔をして、
すぐに表情を戻すと口許に微笑を浮かべた。

「ネオドミノシティから来た、
不動　遊星＜ふどう　ゆうせい＞だ」

言って、彼は強い意志をもった瞳で紫音を見た。

こうして、
神無瀬紫音と不動遊星、
月と星は出会った。

「なるほど。
それで君はこれがマーカーだと気がついた訳か」
得心がいった、と遊星は整った顔ばせをほころばせた。
彼の仕事の打ち合わせ場所だという
ポロニアンモールへと向かう道すがら、
紫音は遊星がネオドミノシティからやってきたのを
見破ったわけを話して聞かせた。
遊星は少しキザに微笑むと、
自らの頬を押さえた。

「しかしこの制度は廃止に向かっているんだ。
これはほんの数年前、
ネオドミノシティが二つの層に
別れていた時のなごりだからな。
今はマーカーなんて必要ない。
消してしまう事もできるんだが……」
「手放す事への感傷、
とかですか？」
紫音が聞くと、遊星は遠い目をしてふっと笑い、
そんなところだ、
と懐かしむように空を見て言った。
休日で学園の生徒しか使わないこの道は
閑散としていた。
その中で遊星と紫音、
二人分の足音だけが歩道を叩く。
「ネオドミノシティは、君の目から見てどうだろうか」
二人の間に落ちかけた沈黙を破って、
遊星はそう紫音に尋ねた。

紫音が無言でその問いの真意を測ろうと遊星をみると、
彼の力強い真摯な光をたたえた瞳とぶつかった。

紫音はその迫力にどうしてか
居心地の悪い思いを抱きながら、
慎重に言葉を選んだ。

「とてもいい街だと思います。

人がみんな生き生きとしていて、
この街で問題になっているような
『無気力症』なんて、無縁そうですね」

『無気力症』とは、
社会的ストレスによって精神を害した結果、
生きる事を脳が否定してしまう、
という重度の精神病だ。

その病状はひどいものになると、
言葉を話すことも自意識さえもなくなり、
壊れた機械のように辺りをさまようそうだ。

この街ではその無気力症を患っている人間のことを
『影人間』と呼んでいた。

紫音のそんな感想に、

遊星はそうか、と一つうなずくと
その落ち着いた表情の中に別の情緒を滲ませた。

「ネオドミノシティも
かつては様々な社会問題に直面した。

一時は街そのものが消えてしまいそうになったことだってある」

静かに語る遊星の声。

しかしその裏には
燃えたぎる炎のような情熱を秘めていた。

「だが街の問題は
そこに住む一人一人が
その街を良くしようと行動すれば
必ずいい方向に進んで行くさ。

ここに住んで生きているのは君一人じゃない。

君自身がいい方向へ歩もうとすれば、
それに賛同してくれる仲間ができるはずだ。

同じ場所に生きる
沢山の人々とともに歩めば、
必ず街もいい方へ成長して行く。

そして沢山の光に支えられた夜空のように、
街もまた、君たちの歩む暗い道を
明るく照らしてくれるさ。

その事を忘れないでいてくれ」
そういって、彼は口をつぐんだ。

それは普通に聞けば、
すかした夢見がちな話だ、
と笑い飛ばしてしまっていただろう。

しかし、彼の紡ぐそれには
そんな気取ったことさえも納得してしまうような、
確かな重みがあった。

紫音から見て、
遊星は決して雄弁ではなかった。

どちらかというと無口になりがちで、
人と話すのは苦手な印象だ。

言葉数も多くはない。

しかし、彼はけして
内向的に下を向いてはいなかった。

彼の瞳は力強く、
まっすぐで一途な輝きを放っている。

彼の言葉が足りなくても、
いや、たとえ彼が何も語らずとも、
その目をみれば彼が間違っていない事が
誰にでもわかった。

それは自ら輝き続ける恒星のように、
確かにそこにあった。

他人と目を合わせず、
前を見ているようで
実は直視などできていない
臆病な自分とは真逆の存在だった。

自分の無感動な瞳は、
何も語らない。

感情を表に出すのが下手な自分は、
周りから『鉄面皮』だと言われているのを
紫音は知っていた。

それについて否定はしない。

ただ、何となく悲しかったことは覚えている。

だからこそ紫音は遊星の
そんなひたむきな瞳を、
とてもまぶしく思った。

同時に紫音はそんな彼のそばにいてはいけない気がした。

それは一週間ほど前、
順平と寮で話した時に感じた、
あのひやりとした感覚に似ていた。

何かを忘れているような、
しかしけして思い出してはならないことのような。

そんな途方もないことを、
彼の隣にいると、
自身に問いかけずにいられなかった。

もしも思い出してしまったら、
自分という存在は飴のようにどろりと溶けて、
この世界からなくなってしまうのではないか。

いや、ちがう。

世界に『否定』されて、
居られなくなってしまうのではないか。

胸の辺りがそんな漠然とした言い知れない不安で、
もやもやした。

「どうした？」

遊星に問われて、
紫音はひたりと足をとめた。

彼の問いには答えず
紫音は顔を上げて、
少しだけ微笑んで道の先を指し示し、

「この先をまっすぐ行った先がポロニアンモールです。

少し歩けば案内の看板も見えてくるはずですよ」

どこか青白い顔で告げる紫音に
遊星は心配そうな表情を向けていたが、
有無を言わせない雰囲気に
無理矢理呑み込むと、
一つうなづいた。

「ありがとう。

今度ネオドミノシティへ来た際は是非訪ねてくれ。

大したことはできないが、
今日のお礼をするよ」

お互いの連絡先を交換すると、
遊星は歩き去って行った。

遊星の何にも迷わない、
力強い歩みを少しだけ見つめて、
紫音は踵を返した。

模試の直後はあんなに減っていたお腹だが、
今は何も食べる気にならず、
紫音はそのまま寮に帰った。

こうして、様々な偶然が複雑に絡み合い、
役者はそろった。

この出会いが紫音の日常を一変させてしまうなど、
この時の紫音は想像もしていなかった。

全ての運命が変わる最初の満月まで、
あと一週間。

7

２０１０年５月３日　月曜日

ゴールデンウィーク一日目、
この日は憲法記念日で休日である。

昼頃になって、
自室で休日を過ごしていた紫音の携帯に着信が入った。

静寂を割いて
無機質な音がけたたましく鳴り響く。

それは先週の金曜日、
面接を行ったカフェからだった。

電話に出ると、
採用の旨と
早速明日の午前中からゴールデンウイーク終了まで
バイトに出て欲しいとの申し出に、
紫音は取り立てて外せない用事がないことを確認して了承した。

事務的な通話が終了すると、
紫音は来週からの中間テストに向けての勉強をすることにした。

といっても、
今回の試験は通常の５教科７科目だけだ。
期末からはデュエルアカデミア独自の教科が入る予定だが、
とりあえず今期は問題なさそうだった。
最近は授業も麗華の監視…もとい、
注意のおかげで
真面目に聞いているため、
簡単な見直しだけでよさそうだ。
紫音はベッドの上に教科書とノートを広げると、
寝転がりながら授業内容を反芻した。

２０１０年５月４日　火曜日

ゴールデンウィーク二日目。
今日はみどりの日だ。
今日と明日は終日カフェでアルバイトだ。
紫音は手早く支度を済ませて、
寮を出た。

この日、
噴水広場は休日を満喫している人で
ごった返していた。

鳩を追いかける子どもや、
それを微笑ましく見守る大人。

散歩をする老夫婦、
噴水の縁でのんびりと読書をする青年など、
同じ場所に居ても休日の楽しみ方は様々だ。

午前１０時。

紫音の勤める『ＣＡＦＥ　ＬＡ　ＧＥＥＮ』は
開店してから客足は徐々に増え、
ランチセット開始一時間前の現在、
すでに満席になり始めていた。

面接時に紫音を迎えた
ウエイトレスのステファニーに連れられて
注文や会計の仕方を習いながら、
紫音は忙しくも有意義な時間を過ごしていった。

「『ブルーアイズマウンテン』をもらおうか」

鋭い声が聞こえて振り向けば、
先日紫音を呼び止めた青年、
ジャックが居た。

初夏のきつい日差しが差し込む中、
ジャックは今日も白いトゲつきのロングコートを羽織っている。

休憩中のステファニーに代わって、
紫音が注文のコーヒーを持って行くと、
彼は相変わらず鋭い眼差しでこちらを見た。

紫音はそれを受け流しながら、

「『ブルーアイズマウンテン』でございます。

ご注文は以上でおそろいでしょうか」

ことり、と彼の前にカップを置いて、
紫音は型通りの質問をした。

ジャックがうなずくのを横目で確認して、
紫音は伝票を置くと
ごゆっくりどうぞ、
と言い残して立ち去ろうとした。

が、

「待て」

返そうとしたきびすを止めて、
紫音は　はい、
と返事をする。

何の用かと首を傾げれば、
ジャックはコーヒーを一口すると、

「今日、仕事はいつ終わる」

「……？」

問われて紫音は話について行けず、
一瞬固まってジャックを見返した。

するとジャックは
カップをソーサーにことり、
と置いて、何故かしたり顔でこう切り出した。

「なに、この間とは気が変わったのだ。

初めはお前の挑戦を待つつもりでいたが、

ネオドミノシティの外が
どれほどの腕前か知りたくなってな。
神無瀬紫音、仕事が終わったら、
このオレとデュエルしろ」
もしこのシーンがアニメならば効果音がついたかもしれない。
だが。
「すみませんが、
僕はまだ自分のデッキを持っていません」
「なにっ？！」
確かにそろそろ作ろうと思っていたが……。
そんな返答が帰ってくるとは思わなかったのだろう、
オーバーリアクションでジャックはしばらく凍り付いていたが、
はたと我に返ると、
「ふん、仕方あるまい。
ならば次に会うときまでにデッキを完成させておけ」
言ってふい、と視線を外す。
その姿はおもちゃを取り上げられて
ふてくされている子供のようだ。

そんなジャックを微笑ましく思いながら、
紫音は一礼して仕事に戻った。

ウエイターのバイトに努めながら、
紫音はデッキか、
と頭の片隅で考えた。

実は最近一番の悩み事であった。

遊戯王はおろかカードゲームの
知識も経験もほとんどない紫音には
どのようなデッキが存在するのかさえわからないのだ。

勿論デッキの組み方など
見当もつくはずがない。

今度、どんなデッキがあるのか
誰かに聞いてみようか。

ぼんやりと考えながら、
紫音は本日のバイトをこなした。

２０１０年５月５日　水曜日

ゴールデンウィーク三日目。

今日はこどもの日だ。

日もかなり高く昇った時分。

紫音にとっての最初の客が現れた。

「あら、神無瀬君」

もともと大きな瞳をさらに丸く見開いて、

十六夜アキはにっこりと微笑んだ。

制服のときよりも大きく開いた胸元から

微妙に視線をそらしながら、

紫音はいらっしゃいませ、

と微笑んだ。

「ウエイター姿、

似合ってるわね」

「ありがとう。

ご注文はお決まりですか？」

紫音が聞くと、
アキは手元のメニューに視線を落として、
「じゃあ、このナチュルケーキセットをいただくわ
ナチュルチェリーティーと、
ナチュルナーブミルフィーユで」
かしこまりました、
と紫音は注文を復唱する。
その様子をしばらく物珍しそうに見ていたアキは
そういえば、
と話題をふった。
「明日、デュエルアカデミアに来るでしょう。
前に言ってた購買にカードを
見に行かない？」
楽しそうに提案するアキに、
紫音は二つ返事で快諾した。
と、紫音はそこで昨日のジャックとの
やりとりを思い出して、
「そういえばデッキづくりの事で悩んでるんだけど、
何かオススメのデッキはある？」

するとアキは形のいいあごに
細くしなやかな指をそえて少し考えて、

「そうね…。

最初はビートダウンデッキがいいかも。

デュエルの基本は
やっぱり相手のライフを０にすることだから」

と言って解説する。

ビートダウン＜Ｂｅａｔ　Ｄｏｗｎ＞とは
打ち倒すの意を示し、
その名の通り戦闘ダメージによって
相手ライフを０にすることを
勝利条件にしたデッキのことである。

モンスターが中心のデッキで、
コンボ等の複雑なギミックを持たないのが特徴だ。

「やる事の少ないデッキだから、
初心者にも扱いやすいはずよ」

そう言って『どこか嬉しそう』に笑うアキに
紫音は参考にするよ、
とお礼を言って仕事に戻った。

相手を殴り倒すという事について
どうしてだかアキにはとても似合っているような気がして、
背筋が冷たくなったのはここだけの話だ。

「そうですね、
バーンデッキなんかはいかがでしょう」

店に訪れた二人目の客人の麗華は
紫音の問いに
眼鏡の奥を輝かせて語った。

バーン＜Ｂｕｒｎ＞とは、
燃やすの意で、
相手にダメージを与える効果を持つカードを駆使し、
ビートダウン以外の方法で
相手ライフを０にするデッキの事である。

「ハイスピードかつ安定した手段で
相手ライフを削ることができますし、

ほぼ全てのデッキに対して
オールグラウンドな強さを誇るところも魅力です」

デュエル開始時の手札は
ドローフェイズもあわせて６枚。

もしもカード一枚につき、
最低１０００ポイントのダメージを叩き出す事ができれば、
わずか３ターンで決着をつけることが可能だ。

なるほど、理にかなっているな
と紫音はうなずいた。

てきぱきとマニュアルに従って
仕事をこなす紫音を見て、
麗華は溜め息を漏らして口を開いた。

「それにしても、神無瀬さん。

バイトの制服はきちんと着ているのに、
学校の制服はどうして上着の前を開けているのですか？

学校の制服もきちんと着て下さいよ」

休日だというのに
いつも通りの麗華に苦笑して、
お小言が長くなる前に
紫音はそそくさと仕事に戻った。

「デッキかぁ。じゃあさ！
ディフォーマーデッキなんてどう？！
ジャッキーン！って変形して、
カッコいいんだぜ！！」
「もう、それは龍亞の趣味でしょ。
それに紫音はデッキの種類を聞いているのよ」

相変わらずの仲のいい双子が、
本日三組目のお客だ。

年の割に知的でしっかりとした龍可に
たしなめられて、
年相応の子供らしい勢いをもった龍亞は
捨て鉢気味に唇を突き出させた。

そんな龍亞を放って、
龍可はまた一つ
新たなデッキを提案する。

「少し扱いが難しいんだけど、
コントロールデッキなんてどう？」

コントロール＜Ｃｏｎｔｒｏｌ＞とは
よく知られた意味通りで、
フィールドおよび相手のリソースを支配し、
行動を妨害することを目的としたデッキだ。
フィールド、手札、墓地などを完全に制圧しきった後に、
フィニッシャーや相手のデッキ切れなどで勝利する。

「特にパーミッション型の
コントロールデッキは、
奇襲性があって相手の心理に
多大なプレッシャーを与えるから、
高度な頭脳戦を楽しみたい人にはオススメよ」

ただしＯＣＧにおいて
受動的なカウンターカードは、
その利便さから発動コストが高め、
あるいは無効にできる対象が狭く設定されている。
運用の際は自分のデッキにとって
致命傷となりうるカードや
相手のデッキのキーカードを見極め、
的確なカードを使っていかなければならないだろう。

あらゆるカードを知り尽くした、
玄人向きのデッキだ。

難しい事をよく知っているんだね、
と紫音が感心すると、
先程のダメージから立ち直った龍亞が何故か胸を張った。

「龍可は小さい頃は
天才少女って言われてたんだぜ！
それくらい当然だよ」
「やめてよ。
そんなの昔のことで、
今はそんなんじゃないから……」
言って、
どうしてかしおれてしまった龍可を
龍亜と二人で慰めた。
龍可のそばでは相変わらず、
『くりくり～』と
どこか心配そうな声が聞こえていたが、
空耳だと割り切って、
紫音は仕事に戻った。

こうして長いようで短い
ゴールデンウィークは終わりを告げた。

ベッドに入って
紫音は本日仕入れた情報を基に
デッキ構成を考えていたが、
疲れのためかいつの間にか眠ってしまった。

夢は、見なかった。

7（後書き）

参考、引用：遊戯王カードＷｉｋｉ

Duel 1 ～The first half

２０１０年５月６日　木曜日

放課後。

「どう？」

アキに問われて、
紫音はガラスケースから顔を上げた。

先日の約束通り、
紫音はアキに連れられて
デュエルアカデミア購買、
カード売り場へと足を運んでいた。

初等部から高等部まで共通のこの場所は、
自由に過ごせるフリースペースと合わせて
普通の学校の購買よりも圧倒的に広かったが、
そのほとんどをずらりと並んだ
カードのショーケースが占めていた。

生徒二人がようやくすれ違えるほどの通路しか確保できないほど、
所狭しと並んだガラスのショーケースは、
表面に顔が映るほど磨き上げられている。

ショーケースには盗難防止だろう、
厳重に鍵が取り付けられ
中のカードがいかに高価な品であるかを表していた。

カード一枚一枚にはそれぞれ値段と品番が張りつけられ、
生徒は注文書に品番を書き込んでカウンターに提出する形式をとっている。

「何にするか決まった？」

問われて紫音は曖昧に微笑んだ。

昨日の帰りに色々と考えてはみたものの、
まだバイト代も入っていない現在の所は、
結局財布との相談となりそうだ。

紫音の計算した所、
カードにもよるが、
汎用カードを一枚２００円前後として、
デッキ一つにつき平均５０００円、
比較的安価なものを選んでようやく２５００円～３０００円台であった。

胸の内で自らの所持金と照らし合わせ、
紫音は熟考する。

必須カードが安く手に入り、
確実にデッキが回って、
かつ中堅以上の強さを誇るものといえば……。

紫音は心を決めると、
注文書に品番を記入した。

黙々とカードを保護スリーブに入れる作業は、
割と集中力を使うものだ。

紫音は最後の一枚を入れながら、
頭の隅でぼんやりと思った。

きっちり４０枚にしたデッキは思ったよりもぶ厚い。

まだ手になじまないそのデッキを
複雑な気分で見下ろして、
紫音は裏返したデッキから六枚引いて、
空回した。

数回それを繰り返して
おおよそカードの効果とデッキの特性、
その回し方を掴んだところで、
紫音は左腕にデュエルディスクをはめ込んだ。

「準備は整ったかしら？」

アキに問われて、
紫音は返事の代わりに
デッキゾーンにデッキを収める。

問題なくデュエルディスクが起動したことを確認してから、
前を向いた。

先週のデュエル実習の授業で使ったスタジアムは、
放課後は時間制ではあるが
自由に使用できる施設となっていた。

使用申請提出時に希望すれば、
デュエルディスクも貸し出し可能だ。

放課後のスタジアムは
予想通りの込み合いを呈していた。

ただし授業のときよりもその雰囲気は和やかで、
白熱した試合を繰り広げているグループも居れば、
それをゆったりと見学するものたちもいる。

そしてまさに今
始められようとしているデュエルに、
スタジアムの雰囲気が若干変わったのを
紫音は感じていた。

それまで散らばっていた観客が、
一斉にこちらに注目する。

アキがいるからか、
はたまた他校の制服が物珍しいからだろうか。

様々な視線に多少居心地の悪い気分を味わいながら、
デュエルは開始された。

「僕の先攻、ドロー」

紫音はデッキからドローしたカードを一瞥すると、
そのままスタンバイ、メインフェイズに移行した。

「モンスターをセット。

リバースカードを一枚伏せて、ターンエンド」

首尾は上々だ。

手札も悪くない。

「私のターン、ドロー」

アキが宣言して、同じようにドローし、
フェイズをメイン１まで進める。

こちらのカードの発動はなし。

「手札から、『ローンファイア・ブロッサム』を召喚」

アキの足下が光って、
黄色い蔓がうねり
所々紫色の葉を葉を茂らせてその植物は文字通り、
『生えた』

その蔓はフィールドを驚くほどの早さで覆い、
やがて成長しきった蔓の先には
漫画で見るような丸い爆弾の形をしたつぼみができ、
火花を散らす。

『ローンファイア・ブロッサム』
☆×３
ＡＴＫ　５００

初めて見るモンスターに、
紫音はスクリーンで相手のカードを確認しながら
軽く身構えて成り行きを見守った。

「『ローンファイア・ブロッサム』の効果発動。
自分フィールド上に表側表示で存在する
植物族モンスター一体をリリースして発動する。
自分のデッキから植物族モンスター一体を特殊召喚する。
『ローンファイア・ブロッサム』は自身も植物族モンスター。
よって私は『ローンファイア・ブロッサム』をリリースして、
デッキから『ギガプラント』を攻撃表示で特殊召喚する」
フィールドの『ローンファイア・ブロッサム』のつぼみが弾けて、
大きな打ち上げ花火とともに小さな種がばらまかれた。
その種の一つが地面にささり深く埋もれると、
光とともに巨大なハエトリソウのような植物が現れた。
『ギガプラント』
☆×６
［デュアル］
ＡＴＫ　２４００
「『デュアル』？」
眉をひそめる紫音に反応して、
デュエルディスクのスピーカーから
アキの解説が聞こえてきた。
「墓地、またはフィールド上に表側表示で存在するときには

『通常モンスター』として扱うんだけど、
一ターンに一度の通常召喚権をこのカードのために消費すること
『再度召喚』することで、
効果モンスターとなる特殊なモンスターよ。

私はさっきの
『ローンファイア・ブロッサム』を
召喚したことで、
このターンの通常召喚権を失っているわ。

でもね、
たとえ『再度召喚』しなくても、
効果を使う方法もあるのよ」

にっこりと微笑むアキは美しく、
空恐ろしかった。

そしてその感覚が間違っていなかったことを
証明するように、
アキは流れるようなコンボを展開させた。

「私は手札から、
装備魔法『スーペルヴィス』を発動、
『ギガプラント』に装備。

この装備魔法『スーペルヴィス』の効果により、
『ギガプラント』は再度召喚した状態になる。

そして、『ギガプラント』の効果発動。

一ターンに一度、自分の手札または墓地に存在する
昆虫族または植物族モンスターを一体特殊召喚する。

私は墓地の『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚。

『ローンファイア・ブロッサム』の効果、
自分フィールド上の植物族―――自身をリリースしてデッキから
『グローアップ・バルブ』を守備表示で特殊召喚する」

再び花火とともに蒔かれた種から、
球根部分にぎょろりとした目を持った花が現れた。

『グローアップ・バルブ』
☆×１
［チューナー］
ＤＥＦ　１００

アキはそのしなやかな腕を伸ばして、
高らかに宣言した。

「レベル１『グローアップ・バルブ』に、
レベル６『ギガプラント』をチューニング！

冷たい炎が世界の全てを包み込む。

漆黒の花よ、開け！

シンクロ召喚！

現れよ『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

薔薇の花弁が嵐となって、
フィールドに舞い散る風花のように咲き乱れた。

その中で、一際大きく、
美しい大輪の花のような翼を持ったドラゴンが、
鎌首をもたげた。

蛇が威嚇するような押し殺した鳴き声が、
フィールドに響いた。

『ブラック・ローズ・ドラゴン』
シンクロモンスター
☆×7
ＡＴＫ　２４００

「装備魔法『スーペルヴィス』の効果発動。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地に送られたとき、
自分の墓地に存在する通常モンスター一体を特殊召喚する

墓地に送った『ギガプラント』を特殊召喚」

アキの言葉に導かれるように、
『ギガプラント』が再びフィールドに舞い戻る。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果発動！

一ターンに一度、

自分の墓地に存在する植物族モンスター一体を
ゲームから除外することで
相手フィールド上に存在する
守備表示モンスター一体を攻撃表示にし、
このターンのエンドフェイズまでその攻撃力を０にする。

私は墓地の『ローンファイア・ブロッサム』を除外する。

ローズ・リストリクション！」

『ブラック・ローズ・ドラゴン』の
トゲのついた茨の鞭が、
紫音のセットしたモンスターを拘束した。

だが、こちらもやられてばかりいられない。

セットモンスターは、

「リバースされたことにより
『ライトロード・ハンター　ライコウ』の
効果発動。

フィールド上のカードを一枚破壊することができる。

十六夜さんの『ギガプラント』を破壊。

その後、自分のデッキからカードを三枚墓地に送る」

リバースとは反転召喚あるいは

セットモンスターが攻撃や
効果で表側表示になることを差す。

ライコウはリバースされた時に
効果を発するモンスターだ。

本来なら相手のバトルフェイズに
攻撃を受けて発動する効果だったが、
予定に狂いはない、
というよりはむしろ好都合だった。

真っ白い美しい毛並みをもった犬が、
茨に巻かれながらも
果敢にギガプラントへと突進すると、
ガラスの割れたような音とともに、
アキのフィールドで光の破片が飛び散った。

さらに墓地に送った三枚は幸い、
三枚ともモンスターカードだ。

そう心の中で安堵した時。

「手札から、装備魔法
『D・D・R＜ディファレント・ディメンション・リバイバル＞』
発動。

手札を一枚捨てて、
ゲームから除外されている
自分のモンスター一体を選択して攻撃表示で
フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。

私は手札の『スポーア』を捨て、
除外された『ローンファイア・ブロッサム』を
フィールドに特殊召喚する。

さらにフィールドに特殊召喚された
『ローンファイア・ブロッサム』の
効果発動。

『ローンファイア・ブロッサム』をリリースし、
私はデッキから、
さらに『ギガプラント』を特殊召喚する」

再び現れたギガプラントは、
その頭をがちがちと不気味にならした。

『ギガプラント』
［デュアル］
☆×６
ＡＴＫ　２４００

妨害があったにも関わらず
あっという間に二体の上級モンスターをそろえたアキは、
荒々しくも気高いモンスターたちを従えて、
紫音に襲いかかった。

「バトルフェイズ。

ブラック・ローズ・ドラゴンでライトロード・ハンター　ライコウ
に攻撃。

ブラックローズフレア！」
ブラック・ローズ・ドラゴンの口から
漆黒の吐息が吐き出された。
ダイレクトアタックも同然なその攻撃に、
しかし紫音は冷静にデュエルディスクを操作した。
「永続罠『ライトロード・バリア』発動。
自分フィールド上に表側表示で存在する
「ライトロード」と名のついたモンスターが攻撃対象となったとき、
自分のデッキの上からカード二枚を墓地に送ることで
相手モンスター一体の攻撃を無効にする」
デッキから二枚墓地に送り、
紫音はブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃を防いだ。
攻撃が防がれたことに
アキは特に驚いた様子もない。
アキはこちらを伺うように
少し考えると、
「バトルフェイズを終了。
このまま私はターンを終了するわ」
回ってきたターンに
紫音はドローしながら、

手札と墓地を確認した。

普通に考えれば明らかに危機的状況だが、
紫音は手札と墓地を確認してよし、
と自分でも珍しく意気込んだ。

今度はこちらの番だ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

Duel 1 ～The first half（後書き）

参考：遊戯王Wiki

Duel 1 ～The latter half

紫音はドローしたカードを手札に収めると、
今から始める手順をシュミレートした。

アキのフィールドには
上級モンスターが二体。

一つでも間違えれば、
次のターン紫音のライフポイントは
確実に0にされるだろう。

『ライトロード・バリア』を使ったことで、
アキにはこちらのデッキの正体がわかったようだ。

だからこそ、
下手に追撃して墓地を肥やすことを避けたのだろう。

そう。紫音の選んだデッキは
『ライトロード』。

全てのモンスターが光属性で統一されたこのモンスター群は、
多くがデッキからカードを墓地に送る効果を持っている。

勿論過多になればデッキ切れの危険性もはらんでいるが、
それまでに決着をつけられなければ

ライトロードとして失格である。

現在墓地には五枚のカードが落ちている。
そのうち三枚がライトロードのモンスターカードで
同じカードのダブりが一種類、
残りの二枚は魔法、罠だ。

あと二種類。

紫音はスタンバイ、
メインとフェイズを進めながら、
意識の端でそう考えた。

「魔法カード
『ソーラー・エクスチェンジ』発動。

手札から「ライトロード」と
名のついたモンスターカード一枚を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを二枚ドローし、
その後二枚墓地に送る。

僕は手札から
『ライトロード・ウォリアー　ガロス』
を捨てて二枚ドローし、
二枚墓地へ送る」

今墓地へ落ちたカードは三枚。

一枚はコストで捨てたガロス、
そして効果で落ちた残りの二枚もライトロードのモンスターカードだ。

これで墓地のライトロードは5種類となった。

こちらも、カードはそろった。

「このカードは自分の墓地に
「ライトロード」と名のついたモンスターが
四種類以上存在する場合のみ特殊召喚することができる。

手札から、
『裁きの龍＜ジャッジメント・ドラグーン＞』を
攻撃表示で特殊召喚」

フィールドにやわらかな光が差し込んだ。

ばさりと羽音がして仰ぎ見れば、
はるか天空の彼方から巨大な影が迫っていた。

フィールドに純白の翼を生やした
白きドラゴンが舞い降りた。

その神聖さたるや、
夢、幻の中に息づくどんな生き物も

及ばなかった。

『裁きの龍』
☆×８
ＡＴＫ　３０００

「『裁きの龍』の効果発動。

僕は１０００ライフポイントを払うことで、
このカードを除くフィールド上のカードを全て破壊する」

神無瀬　紫音
ＬＰ　８０００→ＬＰ　７０００

清浄な光が、
フィールドに満ちあふれた。

裁きの龍に導かれ、
光に帰って行くかのように
フィールド上のものたちは音もなく消え去った。

あとにはしん、とした静寂が残った。

「手札から魔法カード
『おろかな埋葬』を発動。

自分のデッキからモンスター一体を
選択して墓地へ送る。

僕は『ライトロード・ビースト　ウォルフ』を

墓地に送る。

墓地に送られた
『ライトロード・ビースト　ウォルフ』の効果発動。

このカードがデッキから墓地に送られた時、
このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

僕はこのカードを攻撃表示で特殊召喚」

紫音の呼びかけに応えるように、
白い甲冑を着込んだ頑強な肉体を有した獣人が、
裁きの龍の隣に現れた。

『ライトロード・ビースト　ウォルフ』
☆×４
ＡＴＫ　２１００

紫音の勢いはまだ、止まらない。

「さらに手札より魔法カード
『死者転生』を発動。

手札を一枚捨てて、
自分の墓地に存在するモンスター
一体を手札に加える。

僕は『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』を
墓地へ捨て、
墓地の『ライトロード・サモナー　ルミナス』を

手札に加えてそのまま召喚。

『ライトロード・サモナー　ルミナス』の効果を発動。

一ターンに一度、
手札を一枚捨てることで自分の墓地に存在する
レベル４以下の「ライトロード」と
名のついたモンスター一体を
自分フィールド上に表側表示で特殊召喚する。

手札の『ライトロード・モンク　エイリン』を
墓地へ捨て、
『ライトロード・パラディン　ジェイン』を特殊召喚」

うやうやしく現れたルミナスの光に導かれ、
ロングソードと盾を持った中性的な美しい顔立ちをした騎士、
ジェインがフィールドに立った。

『ライトロード・サモナー　ルミナス』
☆×４
ＡＴＫ　１０００

『ライトロード・パラディン　ジェイン』
☆×４
ＡＴＫ　１８００

手札を全て使い切った紫音は、
真っ向からアキを見つめて言い放った。

「バトルフェイズ。
まずはルミナス。
続いてジェイン、
ウォルフ、
最後に裁きの龍でダイレクトアタック！」
ライトロードの精鋭達が
次々とアキに襲いかかる。
紫音はデュエルディスクに
内蔵されたカルキュレーターが
順調にアキのライフポイントを
削って行くのを確認した。

十六夜　アキ
ＬＰ　８０００→１００

後、ほんの１００だ。
後もう一体でも
モンスターが召喚できたなら。
紫音は軽く唇を噛んだ。

だが、攻撃力３０００の『裁きの龍』が
そう簡単に沈められないことは紫音もわかっていた。

おまけにこちらは『裁きの龍』の効果で
払った１０００ライフ以外はノーダメージ。

他はともかくとして、
『裁きの龍』とその効果を使えるライフポイントさえ守りきれば、
紫音の勝ちだ。

「バトルフェイズを終了し
メイン２を経て、
エンドフェイズに
それぞれのモンスター効果により、
デッキからカードを墓地に送ります」

前述の通り、
ライトロードはそのほとんどが
エンドフェイズにデッキからカードを
墓地に送る効果をもっている。

現在紫音のフィールドに存在する
ウォルフ以外のモンスターがそうだ。

ジェインは二枚、
ルミナスは三枚、
そして裁きの龍が四枚、
デッキを削る。

ライトロードたちはそうして、
我が身を削り
己が信ずる正義のままに
生きている。

紫音はそれぞれの効果に従って、
デッキからカードを九枚墓地へ送った。

モンスターカードが四枚、
魔法が四枚、
そして罠が一枚

「ターンエンドです」

「私のターン。

ドロー！」

アキはカードをドローして
この危機的状況にも関わらず嬉しそうに言った。

「神無瀬君、
少し運試しをしましょうか」

そう言うアキの意図が掴めずに
眉をひそめる紫音に、
アキは手札からカードを発動した。

「魔法カード『アームズ・ホール』発動！
自分のデッキの一番上からカード一枚を墓地へ送って発動する。
自分のデッキ・墓地から装備魔法カード一枚を手札に加える。

ただしこのカードを発動する場合、
私は通常召喚ができないわ。

私はデッキの上から一枚、
墓地へ送って効果発動。

墓地の『スーペルヴィス』を回収する。

さらに今の効果で墓地に送られた、
『ダンディライオン』の効果発動！

このカードが墓地へ送られたとき、
自分フィールド上に「綿毛」トークン
（植物族・風属性・レベル１・攻守０）を二体、
守備表示で特殊召喚する」

ふわりとタンポポの綿毛のような姿をしたモンスターが二体、
フィールドに現れた。

それらは春の陽気に
ふわふわと宙を舞った。

「『トークン』っていうのは
カードの効果によって
モンスターカードゾーンに呼び出される、
カードではないけれどモンスターとして扱われる存在よ。

カードではないから、
破壊やリリースされたら墓地には行かずに
デュエルから取り除かれてしまうけど。
でもけっこう色々と使えて便利なのよ。
こんなふうに、ね。

永続魔法『超栄養太陽』。
自分フィールド上に存在する
レベル2以下の植物族モンスター
一体をリリースして発動する。

リリースしたモンスターのレベル＋3以下の植物族モンスター一体を、
手札またはデッキから特殊召喚する。

私は綿毛トークンを一体リリースして、
デッキから『ローンファイア・ブロッサム』を
特殊召喚する。

『ローンファイア・ブロッサム』の効果、
『ローンファイア・ブロッサム』をリリースして
デッキからギガプラントを攻撃表示で特殊召喚する」

再び現れた巨大植物が、
紫音とライトロードたちの前に立ちふさがった。

『ギガプラント』
☆×６
［デュアル］
ＡＴＫ　２４００

アキはさらに展開を続ける。

「『ギガプラント』に回収した装備魔法、
『スーペルヴィス』を装備。

そして『ギガプラント』の効果発動。

墓地から『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚。

さらに『ローンファイア・ブロッサム』の効果で、
フィールド上の『ギガプラント』をリリース。

デッキから、チューナーモンスター
『ナチュル・コスモスビート』を守備表示で特殊召喚。

さらに墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果発動。
墓地から『ギガプラント』を特殊召喚する」

頭に赤、ピンク、白のコスモスを生やした
小型のモンスターが紫音につぶらな目を向けた。

『ナチュル・コスモスビート』
☆×２
［チューナー］
ＤＥＦ　７００

そしてアキは再び歌うように口ずさんだ。

「レベル２『ナチュル・コスモスビート』に
レベル１『綿毛トークン』と
レベル３『ローン・ファイア・ブロッサム』を
チューニング。

聖なる森に潜みし華麗なる棘の狩人よ、
戒めの鞭を持ちて今こそ姿を現せ！

シンクロ召喚！

現れろ、『スプレンディッド・ローズ』！」

鮮やかな金の髪をゆらして、
その人型のモンスターは薔薇の影から飛び出した。
左右で色の違う特徴的な衣服に身を包み、
足には薔薇の飾りをつけている。

『スプレンディッド・ローズ』
シンクロモンスター
☆×６
ＡＴＫ　２２００

「『スプレンディッド・ローズ』効果発動！
一ターンに一度、

自分の墓地の植物族モンスター一体をゲームから除外することで、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター一体の攻撃力を
このターンのエンドフェイズ時まで半分にする。

私は墓地の『ローン・ファイア・ブロッサム』を除外して、
『裁きの龍』の攻撃力を半減させる」

『裁きの龍』
ＡＴＫ　３０００→１５００

「――――！！」

「バトル！

『ギガプラント』で『裁きの龍』を攻撃！」

『ギガプラント』
ＡＴＫ　２４００
←
『裁きの龍』
ＡＴＫ　１５００

『ギガプラント』の巨大な頭が、
『裁きの龍』に食らいついた。

『裁きの龍』はのけぞり、
悲しそうな声を上げてたまらず砕け散る。

「『スプレンディッド・ローズ』で

『ライトロード・パラディン　ジェイン』を攻撃」

『スプレンディッド・ローズ』
ＡＴＫ　２２００
←
『ライトロード・パラディン　ジェイン』
ＡＴＫ　１８００

『スプレンディッド・ローズ』の強烈な鞭が、
なす術もないジェインを打ちのめす。

終わりか見えたアキの攻撃は、
しかしそうではなかった。

「『スプレンディッド・ローズ』の効果発動！
このカードが攻撃したそのバトルフェイズ中に、
自分の墓地に存在する植物族モンスター一体を
ゲームから除外することで、
このカードの攻撃力をエンドフェイズ時まで半分にし、
もう一度だけ続けて攻撃することができる。

私は墓地の『ダンディライオン』を
ゲームから除外して、
『スプレンディッド・ローズ』で
『ライトロード・サモナー　ルミナス』を攻撃」

『スプレンディッド・ローズ』
ＡＴＫ　２２００→１１００
←

『ライトロード・サモナー　ルミナス』
ＡＴＫ　１０００

神無瀬　紫音
ＬＰ　７０００→５６００

「私はターンを終了。

エンドフェイズ時に
『スプレンディッド・ローズ』は
元の攻撃力に戻るわ。

さぁ、これであなたも
私も手札０＜ハンドレス＞」

薔薇のような荒々しい美しさをたたえて、
アキはそう言った。

こうもあっさりと攻勢が逆転してしまったことに、
紫音は半ば感心しながら、
しかし表情を険しくした。

このターンで失ったライフポイントは
先程紫音がアキに与えたものに比べれば
大したものではないだろう。

しかし、お互いにハンドレスな現在、

失ったボードアドバンテージの差は歴然だ。
見たところ、
彼女の植物族で統一されたデッキは、
墓地蘇生に非常に長けている。

運もあったとはいえ、
ドローを含めたった3枚のカードで
更地からあそこまでの展開力を見せるとは、
さすがとしか言いようがない。

キーカードはやはり、
あの『ローン・ファイア・ブロッサム』と
『ギガプラント』、
そして装備魔法『スーペルヴィス』。

後のカードはおそらくこの三つを
デッキから引っ張りだすための補助と
数合わせにしか過ぎないのだろう。

方や、紫音の『ライトロード』は瞬間的な展開力と
『裁きの龍』のフィールド除去能力で一気に制圧する、
短期決戦タイプのデッキだ。

アキのデッキのように
トップ解決ができるほど
柔軟にはできていない。

『ライトロード』という

シリーズの特性上、
ほとんどのカードが墓地に送られてしまうため、
魔法、罠も極力少なめにせざるを得ず、
その内容もどちらかといえば
守りよりも攻めのために入っている。

つまり先程、片が付けられなかった時点で、
ほぼ負けが決まっていると言っていいのだった。

「僕のターン、ドロー」

もし。

もしここで引いたのが、

『裁きの龍』なら。

即座に特殊召喚につなげて
残ったライフでフィールドを一掃し
相手ライフポイントを０にできるのに。

「……モンスターをセット。
ウォルフを守備表示に変更して、
ターンエンド」

『ライトロード・ビースト　ウォルフ』
ＡＴＫ　２１００↓ＤＥＦ　３００

「私のターン」

ドローしたカードを一瞥して、
アキは言う。

「『ギガプラント』を再度召喚。
その効果で墓地から
『ローン・ファイア・ブロッサム』を特殊召喚。
その効果で『ローン・ファイア・ブロッサム』をリリースし、
デッキから『椿姫ティタニアル』を特殊召喚」

ふわ、と巨大な椿のつぼみが花開いた。

その中から、腕を組んだ花の妖精が
椿の花弁のドレスを優雅に揺らしてフィールドに現れた。

それはブラック・ローズ・ドラゴンのような華々しさはないものの、
優美な気品があった。

『椿姫ティタニアル』
☆×８

ＡＴＫ　２８００

バトル、と彼女はフェイズを進めた。

「『スプレンディッド・ローズ』で
セットモンスターを攻撃」

セットされた紫音のモンスターが姿を現す。

「セットモンスターは『カードガンナー』。

『カードガンナー』が破壊されて墓地に送られた時、
デッキからカードを一枚ドローする」

『スプレンディッド・ローズ』
ＡＴＫ　２２００
←
『カードガンナー』
☆×３
ＤＥＦ　４００

一昔前のＳＦ映画に出ているような、
丸っこいボディをしたロボットが、
『スプレンディッド・ローズ』の攻撃により破壊される。

紫音はデッキからカードをドローした。

アキはその様子をスクリーン越しに

固唾を呑んで見守っている。

だがそれは『裁きの龍』ではない。

「『スプレンディッド・ローズ』の効果発動。
私は墓地の『ナチュル・コスモスビート』をゲームから除外して、
このカードの攻撃力をエンドフェイズ時まで半分にし、
もう一度だけ続けて攻撃する。

『スプレンディッド・ローズ』で
『ライトロード・ビースト　ウォルフ』を攻撃」

『スプレンディッド・ローズ』
ＡＴＫ　２２００→１１００
←
『ライトロード・ビースト　ウォルフ』
ＤＥＦ　３００

ぱりん、と音を立てて、
最後の壁モンスターが消え去った。

「『ギガプラント』、
そして『椿姫ティタニアル』でダイレクトアタック！」

襲い来る二体のモンスターに、
ソリッドビジョンだとわかっていながらも

紫音はその迫力に思わず受け身をとった。
ギガプラントとティタニアルの猛攻を受け、
紫音のライフポイントは風前の灯火となった。
神無瀬　紫音
ＬＰ　５６００→４００

「バトルフェイズを終了し、
リバースカードを一枚セットしてターンエンド」
アキの声がどこか遠くから聞こえたような気が、
紫音にはした。

紫音はデッキに指をかけて、
「僕のターン、
ドロー」

このドローで『裁きの龍』を引けなければ、
紫音の敗北が決まる。

紫音はゆっくりと、
カードをドローした。

引き当てたカードは、

『裁きの龍』

ではなかった。

「……」

だが、紫音は確かに

自分の悪運の強さを感じていた。

「スタンバイ、メインフェイズに入ります。
僕は『ライトロード・マジシャン　ライラ』を
召喚」

光の中から杖を持ち、
ゆったりとした白い衣装を着た女性が現れた。

『ライトロード・マジシャン　ライラ』
☆×４
ＡＴＫ　１７００

このカードの効果は、
フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードを
表側守備表示に変更することで、
相手フィールド上に存在する
魔法、罠カードを一枚破壊することだ。

だが、今はそれを使うべき時ではない。

「バトルフェイズ。

『ライトロード・マジシャン　ライラ』で、

『椿姫ティタニアル』を攻撃！」
アキの瞳が驚きに見開かれた。
しかし紫音の手に残った一枚の手札を見て
得心したように表情を和らげて、
言った。

「こちらのカードの発動は、ないわ」

「それでは、ダメージステップ時。

手札から『オネスト』を墓地へ送って効果発動！

自分フィールド上に表側表示で存在する
光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時に、
このカードを手札から墓地へ送ることで、
戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする」

そう。

前述の通り、
ライトロードは光属性で統一されたモンスター群だ。
光属性の各種サポートカードによって、
普通ならば敵わない敵にも立ち向かい、
圧倒するのが、

『ライトロード』である。

『ライトロード・マジシャン　ライラ』
ＡＴＫ　１７００↓４５００
←
『椿姫ティタニアル』
ＡＴＫ　２８００

アキのライフポイントが尽きたことを知らせる
ピー、という間の抜けた軽い音が、
スタジアムに木霊した。

「まさか負けてしまうなんて。
でもいいデュエルだったわ」
気が抜けたように立ち尽くしていた紫音は、
アキの声にそちらに顔を向けた。
「いや…、
僕も運がよかっただけだ。
こちらこそ、とても楽しかった」
自分で自分の顔が確認できないため
一体どんな顔をしているのかわからないが、
おそらくいつも通りの無表情に
少しだけ微笑をたたえて紫音が言うと、
アキはふふ、と笑って、
「君のただのデッキ回しの予定が、
思わず白熱しちゃったわね」
アキの言葉に促され、

紫音が周囲を見回すと、

「！」

紫音は驚くほどに大勢の人々に囲まれていた。

ギャラリーの年齢や性別はばらばらで、
その中には教師の姿も見受けられた。

これほど多くの人々の中にあったにも関わらず
その存在に全く気がつかないほど、
紫音はデュエルに熱中していたらしい。

紫音はそのことがやけに恥ずかしくなって、
気を紛らわすため、
アキにこんな質問をぶつけた。

「ところで十六夜さん。

さっきのデュエル、
最後に何か伏せていたけど、
あれは何のカードだったの？」

その応えにきょとんとしたアキだが、
いたずらっぽく笑って、

「あれはね、通常魔法カード。

ただのブラフよ」

にっこりと笑うアキとともに、
紫音は人ごみをぬって寮に帰った。

帰り道、
アキと別れた紫音は
ふと、今日のデュエルを思い出した。

興奮と、胸が熱くなるあの感覚の残照が少しだけ蘇り、
紫音は前にアキが言っていた
『心が通じ合う』というのは、
こんな感じなんだろうか？

と、そんなことを、
ぼんやり考えた。

8

２０１０年５月７日　金曜日

この日、紫音は久しぶりに美術室の扉を開いた。

途端、むっと鼻をつく油絵の具のにおいを
どこか懐かしいとさえ思いながら、
教室の扉をくぐった。

「あ、神無瀬くん」

しん、とした教室の中、
エプロン姿の女子生徒が
ちょこちょこと駆けてきて、
紫音は久しぶりに会った彼女に軽く挨拶をした。

「うん、こっちこそ久しぶり」

短く切った緑色の髪をさらりと流して、
彼女、　山岸　風花＜やまぎし　ふうか＞は
ひかえめに微笑んだ。

右手に持った筆を置くと、
風花は手頃な椅子に腰かけて問う。

「神無瀬くんも展覧会の出展作品を？」
問われて紫音は一つうなずいて、
「全員参加だから。
作品の構想すらまだ提出してなかったのは、
僕だけだって」
とりあえず、今日は麻紙のパネル張りだけ。
そう紫音が言うと、
風花は楽しそうに笑って、
私も先週までそうだったの、と言った。
「最近、メカ部の方が忙しくて。
っていっても今は同好会だから、
将来の呼び名なんだけどね。
春の新入生歓迎会のときに、
興味をもってくれた子が居てね、
その子たちと同好会から部活に昇格できるように、
って色々作ってるの。
きちんと活動して、
何か賞を受賞すれば、
きっと部活になれるよね、って。

それで、なかなか美術部に
顔を出す機会ができなくって、
こうしてテスト期間中なのに
無理言って開けてもらって描いてるの」

ばつが悪そうに告白する風花に
紫音も穏やかに微笑んだ

その時、
ふと彼女の持った筆が視界に入った。

堅い豚の毛でできた柄の長い筆に、
紫音は首を傾げて問う。

「今作も油絵？」

すると風花は、え、と一瞬言葉を詰まらせて、
こくりと一つうなずいた。

「うん。
日本画も面白そうだったけれど、
不器用な私はやっぱり油絵が似合ってる」

そう言って笑う風花の顔は
明るい中にも、
しかしどこか影がある。

紫音が黙って見つめていると、
『……なんてね』と風花は肩をすくめて続きを話した。

「本当は諦めきれなくて、
膠<にかわ>と岩絵具の配合だけでも、
って、少しやってみたんだけど……。

うまくいかなかったみたいで、
麻紙に塗ったら綺麗に真っ二つに割けちゃって」

恥ずかしそうにそう語る彼女に、
紫音は苦笑で返した。

膠と顔料の配分を間違えると、
そうなるとは聞いたことはあったが、
現実にやってしまった人を見るのは
紫音は初めてだった。

麻紙とは楮<こうぞ>に麻の繊維をすいて作った物で、
かなり丈夫でちょっとやそっとのことでは
破れはしないもののはずだが…。

だが彼女の言う通り確かに、
膠と顔料の配合は難しい。

膠とは、獣や魚類の骨、皮、腱、腸などを
水で煮た液を乾かして固めたもので、
日本で使われるのは主に牛の皮などを炊いたものだ。

岩絵具は着色に用いる粉末で、

日本画ではこれを膠に溶いて使用する。

岩絵具は粒子の粗い物から細かい物へと
番号が十数段につけられている。

その粒子が粗くなるほど色は濃くなり、
逆に細かくなるほど色は淡い物へとなっていき、
最も細かい物を白<びゃく>という。

「しかも悪いことに、
配合のとき先生の私物の
『天然岩絵具』を使っちゃってね。

それが天然の珊瑚のものだとかで、
ものすごく手に入りづらくて高価なものだって
すごく叱られちゃった」

岩絵の具には二種類ある。

天然岩絵具と新岩絵具だ。

天然岩絵具は天然の原石の不純物を除き
細かく砕いたもので、
素材が素材のため色数も少なく、
最近は滅多に手に入らないものもあることから

その値段も一般で使われている絵の具よりもはるかに高価だ。
新岩絵具は、ガラスの原料の粉末と金属酸化物を配合し、
溶かして固形にしてから砕いた科学的に作られたもので、
深みはないが鮮やかな色が豊富にそろっている。

原料入手も作成も容易なこちらは
値段も天然岩絵具より安価で、
美術部内で配給されているのもこちらの方だ。

風花が使ったのは言わずもがな前者で、
その中でも天然の珊瑚の粉末は
環境破壊が進む昨今では
滅多にお目にかかれない代物で有名だ。

紫音は胸の内で顧問の教師に
少なからず同情した。

風花は言わなかったが、
妙なところで大胆な彼女のことだ。

きっと惜しみなくざらっと全て使ったのだろう。

「それで、諦めたの？」

紫音の問いに風花は
しかしゆっくりと首を振って、

「それもあるけど、
油絵にしようってはっきり決めたのは
もっと別のことなの」
風花は視線を自ら持った筆へと落とした。
「出展作品を何にしようかなって悩んでて、
ゴールデンウィークを使って
少し遠いところにある美術館に行ったの。
そしたら、そこの警備の人ともめてる人が居てね。
どうしたのかな、って様子を見てたら、
その人、目の見えない人だったみたいで、
作品に触ろうとしていたから、
警備の人に見つかって注意を受けていたみたいなの」
でも、それってちょっとおかしいよね、
と風花は表情を曇らせた。
「芸術は誰でも平等に楽しめるもののはずなのに、
目が見えないからって
楽しめないのは不公平じゃないかな」
確かに、と紫音はうなずいた。
特に日本は美術品への管理、監視がやけに厳しい。

作品に少しでも触れそうになれば、
血相を変えた警備員がいちいちやってくるし、
そもそも美術館で静かにしなければならないこと自体、
紫音には疑問であった。

せっかく本物を目の当たりにしているのというのに、
作品についてあれこれと論議しないで
一体どうしろというのか。

芸術とは、そんなに不自由な物ではないはずである。

「だからね、そんな人たちにも
楽しんでもらえるようなものにしよう、
って心に決めたの。

それで、今回も油絵にしたんだ」

風花はどこか晴れ晴れとした様子だ。

椅子から立ち上がると、
風花は窓辺から空を見上げて、
思い出を語るように言う。

「私ね、ずっと日本画の
細かくて淡くて、
はかなげなところに憧れてたの。

日本画ならではの特徴って言えばいいのかな。

油彩って、遠くから見る作品でしょ。
だからどんなに細かく描き込んでも、
一枚絵として見たら、
全然見えないどころか
そこだけ黒っぽくなって汚く見えちゃう」

風花の言う通り、
油彩画は大体二、三メートル離れたところから、
キャンバス全体を一つとして楽しむ作品だ。

日本画はもともとが絵巻物など、
作品との距離が非常に近い。

その違いから二つは
描き方、捉え方、そして表現の仕方が
異なっている。

「でもね、そのことがあってから気づいたの。

どっちも同じ『絵』なんだって。

どっちも、描いてる人も見てる人も楽しむためのものなんだって。

そう思ったら、そんなことで悩んでいるなんて
小さいことだなって何だかおかしくなって。

それによく考えたら、

油彩ってとても自由な画材なんだって気がついたの」
見て、と風花は紫音に手招きした。
イーゼルにのったFサイズの１００号キャンバス（１６２．０×１３０．３センチ）には
大きな木と美しい空が一杯に描かれていた。
「……？」
よく見てみると
その木の幹は表面がぼこぼことというかぶつぶつというか、
とにかく絵の具をただ塗り重ねただけでは出ない質感をしていた。
紫音が不思議そうな顔を向けると、
風花は嬉しそうに笑って、
「油絵具の中にティッシュをちぎってを混ぜてみたの。
他にも色んな物を混ぜて、
絵の中の全ての箇所を違う質感にする予定。
さしずめ、『触って見る絵画』って感じかな」
どうかな、と少しだけ得意そうに言う風花に、
紫音は、いいと思う、と素直な意見を述べた。
すると風花はぱっと表情を明るくして喜んだ。
「よかった。

神無瀬くんにそう言ってもらえると、
とても自身がつくよ。

いつもは２５号（８０．３×６５．２センチ）キャンバスに
ちまちま描いてたんだけど、
今回は自分の壁を破るために１００号に挑戦してみてるんだ」

少しだけ頬を赤らめて興奮気味に語る風花は
視線を外すようにちらりと壁にかけられた時計を見て、
一転、すまなさそうにこちらを顔を向けた。

「あ、ごめんね、自分のことばっかり。

それに神無瀬くんも忙しいのに」

別に構わない、と首を振ると、
風花は少しだけ安堵したように息を吐いた。

「神無瀬くんは、今回も日本画なんだよね。

どんな絵を描く予定なの？」

問われて紫音は首を捻った。

そしてまだ決めてないことを素直に告げると、
風花はそっか、と返した。

「神無瀬くんが前に描いた、水と金魚の絵、
とても透き通った淡い色合いですごく好きなの。

……儚い夢みたいなところが、何だか神無瀬くんみたいで。

今回もできたらまた見せてくれる？」

その一瞬聞こえた消え入りそうな声に、
紫音は不思議そうに風花を見た。

だが風花はいつも通りの笑みを浮かべている。

紫音はほんの一時その真意を問おうか悩んだが、
結局口を噤んでひとつ首肯した。

二人だけの約束だね、
と彼女は少しだけ頬を赤らめて嬉しそうにしていた。

やがて風花はよし、
と筆を握り直して気合いを入れた。

「さ、もうひと頑張りしなくっちゃ」

意気込む風花に背を向けて、
紫音はパネル張りの作業を開始した。

数十分後、すでに慣れたパネル張り作業を済ませると、
もう少しがんばる、という風花と別れて、

紫音は美術室を出た。

すでに薄暗い廊下を半ばまで歩いたとき
そういえば、と、紫音は考えた。

展覧会へ出展する絵画部門の作品の規定サイズは、

５０号（１１６．７×９１．０センチ）までじゃなかったっけ？

校舎から出ると、

夜の気配をたたえた空気が紫音の肺を満たした。
藍色に染まった空にうっすらと昇った白い月が、
地上にやわらかな光をもたらしていた。

その月は十分に丸かったが、
端がほんの少し欠けていた。

完全に満ちるまで、
後ほんの数日だろう。

紫音は耳もとを通り抜ける風のうなりを聞きながら、
清らかにそっと浮かぶ月を見た。

今回の作品はこれにしよう、
と紫音は何となく思った。

何故かなんてわからない。

ただ、所在なさそうに昇り、そして沈む、
そんな意味のないことを繰り返している空虚なところが
どこか自分に似ていると思った。

肩にかけたヘッドフォンで耳を覆うと、
紫音は寮に帰った。

8（後書き）

参考、一部引用：　岩絵の具で描きたい！日本画ｓｔｙｌｅ　（Ｗｅｂ）

Full moon ～The first half

２０１０年５月８日　土曜日

授業が半日で終了するこの日、
紫音はまっすぐに家に帰ると、
部屋の掃除に取りかかった。

別段それは来週の中間試験を目前にして
ふと掃除がしたくなる学生の心理に突き動かされて、
といったものではない。

出たのだ。昨晩。

リアルな『黒光りするG』が。

昨日出たものは
手近に叩くものがなかったため
洗剤を噴射して仕留めたが、
一匹出れば百匹は堅いやつらのことだ。

今もこの寮にはびこっているに違いない。

そしてその一番の出所はおそらく『誰とは言わない』が、

伊織順平の部屋だろうと紫音は思っていた。

とはいえ、
さすがの紫音も順平の部屋を掃除するのはごめんだ。

それこそ『黒光りするG』どころか、
『ワーム』シリーズが蔓延っていてもおかしくはない。

せめて自分の部屋くらいは
彼みたいにならないようにしておきたかった。

紫音は簡素な自室をぐるりと見回して、
気合いを入れて掃除にとりかかった。

２０１０年５月９日　日曜日

突如人手が足りなくなったという
アルバイト先からの電話で紫音は目を覚ました。

時計は１０時を回ったところで、
紫音は移動時間が最低でも１時間と少しを要することを伝えて、
急いでバイトへ行く準備に取りかかった。

財布や携帯などの必需品を乱暴に鞄に放り込みながら、
紫音はふと、机の上に置かれたものに目を向けた。
それはいつかアイギスから手渡された
『お守り』　の白いホルスター付きの革ベルトだった。
ホルスターに収まった光沢のあるそれは、
朝の日差しを浴びて鋭く煌めいた。

できる限り持っていて欲しい、
とは言われたものの、
ホルスターに収まっているモノは
どう見ても物騒なものにしか見えないのだが……。

紫音はそれをそっと手に取った。
相変わらずずしりとした重みを伝えるそれを
少しだけ見つめると、
紫音は鞄の奥底に詰め込んだ。

何故だか今日はこれが必要である、
そんな気がしてならなかった。

こうして、
紫音の長い一日が始まった。

バイトが終わる頃には、
既に２２時を回っていた。

紫音は疲れで少し重たい体を
引きずるようにして駅へと向かっていた。

墨が落ちたように真っ黒な空には、
星はなく煌煌と明るく輝く白い月だけが咲いている。

静謐な光をたたえるその華は、
一滴のゆらぎもない水面に咲く睡蓮のようだ。

まあるい、それは、
いつか見上げた月のように一欠けもない。

ああ、と紫音は思う。

今日は、満月なんだな。

そうして紫音はその白い花を掴むように、
空に手をかざして――――

「だめ」

突如静寂を切り裂いて響いた声に、
紫音ははっと我に返った。

声のした方を向くと、
紫音の半分くらいの背丈の少女が、
じっとこちらを見ていた。

二つにくくった髪をサイドより
少し手前に揺らした少女はその胸に
赤いリボンをつけた
茶色い毛並みのぬいぐるみを抱きしめて
一人ぽつんと立っていた。

その輪郭は闇の中であるはずなのに
やけにはっきりしている気がした。

「龍可……？」

紫音がつぶやくと、
少女はよかった、と安堵したように
こちらに駆けてきた。

どうしてここに居るのか、
そしてこんな時間に一体何があるのか、
紫音は脳裏によぎったそんな疑問を抱えて
彼女の周りを見回した。

しんとした暗い夜道に人の気配はなく、
いつも一緒の双子の兄の姿も見当たらない。

「よかった、紫音。

あなたを捜していたの」

来て、というように手を引く彼女に、
紫音は困惑気味に龍可を見た。

すると龍可はあせったようにこちらを見返すと、
懇願した。

「お願い、今は話している時間がないの。

急いで『私』のところに来て」

その言葉の意味がわからず、
紫音は眉を寄せてさらにじっと龍可を見た。

反応に困ったように、
だが必死に紫音の腕にしがみつく龍可。

その胸に抱かれたぬいぐるみが
心なしか目をすがめて、
彼女の周りでいつも聞こえていた不思議な声を発した。

『くりくり……』

え、と紫音が声を発した、
その時。

「おおーい！しおーん！！」

背後から聞こえてきた快活な声に、
紫音は反射的に振り向いた。

すると息を切らせて走ってくる
龍亞の姿が闇の向こう側にぼんやりと見えた。

紫音のもとまでたどり着くと、
龍亞は息を整える間もなく口を開いた。

「よかったぁ。見つかった。

さっき龍可がここに居るって言ってて、
それですぐに来たんだ」

その言葉に、紫音は首を傾げて口を開こうとして、
はたと気がついて背後を見た。

先程まで確かに紫音の腕を引いていた龍可の姿が、
こつ然と消えていた。

紫音は慌てて辺りを見回したが、
やはり龍可の姿はどこにもない。

きつねにつままれたようにほうけている紫音に、
龍亞は焦ったような口調で続けた。
「大変なんだ！龍可が突然倒れちゃって。
お願いだよ、紫音、すぐにオレと一緒に来て！」
その言葉に驚いて目を見開いた紫音は、
龍亞の言われるままに夜の街を走り出した。

紫音の胸に、予感めいた不安が
じわり、と広がった。

大通りに出た紫音たちは、
幸いすぐにタクシーを捕まえることができた。
タクシーの中で、
龍亞は妹が倒れたときのことを過去の話を交えて
紫音に話した。

「龍可は昔からちょっと体が弱くて、
一時期は寝たきりになったことがあったんだ。
オレ、眠っている龍可の枕元で
いつも名前を呼んでた。
そしたらある日、
龍可が目を覚ましたんだ。
オレの声が聞こえた、って。
起きた龍可はデュエルモンスターズの
精霊世界に行ってた、って言うんだ。
精霊達に、この世界を守って欲しいって。
それから、龍可はカードの精霊の声と姿が
感じられるようになったんだ」
そう語る龍亞の声は真剣で、
冗談を言っているようには到底聞こえなかった。
龍亞は膝の上で握りしめた拳を見つめながら、
続きを話す。
「初めは、オレも疑ってた。
でも、その内不思議なことが沢山おこって、
本当のことなんだって、思ったんだ。

最近はあまりなかったんだけど、
でも、倒れる前に龍可は確かに、
精霊たちが『危ない』、って言ってた。
それを食い止めるために、行くんだって。
それから」
そこで一旦言葉を区切った龍亜は、
視線を上げて紫音を見た。
真摯でまっすぐなその瞳には、
兄として純粋に妹と仲間達を守る、
という決意が強くにじんでいた。
「今迫ってる俺たちへの危機に、
紫音が必要なんだって言ったんだ」
紫音はその瞳を見返した。
彼の瞳に映った自分の姿は希薄で、
どうしようもなく頼りなかった。
こんな自分に、
一体何ができるというのだろう。

紫音が言葉を返せないでいると、
タイミングよくタクシーが目的の場所に着いた。
紫音は深夜料金制でかなり割高になった代金を支払うと、
龍亞とともにタクシーを降りた。
目指すは龍可が眠っているという、
彼らのペントハウスだ。

To be continued…

Full moon ～The second half

ホテルの最上階に広がる敷地が、
龍亞たち兄妹の住まいだという。

専用のエレベーターから降りた紫音は、
その広大さに足を踏み出していいものか逡巡したが、
龍亞に促されて彼の小さな背中について歩いた。

真っ暗な闇が濃厚に満たされた室内は
しん、と耳が痛くなるほどの静けさに包まれていた。

室内独特のかすかに埃くさいにおいが鼻腔を満たした。

だだっ広いリビングからは、
ガラス戸一枚を隔てて綺麗に手入れされた庭が一望できる。

庭には背の高いヤシの木や、
種類はわからないが南国の植物が
花壇に規則正しく植えられている。

輝くような白く美しいタイルに覆われた庭の大部分は
広大なプールが占めていた。

風のない穏やかな水面は静かに闇に沈み、
まるで鏡のように浮かんだ月を映し出している。

「こっちだよ」
メゾネットの階段を上がりながら、
龍亞が手招きした。
紫音はゆっくりとそれについて行く。
吹き抜けになっている開放的な二階の廊下に並んだドアの一つに立ち止まると、
龍亞は躊躇なく扉を開けた。

青い、部屋だった。

否、そこは驚くほどに巨大な月が、
窓一杯に広がっていた。
窓から燦々と差し込む月の光が、
黒かったはずの空と闇を青く照らし出していたのだ。
龍亞が歩いたことにより舞い上がった埃が、
窓からの光に照らされて粉雪のように静かに落ちていく。
それは限りなく幻想的で、

そしてそれ故に有り得ないほど
狂気的な美しさをたたえていた。

そんな狂った美しさに満ちた部屋のベッドで、
龍可は静かに眠っていた。

紫音は息をするのも忘れて、
入り口からその光景を眺めた。

「龍可、紫音を連れて来たよ」

龍亞がベッドの縁で、
龍可にそっと呼びかける。

龍可はそれに反応を示さなかった。

白い顔をして横たわる龍可は、
この部屋に満ちた青い闇の中、
まるで死んでいるかのようだった。

その『死』という生々しい響きに、
紫音の心臓が
どきり、と跳ねる。

「紫音も、こっちに来て」

龍亞の声に導かれるまま、
紫音は一歩、
その部屋に踏み込んだ――――――

途端。

ぐにゃり、

と、世界が飴のように溶けた。

襲い来る激しいめまいに
立っていることさえできず、
紫音は額を押さえてうずくまった。

心配する龍亞の声が
頭にぐわん、と反響する。

波のように満ち引きを繰り返す
めまいと吐き気に、
その声が何を言っているのか
紫音にはすでに理解できなくなっていた。

「――っ――！

――――――。

――――……

……

……」

だんだんと、
龍亞の声が遠くなっていく。

それは救急車などと
すれ違ったときに起きるあの現象のように、
屈折した龍亞の声は意味をなさない音となっていった。

やがてその音さえも完全に聞こえなくなった時。

――――風のうなりが耳を叩いて、

紫音は目を開いた。

いつかのような真っ白い月が目を焼いた。

「ーーーー！」

紫音は風で暴れる髪を押さえて、
辺りを見回した。

それは最近夢で見た光景に酷似していた。

空の半分を覆った
『垂れ下がっている』という表現が
ふさわしいほどの大きな丸い月。

澄んだ青い世界で、
水面のようにおぼつかない地面に
ぽつりと立つ紫音。

そしてはるか眼下に広がる、

ネオドミノシティ。

だが、夢と違うことが一つ。

ごうごうとした風の音の中に紛れるように、
ひっそりとした声が聞こえた。
不特定多数の、声。
その声は風の中にも関わらず、
鮮明に紫音の記憶を刺激する。

ひそひそ。

ーーーーきみは、一日は二十四時間じゃないと言われたらーーーーー

こそこそ。

ーーーーそれは一日の狭間にある、隠されたーーーー

ひそひそ。

ーーーー汝……我。我は……ーーーー

『影時間』。

「紫音！！」

逼迫した龍亞の声に、
紫音は驚いて彼を見上げた。

くらり、と先程のめまいのなごりが一瞬垣間見えたものの、
その他の妙な感覚はすっかり抜けていた。

額をびっしりと覆った汗を拭って、
紫音は床についていた膝に力を入れる。

相変わらず巨大な月に照らされたその部屋は、
一種の棺桶のように不気味な沈黙を保っていた。

しん、

とした、静寂。

それはまるで、この世界に紫音と龍亞だけが
取り残されてしまったような錯覚さえ起こさせた。

その中で、龍亞の目は瞬きもせず
ある一点へと向けられていた。

視線の意味するものは、
明らかなる得体の知れないものへの、怯えだった。

龍亞の瞳は凍ったように、
月を宿した窓へ向けられている。

紫音はそんな龍亞と窓を、
いぶかしげに見ていたがーーーー

ぴちゃ。

何かが、

床を叩く音がした。
それはたとえるなら素足が床を踏みしめる、
じっとりとした質感を持った音だった。

ぴちゃ。

再び聞こえる、足音。
先程より幾分かはっきりしたその音に、
紫音は肌が粟立つのを感じていた。

生々しい、それはゆっくりと、
しかし確実に迫ってきている。

ぴちゃ。

立ち尽くす紫音に、
龍亞が寄り添う。

ぎゅっと握られた服越しに、
その今にも切れそうなほど張りつめた緊張が伺えた。

ぴちゃ。

また一歩、迫る音。

ぴちゃ。

そしてもう一歩。

ぴちゃ、

ぴちゃ、

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、

「ーーーーーーーーっ！！」
瞬間、龍亞の絶叫が弾けた。

二階のはずの窓の向こう側に、
『手』が生えた。

それは青い闇の中、
焼けこげた炭のように真っ黒な姿を晒していた。

べちゃ、と窓枠をつかむ
その『手』はほっそりとして、
というよりも骨のようで、
凹凸のない無機質なものを寄せ集めて
無理やり人の手を形成しているようだった。

目を凝らすとその手の指は
関節が大量にあるぐにゃぐにゃとした指もあれば、
全く関節のない棒のような指もあった。

そしてその手にぐっ、と力が入って、
ぬぅ、とその下の頭が現れた。

のっぺりとした黒い頭には、
青い仮面がつけられていた。

それはまるでその存在を示すように、
空虚でぬらりとして
限りなく無表情な仮面だった。

ぽっかり空いた仮面の目の奥は、
夜を集めて固めたように
ただただ虚ろな穴があいていた。

その仮面をつけた頭が、
かくん、
と傾いた。

「っ！」

そのあまりのおぞましさに、
紫音は胃の中のモノが
ひっくり返りそうになったが、
口許を押さえると寸でのところで
それを呑み込んだ。

今はそんな悠長なことをしている場合ではない。

伸びきったゴムのような首は、
頭の重さに耐えかねて
だらり、と垂れ下がった。

窓の外でゆらゆらと今にも千切れて落ちそうな頭で、
それは器用に窓の中を覗いていた。

ゆっくりとした動作で、
こちらの様子を確認するように
さらにぶらぶらと首を揺らした。

その姿は無垢な子供が、
蟻の巣に水を流し込もうとしているかのように、
無邪気で残酷な、悪意そのものだった。

そしてだらりと
だらしなく垂れ下がった

それの虚ろな目と、

紫音の目が、

あった。

ばん！

「ーーー！」

突如、それの関節だらけの手が、
窓を叩いた。

ばん、ばん、ばん、ばん！

激しく叩かれる窓に、
龍亞が再び絶叫を上げた。

龍亞の声と窓を叩く音が重なり、
響き合って、室内は阿鼻叫喚の渦へとのみ込まれた。

その音に反応したかのように、
窓を叩く音が激しくなり、

そしてついに、

度重なる衝撃に
窓が音を上げた。

ばりん、

とあっけなく崩れ落ちた窓ガラスの破片を
ぬちゃり、と踏んで、
それは左右で長さの違う足で
奇妙にバランスをとりながらこちらに向かってきた。

その手に細く長い、
剣を持って。

月光に煌めく剣が、
紫音に向かって振り下ろされた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

「ーーーーー！」

紫音は反射的に龍亞を両手でかばいつつ、
床を蹴った。

一閃された剣は紫音と龍亞の代わりに、
紫音の鞄を切り裂いた。

鞄は空中で二つに分かれると、
中身をぶちまけながら重力に従って床に落ちた。

受け身をとっていた紫音が龍亞とともに床を一転して、
素早く体勢を立て直す。

紫音はこの未知の生命体に対し
何か武器になりそうな物はないかと
辺りに視線を巡らせたが、
子供部屋らしきこの部屋には
当たり前だがそういった物は見当たらなかった。

そうこうしていると、
のろのろと体勢を立て直した『それ』が、
頭部を揺らしながら再び剣を構え直した。

『それ』は揺れ動く頭のせいか、

突進の速度は速いが、
方向転換は苦手のようだ。

できればその隙をついて
逃げ出したいところだ。

おそらく紫音と龍亞の二人だけならば、
容易いとまではいかずとも、
この場所からの逃走は可能だろう。

だが。

龍亞を自らの背にかばいながら、
紫音はちらりと右手前にあるベッドに視線を向けた。

そこには身じろぎもせず、
深く安らかに眠っている龍可が
静かに横たわっている。

小学生とはいえ人一人を抱えて
『それ』から逃げられる自信は
さすがの紫音にもなかった。

紫音は頬を伝った冷たい汗を拭いもせず、
『それ』を見据えた。

どうする。

紫音は自分自身に問いかける。

逃げるか。

だが、どうやって。

その問いに紫音が答えを出せないでいると、
狙いを定めた『それ』が再び剣を振り上げた。

その切先は、
しかし紫音たちには向いていなかった。

「龍可！」

瞬間、紫音の影から飛び出した龍亞が
ばっ、とそれの前に躍り出た。

「！！」

その予想外の行動に紫音は完全に出遅れた。

龍亞へと伸ばした手は、
むなしく空をつかむのみ。

勢いよく振り下ろされた剣が、
風を切ってひゅ、と音を立てる。

龍亞の大きな目に、
そのおぞましい光景がありありと映し出されている。

眼前にせまった死に、
しかし龍亞は覚悟を決めていた。

最愛の妹を抱きしめて、
龍亞は断固として一歩も退かなかった。

そして紫音は
身を呈して庇うことさえできず、
龍亞の小さな体に
ぎらりと光る凶器が振り下ろされるのを、

ただ見ているだけしかできない。

紫音の目の前で、
それはスローモーションのように、
ゆっくりと流れて行った。

双子へと伸ばした手が
力なく、下ろされた先にはーーーー

かつんと、
指先が硬いものに触れて、
紫音は反射的にそれを握りしめた。

留め金の外れたホルスターから
滑るように抜け出した
冷たく重い、
しかしどこか安心感のある、それ。

意識の端で、

いつか聞いた声が聞こえた。

選びとれ。

我は汝。

心臓が、ばくばくとやたらとうるさい。

まるで耳元でなっているかのようだ。

息の仕方を忘れたかのように、

半開きの口が酸素を求めてかすかに震えた。

紫音は今、自分を取り巻く環境を、

どこか懐かしいとさえ思いながら、

それの口を自らのこめかみにあてがった。

「なんじは、我ーーー！」

今。

紫音はようやくここにいる意味が、

わかったような気がした。

がん、と乾いた音を立て、

それは紫音を打ち抜いた。

ーーー瞬間。

きん、と澄んだ音がして、
全てが静寂に包まれた。

それはほんの一瞬の出来事だった。

肌を刺すような鋭い冷気が、
部屋に立ちこめていた。

冷気は白いもやとなって、
この部屋にいる者の体温を
急速に奪っていく。

吐き出された息が白くけぶり、
それもすぐに熱を失って霧散した。

そんな白い世界の中、
紫音はゆっくりとそれを見た。

振り下ろされた剣は
龍亞に接触する数センチ手前で
止まっていた。

白く濁ったその刃先から、
ぱらりと、降り積った霜がこぼれ落ちた。

襲い来るはずの痛みがないことをいぶかしんだのだろう。
龍亞が伏せていた体をゆっくりと起こした。

「うわぁ！」

目の前にせまった刃に
先程の気迫はどこへ行ったのか、
龍亞は間抜けな声を上げてのけぞった。

だがすぐに『それ』の様子に気づいて、
龍亞は瞳を丸くした。

あのおぞましい黒い物体は、
どこまでも透明な分厚い氷の結晶に覆われ、
ひたりと動きを止めていた。

月の淡い光に映し出されて、

さながら狂的な芸術家が制作した
不気味な彫像としてそこに立ち尽くしている。

龍亞は未だ何がおこったかわからず
混乱していたが、
はたと気がついて
眠る妹をその場から連れ出した。

それと十分な距離をとった龍亞は、
訳がわからない、というように
紫音を見て、

「ーーー紫音、それ…」

紫音の背後に控えるこの冷気の主に、
龍亞は再び驚きの声を上げた。

ぱきぱきと音を立てて羽ばたくそれは、
輝くような美しい氷の体をこの狭い室内にうねらせて
窮屈そうに、だが厳かに紫音の背後にひかえていた。

雪の結晶のような頭から
いつかのように、
白くたなびくような細い息を吐き出していた。

そう、それはまぎれもない。

紫音にとって初めてのデュエルの授業のときに現れ出た、
氷の化身。

『氷結界の龍　ブリューナク』

龍亞は魚のように口をぱくぱくとさせていたが、
やがて一つ深呼吸をすると、
やや的外れな疑問を口にした。

「それ、ホンモノ？

ソリッドビジョン、じゃないよね。

だって寒いし……」

口許を引きつらせる龍亞。

確固とした硬い実態を持ったそれは、
ソリッドビジョンとは比較にならないほどの
圧倒的な質量と威圧をもって存在していた。

紫音は龍亞の問いには答えず、
す、と右手を上げた。

その右手に握られたものからは、
ブリューナクの口から漏れているような
細い煙がうっすらとあがっている。

紫音の手に握られた、
鈍く輝く銀の、拳銃。

応えるように氷がこすれるような声を上げて、
龍は長い体躯をうねらせた。

瞬間、
あの不気味な彫像が、
内側から破裂した。

「ーー！！」

龍亞が息をのんだ。

それは砕けた氷とともに
バラバラになって床に雪崩れ落ち、
青い闇に溶けるように
跡形も残さず消え去った。

それを境に。

窓にかかっていたあれほど巨大で存在感のあった満月は一変し、
アリスに出てくるチェシャ猫の口のように細く
頼りないモノになっていた。

そんな月の周りでは、
小さな星々がちかちかとまたたいている。

月の光に照らし出されて目が痛くなるほどに青かったその部屋は、
元の薄暗闇が支配する普通の子供部屋に戻っていた。

気づいたときには身震いするような冷気もなくなっていて、
紫音の背後にいた氷の龍も夢のようにかき消えていた。

後に残されたのは、
龍亞と龍可、紫音と、

破壊された窓ガラスに、

紫音の手に握られた銃だけだった。

「ん、うぅ…」

全てが終わり誰ともなく
ほっと息を漏らしたその時、
彼の胸で眠っていた龍可が
小さく呻いてうっすらと目を開けた。

「龍可！」

はっとして笑みをこぼす龍亞に、
龍可はそっと兄を見上げて微笑んだ。

「よかった、龍亞。

それに、紫音も」

まるで龍可は眠っている間に
二人を襲った出来事を知っているかのように、
安堵にその目尻に涙を浮かべた。

「よかった、龍可。

心配したんだぞ！

また、目を覚まさなかったらって思ったら…」

双子たちのそんなやりとりを微笑ましく見守って。

紫音は体全体に重くのしかかる疲労にその場にくずおれた。

ど、と床に沈んだ紫音を呼ぶ双子の声が、
徐々に遠ざかっていく。

襲い来る眠気に抗うすべを持たない紫音は、
重い瞼を閉じて全ての感覚を失った。

意識を手放した先で、
紫音は深い闇に落ちていった。

……

……

一章　あとがき

初めまして、歌音と申します。
いつもをご愛読頂きまして、
誠にありがとうございます。

皆様の閲覧のおかげで、
この作品はめでたく一章終了の運びとなりました。
まずは御礼を申し上げます。

さて、それでは各話の解説と補足です。

・0

紫音が生徒会長となり、ネオドミノに行く少し前の話です。
本作では、それぞれのキャラクターの崩壊が起きないように、
できるだけ配慮して動かしています。
順平（テレッテ）は中でも自由度の高いキャラだったので、
序盤の様子見としておそるおそる書き上げました。

この作品ではゲーム本編で成長しきった後のテレッテなので、
持ち前の明るさも健在ですが、少し大人っぽさも出るようにしました。

後は、鳥海先生の下の名前を忘れてネットを駆け巡ったのはいい思い出です（笑）

・1

ネオドミノシティって、凄く描写が難しかったです。

一応、最近の遊戯王をあんまり知らないで
読んで下さっている方にも楽しんでもらえるようにしたかったので、
こういった情景描写は大切にしています。

皆さんのイメージとそこそこのシンクロ具合が出せていればいいな、
と思っています。

余談ですが、遊戯王５Ｄ'ｓのＯＰは『ＬＡＳＴ　ＴＲＡＩＮ　－
新しい朝－』が
一番よかったし、イメージに最も合っていると思っています！

アイギスとの回想ですが、実は私、
アイギスってあんまし好きじゃないんですよ（笑）

物語中盤になっていきなり出てくるし、
終盤は主人公にべったりだし
ロボだコレー！だし。

でも、女主人公のときも男主人公でも、
変わらないコミュストーリーを見て、
ああ、アイギスって、主人公に恋してるんじゃなくて、
それとは違う『仲間として大切』なんだ、

（ＣＣさくらでいうところの、『ケロちゃん』ポジ）なんだ、
って気がついてから、
めちゃくちゃ嫌いではなくなりました。
なので本作でも、アイギスは、そういった立ち位置で進めて行こう
と思っています。

・委員長登場回

委員長とは、タッグフォースの中で出てくるフルバーン委員長です。
強いですよ～。鬼畜です。
でも、５で弱くなりましたね。
フルバーン↓ロックバーンっぽくなってしまって。
まじめででも固すぎず、
眼鏡でボブとセミロングの中間くらいの髪型で、
個人的にものすごいツボの子です。

多分不真面目な紫音をこれからも叱ってくれるでしょう（笑）

そしてアキさんの登場。

キャー、アキサーン！
美しい！まぶしい！

遊戯王歴代ヒロインの中で一番好きです！

彼女はとりあえずしばらくは
無知な紫音のサポート役ですかね。

・Ｌｅｓｓｏｎ１

遊戯王のアニメって、デュエルがどんなふうに進んで行くのか、
って説明が不足してて、凄くわかりづらいので、
これから話を書くにあたって、是非皆さんに基本ルールを知ってもらいたいな。

とおもって、この回を書きました。

まだまだこの回だけでは書ききれないので、
これからも続きます。

あと、重要な伏線を、どうでもいい回に入れるのは
遊戯王では伝統芸なので、それに則ってみました（笑）

・大庭ナオミ登場回

タッグフォースに登場する、
潔癖性で男嫌いである意味メタキャラの登場です。

この子はいちいち反応が面白いので、
出しました。

今後も少しずつ登場させたいです。

・２

クロウ登場回ですね。

現在はＺｏｎｅ戦後の時間軸なので、
セキュリティになりたての彼には
それらしく登場してもらいました。

そして一応トリックスター（自称）らしく、
させてみたのですが、
如何でしたでしょう？

あと、遊戯王の悪者って、
みんなレアカード欲しがりますよね。

正直金品奪って欲しいカードを
シングル買いした方が儲かるんじゃないの？

って、思うんです。

いつもアニメを見ていて思った
素朴な疑問を紫音に言わせてみたかった。

できて満☆足です。

・3

久々の日常回です。

私は生徒会に所属した経験がないので、
実際にどんなことをしているのかは想像で書いています。

もしもこんなことしてるよ！
っていうことがあれば、
教えていただけると、嬉しいです。

美鶴先輩には、ガチなボケをかましてもらう。
このためだけに、この回を用意しました（笑）

ヴァンガードも、カードアニメとして
遊戯王とは違った意味でぶっ飛んでて、
面白いですよね。

一度、このアニメの予告の一言に腹筋をもっていかれて、
死にそうになったことがあります。

思い出すだに……恐ろしい。

後、遊び方が遊戯王ほどややこしくないから、
アニメ見てるだけでも流れがわかるところがいいですね。

それと、同じカードが複数積んであって、
きちんとデッキ構成できてるところが
地味にいい！と思います。

是非、美鶴先輩には、今後も視聴して欲しいです。

・4

龍亞、龍可登場です。

この二人は元気で明るくて、
子供らしいところがいいですね。

天田少年は大人びようとがんばりすぎてましたからね。

無邪気に全力で紫音にぶつかってくる
キャラクターでいて欲しいなぁ、
と思います。

後、コメントで教えていただくまで、
龍亞の亞を亜と間違えていることに全然気がつかなくて。

助かりました！ありがとうございます！

・バイトの話

今作でも紫音君には喫茶店のウエイターをしてもらいました。

ウエイターのバイトなんて、カッコいいですよね。

カッコイイ制服をきっちり着こなした
細身なイケメンがやってる店なんて目の保養に足を運びたいですね。

それでどうせなら、ステファニーことがに子と
仲良くバイトをしてもらおう、と思い至ってできた話です。

ついでにジャックにも会えるしね！！

・5

日常回、友近、宮本&結子バージョンです。

もっとも日常パートっぽい回でしたね。

屋上で昼食ってやったことないんですよね。

どこの屋上も閉鎖されちゃってて。

個人的なあこがれです。

宮本の下の名前は、なんて読むのか今一つわかってません。

なので、一般的にはこう読む、

という無難な例として『ひとし』、

とさせていただきました。

あと、結子も今ひとつわかりません。

四コマ漫画では『ゆいこ』だけど、

『ゆうこ』と言っている方もいますし。

とりあえず、『ゆいこ』で通していきたいと思っています。

ちなみに、紫音は結子とのコミュはもちろんＭＡＸです。
でも、つきあっているとかはなくて、
紫音は面倒見のいい可愛らしいところのある同級生、
といった感じの認識をしています。

ゲーム内での結子の可愛らしさは異常でしたね。
やっててにやにやが止まりませんでした。
修学旅行での会話は地味に好きです。
でもごめんね、結子。
『紫音』君はみんなのものなんだ。

・6

三年生にもなると全国模試くらい月一で
余裕で入ってきますよね。
ひどいときは三周連続で、
とかの経験があります。

それはさておきようやく遊星の登場です。
星のように自ら輝く遊星と、

月のように静かにたたずむ紫音の
対比を書きたかった回です。

月と星、
夜空に欠かせない彼らの物語が
ようやく本格的にスタートです。

・7

ゴールデンウィークの有意義な過ごし方です。

というのは嘘で、
今回はデッキ制作に辺り、
デッキの種類の解説です。

あなたはどんなデッキがお好みですか？

・Ｄｕｅｌ　回

アニメでは絶対にしない、
コンボ連打の対決です。

今回は、『（ほぼ）純ライロ』ＶＳ『ギガプラ軸植物』です。

この時点で、多くの遊戯王ユーザーの方はお気づきでしょうが、

この二つのデッキ、完全なガチじゃありません。

ライロはネクガやゾンキャリなどの
闇属性ギミックと組み合わせた『ダークロード』が主流ですし、

ギガプラビートは速攻墓地肥やしでライコウ援軍積み、
モンスターもエボルテクターやウィルプスなど
『デュアル』でまとめたものになってきますか。

シンクロも、同じレベル7ならパワーツール出して、
スーペルをサーチして、スーペルギガプラに再びつけてシンクロして、
のループだと1キル余裕の鬼畜回りになります。

スーペルのデュアル蘇生効果は強制なので、
タイミングを逃すことなく、蘇生させます。

つまり、相手によってリリース、
シンクロの素材にされたとしても最低でもギガプラは残る、
攻撃力２４００が常に立っている状態になる、
ということ。

相手からしたらウザいことこの上ない。

マーサはいつも言っていた。

スーペルもギガプラも悪くない、
ただ、ギガプラにスーペルをつけるのが悪いんだ、と！！

とまぁ、こんなふうに完全なガチはーターンキルが普通です。
後攻二ターン目で勝負がつくなんてザラにあること。

……とはいっても、やはり小説ですし、
キャラクター性重視で進めて行かなくてはなりません。
このキャラ重視というのがかなりキツい制限だと、
書いていて思いました。

でも今作は結果的にアキさんっぽい回りになったのではないか、
と自分では満足しています。

そしてオネストのとどめ。

賛否色々ありましたが、
普通のデュエルって、結構あっけないことで決着がつくものです。
それでもプレイしている間は手に汗握る攻防なので、
そんな雰囲気を出したくて、あえて妥当な終わりにしました。

こうしてみると、カードゲームって、
結局引きゲーなんだって、強く思えるんですよ。
どんなに色々組み込んだところで、
引きがよければデッキが回り勝つべくして勝つ。

逆に回らなければ負け、なんです。
そういった意味では今回紫音は、
勝つべくして勝った、と言えるのではないでしょうか。

ちなみに私が引きゲーを強く感じたのは、
天魔神　ノーレラスの効果を相手に使われたときでした。

天魔神　ノーレラス
効果モンスター
星８／闇属性／悪魔族／攻２４００／守１５００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の光属性・天使族モンスター１体と闇属性・悪魔族モンスター３体を
ゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。
１０００ライフポイントを払う事で、お互いの手札とフィールド上のカードを
全て墓地へ送り、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

まさに引きゲーでした。

・８

日常パートその３です。

風花編の今回は部活動にしました。
今回は私の趣味を反映しまくった内容にしてみました。
最初は管弦楽にして、
マーチングバンドの練習でもさせようかとも思いましたが、
弦楽器も入ってるとマーチングは無理だな、
と思って諦めました。
後、Ｐ３Ｐしかやってない私は
紫音がどの楽器をしていたのかわかりませんし。
地味に気になっています。
よかったら、どなたか教えて下さい！

さて、美術と言えば、デッサンとか、
あんまり面白みのないものなんじゃないかと
思っている方も多いと思います。
確かに、美術は音楽と比べて華やかさはありません。
基本的に同じ体勢で何時間も美術室にこもって、
はっきりいって恐ろしい形相で作品を作っています。
自分一人での制作が基本ですから、協調性も皆無です。
でも、モノを創る、というのは、
色んなことを考えさせます。

色んなことを見聞きして、感じて、
そうしてようやく理解できることがあります。

どれがかけても、中途半端でしっくりくるモノにはなりません。

でもそれは、返してみれば美術でなくとも
どんなモノでも同じだ。

そんな当たり前のことを、言えた話にできたのではないか、
と思っています。

そういう意味で、美術に興味のない方にも
是非読んで欲しい話です。

・満月

ようやく本編が始まりました。

このクロスでやりたい一番は、

『遊戯王カードのモンスターを使って怪物と戦う』

というバリバリのファンタジーでした。

ここまで来るのに、かなりかかってしまいましたが、
ようやく本編を始められて本当に嬉しいです。

やはりこれがないと、コミュも始められませんからね。
それにしても、何で初期がブリュなの？
と疑問に思われた方もいると思いますが、
これを始める一年くらい前に
５Ｄ'ｓの５龍の話を友人としたんですが、
『水』属性がいない、というのと、
性能とか見た目とか考えると、
エンシェントフェアリーよりブリュのほうが合ってるね、
という非常に個人的な会話が基です（笑）
なので、こういった機会があれば、
ブリュでやりたかったんです☆

さて、一章は大体こんなところだと思うのですが、
如何だったでしょうか？
少しでも皆様に楽しんでいただけたなら幸いです。
これからかなり長い旅路になるかと思いますが、
どうかお見捨てなきよう、よろしくお願い致します！！

＊

「ようこそ、ベルベットルームへ」

聞き覚えのあるしわがれた老人の声に、
紫音は緩慢な動作で顔を上げた。

ふわふわと毛の長い上質な青いカーペット。

巨大な空間にかけられた太陽のように輝く金色の大時計。

すべすべとしたテーブルクロスのかかった丸机を挟んだ先には、
やはり青い布地のゆったりとしたソファ。

そこに、先の声の主はいた。

悪魔のように尖った耳に特徴的な長い鼻、
そしてその左右についた白目がちの目で、
その老人は紫音をまっすぐとらえていた。

「お久しぶりですな。

……といっても、
あなたはおそらく覚えておりますまい。
今のあなたは『あの時のあなた』ではない。
『命のこたえ』に辿り着いた、
『あなた』では」
言ってふふふ、と老人はのどを震わせた。
紫音はその老人の言っている意味がわからず、
ただただ呆然と紡がれる言葉を聞いていた。
そんな紫音に、
彼はまた老かいな笑いを顔に浮かべて、
「失礼致しました。
同じ姿、そして魂をした方が再び現れるのは、
こちらとて初めてのことでしてな。
ついおしゃべりが過ぎてしまいましたな。
私の名は、イゴール。
ここは夢と現実、

精神と物質の狭間にある場所。
そして何らかの形で
契約を交わされた方が訪れる部屋」
言ってその老紳士、
イゴールは、目をつむった。
「しかしあなたとの契約は、
一度は果たされている。
今回あなたはここでの契約を
他へと移譲するために、
訪れたに過ぎない」
けいやく、
とどこか聞き覚えのある単語を
紫音がぽつりとつぶやくと、
テーブルの上にさっと革張りの契約書が現れた。
そこには確かに、
神無瀬　紫音
と名前が記されている。
「今あなたが過ごされている土地は、
特別な土地。

そしてそこには特別なルールが存在するようだ。
郷に入っては郷に従え。
古くからあることわざです。
そのルールに従って、
あなたは新たに手に入れた力を磨き、
ご自身に降りかかる運命に抗わなければならない。
ですが、ご心配めさるな。
今度もあなたは決して一人ではない。
夜空にまたたくような数多の希望の光が、
あなたの支えとなってくれるでしょう。
そして同じだけの種類のカードが、
あなたには見えるはずだ」
そう言ったとたん、
契約書が光を放ち、
一枚のカードへと変わった。
白い枠の中に、
氷の体をした龍が描かれたそれは、
まるで意志を持っているかのように、
紫音の元へと収まった。

「これで、
私の役目は本当に終わりです。
これからのあなたの旅路に、
幸多からんことを」

ふ、と意識が混濁した。
くらりとしためまいに、
紫音はまたか、
と思う。

こんな感覚は、
今日で何度目だろう。

紫音は考えたが、
数えるのも面倒くさくなって、
そのまま目を閉じた。

1

近くで聞こえる複数人のささやき声で、
紫音は目を開いた。

目に入ったのは先の夢から一変、
真っ白い天井だった。

清潔なシーツに覆われた紫音は、
つん、とした鼻につく薬品のにおいで
ここが病院だと気づいた。

どうしてこんなところに……？

思って、おぼろげな記憶を辿ろうとした時。

「紫音！
気がついたんだね！！」

「よかった、紫音」

耳をつんざく喜びの声に、
紫音は驚いて目を白黒させながらも
ゆっくりと身を起こした。

「オレ、みんなに知らせてくる！」

「あ、龍亞！
病院で走っちゃだめ、って……
聞いてないみたい」
龍可のたしなめに、
しかし龍亞は興奮してそれどころではないというように
全速力で走り去った。
そんな兄の姿を見つめ、
もう、龍亞ったら、と呆れていたが
そんな龍可の声音もどこか柔らかかった。
「気分はどう？
どこか具合悪いところとか、ない？」
心配そうに尋ねる龍可に、
紫音は首を横に振って、
ない、と答えた。
すると龍可はほっとした様子で、
「よかった。
紫音、あの日からずっと眠ってて、
起きなかったら、どうしようって…」
そう言う龍可に、
紫音は首を傾げて

部屋にかけられたカレンダーを見ながら、
今日が何日か問う。
「5月16日よ。
今日でちょうど一週間くらいかな」
ほんの少しまどろんでいたと思っていた紫音は、
その言葉に驚いて、口を開こうとしたが。
がら、と音がして、
ぞろぞろと入室してきた顔ぶれに、
紫音はぎょっとした。

「久しぶりだな、紫音」

どこから情報を得たのか、
そこには龍亞を始め、
ジャック、クロウ、
アキ、そして先の再会の挨拶をした遊星と、
個性豊かな顔ぶれが集結していた。

２０１０年5月16日　日曜日

「まったく、お前寝過ぎなんだよ。
さすがの俺たちもひやひやしたぜ」
「フン、世話の焼ける奴だ」
椅子の上で呆れたり、
ふんぞり返ったりと忙しい
クロウとジャックにアキは眉根を寄せて、
「もう、二人とも。
折角目を覚ましたのに、
そんな言い方ないと思うわ。
でも心配してたのは本当よ」
そう言って笑うアキに、
紫音はごめん、と頭を下げた。
その反応がおかしかったのか、
紫音の周りで朗らかな笑い声が響いた。
「それにしてもまさかこんな再会になるなんてな」
そう言って苦笑する遊星に、
紫音はそうですねと答えた。

あの日紫音は、
双子からの連絡を受けた遊星に連れられて、
病院へと搬送されたらしい。

荒らされた部屋と倒れている紫音。

遊星はその理由を双子の、
主に龍亞から聞かされたが、
混乱していたこともありその内容は支離滅裂だった。

龍可の方も衰弱していたため、
この続きは紫音を交えて、
ということとなったのだという。

「起きたそうそうで済まないが、
できればその時の状況を詳しく説明して欲しい」

遊星の言葉に、
その場の全員が一斉に紫音を見た。

向けられた穏便でない視線に、
紫音は一つうなずいて、
バイト帰りにおこった不思議な出来事を
細かく彼らに話した。

話を聞き終えた彼らは、
一様に深く考え込むように沈黙した。

その反応に、紫音は当然か、と思った。

わけのわからない怪物に襲われて、
あげくカードの精霊らしきものを召喚して撃退した、
など、普通なら鼻で笑ってしまうだろう。

頭を打って夢でも見たのではないかと
疑われてもおかしくない。

それとももしかして
双子の家を荒らした不審人物
とでも思われているのだろうか。

遊星が倒れた紫音を運び出したなら、
その手に握られた、あるいはそばに落ちていた
銀色の銃を見ているはずだ。

重い沈黙の中、紫音は一人そんな不安を
頭の中でぐるぐる巡らせる。

だが顔を上げた遊星の口から出たのは、
予想外の事だった。

「実はその日の夜。
ネオドミノシティで突如として
前に君が言っていた『無気力症』に
陥った人々が複数現れたんだ」

「ーーーーー！」

紫音はその衝撃の事実に、
息をのんだ。

遊星の言葉を引き取ったクロウが、
説明を続ける。

「それも一人や二人じゃねえ。
病院が一夜にして『無気力症』患者で
パンパンになるくらいだ。
発症した患者の性別、年齢、発症場所などはばらばらで、
共通点はなし。
おかげで街中ひっきりなしに救急車が走り回る異常事態。
オレも人手が足らないってんで手伝いに出てたんだが、
ありゃあ、本当にひどいもんだったぜ」
そう語るクロウの顔には、
疲労の色がありありと浮かんでいた。

「だけどおかしいのはその後で、
紫音、お前が倒れたって連絡が来た辺りから、
それがぱったり収まったんだ。
それまで休む暇もなく
どこかで患者が出没してたのに、だぜ」

「……」

紫音はその説明に言葉を無くして聞き入った。
それは紫音の中の遠い記憶を呼び起こす、
そんなきっかけになる予感がした。
ただ、今はそれが一体何なのか、
紫音にはわからなかったが。

「その後の患者達の様態は様々だが、
中には意識を取り戻したって奴もちらほら出てきてる。
そいつらから話を聞いたところ、
全員示し合わせたように、『何かに呼ばれた』っていうんだ。
そして、紫音と龍亞、
お前らが出くわした怪物に襲われた、
って情報もあがってる」
ま、同じ奴かはわかんねぇけど。
そう言って、クロウは口を閉じた。

全員の間に、
嫌な沈黙が落ちた。

紫音はもちろん、
誰も口を開かなかった。

ただ無為な時間が、
じわり、と流れていく。

その沈黙に耐えかねたのか、
双子の兄こと龍亞が口を開いた。

「ねぇ、そういえば、
紫音がカードの精霊を呼び出すのに使った銃はどうしたの？」

「！」

その言葉に、紫音たちはっとして顔を上げた。

紫音は遊星に顔を向けると、
倒れていた自分の身の回りに、
銀色の銃が落ちていなかったかと聞いた。

すると遊星はこともなげに、
ああ、とうなずいて、

「それなら、俺が預かっている。

それから少し悪いとは思ったんだが、
あの銃を調べさせてもらった」
淡々と語る遊星に、
クロウは呆れたように彼を見た。
「なんだよ！
ったく、遊星も人が悪いぜ。
で、その結果はどうだったんだ。
なんかわかったのか？」
クロウの問いに、
しかし遊星は表情を曇らせ、
首を左右に振った。
「龍亞の話を参考にしながら簡単に調べてみたんだが、
残念ながら何の変哲もないモデルガンだった。
銃口も樹脂でしっかり固めてあって、
弾も出ないようになっている。
気がかりといえば、表面に彫られた
『S．E．E．S』の文字だが…」
鞄から取り出した白いベルト付きホルスターに収められた銃を紫音
に返しながら
、
心当たりは、と遊星は視線で問う。

紫音はしかしその視線に残念ながら、と首を横に振った。
そうか、と特に落胆した様子もない遊星は、
更に質問を重ねた。

「それから俺はこの銃の出所を探ってみたんだが、
それが全くわからない。

ネットを通じて世界中の闇市場から、
一般のおもちゃ会社まで照合したが
これと特徴が一致するものはなかった。

紫音は一体、これをどこで手に入れたんだ？」

問われて紫音は、
ぱっと思い当たったことを口にした。

「ネオドミノシティに来る日に、
同級生の女子生徒から渡された…。

お守りだって」

そして皆の注目の中、
紫音は彼女の名前を口にした。

「アイギス、

という子に」

To be continued…

＊

紫音は簡単な検査を受けてから、
その日の昼に退院した。

その足で、紫音は遊星、クロウと共に巖戸台へと向かった。

目的地は、月光館学園女子寮。

件のアイギスの住んでいる寮だ。

退院してすぐに紫音がアイギスに連絡をとると、
今日は寮に居るようだった。

学園の女子寮には治安維持局からアポイントメントを取り、
特別に一階ラウンジまでの立ち入りの許可をとった。

紫音たちは三者三様の面持ちで、
女子寮へと向かった。

紫音たちが女子寮のラウンジに入ると、
既にアイギスが待機していた。

彼女はラウンジに備え付けられたソファから立ち上がると、
三人を迎えた。

「お久しぶりであります。
紫音さん。

こちらの方々が、
例のネオドミノシティからのお客様でありますね」

いつもの独特の話し方で問うアイギスに、
紫音は一つうなずいた。

背後に控えていた二人がそれぞれ簡単に挨拶すると、
ソファを挟んで紫音たちはアイギスと対峙した。

「私への用件とは、
一体何でありますか」

彼女の率直な質問に、
クロウと遊星は目配せすると、

「実は、この銃がどこで出ているかを調べているんです。」

言って、遊星は彼女が御守りだと渡した銀色の銃を、テーブルに置いた。

銃を見たアイギスは、
はっとした様に目を見開いたが、
すぐにいつもの無表情に戻った。

紫音達は誰もがその一瞬の変化を見逃さなかったが、
しかし問い詰めることもせず、

淡々と一週間前の出来事、
そしてこの銃の出所を求めるに至ったいきさつを話した。
説明を聞いて、
アイギスはしばらく机の上の銃を見ていたが、
やがて伏せていた視線をあげた。
「理由はよくわかりました。
ですが、残念ながらこの銃について、
皆さんが求めているような情報は私の中にはないであります」
きっぱりと言い切ったアイギスに、
クロウはあからさまに表情を険しくした。
「知らないってか。
一方的に紫音にコレ渡しといて、
知らねぇはずねえだろ」
「それは元々紫音さんのものであります。
訳あって、一時私が預かっていただけであります」
衝撃の事実に、
遊星とクロウ、そして当の紫音はぎょっとした。
その場にいた全員の視線を集めた紫音には、
しかしいくら記憶を辿っても心当たりはない。

紫音は二人に、
そしてアイギスに向かって
ゆっくりとかぶりを振った。

遊星は再びアイギスに向き直ると、
抑揚のない声音で質問を続ける。

「その、預かっていた理由とは？」

「お答えできません。

というより、答える義務はないであります」

「はぁ？

なんだそりゃ。

それじゃデタラメ言ってるって
主張してるようなもんじゃねーか！」

叫ぶように言ってソファから腰を浮かすクロウを制して、
遊星は冷静にしかし射抜くように真っ直ぐな視線でアイギスを見た。

「先ほど、この銃を見て驚かれていたようですが」

「通常、銃を取り出されて
心拍数を乱さない人はいないであります」

無機質に、まるで台本を読み上げるように言うアイギスに、

遊星は静かな眼差しを向けていたが、
やがてふっと息を吐き出した。

「わかりました。

では、他に何か思い出した事があれば、
紫音を通じて連絡を下さい」

帰ろう、とソファに埋めていた腰を持ち上げて遊星は言った。

紫音もそれについて異存はなく、
黙って席を立った。

クロウは悔しそうに唇を噛みしめていたが、
遊星に諭されてやはり立ち上がった。

三人を代表して紫音がアイギスに礼を言うと、
彼女は相変わらず無表情に、
お役に立てなくて申し訳ありません
と定型文を読み上げた。

そうして遊星とクロウの背を追って、
玄関に向かった紫音に、
アイギスはぽつりと消え入るような声でつぶやいた。

「紫音さん。

どうか気をつけて」

耳に響いたその声に、
紫音は振り向かなかった。

女子寮を後にした三人は、
ポロニアンモールのコーヒーショップ『シャガール』にて、
待機していた他のメンバーと合流した。

「あー、ちっくしょー！
アイツ、絶対何か知ってやがったぜ」

ガリガリと派手なオレンジの頭をかきむしるクロウに、
ジャックは本日何杯目かのコーヒーを楽しみながら、

「そうカリカリするな、クロウ。

折角のコーヒーもうまく飲めんようでは、
話もできんだろう。

ここの『フェロモンコーヒー』とやらもなかなかの香りだぞ」

「あのな！
俺たちはコーヒーを飲みにきたんじゃねーんだぞ、
って、お前それ何杯目だ！」
怒りに任せて伝票を引き寄せようとするクロウを、
眉間にしわを寄せたアキが制した。
「もう！下らないことで喧嘩はやめて。
クロウ、ジャックの言う通り、
あなたが落ち着かないことには
冷静な話し合いはできないわ」
アキに叱られて、
一瞬クロウは口をへの字に曲げたが、
カップに注がれたコーヒーを
ぐい、と一息に飲み干した。
空になったカップをソーサーに戻したクロウは、
はぁ、と息を吐き出すと
先程とは一転して静かな声音で言った。
「わりぃ。
ちょっと興奮し過ぎてた」
ソファに沈み込んだクロウを、
遊星はフッと笑って、

「誰も責めたりしないさ、クロウ。
この事件を一刻も早く解決したい気持ちは、
みんな一緒だ」
遊星の言葉に、集まった顔ぶれは
一様に同じ笑みを浮かべた。

「で、結局収穫はなし、
ということか」
ジャックの切り出しに、
遊星は、ああ、とうなずいた。
「おそらく何か知っていることは
間違いないとは思うんだが、
確証がない。
だから今日は引き返してきた」
「今日は、ってことは、
何か考えがあるの？」
オレンジジュースをストローで少しずつ吸い上げながら
無邪気に問う龍亞に、
遊星は首肯して、
「別の視点からアプローチをかけてみる。

まずは、あのアイギスという人物だ。
出自や戸籍を調べれば、
月光館学園の生徒という以外に
何か見えてくるかもしれない」

「確かに。

何かきな臭え感じだったしな」

椅子の肘掛けに頬杖をついたクロウが相づちをうつ。

それにアキは首を傾げて不安そうに言った。

「でも、もしもこの件に関係があるとして、
それを隠して一体何の得があるのかしら」

アキの言葉に、皆は一様に押し黙る。

その中で、でも、と珍しく龍可が
ひかえめにはにかんで、紫音を見た。

「紫音がいるなら、きっと大丈夫ね」

その子供らしい素直な微笑みが、
硬い空気をほぐしていった。

そんな龍可に龍亞も隣でぐっと拳を握って、

「もちろんだよ！
あの時の紫音、ちょっと怖かったけど、
カッコよかったんだぜ！
みんなにも見せたかったくらいにさ！」
そう言ってさらりとプレッシャーをかける龍亞に、
紫音は少し居心地の悪い思いを感じつつ、
全員を見回して、改めて言った。

「これから、よろしく」

こちらこそ、と大きく返事をした遊星と
紫音は固い握手を交わした。

「いよっし！
『チーム５Ｄ、ｓ』、新しいメンバーを加えて再結成だ！」
クロウがそう言って、全員の顔に笑顔が咲いた。

その瞬間。

紫音の頭に不思議な声が響いた。

ーー我は汝。汝は我。

汝、”愚者”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

『仲間』たちの笑い声に
紫音は胸の内を満たす、
あたたかい光を静かに感じていた。

The Empress Start

２０１０年５月１７日　月曜日

この日の放課後。

紫音は昏睡していた間に行われた
中間テストの追試を受けた。

追試の問題用紙は
教師の手書きで問題文が非常に読みづらく、
内容も簡略化されて荒いといった
やや雑な作りをしていたが、
そんなのはまだいい方で、
中には出題範囲のテキストを
コピーしただけのものもあった。

できたら帰っていい、
と、やはり適当な指示を残して教室を出て行く教師を見送って、
紫音は机の上の問題用紙に向き合った。

どれも簡単で仕方ない。

結局小一時間程で全ての教科を終わらせた紫音は、
筆記具をしまって教室を後にした。

追試を終えた帰り。

紫音はまだややトラウマの残る
あの繁華街へと繰り出していた。

別段今日はこの場所にこれといった用はない。

ただの暇つぶしのついでに
これからも頻繁に利用することになるだろう
この場所にもそろそろ慣れておきたかったのだ。

紫音が繁華街を探索していると、
ショーウインドウを見つめるアキを見つけた。

彼女は熱心にだがどこか思いつめた表情で、
ショーウィンドウを凝視している。

そのまま無視して通り過ぎるのもおかしいと思い、
紫音がその背に声をかけると、
アキはわ、と驚いて弾かれたようにこちらを見た。

肩を強ばらせて鞄を抱きしめ後じさるアキに、
紫音はまるで自分が不審人物のようだなと
ちらりと考えた。

アキはしばらく驚いたようにこちらを凝視していたが、
相手が紫音だとわかると緊張を解いて、

「もう、驚かさないでちょうだい」

拗ねたように唇を突き上げるアキに、
紫音はごめん、と謝った。

するとアキは先の自分の行動がおかしかったのか、
ふふ、と声を漏らして笑って
その薔薇の花弁と同じ色の唇を震わせた。

「追試、終わったの？」

紅い髪を揺らして問うアキに、
紫音は一つうなずいた。

どうだった？と問うアキに、
紫音は先程片付けた微妙な問題用紙を思い出して
言葉を濁した。

まっすぐに注がれるアキの視線から目をそらした紫音は、
彼女ごしに先程見ていたショーウィンドウの中をかいま見た。

雑踏のただ中にありながら、
よく手入れされた美しいガラスケースの中には、
ビジネス用の品々が陳列されていた。

綺麗な赤い布の敷かれた台座の上には、
男性用と思われる時計やネクタイピンなどの小物が、
その脇には色とりどりのネクタイが並び、
小物だけでは寂しかった台座に賑やかさが加わっている。

台座の下の方には綺麗に包装されたドレスシャツや、
角度まで洗練された雑然さを醸したプレゼント箱が所狭しと置かれていた。

明らかに彼女自身のための物ではないそれらに紫音が首を傾げると、
アキは自らの背後に向けられた視線に気づいて、
何故か少し慌てたように手を振った。

「あ、あの、
いつもお世話になってる……人のね、

誕生日なの、
もうすぐ」

そう言って、アキは頬を染めた。

よほど大切な人なのだろう、
リンゴのように赤い頬を押さえるアキを
紫音は微笑ましく思った。

アキは紫音の前でしばらくの間百面相を続けていたが、
ふと何かに思い至ったように突然物憂げな表情になると
先程とは一転して寂しそうな声音で言った。

「でもね、彼、そういったお祝い事に慣れてなくて、
自分の誕生日も忘れて仕事に没頭してるような人なの。

だからプレゼントを渡しても、
多分私が誕生日の事を言うまで気づかないと思うわ」

はぁ、とアキは重いため息をついた。

そんなアキを紫音は思わず
少し目を見開いて呆然と見てしまった。

いつも冷静で思慮深い彼女が
そんなことで悩んでいるなんて、意外だったのだ。

紫音は少し考えたが、
アキをまっすぐ見ると、
頭に浮かんだそのままを口にした。

「その時は、その都度教えてあげればいい。

祝ってくれる人がいれば、
きっとわかってくれるようになる」

するとアキはそんな紫音の言葉にはっと驚いたように目を見開いて、

だが、すぐに頭を左右に振ると
困ったように微笑んだ。

「……ごめんなさい。

こんなの、言い訳。

ほんとはね、彼に何あげよう、
って考えた時に何も思い浮かばなくってね。

それで私、
初めて彼のことを何にも知らないんだ、
って気がついて。

そんな自分が嫌な子だなって思ってしまったの」

悲しそうに目をすがめるアキを、
紫音は黙って見つめた。

アキはその紫音の視線がいたたまれないというように、
目をそらしてショーウインドウを見ると、

「彼、とても頭がいいの。

私にはわからない、
難しい理論や公式を沢山知っていて、

ううん、それどころか、
最近は自分で新しい理論を構築して、
街を上げて取り組んでいるプロジェクトに多大な貢献をしてる。

今も昔も、彼はずっとそうだった。
現実では絶対に不可能だって誰もが思うことでも、
あるときぱっとまるで魔法のように
自然にやり遂げてしまうの。

私、それが悔しくて、
彼のようになりたくて、
これでも自分なりに毎日努力して
一生懸命追いかけてるのよ。

なのに、彼の背中さえ全然見えてこなくて…。

そしてそんなまごついている私を置いて、
彼はどんどん歩いて行ってしまう。

私とはたった二つしか年が違わないのに、
彼はいつも冷静で、どこまでも大人なのよ。

それとも私が子どもなだけなのかしら」

いつになく弱々しいアキに、
紫音は何と言えばいいかわからなかった。

ざわざわとした沢山の人の声と足音が、
しばらく紫音とアキの間を満たした。

二人の間に落ちた沈黙を、
やがてアキは振り払うように明るい表情を作って、

「そうだ。

もしよかったら、今度プレゼント選びに
つきあってもらえないかしら。

私じゃ男の人にどんな物をあげたらいいか
わからなくて困ってたところなの」

どこか楽しそうに言うアキに、
紫音は構わない、と簡潔な返事を返した。

「ありがとう！約束ね」

アキは紫音の小指をとって自らのそれと絡めると、
ぱっと華のような笑顔を咲かせた。

やがて紫音から離れた彼女は、
その細い腕に巻かれた時計を確認すると、
そろそろ帰らなきゃ、と踵を返した。

またね、と言い残して
急ぎ足で雑踏の中に紛れていくアキの姿を見送って、
紫音も時間を確認すると駅へと引き返した。

人の流れにそって歩く紫音の意識の端で、
昨日も聞いた声がふと浮かんだ。

ーー我は汝。汝は我。

汝、”女帝”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

その声が心に新たな火を灯すのを
紫音はひっそりと感じていた。

The Chariot Start

２０１０年５月１８日　火曜日

紫音はデュエルディスクを起動させると、前を向いた。

そんな紫音の様子を見て、
向かい合わせに立った本日の対戦相手は、
スピーカーがなくても聞こえるほどの元気な声を張り上げた。

「いっくぞー！紫音！」

正面に展開したスクリーンの中で、
龍亞は拳を上げてそれは楽しそうに宣言した。

「デュエル！！」

事の起こりは数分前。

この日の授業を終えた紫音が帰ろうと
アカデミアの生徒用玄関をくぐった時である。

「おぉ～い！しおーん！」

耳にはめたヘッドフォン越しにも
そのよく通った快活な声は
はっきりと紫音の耳に届いた。

紫音が立ち止まって振り返ると、
声の主は息を弾ませて勢いを緩めることなく
そのまま懐に突っ込んで来た。

鳩尾を強打されそうになった紫音は、
鉄砲の弾のような声の主を慌てて両手で受け止めた。

受け止められる側の衝撃を緩和するため、
抱き上げて一回転してから地面におろすと
驚きと嬉しさが入り交じった声を上げた。

「おおー！紫音すげー！

もう一回やってよ！！」

その無邪気な声に肩をすくめながら
紫音が用件を聞くと、
声の主の龍亞は、忘れるとこだった、
と鼻の頭を擦った。

そして紫音を見上げると、
龍亞は後ろでまとめた髪を落ち着きなく揺らして言う。

「紫音、この間アキ姉ちゃんとデュエルしたんでしょ？

いいなぁ、俺ともやろうよ！

ねえ、いいでしょ、紫音！」

やろうよ！やろうよ！

と駄々をこねる龍亞に紫音は苦笑しつつも

その申し出を快諾した。

すると龍亞は文字通り飛び上がって狂喜乱舞し始めた。

少し浮かれ過ぎではないかという程にはしゃぎ回る龍亞を

デュエルくらい授業でも毎日しているだろうに、

と、紫音は不思議に思った。

だが、こんなことで喜んでもらえるのなら安いものか、

と考え直して胸の内で一つ息をついた。

そうして満面の笑みを浮かべた龍亞に手を引かれて、

紫音はデュエルスタジアムへと足を運んだのだった。

「僕の先攻。ドロー」

紫音はデッキからカードを一枚ひいて手札に加えた。

子供相手にこんなデッキを使うのは

大人げないだろうか、

と少し罪悪感を感じながら、
紫音はその決して悪くはない手札から
カードを選びとると宣言した。

「手札から『ライトロード・パラディン　ジェイン』を召喚。
エンドフェイズに自分のデッキの上からカードを二枚墓地に送る」

光をまとい現れた白銀の髪をした騎士が、
勇ましく剣を振り上げる。

『ライトロード・パラディン　ジェイン』
☆×４
ＡＴＫ　１８００

紫音はカード効果に従って
デッキからカードを二枚墓地へ送った。

ジェイン以外のライトロードのモンスターと、
魔法カードが墓地に送られたのを確認して
紫音はターンエンドを宣言した。

瞬間龍亞は生き生きと腕を振り上げると、

「きたきた！

今度はオレのターンだよ。

ドロー！！シャッキーン！」

大仰な動作でドローする龍亞に、
周囲にいた見物客からくすくすと笑い声が漏れた。
だが、龍亞は周囲のことなど目に入っていない様子で、
それは楽しそうに腕を振り上げた。
「おおー！いいカードじゃん！！
よーし、一気に行くからね。
ちゃあんとついてきてよ！」
言って龍亞はきらきらとした視線で
画面越しの紫音を見つめた。
紫音が再び苦笑気味にうなずくと、
龍亞はうきうきという表現を現実にした様子で
カードをデュエルディスクにセットした。
「まずは魔法カード、『ワン・フォー・ワン』を発動！
手札からモンスター一体を墓地に送って
手札またはデッキからレベル１モンスターを特殊召喚する。
オレは手札の『Ｄ＜ディフォーマー＞・ボードン』を墓地に送って、
デッキから『Ｄ・モバホン』を攻撃表示で特殊召喚！」
光の中から一昔前の折りたたみ式の携帯電話を模した
機械モンスターが現れた。

がしゃん、と音を立てながら変形するそのさまは、
まるで特撮ヒーローに出てくるロボットのようだ。

『Ｄ・モバホン』
☆×１
ＡＴＫ　１００

「ディフォーマーは攻撃表示と
守備表示で効果が違うんだ。

このモバホンの攻撃表示のときの効果は、
一ターンに一度、サイコロを振って
出た目の数だけデッキの上からカードをめくって、
その中にレベル４以下の
ディフォーマーと名のついたモンスターがいれば、
一体を召喚条件を無視して特殊召喚するんだ。

いっけー！ダイヤルー、オン！！」

言いながら龍亞がぐるぐると腕を振り回すと、
反応したようにモバホンの胴体の
１～６の数字が記されたダイヤルがランダムに回り始めた。

目にも止まらぬ早さだったそれは、
やがて一つの数字を点灯させて止まった。

「出たのは３だから、デッキから三枚めくって……。

よし！オレは『Ｄ・ラジオン』を攻撃表示で特殊召喚！」

龍亜のかけ声にラジオの形をしたモンスターが、
モバホンの隣に並んだ。

『Ｄ・ラジオン』
☆×４
ＡＴＫ　１０００→１８００

『Ｄ・モバホン』
☆×１
ＡＴＫ　１００→９００

「ラジオンは攻撃表示で存在するとき、
自分フィールド上にいる
ディフォーマーと名のついたモンスターの攻撃力を
８００ポイントアップさせる。

でもまだまだこんなんじゃ終わらないぜ。

オレは手札からさらにモバホンを通常召喚。

ダイヤル～、オーンッ！！」

ニ体目のモバホンの登場とともに
再び回り始めたダイヤルが示したのは、

「やったぁ！６だ！デッキを６枚めくって…と。

よおし！『Ｄ・ラジカッセン』を特殊召喚だ！」

丸みを帯びた音楽ラジカセの形のモンスターが、

光から飛び出すと、他と同様に変形した。

『Ｄ・ラジカッセン』
☆×４
ＡＴＫ　１２００→２０００

「最後に手札から
魔法カード『死者蘇生』を発動。

自分または相手の墓地に存在するモンスター一体を選択して、
そのモンスターを特殊召喚する！

オレは自分の墓地に送った『Ｄ・ボードン』を攻撃表示で特殊召喚！」

五体目のジェットエンジンつきスケートボード型のモンスターが、
光から勢いよく飛び出した。

『Ｄ・ボードン』
☆×３
ＡＴＫ　５００→１３００

紫音は展開したスクリーンで
龍亞の言った通り次々と飛び出すモンスターの効果を目で追っていたが、
その最後に登場したモンスターの効果を見たときは、
お疲れさまでした、とデッキの上に手を置こうかと迷った。

だが、それはあまりに幼稚で大人げないなと思い直し、

紫音はこれから行われる公開処刑に肩を落とした。
全てはこの処刑の準備を
妨害できなかった自分に非がある。

紫音はかくして、
根性だけではどうしようもない事実があることを学んだのだった。

そんな紫音にはおかまいなく、
龍亞は腕を振り回しながら
高らかに宣言した。

「よーし！バトルフェイズだ。

『D・ボードン』の効果で、
自分フィールド上の「D　ディフォーマー」と
名のついたモンスターは相手プレイヤーに
＜直接攻撃＞することができるんだ！

さらに、『D・ラジカッセン』は、
一度のバトルフェイズで二回攻撃を行うことができる。

いっけーディフォーマー軍団！

『D・ラジオン』『D・モバホン』
『D・ラジカッセン』『D・ボードン』で
＜ダイレクトアタック＞！！」

龍亞の一声で彼のフィールドに並んだモンスター達は一斉に
紫音のモンスターを文字通り『飛び越えて』
ライフポイントをあっという間に削り去った。

神無瀬　紫音
ＬＰ　８０００→０

ぴー、という軽い音を響かせて、
ゲーム内での紫音の命はあっけなく消え去った。

紫音は、こういうこともあるんだな、と
どこか納得してデュエルディスクを外した。

デュエルの決着がついたと同時に
駆け足で走ってくる龍亞に、
紫音はお手上げ好きの友人のように両手をあげた。

「へへー！今日はすげーうまく回ったよ！
ここ一番の回りだったんだ！」

肩をすくめる紫音に、
龍亞は誇らしそうにそう語った。

気分良さそうに子供らしくはしゃぎ回る龍亞を見て、
しかし紫音は負けたというのに悔しさを感じなかった。

どこか晴れ晴れとして、
いっそ清々しいくらいだ。

そんな内なる疑問を見透かしたかのように、
龍亞は紫音に言った。

「紫音、デュエルって楽しいね！
オレ、紫音とデュエルできて嬉しいよ」

先程の内容が果たしてデュエルだったかはさておいて、
子供ながらにまっすぐ紫音という存在を
受け止めようとしている龍亞の気持ちを、
紫音は確かに感じた。

瞬間、そろそろおなじみとなった
あの声が頭に響いた。

ー我は汝。汝は我。
汝、”戦車”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

紫音はそして胸の内に宿った新たな光を
確かに感じた。

龍亞の裏表のない言葉に、
紫音は思わず顔をほころばせると、
「面白いデッキとコンボだったよ。
勉強になった」
すると龍亞はまるで向日葵のように
ぱっと明るい笑顔を咲かせた。
「ホント！？やったぁ！！
そういってもらえて嬉しいよ！
……そっかぁ、紫音はこの間デュエル始めたばっかだもんな」
腕を組んで紫音に背を向けて
龍亞は少し考えていたが、
出し抜けにぽん、と一つ手を打った。
「そうだ！
これからオレ、紫音にデュエルの色んなこと教えるよ！」
名案だ！と一人うなずくと、
龍亞は誇らしげにその小さな胸を張って紫音に言う。

「そうだよな。
年は紫音の方が上だけど、
デュエルに関してはオレの方が長くやってるから、
先輩として色んなこと教えなくっちゃ！」

よおし！がんばるぞ！
と拳を振り上げて叫ぶ龍亞の声に
驚いた周りの人々がこちらを振り向いたが、
彼はやはり気にしていないようだった。

ちなみにその中には、
人ごみに隠れるようにしてこちらを伺う龍可の姿もあった。

「紫音、さっそく今度特訓な！」

意気込む龍亞に紫音はただひたすら苦笑しつつ
彼の暴走を見守ったのだった。

2

２０１０年５月１９日　水曜日

紫音はテストをまたいで久しぶりとなった
生徒会室の扉を開けた。

がらり、と音を立てて滑りのいい引き戸を開けると、
まだ見慣れない新規メンバーと、
すでにお馴染みの古参メンバーが入り混じりつつ
それぞれの席に着席していた。

生徒会室の外まで聞こえていた話し声は
紫音が扉を開けたと同時にぱったりと途絶え、
今はたじろぐほどの静けさが教室を満たしていた。

こそりとした身じろぎの音すら立たない教室に、
紫音は前生徒会長の影響の大きさを感じて苦笑しそうになったが、
その迫力はそれすら浮かべるのをためらわせた。

紫音が教室の中央に立つと、
傍らの生徒がそのさらさらとした
毛先までストレートの髪を揺らして立ち上がった。

縁の厚い眼鏡の奥には
誠実さと寛容さを併せ持った瞳が静かに収まっている。

ただひたすら無口な紫音の代わりに、
彼女はこの真面目な時間の始まりを
凛としたよく通る声で告げた。

「それでは、これより第５回生徒会定例会を始めます」

本日の定例会は６月の方針を確認後、
各委員会の活動報告をまとめて解散となった。

紫音は普段居ない分、
生徒会長として溜まった雑用に努めながら、
ふとぼんやり窓を眺めた。

窓の向こうからは
運動部の自主練習のかけ声や、
管弦楽部の楽器の音が
まるで遠い世界から聞こえてくるような錯覚を伴って響いている。

五月も中旬を過ぎた昨今は日もかなり長くなり、
午後１８時を過ぎた今でも昼の青い空が端の方にわずかに伺えた。

紫音がそんな
どこかノスタルジアさえ感じさせる放課後の遠いざわめきに、

うつらうつらとし始めたとき。

「お疲れさまです。

神無瀬さん」

すぐそばで聞こえた涼やかな声に、
紫音は目を開いた。

きめ細かい髪を耳にかけながら、
少し上目使い気味に
彼女はこちらを覗き込んでいた。

「伏見さん」

名前を呼ばれて、
彼女、伏見　千尋〈ふしみ　ちひろ〉は
百合の花のように清楚な微笑みを浮かべた。

「少し休憩をとられたらどうですか？」

言ってその両手で抱えた新しい書類の束を机に置きながら、
千尋は紫音の隣に腰掛けた。

紫音が返事もそこそこに置かれた書類を見つめると、
千尋はふふ、と笑って、

「大丈夫ですよ。

こっちは私の分ですから」
その言葉にそっと安堵しつつも、
紫音はそんなに顔に出ていただろうか
と小首を傾げた。
すると千尋は口許に手を当てて、
「神無瀬さんの考えていることくらいなら、
わかります」
さもおかしそうに声を漏らす彼女に、
紫音は敵わないな、と肩をすくめたのだった。

「神無瀬さん、先週まで入院されていた、
と伺ったのですが、もう大丈夫なんですか？」
先程の和やかな口調とは一変して、
憂いを帯びた声音で尋ねる千尋に、
紫音は、大したことじゃないから、
と彼女を安心させようと首を振った。
そんな紫音にしかし千尋は眉根を寄せて、
「そうですか…。
でも、ただでさえ交流生として
遠方を行き来しているんですから、

無理はしないで下さいね。
生徒会も私の方で進めておきますから、
つらいときはゆっくり休んで下さい」

そう言う彼女の表情は
一年前の自信なくおどおどとした印象はなく、
どこか前生徒会長に似た
自立した大人の女性のものとなっていた。
紫音はそんな彼女の顔を眺めて、
引き結んだ口許を緩めぽつりと本音をこぼした。

「かっこいいね。副会長」

瞬間、千尋は顔を真っ赤にしてあたふたと手を振った。

「そ、そそそんな！
わ、私なんて、みんなに支えられて
何とか取り繕っているだけです！
そ、それに……」

千尋は胸に手を当ててそっと目を閉じ、
まるで歌うように言った。

「私、神無瀬さんに出会ってから、
人生が変わったんです。

男の人が怖いって、それは単に私が怖いものや逃げたいものから
目を背け続けた結果だったんです。

でも、神無瀬さんはそんな臆病者の私の背中を支えて、
そして押してくれました。

それがきっかけとなって何事もきちんとやろう、
って決めてからは本当に世界が変わりました。

自分の周りのこと全てに向き合えるようになったおかげで、
見えなかったもの、聞こえなかったものも
ちゃんと感じることができるようになりました。

だから今年も生徒会に入ろう、って決めたんです。

みんなの声をちゃんと受け止められる今なら、
こんな私でもよりよい学園をつくるお手伝いができる、
いえ是非お手伝いがしたい、と思えるようになったからです」

ただ、副生徒会長になれるなんて思っていませんでしたが。

彼女は苦笑したが、
その表情は幸せそうだ。

「だから私はこれからは神無瀬さんの支えになりたい、
と思っているんです。

世界がひらけることがこんなに幸せなことなんだ、
って、一番初めに教えてくれた神無瀬さんのそばにいて、

助けになりたい。
だから今、私はとても幸せなんです」
言ってはにかむ千尋を、
紫音は心からありがたい存在だと思った。

おそらく彼女も否定するだろうし口には出さないが、
紫音は本当は自分なんかより彼女の方が生徒会長にふさわしいと思っていた。

自分は彼女よりも一年年上であることと、
彼女自身の強い希望によってこの席に座らせられているだけのお飾りである。

現にほとんど学園にいない今、
この生徒会をまとめ、運営しているのは千尋であった。

自分がこの生徒会にいる意味は
役員の数合わせという以外にはないのである。

生徒会長に決まってしまった当時、
本当は頃合いを見計らって彼女にこの席をゆだねようと紫音は考えていた。

しかしーーーー

紫音は手元の用紙から顔を上げて、
一生懸命生徒会の仕事に励む千尋を見つめた。

千尋はこちらの視線にまったく気がつかないほど、
次回の定例会の資料の作成に没頭している。

彼女の顔をよく見ると、その輪郭は前年よりもほっそりとした、
というより、少しやつれた、といった表現が似合うほどであった。

風のうわさで聞く所によると、
彼女は毎日遅くまでこの教室で生徒会の雑務をこなしているのだとか。

考えてみれば、前生徒会長の仕事を引き継いだにしては
紫音のもとにくる仕事はやけに少ない上に
資料等もすでにそろっていた。

そしてこの書類を紫音に手渡すのは、
いつも千尋であった。

紫音は再び手元に視線を戻すと、
口の中でぽつりとつぶやいた。

「伏見さんも、無理はしないようにね」

視線は上げなかったが、
紫音は確かに彼女がくすりと笑った気配を感じていた。

「そういえばこの間桐条先輩にお会いしたときに伺ったんですが、
神無瀬さんの交流先の街は人々の絆によって構成されているんだとか」

脈絡もなくそう切り出した千尋に、
紫音は椅子の背もたれに自らの背中を預けながらうなずいた。

千尋は胸の前で両手を握って、
嬉しそうにその白い頬を赤く染めた。

「そういうの、いいですよね。
みんなが協力して一つのことに向かう。
私たちも見習いたいですね」

そう言って遠くを見つめる千尋に、
紫音は少し考えて、

「それなら思い切ってうちの学校でも
そんな行事を企画してみる？
さすがにカードゲームは無理だけど、

学年かクラスごとに一丸となって
何か一つのことを目指すような」
紫音は手元の生徒の要望調査結果の一つをさしながら提案した。
生徒の中で多かった意見の内
『行事が少ない』といった項目を見て、
千尋はそうですね、と微笑んだ。
「でしたら、合唱コンクールなんてどうでしょう？
私の地元の中学ではこの時期になると、
朝や放課後によく練習の歌声が聞こえてくるんです」
その案に、なるほど悪くない、と紫音がつぶやくと、
千尋は小さく拳をつくって早速企画書をつくりますね、
と意気込みを見せた。
それからしばらく二人であれやこれやと意見を交わしてみたが、
最終的にたった二人だけでも結構な行事企画案が上がった。
どうやら次回の定例会の議題はこれで持ち切りになりそうである。
「では、金曜日の定例会で話し合ってみますね」
先程の会話内容をまとめた紙を大切に鞄にしまいながら言う千尋に、
紫音はこくりと一つうなずいた。
時計が二十時をさしているのに気づいて、
紫音は戸締まりを確認すると千尋と二人学校を出た。

彼女の家の付近まで送ると申し出たその帰り道、
千尋はふと紫音を見て、

「そういえば、神無瀬さんは歌は得意なんですか？」

その問いに、それなりに、と紫音が答えると、
彼女は少しはにかみながら微笑んだ。

「じゃあ合唱コンクール、楽しみですね」

にこにことする千尋に、
紫音は暗い空にぽっかりと浮かぶ月を眺めながら
何とはなしにつぶやいた。

「その時は、伴奏でもしようかな」

暗い夜道に二人分の足音がやけに大きく響いていた。

2（後書き）

こんばんは、いつもご愛読ありがとうございます。

突然ではありますが、
２５日の土曜から来週７月２日土曜日まで、
新デッキ考案のため
一時連載を不定期にさせていただきます。

２日以降は通常通り、毎日２３時更新をしていきますので、
皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

Strength Start

２０１０年５月２０日　木曜日

この日紫音はネオドミノシティの繁華街に面した喫茶店で、
待ち合わせをしていた。

待ち合わせの相手はデュエルアカデミアの女子生徒なのだが、
何やら訳ありらしい。

紫音は喫茶店の奥のできるだけ目立たない席で
読みかけの文庫本を片手に、
その女子生徒の到着を待っていた。

初夏めいた暑さを感じさせるこの日、
店内は冷房が程よく利き
流れるＢＧＭもゆったりとした雰囲気作りに一役買っており
読書にはうってつけの環境を演出している。

時折表面にたっぷりと汗を浮かせたグラスに注がれたアイスティーの氷が
からん、と涼しげな音を立てた。

指定の喫茶店についてから約十数分が経過したときだった。

「遅れてごめんなさい」
荒い息を整えながらそう言う彼女に、
紫音は文庫本から視線を上げて正面の席を勧めた。
彼女は促されるまま席に着くと、
運ばれてきた水でのどを潤した。
注文を確認した店員が立ち去るのを見送ると、
彼女は一息ついて紫音に向き直った。
「本当にごめんね。
ちょっと振り切るのに手間取っちゃって……。
紫音も忙しいのに」
うなだれる彼女に、
紫音はゆっくりと首を横に振る。
「別に構わない」
たったそれだけの言葉に、
正面の彼女はよかった、と表情をほころばせた。
紫音は文庫本を鞄にしまいながら、
『一人』で居るのは珍しい彼女に早速本題を問う。
「今日はどうしたの。

いつも一緒の『彼』じゃなくて、
僕を呼ぶなんて。

ーーー龍可」

紫音の言葉に
龍可は少しばつが悪そうにこちらを見た。

「大したことじゃないのよ。

あのね、ちょっとお買い物についてきて欲しいの」

そう言って笑う龍可に、紫音はかくんと、首を傾げた。

「ごめんね、荷物持ちさせちゃって」

買い物袋を両手に下げた紫音は、
龍可の言葉に軽く首を振って答えた。

これでも運動部でそこそこには鍛えた体である。

小学生の女の子である龍可にはともかく、
紫音にはこの程度の荷物ならば苦にはならなかった。

紫音の両手で揺れる買い物袋の中身は
双子の今晩の夕食の材料だ。
ジャガイモ、人参、タマネギ、肉、
とこの材料から察するに今晩はカレーだろうか。
舗装された道に夕日で長く伸びた影をまといながら
紫音は龍可と並んで歩いた。
「いつもは通信販売で取り寄せてるから
こんな風にお買い物したりとかはしないんだけど、
操作ミスで今日の分を別の日にしちゃって」
そう言って龍可は苦笑を向ける。
紫音はしかしそれに首を傾げると、
頭に浮かんだ疑問を龍可にぶつけた。
「でもそれなら別に
龍亞を連れてきてもよかったんじゃないの？」
すると龍可ははぁ、と大きな溜め息をつくと
眉根を寄せて拗ねたように唇を尖らせた。
「龍亞はね、買い物にくるとお菓子売り場とか、
カード売り場とか、デュエルターミナルとか、
そういう自分の趣味の場所に飛んでいっちゃって、
こういうお買い物にはつきあってくれないの」
ヤになっちゃう、と肩をすくめる龍可に

紫音はなるほどと納得した。
そんな紫音をおかしそうに笑うと、
龍可は前を向いて、
「紫音は龍亞から聞いたんでしょ。
私の体、あんまり強くないって。
だから龍亞は今よりもっとちっちゃな頃から、
どこに行くときもいつも一緒にいてくれる。
もちろん私の体を心配してやってくれてることだから、
嬉しいし、ありがたいとは思ってるのよ。
でもね、やっぱり男の子と女の子だから、
趣味とかは違うの。
今日みたいなときに限らず、
龍亞はいっつもそう。
自分の行きたいところばっかりに行って、
私の行きたい所には全然ついてきてくれないの」
龍可の言葉に、紫音は苦笑を浮かべて話題の兄を思い出したが、
彼の奔放な性格を考えるに、
龍可の言う様子は想像に難くなかった。
だが龍亞もなんだかんだ言っても、

まだ小学生の男の子だ。
遊びたい盛りであるには違いないだろう。
そう考えるとあの年頃の特性上、
仕方ない部分もあるのではないかと思ったが
それはおそらく紫音の客観的な視点から見てであり、
いつも一緒にいる彼女からすれば
十分に悩みの種となるのだろうと思い直し、
口には出さなかった。

しばらくお互いに何も言わず歩いていたが、
不意にでも、と龍可はこちらを見た。
彼女はどこかもじもじとして、上目使いに紫音を見上げた。
「今日は紫音とお買い物ができて楽しかったわ」
屈託なく言う龍可に
紫音は光栄だ、とおどけてみせた。
すると龍可は心の底から楽しそうに声を立てて笑った。
彼女の朗らかな笑い声が響く中、
紫音の頭には別の声が混じって聞こえていた。

ーー我は汝。汝は我。
汝、”剛毅”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

心と心の間から一条の光が差し込んで
それは紫音の胸の内をやわらかく照らし出した。

やがて笑いを収めた龍可は、
少し緊張した面持ちで紫音に言った。

「あのね、紫音。

紫音が嫌じゃなかったら、
また二人でお買い物に行きたいな」

おそるおそるそう口にする龍可に、
紫音はいいよ、とうなずいた。

すると龍可は龍亜を思わせる年相応の笑顔を見せた。

龍可のペントハウスまで荷物を運んでから、
紫音は寮へと帰った。

3

２０１０年５月２１日　金曜日

久しく通っていなかった牛丼店『うみうし』のドアの前にて、
彼らはその日ばったり出くわした。

あ、と声を漏らして
お互いに鏡のようにほうけたような顔を突き合わせ、
そして我に返るタイミングまで一緒で
紫音は何となく気まずくなった。

しかし彼はそんな紫音の心中を知ってか知らずか、
快活に笑った。

「神無瀬じゃないか。

まさかこんな所で会うなんてな」

相変わらず紫音には到底真似できそうにない
爽やかな雰囲気をまとって彼
真田　明彦＜さなだ　あきひこ＞は、
口許からのぞく歯すら
短く刈った髪と同じ白銀色に輝かせたのだった。

『うみうし』の店内は、
いつでも同じ混雑ぶりを呈していた。

牛丼特有のキツい油と肉のにおいが充満した空間の大半が
会社員と学校帰りの運動部所属だろう生徒で占められ、
見ているだけでもむさ苦しさで胸が一杯になる。

とはいえその点は基本的に紫音も気にしないのだが、
今日は連れがいた。

そしてその連れこそが問題なのであった。

「最近はどうだ。

月光館学園での生活は変わりないか？」

同じカウンターに肩を並べて同じ注文をし、
そして同時に出てきた牛丼を同じように箸でつつきながら、
明彦はそんなことを紫音に問うた。

紫音はそれまで黙々と動かしていた箸を止めると、
丼を置いてこれまでの自らの生活を簡単に振り返り、

「そうですね。

僕が経験した限りでは特に変わりありません」

それだけ言うと、
紫音は再び作業のように箸を動かした。
明彦はそうか、と言うと、
すぐにそういえばと新たな話題を提供してきた。
「この間美鶴とのメールのやりとりで知ったんだが、
お前、生徒会長に就任したそうじゃないか」
お前も美鶴もよくやるな、俺には考えられん。
そういう明彦に、紫音はそうですかと言いかけて、
ふと思い出したことを口にした。
「生徒会といえば、
実際は真田先輩も役員候補に挙がっていたそうじゃないですか」
すると明彦はそのことか、とこともなげに言い放った。
「まあな。
生憎、俺は美鶴と違って
ずっと椅子に座って雑用をこなすのは性に合わなかったからな。
そういうのは受験勉強くらいで十分だ。
それに生徒会なんて半分人気投票みたいな物だろう、
つき合ってられん。

そんな暇があるなら
部室に通ってトレーニングでもするさ」
言いながら明彦は鞄をごそごそと探ると、
乳白色のプラスチック容器を取り出した。
その容器からさらさらとした粉末をコップの中の水に溶いて、
彼は一気に飲み干した。
紫音はその光景をまずそうに見つめながら、
残った牛丼を口の中に放り込んだ。
相変わらず好きだな、と思っていると、
明彦はその視線をどんな風に勘違いしたのか、
お前もどうだ、と勧めてきた。
思わず口の中の牛丼を吹きそうになりながらも
何とか飲み下すと紫音は口許を押さえて、
丁重にお断りした。
すると彼はそうかと少し残念そうに首を傾げた。
「お前もまだ剣道部に所属しているのなら、
少しはこういったプロテインサプリメントも
考えて接種した方がいいぞ。
健康な体は栄養バランスの行き届いた食事からだからな。
味について苦手だという奴も多いが、
最近のプロテインはなかなか飲みやすく改良されているんだぞ。

多く出回っているホエイプロテインは、
なかなか安価で他の製法では残る粉っぽさもないし、
水に溶かすとほとんどスポーツドリンクと同じ口当たりの商品も出ている。

味も豊富でプレーン味の他に、
バニラやチョコ、ストロベリーの風味のついたものなんかもあるしな」

「とは言っても、
決しておいしいものではないでしょうに」

箸を置いた紫音がいうと、
明彦は苦笑してまあなと素直に肯定した。

「初心者は味のついた牛乳に溶かすと飲みやすいぞ。
俺も使い始めはそうしたもんさ。

ま、それもじきに慣れるさ」

「ですから、遠慮します」

きっぱりと言い切った紫音に、
だが明彦は特に気落ちした様子もなくそうか、と言って
プロテインの容器を鞄にしまった。

紫音は湯のみの中の少し熱めのお茶を一口含むと、
ようやく一息ついた。

とりあえず、これでいつ『アレ』が来ても大丈夫そうだ。

「それはそうと、先輩。

未だにそれを愛飲している、ということは
大学でもボクシングを続けられているんですね」

すると明彦は当然だと誇らしげに胸を張った。

「もはや習慣みたいなものだからな。

今更やめられんさ」

どこか哀愁らしき響きを含んだ声音に、
紫音はそういうものか、と考えて、

「では、大学卒業後はプロの選手に？」

その問いに、しかし明彦は首を横に振った。

「いや。

ボクシング自体は趣味で続けられればいいと思っているしな。

本当は、力なんて振るう機会の無い方がいいに決まってるさ。

……大切なものはいつだって、
力なんかじゃ救えないものばかりだからな」

言って彼は何故かじっとこちらを見た。
眉間にしわを寄せた彼はどこか疲れているようで、
卒業してからのたった数ヶ月の間に
何歳も年をとってしまったかのようだった。

そんな複雑な表情をしている明彦に、
紫音が口を開こうとしたその時。

うみうしの自動ドアが開いて、
紫音の恐れていた『アレ』ーーー複数の黄色い声がなだれ込んできた。

「真田くぅん！やっぱりここに居たのね！」

「もぅ。

今日は練習ないって聞いてたから、
遊びに誘おうと思ってたのにどっかいっちゃうんだから！」

おそらく同じ大学だろう
派手な服装のお姉様方に
あっという間に囲まれた明彦は、
高校の時と同じくいかにも迷惑そうに、
しかし新入生という立場上
完全に邪険に扱うこともできずにおろおろとしていた。

紫音はそんな明彦にそれでは、
と一言挨拶をすると混乱の渦に巻き込まれる前に
会計を済ませてさっさと立ち上がった。

そんな薄情ともとれる紫音の背中に
明彦が慌てたように声をかけたが、
聞こえないフリを通してそのまま『うみうし』を出た。

店を出ると昼間の光を保った空は青く、
しかし地平の先から昇ろうとしている月は
本来の時刻を正確に表していた。

紫音は未だに降り注ぐ陽の光に瞳をすがめつつ、
まっすぐ寮へと帰ることを決めたのだった。

4

２０１０年５月２２日　土曜日

授業が終わると
教科書等をやや乱暴に鞄に詰め込んで
紫音は教室を出た。

学校を出てからは特に予定がなかったため、
久しぶりに午後からは寮でのんびり過ごそうか、
などとこの時紫音は考えていた。

だが教室を出た所でかかった声により、
紫音のその考えは夢物語のようにはかなく消え去ってしまった。

紫音が声の主に向き合うと、
彼女は嬉しそうにこちらに駆け寄った。

「今帰り？私もなんだ。

よかったら一緒に帰らない？」

ピンク色のカーディガンに身を包んだ
岳羽　ゆかり＜たけば　ゆかり＞は
そのよく跳ねたくせ毛を指でかき回しながら言うのだった。

ポロニアンモールのコーヒーショップ『シャガール』にて。
いつか遊星たちと集まった時に腰掛けていた席で、
今紫音はゆかりと向き合っている。

「何だかこんなふうにのんびりするのって、
久しぶりかも」

言って、ゆかりはコーヒーとともに頼んだチーズケーキを
おいしそうに頬張りながら、
午後の一時を満喫していた。

「最近は塾でもテスト、学校でも模試にテスト。

ホント、テストだらけでやんなっちゃう」

ね、と同意を求められた紫音は、
間違ってはいない現状にこくりと一つうなずいた。

ゆかりはふぅ、と一つ大きな溜め息をついて
どこかぼんやりとした表情を浮かべた。

「ね、紫お……神無瀬君はこの間のテスト、どうだった？

あ、あの中間じゃなくて、実力模試のほうね」

問われて紫音はどう答えればいいものか考えたが、
とりあえず素直な感想を伝えることにした。

「まあまあかな。
まだ結果が帰ってきていないから、
はっきりとは言えないけれど」
それにゆかりはふぅん…と生返事で返した。
コーヒーカップをソーサーに置くと、
彼女はその黒い水面に映った自らの顔を見つめて、
再び溜め息を吐き出した。
「私は今ひとつ。
やっぱ今までが今までだったから、
そう簡単にはあがらないな」
言ってゆかりは自分の姿から目を背けるように、
カップに残ったコーヒーを飲み干した。
そして彼女はどこかうらやましそうにこちらを見て、
「あーあ。
神無瀬君は去年の春転校してきてから
ずっと首位独走中だもんね。
うらやましいよ、ホント」

言われて、紫音は知らず、
口許を引き結んでいた。

ゆかりはどう考えているかは知らないが、
残念ながら紫音のその成績結果は
自己満足などのためではなかった。

紫音は勉強が特別好きでもなければ、
まして得意でもない。

ただ『得意にならざるをえない』だけであった。

十年前のあの日から、
神無瀬紫音、という存在はいつでも異質で、
それ故にどこにもうまくなじめはしなかった。

そしてそれは当然のごとく今も続いている。

寮暮らしとはいえ親戚のカテゴリの中に
自分という異端が入り込んでいることは間違いない。

金銭面では仕方が無いとはいえ
その他の面まで迷惑をかけることなど
到底できはしない立場であることを、
紫音は自覚していた。

「神無瀬君？」

呼ばれて紫音ははたと現実に意識を浮上させた。

どこか心配そうなゆかりに、
紫音はなんでもない、と答えて
カップで顔を隠すようにしてコーヒーを口に含んだ。

自らの中で久しぶりに出会った
そんな記憶との邂逅から脱すると、
紫音は元の無表情に顔を変えてゆかりを見た。

するとその取り繕った無表情から何かを感じ取ったのか
ゆかりはどこかばつが悪そうにして、

「ごめん、こんなのただの嫉妬だよね。

神無瀬君のはこれまでこつこつ積み上げてきた結果だもんね。

そりゃ、今まで散々遊んでた私なんかが
ちょっと勉強したくらいじゃ追いつけるはずないよね」
あはは、と乾いた笑いを上げるゆかりに、
紫音は先程までの感情を腹の底に押し込めると、
口をひらいた。

「でも、塾に通ってやってる今の勉強は無駄にはならない。
こつこつ続ければ、今年中に結果はついてくる」
それは平凡な慰めではあったが、
決して嘘はではなかった。
そしてひたすら無口な紫音には、
これが精一杯だった。
そんな紫音の心情を察してか、
ゆかりはわずかに微笑んで、
「うん、そうだよね」
重い空気を振り払うように
彼女は努めて明るい声音を出した。

「そういえば神無瀬君、
ネオドミノシティって所に行ってるんでしょ。
どんな所なの？」

唐突なその質問に少し考えて、
紫音はすでに沢山の人々にしたのとほぼ同じ答えを返した。
「いい街だよ。
ほとんどの人がおおらかで、
知らない人同士でもカードゲームっていう
共通の遊びを通してどこかでつながっている、そんな街」
ゆかりはへぇ、と興味深そうに目を見開いた。
「カードゲームねぇ…面白そう。
今度、私にも教えてよ」
笑って言うゆかりに
紫音はいいよ、とうなずいた。
ゆかりは嬉しそうに目を細めて、
そして一つ伸びをすると、立ち上がった。
「さ、もう行かなきゃ。
さすがに次の授業くらいは出ないとね」
そのゆかりの言葉に、
紫音は首を傾げて彼女を見つめた。
するとゆかりはぺろり、と舌を出して、

「本当は今日の塾、
全部サボろうかとも思ったんだけどね。
やってもやってもなかなか成果があがらないことに、
なんか疲れちゃってさ。
でも神無瀬君と話してて、
少し元気出たよ」
言って鞄を掴むゆかりに、
紫音も立ち上がると彼女について店を出た。

ポロニアンモール中央の噴水の前まで来ると、
ゆかりはくるりとこちらを振り返った。

そして彼女は静かに、こう切り出した。

「ねえ。この間さ、
銀色の銃について調べにきたでしょ」
静かな、しかし腹の底に響くような声音で、
ゆかりは聞いた。
太陽を背にした彼女の姿は逆光により、
紫音からは表情は伺えなかった。

突然変わったその雰囲気に紫音が少したじろいでいると
ゆかりは有無を言わせぬ調子で淡々と続けた。

「あれ、あんま気にしない方がいいよ。

アレは何でもないからさ」

土曜のこの時間帯のポロニアンモールは
沢山の人々が行き交い
あちこちからざわざわとした声が聞こえてきていたが、
紫音にはまるでゆかりと二人しかいないような錯覚に陥るほど
彼女の声だけがひたすら耳の中でこだましていた。

不自然なその言葉の内容を遅れて理解した紫音が
それは一体、と言おうと声を出しかけたとき、
ゆかりはこちらの言葉にかぶせるように
いいから。
と強い調子で言った。

それはまるで激情を抑えつけているような声音であったが、
唐突にゆかりはふ、と気が抜けたように無機質な声をだした。

「調べても、いいことなんて一つも出てこないよ。

悲しいばっかりで、さ」

ねえ。

ゆかりは言った。

まるで今にも泣き出しそうに声を震わせて。

「もう、どこにも行かないでよ」

それだけ言い残すと、
ゆかりは踵を返して走り去った。

髪の毛の間から夕日に照らされて浮かんだ彼女の顔は、
能面のように白く、恐ろしいほどどこまでも無表情だった。

紫音はいなくなったゆかりの影を
しばらくの間呆然と見つめていた。

空に闇がせまるように、
紫音の心にそれよりなお濃いものが、
じわりと滲んだ。

The Emperor Start

２０１０年５月２３日　日曜日

紫音が店内に備え付けられた時計を見上げると、
その短針は１４時をさしていた。

そのまま視線をずらしてウエイトレスのステファニーを見ると、
彼女は何かを待っているようにそわそわとしていた。

そろそろかな、と目の前のテーブルを片付けながら
紫音が考えたその時だった。

日曜日は必ずこの時間にやってくる彼が、
今日も変わりなくブーツの音を高らかに響かせて入店した。

「い、いらっしゃいませー！」

目を見開いて歓喜しつつ彼を出迎えるステファニーを見送って、
紫音は食器を裏に運んだ。
業務用の食洗機に食器を並べ終えると
この店のマスターに休憩に入るよう促された。

紫音がエプロンを脱いで店の奥の小さな休憩スペースに腰掛けると、
マスターが看板コーヒーの『ブルーアイズマウンテン』を入れてくれた。

紫音はお礼を言って、
コーヒーに手を伸ばそうとしーーー

店の裏まで聞こえるような怒声が響き渡り、
紫音とマスターは一瞬動きを止めた。

そしてぱたぱたと慌ただしく
こちらにかけてくる足音。

キッチンと店を隔てるドアを開けて、
ジャックの案内と注文をとりに行ったステファニーが
ひょっこり顔を覗かせたかと思うと
紫音の顔を見ると切羽詰まった様子で手招きした。
「大変なの！

紫音君、ちょっと来て！！」

何事かと急いで立ち上がると、
促されるままにステファニーについてキッチンを出た。

店先に出るとそこには、
見知った人物が大声を張り上げて喧嘩していた。

紫音が思わず呆然と立ち尽くしていると、
隣のステファニーが彼らの方へぐいぐい背中を押した。

「紫音君、ぼーっとしてないで彼らを止めて！」

ステファニーの言葉に紫音は
どうやって、とは思ったものの、
このままにしておけないのは確かである。

仕方ないと一つ溜め息をつき、
腹をくくって紫音は言い合いの渦中に飛び込んだ。

「何かあったんですか。

ジャックさんに、クロウさん」
紫音がそう言うと、
名前を呼ばれた彼らの鋭い視線が一斉にこちらに向いた。

紫音がそれにひるまずじっと二人を見つめると、
彼らはようやく少し落ち着いたように
浮かせていた腰を椅子に戻した。

がたがたと無言で座る彼らは、
しかしお互いにそっぽを向いたままだ。

じっとりとした沈黙が、
三人の間に落ちた。

それはまるで嵐の前の静けさのように
肌にまとわりつくような嫌な雰囲気だった。

それを最初に破ったのは、
クロウだった。

「全くよぉ、俺も遊星も定職を見つけたってのに、
お前一人だけ仕事も探さず、ここでだらだらダラダラ。
いつまで遊んでんだよ！この穀潰しが」
「フン。
このデュエルキング、ジャック・アトラスに
見合う仕事が無い以上、仕方あるまい！」
「だーかーら！
そういう態度だから
いつまでも仕事が見つからないんだろ！
見ろ！紫音だって学校行きながら
こうして働いてんじゃねえか！」
いきなり話題に出された紫音は少しのけぞって、
彼らを見た。
そんな紫音をつまらなそうに一瞥したジャックは、
鼻をならしてそっぽを向く。
「凡人と一緒にするな。
俺はデュエルキングだぞ！」
「なあにが『デュエルキング』だよ！

数年前に遊星にあっさり奪われたクセに。
この間の『ＷＲＧＰ』だって優勝できたのは、
みんなの力あってで、
お前一人の力じゃねえだろうが！」
なに！と激昂したジャックが再び椅子から腰を浮かした。
それに反応したクロウも、やるのかよ、と立ち上がった。
一触即発の雰囲気が流れる中、
ようやく紫音は二人の会話から
喧嘩に至る流れを読み取ることができていた。
つまり。
「確か、ジャックさんは
コーヒー代のツケが溜まっていますね」
ぽつり、とつぶやくように紫音が言うと、
ジャックは苦虫を噛み潰したような顔をした。
紫音がステファニーさん、と声をかけると、
彼女は心得ているというように
ジャックの未清算の伝票を紫音に手渡した。紫音はかなり分厚いそれをぱらぱらとめくって、
二人に顔を向けると、
「ざっと計算した所では、
現段階で５０万と少しといったところですね。

ジャックさん、これを一括で清算できるお金はお持ちですか？」
紫音が問うと、彼はうぐっと言葉を喉に詰まらせた。
紫音がそれでも彼を見つめると、
ジャックは開き直ったように腕を組んで高らかに言った。
「持っているはずがなかろう！」
「威張るな！
せめてもっと粛々としろ！」
何を、と再びにらみ合うジャックとクロウをなだめると、
紫音は先を続けた。
「今までの支払い履歴を見ると、
名前が遊星さんかクロウさんになっていますね。
つまりジャックさんは一銭も出されていない、と」
確認するように言うと、
ジャックは痛い所を突かれたようにぐぅ、と呻いてふいと顔を背けた。
紫音は伝票をステファニーに返すと、
ジャック、そしてクロウに言った。
「ジャックさんが今までご友人の好意に甘えている、

ということは十分にわかっているんだと思います。
ですが『デュエルキング』という華々しい経験をされていることも合って、
なかなかうまく行かない現実に疲れているんですよね。
そこをクロウさんに頭ごなしに怒鳴られて、
つい反発してしまった。
こういうことじゃないんですか？」
そう淡々と語る紫音に、
いつの間にか二人は毒気が抜かれた表情をしていた。
しかしはっと我に返ったクロウは、
腕を組み直して、
「と、とにかく！
今日という今日は何があっても許さないぜ」
紫音はそうだろうな、と内心でクロウに同情した。
しかしそれをおくびにも出さずに、
紫音は一つ、提案した。
「ジャックさんはコーヒーがお好きなんですね。
それでしたらコーヒーをタダで飲む方法が一つだけありますよ。

しかも溜まったツケまで返すことができます」

「何？」

言ってジャックを始め、クロウ、ステファニーが
紫音に顔を向けた。

その食い付き具合を確かめてから、
紫音は営業用の笑顔を向けて言った。

「簡単ですよ。この店で働けばいいんです。

確か、まだ募集枠は空いていましたよね」

紫音がステファニーに顔を向けると、
彼女はほうけた顔を元に戻して慌てて首を縦に振る。

しかしジャックは、下らなさそうに鼻で笑うと、

「何かと思えば、このジャック・アトラスに給仕をしろと言うのか。

馬鹿馬鹿しい」

そんなジャックに、隣でクロウは腕を上げて
大げさにやれやれと言った。

「そうだな。

一度ジャックは給仕も満足にできずに
ここをクビになってるもんな」

「な、それはここの連中が俺の価値を理解しないから…！」
慌てて言い繕うジャックに、
しかし紫音は笑顔を崩さずに彼をまっすぐに見つめた。
その視線に気圧されるように、
ジャックは自ら口を閉じた。
それを確認してから
紫音は静かな口調で諭すように言う。
「僕もクロウさんも、
ジャックさんにここで一生働け、
と言っている訳ではありません。
ジャックさんが再びデュエルキングになり、
スポンサーがつくまでの当面の資金調達のために
少しだけがんばればいいんですよ」
む、とジャックは腕を組んで考えていたが
その表情はやはり渋い顔のままだ。
おそらく先程クロウが口にしていた、
過去のトラブルが問題なのだろう。
とはいえ、紫音としては
彼が店先で喧嘩をしなくなればいいのであり、
彼がここでアルバイトをするかまでは

どうでもよかった。

とりあえずはこの場を収めることができそうで、
紫音が胸の内で安堵していると、
今まで黙っていたステファニーがおずおずと口を開いた。

「あ、あの、実は『前の』マスターは、
昨年の冬に『今の』マスターに交代してるのよ。
だから、マスターはジャックのことも
常連客であること以外は知らないの」

ステファニーの言葉に、
クロウはマジか！と喜んで、
ジャックの背中を思いっきり叩いた。

「！！

な、何をするクロウ！」

「よかったじゃねえか、ジャック！

もう一度やり直せそうでよ」

そう言って屈託なく笑うクロウに、
ジャックは慌てて、

「ま、待てクロウ！

まだ俺はやるとは一言も…」

「ああ、聞こえないぜ。

そういうことは。全然」

クロウ、貴様！と怒鳴るジャックを置き去りにして、
クロウは素早く踵を返すと、店先に止めてあった
D・ホイールと呼ばれるバイクに乗り込んだ。

そしてヘルメットを被って腕を上げると、

「じゃ、俺はこれから『仕事』だから。

ジャック、ちゃんと仕事教われよ。

紫音、わりぃけど後頼んだぜ！」

それだけ言い残して走り去った。

ジャック及びステファニー、
そして発案者である紫音はしばし呆然と
走り去るクロウを見つめていたが、
はたと我に返ったジャックはびっと紫音に指を向けた。

「今日の所は引き上げるが、
俺はまだここで働くことを決めた訳ではないからな！」

言い放つと、彼はいつものように
ばさりとロングコートをはためかせて歩き去っていった。

ブーツが石畳を叩く音が高らかに響いている。
しかしそんなジャックの足音に重なるように、
紫音の頭には別の声が響いていた。

ーー我は汝。汝は我。
汝、”皇帝”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

その声は紫音の胸に
熱く力強い鼓動を響かせた。

紫音はジャックの後ろ姿を見送りながら、
おそらくまた来るんだろうな、とそんな予感を感じていた。

The Star Start

バイトが終わったのは二十時を少し回った頃だった。
マスターに挨拶して店を出ると、
すっかり闇が落ちた夜の雰囲気が紫音を包み込んだ。

紫音は躊躇なくその中に身を投じ、
街灯が等間隔に並ぶ帰り道を歩く。

静かな夜だ。

大きな道路からは遠いこの道では、
車の行き交う音などはほとんど聞こえてこない。

切れかけた街灯が立てる、ジジ、
というその命の終わりが近いことを告げる音以外は
紫音の立てる規則正しい足音だけが鼓膜を揺さぶっている。

紫音がその単調な音に飽きて
肩にかけたヘッドホンに手を伸ばした時。

点々と並ぶ街灯の下、
背を預けて空を眺める人物がいた。

白い明かりに照らされた彼は、
紫音が気づいたと同時に
その背を浮かせてこちらに歩み寄って来る。

空に瞬くわずかな星の明かりをその身に受けて、
彼は闇の中からぼんやりとその輪郭を浮き上がらせていた。
立ち止まった紫音は、
少しあごを引いて歩み寄る彼に軽く会釈して、
「こんばんは、遊星さん」
紫音が散歩ですか、と尋ねると、
遊星は口の端をわずかに持ち上げて、
そんな所だ、と笑ったのだった。
そして遊星は相変わらずまっすぐな瞳で紫音を見ると、
「お前を待っていたんだ、紫音。
時間があれば少し話さないか？」
不器用なその誘いに、
紫音は構わない、とうなずいた。
遊星はよかった、と肩の力を抜いて
どこか嬉しそうに笑い紫音と並んで歩いた。
穏やかな夜風が二人の間をすり抜けていく。
「今日の昼は、ジャック達が迷惑をかけてしまったみたいだな」
すまない、と謝る遊星に、

紫音は昼間のことを思い出して苦笑しつつ首を横に振った。
遊星はそんな紫音を見て、
その誠実な光を宿した瞳を少しだけ伏せた。
「ジャックたちも悪気はないんだが、
こう距離が近いと人目もはばからず
衝突してしまうこともしばしばあるんだ」
昔からそうなんだ、と語る遊星に、
紫音は問う。
「彼らとは長いんですか？」
すると遊星はああ、とうなずくと、
暗い空に一筋の流れ星を見つけるように
目を凝らして昔語りを始めた。
「この街には昔、シティとサテライトという二つの社会があった。
シティはこの街のように高度な技術に囲まれた場所。
サテライトはシティよりも身分の低い者の居住区……、
まぁ、言ってみればスラム街だ。
サテライトはシティから隔離されていて、
シティから送られてくるゴミの再生がそこでの主な仕事だ。
俺たち三人はそんなサテライトで育った。

ゴミ溜めの中で、このカードゲームが俺たちを出会わせた」
懐かしむように、彼は懐に持った自身のデッキを手にとって見つめた。
その彼の表情はこの夜のようにどこまでも穏やかで、
静かだった。
「あの頃は毎日生きるのに必死だった。
だけど俺たちには夢があった。
いつかシティとサテライトをつなぐ、という夢が。
意見の食い違いやお互いの目標のために
時には争ったりしたこともあったが、
その夢だけはみんな一緒だった。
そして二年前、それは叶ったんだ。
誰の手でもない、俺たち自身の手によって！」
遊星はいつか最初に会ったときと同じ
胸の内で静かにたぎる熱を放出するように、
一つ一つの言葉を力強く、そして丁寧につむいでいく。
その強い意志を秘めた瞳に見つめられた紫音は、
まるで金縛りにあったかのように目をそらせなかった。
遊星の瞳は紫音という存在の希薄さを明らかにするように、

何も持たない紫音にただそっと光を注いでいた。
彼はそして続ける。
「この街は俺たちが変えたんだ。
俺たちの、絆が」
「きずな……」
おうむ返しに紫音はつぶやいた。
遊星が口にする『絆』と言う言葉は、
紫音が自身の中で前々から感じていた違和感を大きく広げた。
その違和感がもたらす息苦しさに、
紫音は目をすがめる。
半ば呆然とした紫音のつぶやきに
遊星は一つうなずいて、
「そうさ。
だから今この街で起きている異変も、
俺たちの絆で必ず解決してみせる。
紫音と、俺たちの絆で」
紫音は遊星の瞳をぼんやりと見返した。

瞬間。

いつもの声が頭をよぎった。

ーー我は汝。汝は我。

汝、”星”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

紫音の胸に希望という名の光が
うっすらと灯った。

それはまだ小さな光だったが、
紫音の心を確実に照らし出していた。

紫音はその絆という言葉に、
まるで毒気にあてられたように
くらくらとする頭を押さえた。

激しい動悸を感じて、
よろめく。

まるで自らそのものが
否定されたようなショックが紫音を襲った。

どうしてそう感じるのかはわからない。

希望、そして、絆。

それらの言葉はしかし紫音にとって
触れてはならないもののような気がした。

「どうした、紫音。

大丈夫か？」

真っ青な紫音の顔を見た遊星が、
心配して声をかける。

だが、今の紫音にはそれに答えるだけの気力がなかった。

二、三、たたらを踏んだ紫音は遊星から距離をとると、

「すみません。少し、疲れたみたいで。

今日は、帰ります」

それだけ言い残して、
紫音は遊星から逃げるように走り去った。

背後から遊星の声が聞こえたが、
それもすぐに遠くなった。

駅の付近まで来ると、
紫音は暗い夜空を見上げて立ち止まった。

半分ほどに欠けた月が、
ただひたすらに孤独な紫音を見下ろしていた。

The Star Start（後書き）

こんばんは、いつもご愛読ありがとうございます。

本日より先週から告知しておりました不定期配信を終了し、
通常通り、毎日23時更新をしていきます。

皆様のご協力のおかげで、
素晴らしいデッキを組むことができました！

本当にありがとうございました。

これからも紫音と愉快な仲間達をよろしくお願い致します！

The Magician Start

２０１０年５月２４日　月曜日

ネオドミノシティの道路は変形する。

すぐそばの海から道路がせり上がり、
高層ビルの近くの道路はいきなり組代わって別の道を造り出す。

本日もネオドミノシティでは
あちらこちらの道路でデュエルが行われていた。

海上のレーンは特にデュエル優先のため
一般車両のほとんどは下道を走っているが、
中には順番待ちだろうかそれともデュエルが済んで降りてきたのか
巌戸台ではまず見ないようなレーシング用のバイクもちらほら走っていた。

紫音はそんな複雑な道路事情を眺めながら、
相変わらず人の多い繁華街を歩いていた。

歩道を人の流れに逆らって歩く紫音の目指す先は、
この街一番のゲームショップだった。

平日の割にやけに混雑している売り場で
紫音はここに足を運ばなければならなくなった理由の記されたメールを開いた。

５／２４月１０：０７
　テレッテー
件（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
ーーーーーーーーーー

紫音！

一生のお願いだ！

今日発売の
『モンスターハンターポータブル３ｒｄ』
を買ってきてくれ！

店員のミスで予約されてなくってさ（＜＞；）

チックショー

俺の折角のテスト勉強の息抜きを（Ｔ－Ｔ）

こっちじゃ案の定もうなくなってやがる

ネオドミノに行ってるお前が頼りなんだ！

赤点？追試？

そんなものは…うわゆかりっち

なにをすｒｙｈｆｎｉｄｒｄｎｙｕｊｒふじｋ

ーーーーーーＥＮＤ

……勉強しろ。

内心思ったが紫音もこちらで探すものがあったため、

そのついでに見てくることにした。

売り場に着いた紫音は

とりあえず順平に頼まれた品を探すことにした。

本日発売ならば、新作コーナーに並んでいるはずである。

紫音が売り場に行くと、

ほとんどが品切れとされている空き箱の中、

一つだけそう記されていない空き箱が残っていた。

さらに店員の談では、

最後の一つであるという。

紫音は順平の悪運の強さに感心しながら、

空き箱に手を伸ばすと。

「え」

「あ」

真横から伸びた手が、
紫音が掴んだ空き箱と同じものを掴んだ。
驚いてぱっと顔を上げたそこには、
同じようにほうけた顔をしたーーー

「クロウさん」

「紫音！」

どこか間抜けな声を上げた二人は
同時になんとも言えず複雑な表情を顔に浮かべた。

この空き箱を持っている、
ということは彼もこのゲームが欲しいのだろう。
だがそれはこちらも同じである。
掴んだのが同時とて、

一本しかないゲームが二つに増える訳でなし。
むしろ相手が知っている人物ということで、
強引にもぎ取ることもできなくなってしまった。
さてどうしたものか。
紫音が考えたその時である。
クロウが空き箱から手を離したと思いきや、
ばっと九十度角に腰を折った。
「頼む、紫音！！
何も言わずにそれを譲ってくれ！」
クロウのその尋常ではない気迫に、
紫音はしばし呆然として困ったように口許に手を当てて考えた。
もしもコレが頼まれ物でなかったら、
と考えて紫音は数秒、
順平の顔を思い出しーーー、
「いいですよ」
と、紫音は答えていた。
するとクロウは、

がばっと効果音が入りそうな勢いで身をおこすと、
信じられないといった様子でこちらを見た。

「ほ…本当か！

でゅ…デュエルして
決着をつけなくてもいいのか？！」

あまりの感動にか
訳のわからないことを口走るクロウに、
紫音は構わない、と返した。

「そんなことより、早くしないと
僕でなくても他の人に買われてしまいますよ」

言われてクロウはおう！と慌てて
空き箱を持ってレジへと駆けていった。

紫音は一つ息をつくと、
今度は自分用のゲームを探して
売り場を歩いたのだった。

「いやぁ。

ホント、助かったぜ！

わざわざ今日の昼から休みとって、
着替える暇もなく色んな所を回ってみたんだが
これが無くてな。

それで仕方なく一番大手のここに来たんだが、
まぁこのナリだからな。

他の客や店員からは警戒されるし、
あんまこういう所には来たくなかったんだよ」

そういっていつものセキュリティの制服姿をしたクロウは、
照れ隠しのためかいつもより大げさに笑った。

ゲーム売り場から場所を移して、
紫音はクロウに先刻のお礼がしたいと言われ
喫茶店に連れてこられていた。

紫音はアイスティーに
ガムシロップを二つ入れて入念にかき混ぜながら、
彼の話に相づちを打っていたが、
とりわけ自身の中で意外に思ったことを口にした。

「それにしても、
クロウさんもそのゲームのユーザーだったんですね」

『モンスターハンター』とは、
大手ゲームメーカーが出した超ヒットゲームである。

最大四人まで同時プレイができ、
熊から恐竜、ドラゴンなど

大型モンスターを狩って生活していくといったものだ。

当たり前といえばそうなのだが、
この街の人々はデュエル以外には
興味が無いものだとばかり思っていたので、
彼がこのゲームを求めていると知った時は
紫音は少なからず衝撃を受けたのだった。

言われて彼は一瞬目を丸くして、
しかし紫音のその考えを打ち砕くようにぱたぱたと手を振った。

「ああ、これは俺んじゃねえよ。

ガキどもの一人が欲しいってんでな」

その言葉に、今度は紫音が目を丸くする番だった。

紫音は思わずクロウを髪の先からつま先までまじまじと見たが、
どう見ても妻子持ちには見えない。

そんな紫音の様子を不思議に思ったのだろう、
クロウはどうした？と問いかけてきた。

それにどう返そうか紫音は少しためらったが、
結局ストレートに疑問をぶつけた。

しばしの間二人に沈黙が降りた。

が。

「ぶっ、ははははははは！」

それを遠い過去に吹き飛ばすような爆笑が、
店内に響き渡った。

周りの客が振り返るも、
クロウは全く気にせず完全に笑い袋と化していた。

しばらくしてひとしきり笑った彼は満足したというような表情で、
半分引きかけていた紫音を見て、

「違う違う。

ガキどもってのは、俺の子供じゃねえよ。

マーサハウスって孤児院みたいな場所なんだけどよ、
そこで暮らしてる連中のことさ」

孤児院、と紫音はつぶやいて、
昨日の遊星との話をぼんやりと思い出した。

クロウはテーブルに肘をつくと、
窓から差し込む日差しにまぶしそうに目をすがめて言う。

「俺たちは今となってはないんだが、
サテライトって場所で育ったんだ。

俺に遊星にジャック、
身寄りのない俺たちをここまで育ててくれた場所。
今こうして真っ当に生活ができるのも、
仕事をがんばれるのも、
みんなマーサとあの家のガキどもが支えてくれてるおかげだからな。
最近は定職について少し余裕ができたし、
今まで何にもしてやれなかった分、
せめて欲しいモンの一つくらい買ってやんないとな」
そう言うクロウの表情は晴れやかで、
紫音は心の底から順平を優先させなくてよかった、
と思った。
そんな紫音の内心を読み取った訳ではないだろうが、
クロウはこちらに顔を戻すと、
逆立てた髪をがりがりかいて申し訳なさそうに表情を曇らせた。
「それにしても、本当にわりぃな。
ダチの頼まれモンだったんだろ」
紫音はそれに特に表情を変えることなく、
アイスティーを飲みながら答えた。
「構いませんよ。
彼は受験を控えてますから、
少しは雑念を払って勉強に集中するでしょう」

「はは。
勉強なんてろくにしなかった俺には、
耳に痛いぜ」
淡々と言う紫音に、クロウはようやくいつものように快活に笑ったのだった。

その笑い声の中に、
紫音は別の声を感じていた。

ーー我は汝。汝は我。
汝、”魔術師”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

その声は紫音の中に降り注ぐ陽光のような
穏やかさをもたらしていた。

「さあて、そろそろお待ちかねの品を

持ってってやんないとな」
がたり、と席を立つクロウに、
紫音も同じように立ち上がって彼について店を出た。
店先で紫音がごちそうさまでした、と言うと、
彼はこっちこそありがとな、とまた笑った。
「今度はマーサハウスにも遊びにこいよ。
紫音の話をしたら、ガキどもが会ってみたいって騒いでたぜ」
その言葉に紫音は一体何をどんなふうに話したのか気になったが、
あえてそこには触れず、考えておくとだけ返した。
クロウはどこかにやにやとしながら
両脇に黒い羽のオブジェがついたフルフェイスのヘルメットを被った。
Dホイールにまたがりエンジンを吹かしながら、
彼はふと思い出したように紫音に声をかけた。
「そういや、紫音は何のゲームを買いにきたんだ？」
問われて紫音は、
袋からゲームのパッケージを取り出した。
パッケージには、

『遊戯王５Ｄ－ｓタッグフォース５』

と書かれていた。

それを見たクロウはまた豪快に笑うと、

「なるほどな。

それならデッキのシュミレーションに持ってこいだ。

今度また、俺ともデュエルしてくれよな」

うなずく紫音にクロウは片手を上げると、

温まったエンジンを確認して軽快にバイクを走らせた。

遠ざかるバイクの音を聞きながら、

紫音は手元のパッケージを元通り袋にしまうと

寮へと帰ったのだった。

The Chariot Rank2

２０１０年５月２５日　火曜日

高所を吹き抜ける風は、
地面に近い場所を通り抜けるビル風と違って存外に冷たく、
強めの日差しにさらされて肌の上に浮き上がった汗を拭っていく。
都会の雑然とした喧騒をはるか彼方に置き去りに、
紫音はこの俯瞰風景に目を凝らした。

歩いている時は整然としていると思っていた街並みは、
しかしこうして見下ろしてみると
縦横無尽にはしった道路がそれを台無しにしていることがわかる。

職人が精巧に作り上げた模型ように細々とした車や人が、
まるで誰かに操られているかのように
一定のリズムをとりながら流れていく。

見る角度によってこんなにも違う顔をみせるこの街を、
どこか人間じみていると
自らにとってある種の皮肉めいた意味合いにもとれるそれに、
紫音は思わず微笑していた。

ネオドミノシティ中心部からは少し離れた、

双子のペントハウスにて。

本日紫音は兄の方である龍亞の招待により、
ここを訪れていた。

その目的は、
前回彼が言っていた
『特訓』とやらを行うためだった。

デュエルアカデミアでは騒然としずぎているという龍亞の言い分に、
紫音は首を傾げたが
彼が言うのならばそうなのだろう、
と深く考えずについてきたのだが…。

そこで待ち受けていたのは、
想像を絶する過酷な特訓だった。

「しおーん！
何か思いついた？」

背後からの声に、
紫音はその俯瞰風景から顔を上げて振り向いた。

そこには満面の笑みを浮かべた龍亞がいた。

その小さな手には
縁ぎりぎりまで注がれたコップが二つ握られている。

色合いからして中はオレンジジュースだろうか。
そう考える紫音に、
龍亞はこぼさないよう細心の注意を払いながら片方を手渡した。
ありがとう、と受け取った紫音は、
慎重に口まで運ぶとコップの五分の一ほどを喉の奥へ流し込んだ。
少しどろりとしたジュースが
その喉越しに反して柑橘系の爽やかな風味を伴って胃へと落ちていく。
紫音はコップから口を離すと、
きらきらとしたその眼差しから若干目をそらして首を横に振った。
それに龍亞はええええ、と落胆の声を上げて、
「も〜、まだ思いつかないの？」
通ってる学校で本当に学年一位なの？と、
疑いの眼差しを向ける龍亞に
紫音は大切なことだからと、苦笑した。
彼は頭の後ろで腕を組むと、
フグのように膨らませた頬から空気を抜くように喋る。

「まぁ、確かにそうだけどさ」

一応の納得はしたようだが、
やはり龍亞は不満そうだ。

紫音はそれに胸の内でそっとため息をついた。

「じゃあ今から記念すべき初特訓を始めるぞ！」

固く拳を握りしめ
楽しそうに宣言する龍亞に、
紫音は無言でこくりとうなずいた。

龍亞に反して紫音のテンションはかなり低かったが、
彼は気にしていないようだ。

龍亞はにこにことしながら、
な～にっかな？な～にかな？！
と自作だろう歌を口ずさんで、

「今週は、これ！！」

そしてついに
誰も予想だにしていなかった、
その恐るべき『特訓』の内容が発表された。

「今日の特訓は、
エースモンスター召還の時のセリフと
攻撃名を決めることだ！！」

カッコイイのにしようぜ！

そう言って龍亞は
目を点にした紫音を完全に置き去りに
その『特訓』を進めていった。

紫音は手すりに背を預けると、
半ば辟易とした顔を龍亞に向けた。

「これ、デュエルに関係あるの？」

すると龍亞は唇を吊り上げて、

「もちろんだよ！

っていうか、コレがないとデュエルの楽しさが半減しちゃうよ」

プンプン、という擬音が似合う表現を体現して主張する龍亞に、
紫音はポケットに突っ込んだ左手を出して
参った、と頬をかいた。

龍亞は腰に手を当てて、
出来の悪い生徒を叱るように続ける。

「あのね、紫音。

デュエルっていうのは、
どんな時でも楽しいモノなんだ！

みんなで楽しく盛り上がる為には
キメゼリフの一つや二つないと気が抜けちゃうだろ」

子供らしいその意見に紫音は苦笑しかけたが、
ふと、脳裏にアキとのデュエルがよぎって、
その笑いを収めた。

彼女とのデュエルをよく思い出すと、
そういえばシンクロ召還時に
デュエル関連以外の事を言っていた気がして、
紫音は未だに膨れている龍亞にその事を話した。

「そうそう、それだよ！
アキ姉ちゃん、
紫音とのデュエルを楽しんでたんだな」
先程とは一変してにこにことする龍亞に、
紫音は自らのあごに手を当てて思考した。

あの時は初めてのデッキ回しで
他事に構う余裕もなかった紫音は
彼女が何を言っていたかなど細かくは記憶していないが、
自分が思っていたように淡々とデュエルを進めるよりも
胸が熱くなったのは確かであった。

そこまで考えて、
紫音はまだ龍亞のキメゼリフを聞いていない事に気づた。
すると龍亞はよくぞ聞いてくれました、
とばかりに胸を張り、

「へっへ～ん。
この間は手札がうまく揃ったからやらなかったんだけど、
オレの本当のエースモンスターは二つあるんだぜ！！」
言って、龍亞はベルトに吊ったデッキケースから、
二枚のカードを取り出した。

「まず一つめは、
『パワー・ツール・ドラゴン』

一ターンに一度デッキから装備魔法カードをサーチする効果と、
このカードに装備した装備魔法カード一枚を墓地に送る事で
このカードの破壊を免れる事ができるんだ。

そしてもう一つが『ライフ・ストリーム・ドラゴン』

シンクロ召還に成功したとき、
自分のライフポイントを４０００にすることができて、
自分が受ける効果ダメージは０になるんだぜ。

おまけにこのカードが破壊される代わりに、
墓地の装備魔法カードを一枚除外すれば破壊されずに済むんだ！」

カッコイイだろ！
とはしゃぐ龍亞の頭を軽くなでて、
紫音はコップに残ったジュースをぐい、と飲み干した。

アキや龍亞の言動から鑑みるに、
どうやらデュエルを楽しむために努力をすることは
この街では暗黙のルールであるらしい。

郷に入っては郷に従え。

どこかで聞いたようなそのことわざを思い出して、
紫音はそろそろ真面目に彼の特訓に取り組むことを決めた。

紫音は寄りかかっていた手すりから背をはなすと、
今度はこちらから龍亞にデュエルを申し込んだ。

すると龍亞はやはりあの時と同じ向日葵のような笑顔を浮かべて、

「デュエル？！

やろうやろう！！」

今日はオレのエースモンスターの活躍を見せてやるからな、

と意気込む龍亞に連れられながら、

紫音は前よりも彼を理解できた気がしていた。

暗くなるまで龍亞とデュエルをして、

紫音は寮へと帰った。

5

２０１０年５月２６日　水曜日

寮に帰った紫音は、
部屋の扉を閉めるとがちゃりと鍵をかけた。

部屋着に着替え、
床に散らばった制服を
適当にハンガーにかけてクローゼットに仕舞い、
紫音は携帯を開いて時刻を見た。

寮の食堂閉店まで間があることを確認すると、
オーダーストップに間に合う
ギリギリの時刻にアラームをセットして電源を切り、
そのまま携帯をベッドの上に放り投げた。

こうして一切の邪魔が入らないよう準備を済ませて、
紫音は机の上に置きっぱなしにしてあった
ゲームソフトのパッケージを開けた。

説明書を流し読みしつつ
ほとんど物の入っていないすかすかの机の引き出しから、
半ば埃のかぶったＰＳＰを取り出すと
充電器を差して起動させた。

からからと中のディスクが回転して、
ディスプレイにゲーム画面が表示される。

入っていたのは『モンスターハンターＰ２Ｇ』だった。
総プレイ時間は１０５２時間。
もっともそれは１ｓｔアバターのデータであり、
２ｎｄアバターの分も入れればもう３００時間程追加されるだろう。

昨年の夏、順平に誘われてこのゲームを購入した紫音は、
夏休みの間中二人で部屋に籠もって昼夜問わず狩りに勤しんでいた。
もっとも休み明けにゆかりや風花に
怪訝な目を向けられたのは言うまでもないが、
今となってはいい思い出だ。

実は先日発売した３ｒｄも
順平から誘われてはいたものの、
交流先の授業による思わぬ出費のせいで
先延ばしせざるを得なくなってしまっていた。
だが結果的に順平も先日の一件で手に入れ損ねたようであるし、
交流先の授業も半分遊びのような内容のため、
勉強の合間の息抜きには事欠かない紫音であった。

ギルドカードの狩猟生活日記によると、
２０１０年１月３０日に順平を連れて
ガンランスで金銀リオレウス、
リオレイア夫妻に挑んだのが最後であった。

しばし懐かしさにアイテムボックスを覗いて天鱗の数を数えたり、
全武器の揃った装備ボックスの中身を確認したりしていたが、
本来の目的を思い出してゲームを終了しメインメニューを開いた。

裏面のフタを開いてディスクを入れ替えると
再びがりがりと乾いた音が静寂に覆われた部屋に響いた。

起動したゲームのオープニングを飛ばして
スタート画面を表示させると、
キャラクターがタイトルを読み上げた。

『遊戯王５Ｄ－ｓタッグフォース５』

そろそろ新しいデッキを組まなければならない。

数日前から、紫音はその事で頭を悩ませていた。

デュエルアカデミアでは、
毎週火曜の５限目に『デッキ構築論』なる授業が行われている。
禁止、制限を考慮した過去、そして現環境下での流行デッキの解説に始まり、
様々なデッキの特徴や長短所の紹介が主な授業内容だ。
その目的は沢山のデッキとカードを知る事により、
『流行』という固定概念に囚われない新しいデッキの発案につながるよう
生徒の発想力を鍛えること、であるらしい。
そして件の授業から先日、
次のような課題が出された。

『指定されたカードの性質を調べ、
そのカードを使ったオリジナルデッキを製作せよ』

早い話が授業で指定されたカードを使って
きちんと回るデッキを作れ、
という事だ。

前回の授業で一人ずつくじを引かされ、
それに書かれたカードを使用したデッキを組むこととなった。

そして今回、

紫音が指定されたカードは

『縮退回路』
永続魔法
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に
５００ライフポイントを払う。
フィールド上から手札に戻るモンスターカードは、
手札に戻らずゲームから除外される。

バウンス（手札、デッキに戻すこと。ここでは手札に返す場合を指す）
と除外。

どちらも一長一短ある為、
状況に応じた使い分けは必要だが
そこはプレイングでカバーできる。

バウンスする効果をもったモンスターや罠などは豊富に揃っているし、
夢か幻かはわからないがあの事件後に
紫音が手に入れたカードとも相性はいい。

そして何より遊戯王ＯＣＧにおいて、
除外や破壊の対策カードは多々あるものの
バウンスについてだけは対策のカードがないところも
地味ながら利点の一つと言える。

ただし維持コストが若干高めなのが気になるところだ。
発生するダメージがこのカードのコストだけではない以上、
デュエルが長引けばこちらが不利になるのは言うまでもない。

おまけにライフコストは強制効果のため
５００未満ならこのカードが破壊されるだけで済むが、
５００丁度の場合はその支払いによって敗北が決定してしまう。

ざっと教科書に目を通してはみたが、
モンスター効果の場合
『リバース』（モンスターを反転召喚する場合や、
裏側モンスターが戦闘やカード効果によって表側表示になること）
に頼ったものが多く、
『セット』してからバウンス効果を発動するまでに
最低二ターンのタイムラグが発生する。

さらにレベル４以下のバウンス効果を持ったモンスターは
貧弱なステータスのものがほとんどで、
壁としての機能以外は期待できない。

勿論一部そうではないモンスターもいるにはいるが、
三枚積むには少々値段が張ったり
種族等によりサポートカードに乏しかったりと悩みの種は尽きない。

魔法、罠においてはノーコストで発動できる

『強制脱出装置』
通常罠
フィールド上に存在するモンスター一体を持ち主の手札に戻す。
という便利なカードがあるものの、
罠カードの為、『サイクロン』等の破壊は勿論、
『トラップスタン』や『王宮のお触れ』で
無効にされてしまう危険性も孕んでいる。

いずれにせよこのカードを有効に使うデッキの構築は
現在の紫音の知識だけでは難しい。

かといってそれらしいカードを闇雲に積み込んだ所で
デッキは回らない上に無駄なカード＝出費に直結してしまう。

できるだけ無駄な出費はしたくないが、
デッキは組んでみなければ回るか回らないかなどわかるはずもない。

どうしたものか。

そんな悩み多き新人貧乏決闘人の強い味方が、
このゲームという訳である。

遊戯王のゲームシリーズでは最もバグが少なく、
収録カードの種類も豊富とのことで、
新デッキのシュミレーションには最適である。

さらにゲーム内で手に入るカードを見ていけば、
カード知識も自然につき、まさに一石二鳥。

早速中古で購入した紫音は、
この空いた時間を使ってゲームをスタートさせた。

……のだが。

紫音は再び頭を悩ませていた。

ゲームの主人公の持っている初期デッキは、
回るのか回らないのかさっぱりわからない
中途半端な獣族ビートデッキ。

対戦キャラクターはやたらと強いデッキを所持している割に、
パートナーにするとおかしなプレイングでこちらの気力を削いでくる。

そんな数々の試練と戦いながらも小一時間ほどプレイしてみたが、
結局は惨敗を喫し勝利時に貰える通貨もなかなか稼げず、
ゲーム内で販売しているカードのパックもほとんど買えないでいた。

これはどうやら思っていた以上に

時間のかかる課題になりそうだ。

現実と大して変わらない貧乏な自らのアバターに、
紫音は深く溜め息をついたのであった。

Justice Start

２０１０年５月２７日　木曜日

いつもと変わらない日常。

いつもと変わらない授業風景に、
いつもと変わらない一人の放課後、

…になる予定だった。

「神無瀬さん、
少しお時間よろしいでしょうか？」

眼鏡をあげながらそう言う麗華に、
紫音は机の中身を鞄につめる手を止めた。

今日も一分の隙もなくきっちりと制服を着こなした彼女は、
右手に持った薄い冊子を差し出した。

受け取ったそれの表紙には
『デュエルアカデミア主催　タッグデュエル大会のすすめ』
と記されている。

「デュエルアカデミアで毎年十月に行われている

タッグデュエル大会の案内です。
初等部や中等部の生徒も参加しているので、
スタンディングデュエルのみとなっていますが、
アカデミアの外部からの参加も広く受け付けている大会で
この街ではそれなりのイベントとして賑わっているんですよ。
受付は7月からとなっていますので、
神無瀬さんもよければ参加してみて下さい」
笑顔で言う麗華に、
紫音はへぇ、と生返事を返した。
基本的に紫音はこのカードゲームを授業の一環であることと、
この街での共通のコミュニケーションツールとしてしか認識しておらず、
『大会』という響きにさして興味が湧かなかったのだ。
紫音はとりあえずといった調子で
手渡された冊子の内容を飛ばし飛ばし目で追っていたが。
「……ミスプリント」
応募要項の文章に誤植があることに気づいて、
紫音は麗華にそれを告げた。
すると彼女はさっと顔色を青くさせて
慌ててその箇所を確認した。
食い入るように冊子を見ている麗華の顔から、

みるみるうちに血の気が色がひいていく。

「本当だ……どうしよう……」

麗華は愕然とし、
ついには操り人形の糸が切れたように
へなへなと床にしゃがみ込んでしまった。

気の毒なほどに落ち込んでいる麗華に、
しかし指摘した当の本人である紫音は冊子をファイルにしまって、
些細なことだから放っておいたら、と少し投げやりに慰めた。

すると麗華はまるで逆鱗に触れられたかのように激昂して、
きっと紫音を睨みつけた。

「些細なことじゃありません！

これはデュエルアカデミア生徒の学力、
ひいては品位が問われる重大な過失です！」

半狂乱しながら叫ぶ麗華に、
紫音は目をしばたたかせて彼女を見た。

眼鏡の奥から鋭い視線を向ける麗華は、
ともすれば今にも泣き出しそうなほどに
張り詰めた感情を抑え込んでいるのが紫音にはわかった。

彼女はそんな表情を隠すように眼鏡を直してうつむくと、
独り言のように小さくつぶやいた。

「もう印刷所から
街に配布する分も刷り上がって
届いてしまってる。

明日の放課後には各協力店へ送らないと間に合わないのに。

でもこれじゃ到底街に配布なんてできません。

どうしよう…」

いつになく弱気な麗華に、
紫音は胸の内で小さく息をついて残った教科書を鞄に詰め込むと、
校内でパソコンとプリンターが自由に使える場所はあるか聞いた。

麗華はその質問の意図が掴めなかったようで、
しばしその大きな瞳をぱちくりさせていたがすぐに我に返ると、
慌ててうなずいたのだった。

麗華に案内されてやって来たパソコン室は、
ちらほらと人が居る程度で、
生徒はこそりとも喋らず
機械とエアコンの稼動音だけが室内を満たしていた。

パソコンが過熱しないようにと
この時期からすでにつけられたクーラーのせいで、
室内は上着越しにも少し肌寒い。

好きな場所を使っていいか、と紫音が問うと、
麗華はこくりとうなずいた。

ずらりと並んだパソコンは
流石は最先端の街の学校と言うべきか、
全て最新鋭のものである。

紫音は席につくとすぐにパソコンの電源を入れて、
麗華のＩＤを借りてログインした。

ものの数秒で立ち上がったパソコンの
デスクトップ画面下のドックを見ると幸運にも
『ｐｈｏｔｏｓｈｏｐ』の他に『Ｉｌｌｕｓｔｒａｔｏｒ』まで入っていた。

迷わず『Ｉｌｌｕｓｔｒａｔｏｒ』を起動させた紫音に、
麗華が怪訝な顔を向ける。

「一体何をするつもりなんですか？」

立ち上がりまでの待ち時間、
ゆったりと背もたれに体を預けていた紫音は、
麗華の持っていた冊子をを一部取り上げて、
ぱらぱらとめくりながら口を開いた。

「よく書籍なんかに誤植があった場合に
訂正や補足を記した紙がはさまってる場合があるでしょ。
ざっと見たところ他に誤植はないみたいだから、

それを作ってはさみ込めば十分だと思う」

「で、ですが、街に配布するのと同じものが、
校内ではすでに配布されてしまっています！

今からの回収は不可能ですよ！」

半狂乱気味に言う麗華に、
紫音はディスプレイを見つめたまま
努めて冷静な口調で続ける。

「校内の分なら各学年、クラスの代表者の
口頭での説明で十分だ。

問題は街への配布分でしょう。

幸いパソコンに『ｉｌｌｕｓｔｒａｔｏｒ』が入ってるから、
フォーマットをＡ３で作って
一枚に四部くらいをコピー＆ペーストで配置すれば、
印刷の待ち時間の短縮にもなる。

閉館までは間があるから時間ギリギリまで粘れば、
最低でも数百部は刷り上がる。

カットは明日の朝少し早めに登校してやればいい。

休み時間を返上して折り込み作業をすれば、
放課後までには間に合う。

明日はここには登校できないから手伝えないけど、

今日可能な限り手伝うよ」

新規作成したフォーマットに慣れた手つきで
誤植の訂正とそれを詫びる文章を打ち込む紫音を、
麗華はぽかんとした表情で見ていたが、
やがて意を決したように口許を引き結んだ。

ずれた眼鏡の位置を直して立ち上がると、
麗華はいつもの頼れる委員長の顔をして
はきはきと言った。

「街への配布分の部数を確認してきます。

後、事務室から裁断機を借りて、
隣の空き教室でカット作業を始めますね」

すぐに戻ります、
と言って出て行く麗華の背中に、
紫音は忙しく手を動かしながら
気をつけて、とそっとつぶやいた。

月が中天に昇る頃。

街灯の明かりが白々と、
帰り道を照らし出している。

ほとんどの生徒が家でくつろいでいるだろうこの時間、
紫音は麗華と二人、ぽつぽつと歩いていた。

「何とかカット作業まで終わりましたね」

ずっと中腰の姿勢だったのが応えたのだろう、
麗華は両手をあげてぐっと伸びをした。

その言葉によかったね、と返すと、
麗華は小走りで紫音の前に立って深く頭を下げた。

「今日は取り乱したり八つ当たりをしてしまったり、
あげくに私のミスの後始末をさせてしまったり、
迷惑をかけてすみませんでした。

ですが神無瀬さん、
あなたが居てくれたおかげで助かりました。

本当にありがとう」

頭を上げてにっこりと微笑む麗華を追い越しながら、
紫音は別に気にしていない、と緩く首を振ってみせた。

再び紫音と並んで歩き出した麗華は、
肩上で切りそろえた髪をいじりながら少し意外そうにこちらを見上げた。

「それにしてもあの発想といい、
手際といい、『Ｉｌｌｕｓｔｒａｔｏｒ』の使い方といい、

一体どこで覚えたんですか？」

心底不思議そうに首をひねる麗華に、
紫音は苦笑しつつ
どこか彼女に似た正義感の強い後輩を思い浮かべて言った。

「うちの学園の副会長は何事にも一生懸命なんだけど、
少し抜けている所があってね。

わりと重要な書類に今日みたいなミスプリントが見つかるんだ」

そのフォローの過程で、と紫音が言うと、
麗華は納得したようにうなずきかけて、

「な、ちょっと、それじゃあ私も抜けているとでも言うのですか？！」

まなじりをつり上げて厳しい顔を向ける麗華に、
紫音は彼女からさっと顔を背けた。

全くもう、と眼鏡を直す彼女の頬が少し赤らんでいるのを、
紫音は見逃さなかった。

「でも、いいですね。

一生懸命学校をよりよくしようと努力している副会長さんには、
好感が持てます」

私もがんばらなくてはと意気込む麗華を、
紫音は静かに見守っていた。

ーー我は汝。汝は我。

汝、”正義”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

頭の片隅で聞こえた声と麗華の声が重なって、
紫音の胸の奥で花火のようにぱっと輝いた。

その後紫音は他愛も無い世間話に興じつつ
麗華を自宅付近まで送ってから、
寮へと帰った。

The Empress Rank2

２０１０年５月２８日　金曜日

生徒会の雑務をこなし
寄り道などせずにまっすぐ寮に帰った紫音は、
寮の自室に籠ると鍵をかけて携帯の電源を切った。

鞄を適当に机に投げ出すと、
上着とリボンタイをとって第一ボタンを外しただけ、
と着替えもそこそこに充電済みのＰＳＰの電源を入れた。

中身はもちろん『遊戯王５Ｄ' ｓタッグフォース５』だ。

あれから紫音は電車の待ち時間など、
それこそ昼夜問わずとにかく暇さえあれば攻略サイトで調べた
デッキレベルの低いキャラクターを探し出してはいびり倒し、
彼らから巻き上げた……もとい
こつこつ溜めたゲーム内通貨『ＤＰ（デュエルポイント）』で
ようやく質のいいライトロードデッキを組むことに成功した。

このゲームではカードのシングル買いなどといった
便利な機能は存在しないため、
初期パックに収録された有用な『ライトロード』を引き当てる為に
データが壊れるのではないかと心配するほどに
幾度となくセーブ＆リセットを繰り返したのも、

今では過去の話だ。

紫音は中堅くらいのレベル相手なら問題なく潰せることを念入りに確認してから、
更なる『ＤＰ』稼ぎの為にゲーム内での大会荒らしに勤しんだのであった。

紫音のデュエルの腕前が、
『ズブの素人』から『できなくもない』になった。

……気がする。

２０１０年５月２９日　土曜日

授業中、珍しくアキからメールが届いた。

５／２９土１１：０７
　十六夜アキ
件（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
ーーーーーーーーーー

今日のお昼から
もし暇ならこの間の

プレゼント選びに
つき合ってもらえないかしら？

メールを確認した紫音は机の中で素早く了承の返事を返すと、
再び自らの腕を枕にして夢の世界へと旅立った。

眠りに落ちる前に
古文の教師の遠回しなイヤミが鼓膜を震わせたが、
すぐに何も聞こえなくなった。

アキとの待ち合わせ場所は、
ネオドミノシティ繁華街にある紅茶専門の喫茶店だった。

琥珀色がベースの店内は、
机や椅子などの
どれもが童話の挿し絵に出てくるような
アンティークな調度品で揃えられている。

やや暗めに設定された照明が、
この街に来たときとは違った意味で
別世界に迷い込んだような気にさせた。

そう、まるでうさぎを追ってたどり着いた
『不思議の国』
丁度そんな錯覚である。

店内の奥まったスペースで、
アキは薔薇の壁紙を背景に、
静かに椅子に座っていた。

そのさまは先ほどの感覚にのっとるのなら、
さながら薔薇庭園でお茶を楽しむ女王だろうか。

アキには童話の女王のように、
白い薔薇よりも赤い薔薇の方が似合っている。

いつか見た独特なデザインの私服に身を包んだアキは、
重厚な絵画の中の人物のようにどこか現実味のない
魅力を放っていた。

細くしなやかな足を組んで背をもたれ、
気だるげにカップを傾けている。

そんなどこか妖艶なアキの様子に
紫音が声をかけようか迷っていると、
彼女の方がこちらに気づいて声をかけてきた。

「あら、早かったのね」

言いつつアキはぼう、と突っ立っている紫音を
不思議そうに見つめてくる。

その雰囲気からは先程の妖艶さは綺麗に消えていた。

「突然呼び出したりしてごめんなさい。
勉強の邪魔だったかしら」
眉根を寄せて心配そうに言うアキに、
紫音は構わない、と首を振った。
本当は勉強よりも安眠の邪魔だったと思ったが、
ポーカーフェイスを貫き通した。
アキは無邪気によかった、
と笑うと席についた紫音に早速本題を口にした。
「この間からずっと考えているのだけど、
結局これっていうのが見つからなくて……。
男の人ってどんな物が貰えたら嬉しいのかしら?」
心底困った様子のアキに、
紫音は逆に首をひねって半ば身も蓋もなく返した。
「人に寄る。
確実にその人に喜ばれるものにするなら、
直接聞いた方が早いと思う」
するとアキはまなじりをつり上げて怒りをあらわに、
紫音にくってかかった。

「もう、
それじゃただのおつかいじゃない！
プレゼントっていうのは
思いがけないものだからいいんでしょう。
何の為にあなたに聞いてると思ってるのよ」

当たり前と言えばその通りの反応に
頬を膨らませて怒るアキを見ながら、
紫音はそれもそうか、と自嘲した。

いつの時代も乙女心は難しい、
などと真剣に考えたことすらないようなことを考えながら、
運ばれてきたダージリン紅茶を一口含んだ。

口内に広がるパジェンシー（紅茶独特の好ましい刺激的な渋味）と
強いマスカテルフレーバー（ダージリンなどの特徴的な強い甘い香り）を
ゆっくりと味わいつつ、
紫音は完璧に機嫌を損ねているアキに言う。

「確かに十六夜さんの言う事ももっともだ。
だけど例えばの話、
僕が一般的な女の子の喜びそうなものを
十六夜さんにプレゼントしたとして、
それが必ずしも十六夜さんの喜ぶものと
一致する訳じゃないでしょ？」

紫音の言葉にアキは痛い所を突かれた、
といった顔をして口ごもった。
視線を自身の膝に落としたアキは、
どこか悔しそうに唇を噛んでいる。
紫音はそんなアキをまっすぐに見つめると、
改めて彼女に質問を投げかけた。
「その人って、
具体的にどんな人？」
瞬間、アキは弾かれたようにばっと顔を上げた。
その顔には驚きと焦り、
そして恥じらいを隠す為に何とかごまかさなければ
といった心理がありありと浮かんでいる。
普段は飄々としたところがあるというのに
『こういったこと』についてはわかりやすい人だな
などと思いながら、
紫音はアキの言葉を待った。
「え……あ、あの、
具体的に誰、って、その、
いつもすごくお世話になっていて、
みんなの中心で、私たちをいつでも導いてくれる人で。
あ、えと、紫音も会ったことのある人なんだけれども…」

ごにょごにょと聞き取れないほど小さな声で
さらに告白を続けるアキをそのままに、
紫音はアキの『紫音も会ったことのある人』という点について
思考を馳せた。

最初に思い浮かんだのはデュエルアカデミアの生徒だ。

この街での紫音の行動範囲などたかが知れているし、
最も頻繁に行き来している学校という施設ならば
廊下などですれ違っていてもおかしくはないだろうと思ったからだった。

だが思い浮かんだ生徒たちは、
男女問わずアキに思いを寄せる側ばかりである。

それにもしもアキが思いを寄せていている人物がアカデミア内にいるのならば、
今の彼女の様子がアカデミアで見受けられてもおかしくない。

しかも前にアキと街で偶然会った時、
彼女よりも二つ上だと聞いていた。

とすれば、その彼は確実にアカデミア外部の人間である。

アキの学外での交友関係は詳しくないが、
彼女の述べる特徴に当てはまる人物、
かつ紫音の知っている範囲で考えられるのは…。

「例えば、遊星さん、とか？」

びくり、とアキの体が大きく跳ねた。

信じられない、
という顔でこちらを凝視するアキの体は小刻みに揺れ、
それは右手に持ったカップから
中に残った紅茶がこぼれそうになるほどであった。

唇からは声にならない吐息が漏れ、
淡い色をしていた頬は深紅の薔薇のように真っ赤に染まっている。

「な……どうして…」

酸素不足の魚のように口をぱくぱくさせるアキに、
紫音はさらりと、

「何となく、かな」

するとアキは何を思ったのか、
ヤケだというようにいきなり大胆な告白を始めた。

「そ、そうよ。

私は彼が、遊星が好きなの。

出会ってからずっと、

私は彼だけなの！

……。

……

ーーって、何を言わせるのよ！」

強い羞恥に思考がついていけていない彼女は、
意味不明なことを口走りながら紫音に詰め寄った。

しかし紫音は特に驚くでもなく、
どこか納得すらしながら、

「僕はその人がどんな職業に就いているのかとか、
どんな性格かだとか
『彼』という人物像が思い浮かぶようなことを聞いただけで、
具体的に『誰』とは聞いてないし、
ましてや十六夜さんがその彼を好きかどうかも聞いた覚えがない」

「ーーーーーっ！」

特に最後の情報は、
最もどうでもいい事である。

言われたアキは自ら墓穴を掘ったことを認識し、
がたり、と席を立つと慌てて走り去ってしまった。

パンプスのヒールを店先の段差にひっかけ、
つんのめりかけながらも必死で走る

アキの後ろ姿を静かに見送ると、
紫音は彼ーー遊星という人物について
ぼんやり思考を巡らせた。

仲間思いで誠実で真面目、
おまけにデュエルの腕前も天下一品。

だが自分とはまた違った面で不器用そうな彼のことだ。

きっとアキが彼に好意を抱いている事など、
微塵も気づいていないのだろうと想像すると
苦笑を禁じ得ない紫音であった。

アキの秘密を知り、
彼女との距離がまた少し短くなった気がした。

その後紫音は少しだけ市街のカードショップを巡り、
課題に必要なカードの一部を購入し
夕方頃、寮へと帰ったのだった。

The Emperor Rank2

２０１０年５月３０日　日曜日

湿った空気がじわりと肌にまとわりつく。
全国的に梅雨入りが宣言された今日、
ここネオドミノシティでも例外ではない。
しとしとと静かに降り注ぐ雨音を遠くに聞きながら、
紫音はステファニーと先週までの売り上げの帳簿管理をしていた。

天気のいい日には多くの人々で賑わう店内も、
特にイベントもないこんな日は客入りもまばらだ。
『ＣＡＦＥ　ＬＡ　ＧＥＥＮ』従業員は久々にゆったりとしつつも、
漫然と時間を過ごしていた。
ーーーー彼が現れるまでは。

店の扉を押し開けて彼は雨の中
今日もほぼ定刻通りに現れた。
白いコートは雨粒をしたたらせてなお、

その形状を保っている。
針金でも入っているのだろうか？
そんな事をぼんやり考えていた紫音の隣では、
ステファニーがその表情を明るくして彼を迎えに駆けて行く。
ステファニーに代わって売り上げの管理作業を引受けた紫音は、
手元のデータをパソコン画面に並んだセルに書き込んでいった。
だがその作業はものの数分で打ち切りになってしまう。
店先から紫音を呼ぶステファニーの声に、
紫音は嫌な予感を感じつつ席を立った。
カウンター越しに顔を覗かせると、
まっすぐにこっちを見据える二組の瞳と視線が交わる。
片方はステファニー、
そしてもう片方はやはり彼、
ジャックのものだった。
相変わらず腕を組んで鋭い視線を放つジャックに
紫音はこっそり溜め息をついた。
いぶかしそうな顔を向ける紫音に、
ステファニーはあっけらかんと、
「ジャックが紫音君に用があるんだって」

ご指名いいなぁと
不満そうにカウンターに戻ってくるステファニーに、
紫音はできる事なら代わりたい、と心底思った。

「来たか」

注文のコーヒーを運んで来た紫音に、
ジャックは待ちかねたといった具合にそうつぶやいた。

それはコーヒーのことなのか
紫音自身のことなのか今ひとつ判別しづらかったが、
わざわざステファニーを使って紫音を指名するほどなのだから
おそらく両方のことを言っているのだろう。

紫音が彼の前にコーヒーを置いて
マニュアル通りの定型文を言い終わる前に、
ジャックが口を開いた。

「先週言っていた従業員の募集は、
まだやっているのか」

薮から棒なその質問に
紫音は一瞬言葉に詰まったが、
少し考えて首を縦に振った。

それを見たジャックはそうか、
と一つうなずくと、やおらがたりと席を立ち、
つかつかと店の奥へ歩き出した。

紫音はそのジャックの行動にぎょっとして、
慌てて彼に声をかけた。

「どこに行くんですか？」

紫音のその問いにジャックは足を止め、
愚問だとでも言うように胸を張った。

「ふん、決まっているではないか。

働きに来てやったことを店主に報告に行くのだ」

ふんぞり返るジャックに、
紫音は目を白黒させながらもおそるおそる彼に問う。

「ところで面接の事前連絡や、
履歴書は持って来ているんですか？」

紫音の言葉にジャックはその表情を険しくすると、
店中に響く大音声できっぱりと言い切った。

「キングの俺に、そんな小細工は不要だ！

直接当たるのみ！」

一体何をどうツッコんでいいのやら。

紫音はめまいすら覚えながらも、

再び歩き出すジャックを残った気力で辛うじて静止した。

「今はマスターは居ませんよ。

ブルーアイズマウンテンのコーヒー豆を買い付けに
出かけています」

紫音の言葉にジャックはなにっ！、
と驚きをあらわにひたりと歩みを止めてこちらに向き直った。

そしてじっと紫音の顔を見つめると、
彼は仕方がないと言うように大人しく席に座り直した。

紫音はほっと息をつく間もなく、
店の時計を見上げた。

紫音の先程の言は、
決してジャックを止めるためのハッタリなどではない。

もしもそうだったならば、
彼の就職活動につき合わされる事はなかったかもしれないが、
その時のマスターとジャックの荒れ様は想像するだに恐ろしい。

とにかくマスターが帰って来るまでに
ジャックを説得するなり諦めさせるなりして、
今の考えを改めさせなければ。

幸いこの雨のおかげで今の所店が忙しくなる心配はない。

紫音は額に浮かんだ冷たい汗をそっと拭って、

再びジャックと対峙した。

「それにしても、
どうして急にここでのバイトを決められたんですか？」

そう。

ジャックは先日までここでのバイトを
頑なに拒んでいたはずだ。

紫音の問いにジャックは優雅にカップを傾けながら、
静かに事の成り行きを話し始めた。

「実は先日、遊星やクロウと共に
俺たちが育ったマーサハウスに行ったのだが…。

クロウの奴、
事もあろうにマーサに俺の仕事が見つかりそうだと
勝手な報告をしたのだ。

それを鵜呑みにしたマーサがいたく喜んで、
子供たちと共に祝賀会まで催してな

まったく、マーサもそんな事でいちいち喜ぶなど……」

呆れたといった顔を作るジャックだが、
その雰囲気はどこか柔らかい。

どうやら彼がいくら孤高を気取ってみても、
家族と仲間が決してそれを許さないようである。

紫音はしばし黙ってジャックの言葉を聞いていたが、
厳しい表情を作るとはっきりと言った。

「では、なおさら今日は出直された方がいいですね」

「何だとっ！」

剣呑な雰囲気を全身から発しながらこちらを睨むジャックに、
しかし紫音は一歩も引かず淡々と口を動かした。

「社会にはルールがあります。

ここで働くならばそれに沿ったルールを守らなければ、
働く事はできません。

例えばデュエルも一定のルールがなければ、
ゲームとして成り立たないでしょう。

ルールを守らずに勝ったとして、
それが本当の『勝ち』だと胸を張って言えますか？」

紫音の言葉に、ジャックはぐっと呻いて上半身をのけぞらせる。

それに構わず、
紫音は間髪容れずにたたみかけた。

「働くためには、
まず相手に礼儀を尽くすことがルールです。

それにはここで働きたいという旨を事前に伝えて
面接の予約を取ること。
事前連絡の際に当日必要なものを聞くこと、
そして当日までに履歴書を作成する事。
全てはそれからです」

紫音が口を閉じると、
ジャックは最初こそ呆然としていたが
冷めかけたコーヒーを喉に流し込むと、
胸の奥に溜まった空気を全て吐き出すように
深い溜め息をついた。

しばし気が抜けたように黙していたジャックだが、
静かに席を立つと紫音の隣をすり抜けた。

紫音がゆっくりと振り向くと、
ジャックはロングコートの裾をばさりとはためかせて、
びっと紫音に指を向けた。

「今日の所は貴様に免じて退いてやろう。
だがこのジャック・アトラスにここまで言った責任は
必ずとってもらうぞ」

言ってにやりと笑ったジャックは、
店の扉を押し開けた。

扉についた鈴が

からん、と乾いた音を立てた。
全身から力が抜けた紫音ははぁ、と重い溜め息をつくと、
後ろ頭をかいた。
これで紫音はいやでもジャックの面倒を
見なければならなくなってしまったようだ。
今後のことを考えると倒れそうになったため、
紫音は首を振って嫌な想像を頭から追い出した。
そんな紫音をまるであざ笑うかのように、
雨脚は重く激しくなっていった。
再び溜め息をついて外の様子を眺めていた紫音はふと思い至って、
店先で傘を広げているジャックに浮かんだ質問をぶつけてみた。
「それにしても、何故わざわざ雨の日なんかに来られたんですか？
いつもは雨が降っている日は来られないですよね」
ああ、とジャックは視線だけをこちらに向けて、
「何故か遊星とクロウが、
『仕事の話をしに行くのは紫音がいる日にしろ』
としつこく念を押して来てな。
お前が店に来る日をわざわざ確認してやって来たのだ」
なるほど、あの二人の差し金だった、ということか。

紫音は奥歯を噛み締めると、
ようやくこの茶番の全体像を把握した。
ジャックの就職の為ならば使えるものは使う。
これが彼らの絆の成せる技か。
得心がいった紫音は、
ぐっと拳を握りしめて誓った。
いつか必ずこの落とし前はつけさせてもらう、と。

ジャックを見送って店に戻った紫音は、
彼の座っていた席の後片付けのために
布巾を持って机に近づいた。
そして紫音は机の上に置かれた『それ』に
驚いて目を丸くした。
「……」
彼が去った机の上には
珍しくコーヒーの代金が置かれていたのだ。
折り目のついたお札は
湿気を吸って少しくしゃりとしていた。
顔を上げた紫音は窓越しに

ゆっくりと遠ざかっていく彼の後ろ姿に、
ありがとうございました、
とつぶやいたのだった。

紫音とジャックのとの距離が
少し縮んだような気がした。

6

２０１０年５月３１日　月曜日

一日の授業の終了を告げるチャイムの音が
余韻を残して消えると共に、
紫音はアカデミアの購買へと足を運んだ。
目当ては件の課題デッキに必要なカードである。

昨晩、紫音は先日作った『ライトロード』デッキを使って
ゲーム内の大会を荒らし回り、
稼ぎに稼いだＤＰを使って
これでもかというほどカードを買いあさった。

その中から推敲を重ねながら長考すること約３時間、
件の課題デッキの基礎を作ることに成功した。

そして付近にいた手頃な強さのデュエリストで試運転をして微調整
を繰り返し、
ようやく完成の運びとなったのであった。

でき映えは悪くない。

といっても流石にライトロードやＢＦ－ブラックフェザーなど、
大会常連のデッキと張り合うのは難しいが、

それでも普通に遊ぶ分には十分である。
値段も必須カード以外はほとんどが数十円で揃えられるものばかりと、
リーズナブルなデッキとなった。
後は街や購買で必要なカードを買い揃えるだけだ。
……ったのだが。

「『縮退回路』が品切れ、か…」
その事実に紫音は思わず顔をしかめた。
よりにもよって課題のカードである。

ここ、デュエルアカデミアの購買は
街のカードショップよりもやや値段が高いが
豊富な品揃えが特徴だった。
ここでないという事は、
おそらく街のカードショップにも置いていない可能性が高い。
まずいな、と紫音は流石に焦りの色を滲ませた。

いつもなら他の汎用カードや似た効果を持つカードで
無理矢理にでも代用するのだが、
課題で出されたこのカードだけは代用品を使う訳にはいかない。

課題の発表は明日の五限目だ。

何とかして揃えなければ。

紫音はきびすを返すと、
足早に街へと繰り出したのだった。

あれから数時間。

紫音は己が知る限りの店に足を運んでみたが、
『縮退回路』はどこにもなかった。

この数時間、たった数百円のカードを求めて歩き通しだった紫音は、
ぐったりとベンチに座り込んで途方に暮れつつ空を見上げた。

先ほどまでビルの間から見えていた太陽は完全に沈み、
光の残滓だけが弱々しく差し込んでいる。

その光もやがては反対側から迫る夜の藍に混ざって、
溶け消えてしまうのだろう。

紫音は肺の中に澱のように沈殿した重たい空気を入れ替えようと、
ゆっくりと長い息を吐いた。

このままぼうっとしていても仕方が無い。

紫音は自らの鞄を探ると、
課題の概要が記された用紙を取り出した。

その中の、
『指定されたカードが入手できなかった場合』
についての項目に目を通す。

デュエルアカデミアでは
このように手に入らなかったカードがあった場合、
二つの選択肢を用意している。

一つは指定カードの変更。

もう一つはプロキシの使用。

一つ目については言うまでもないだろう。

ただしこの場合は担当教師に
課題発表の三日前に報告しなければならない。

しかし課題の発表は明日に控えていたし、

この方法ではせっかく考えたデッキも一から考え直しとなってしまう。

そしてもう一つの『プロキシ（ｐｒｏｘｙ）』とは
英語で『代理』の意で、
入手していないカードを何らかの方法で代用したものの事を指す。

ただしこれはあくまでも非公式のものであるため、
公認大会では使用できない。

手法は簡単で発表の際に『代わりのカード』を示して
『件のカードとして扱う』ことを相手に了承してもらえばよいのである。

後はデュエルの開始の際に
デュエルディスクにプロキシの使用登録をしておけば、
その通りに読み込んでくれる。

だがこの手法の難点は、
デュエルの最中に元のカードの効果を確認できないことだ。

明日の発表でミス等起こさないよう、
帰ったら効果と裁定をしっかり頭に入れなければ。

そうぼんやり考えている時だった。

「紫音！」

低い、しかしよく通る声に呼ばれて、

紫音は意識を呼び戻された。
紫音はぼんやり空へと向けていた顔を地上に戻すと、
帰宅ラッシュで駅へと流れるように歩いている人々のなかに目をこらした。
その流れに逆らって歩み寄る人影を見つけて、
紫音は頭を垂れて小さくお辞儀した。
「奇遇だな、こんなところで会うなんて」
この雑多な人ごみの中でもどこか凡人とは違う雰囲気を持った彼は、
口角を上げて不器用なりに感情を表現していた。
「仕事帰りですか？
遊星さん」
座ったまま紫音が問うと、
遊星は首を横に振って両腕に抱えた金属製の籠を傾けて
無言でその中身を示した。
籠の中に入っていたのは、
半ばまで錆びた金属片や動きそうにない機械やそのパーツ……、
紫音の思いつく限りではそれらはどうひいき目に見ても
ゴミやガラクタとしか表現できないものだった。
いぶかしそうにしている紫音に
遊星はどこか楽しそうに笑って、

「おそらく紫音の想像している通り、
ただのジャンクだ。

今日は久々の休暇だったから、
少し遠出をして旧サテライトのジャンク市場で
使えそうな物を拾ってきたんだ」

いつも難しい顔をしている彼は、
そう言って珍しく晴れやかな表情を宿している。

しかし紫音は両肩に重くのしかかる疲れにより、
その笑顔につき合う事ができなかった。

「……何かあったのか？」

そんな憂いを帯びた影を見せる紫音を心配してだろう、
遊星が静かに理由を尋ねて来る。

紫音がそれにくたびれた笑いで返すと、
遊星はしばし黙考して、

「この近くに俺たちの住んでいる場所があるんだ。

前に道案内を頼まれてくれたお礼もしたいし、
もしもこの後予定がないなら
少しつき合ってもらえないだろうか」

ジャンクの詰まった籠を抱え直した遊星は、
突然の提案にきょとんとする紫音を静かに見下ろしていた。

To be continued…

The Star Rank2

「すまないな、紫音。
こちらから招待したいと提案したのに、
荷物を持たせてしまって」

言葉通り心底済まなさそうに言う遊星に、
紫音はジャンクの入った袋を小脇に抱えながら
黙って首を横に振る。

いつになく荷物を満載したDホイールを押して歩く遊星の後をついて、
紫音は彼の居住区へとやって来た。

郊外の住宅地の中の見覚えのある噴水広場の一角に立てられたガレージが、
遊星たちの家だという。

広場の噴水をはさんだ向こう側には
紫音のバイト先およびジャック御用達の喫茶店、
『ＣＡＦＥ　ＬＡ　ＧＥＥＮ』の店舗が見えた。

これほど近くに住んでいたことに紫音は素直に驚きつつ、
遊星に招かれるままにガレージの扉をくぐった。

一階部分が広場の地面よりも少し掘り下げられ、
さらに天井が二階まで吹き抜けになっているため
ガレージ内は外観よりもずっと広く感じた。

遊星の話によればこのガレージは隣に建っている
『ＰＯＰＰＯ　ＴＩＭＥ』と看板の掲げられた時計屋のもので、
その店はゾラという婦人とその一人息子が経営しているそうだ。

ゾラ婦人は遊星達の育ての親であるマーサの知り合いで、
サテライトからシティへと進出するに当たって居住で悩んでいた彼らに、
厚意でこのガレージを貸し出してくれているという。

荷物を持ったまま玄関で突っ立っている紫音に、
別の場所からシャッターを開け
Ｄホイールを押して中に入ってきた遊星は、
荷物を適当に床に置くように言うと居住スペースである二階へと誘った。

歩くたびにがたがたと揺れる階段を登った先のリビングには、
ソファと小さなテーブル、窓際に設置されたデスクの上にパソコンが一台あるだけで、
シンプルというよりは質素な印象である。

「今何か用意するから、適当に座っていてくれ」

そういって台所に向かう遊星を見送って、
紫音は彼の言葉に甘えて大人しくソファに体をあずけた。

寮のラウンジに設置された高級なソファに慣れているせいか、
腰を下ろしたソファは固くお世辞にも座り心地がよいとは言えなかったが、
歩き疲れて棒のようになった足を休めるには十分だった。

ソファに身を沈めてすぐに襲いかかってきた猛烈な眠気に
しばしうとうととしていたが、
机に置かれたカップの音で意識を浮上させた。

湯気を立てるカップのからは、
バイト先のものと同じコーヒーの香りがした。

同居人の趣向だろうか、
と紫音はどうでもいい事を考えた。

「学生生活もなかなか忙しいみたいだな」

遊星の言葉に、
紫音は曖昧な笑顔を浮かべた。

なるべく自らの話からそれるように、
紫音は先ほどの荷物について遊星に問うた。

「あのさっきのもの、
一体何に使うんですか？」

すると遊星はああ、
と、いつもよりもわずかに弾んだ調子で話しだした。

「久しぶりに俺たちのDホイールの調整をしていたんだが、
そろそろガタがきている部品があってな。

あれらを解体して使えそうなパーツがあれば、
ガタのきてる部品と交換するんだ。

中には掘り出し物なんかもあって、
調整次第じゃ新品のパーツと変わりない働きをしてくれるものもある」

紫音はへぇ、と感嘆の声を漏らした。

あのどう見てもゴミでしかない物がまだ使えるだけでも驚きだというのに。

彼の事はアキからよく聞かされていたが、
予想をはるかに上回る遊星の技量の高さに紫音は素直に感心した。

目を丸くする紫音の内心を読み取ったかのように、
遊星はくすりと笑って言う。

「そんなに驚くようなことでもないさ。

前にも少し話したように、
俺たちは元々サテライトで
ああいったジャンクの山に囲まれて生活していたからな。

サテライト出身者には、
俺みたいな技術者もちらほらいる」

多くのお偉方のするような尊大な態度や
あからさまな謙遜を
微塵もみせない彼の器の大きさには、
さすがの紫音も脱帽した。

これではたかだか狭い学校の中で
学年一位であり続けることなどでは全く釣り合わない、
とうつむいていたアキの様子もうなずけた。
すっかり言葉を失って見つめる紫音に
遊星は少し居心地悪そうに身じろぎして、
それよりも、とこちらを見つめ返した。
「今日は何かあったのか？
あんな場所でひどく疲れた顔をして、
ぼんやり空なんか見上げて」
問われて紫音はぐ、コーヒーを喉に詰まらせかけた。
我ながらうまく話題をそらしたと思ったのだが、
そうでもなかったらしい。
「そんなに酷い顔でしたか？」
紫音が恐る恐る問うと、
遊星はシニカルな笑みを口許に湛えて言う。
「遠目からもわかる程度には」
「……」
紫音は決まりが悪くなって、瞳を伏せた。
そんな紫音に遊星はカップを傾けながら、

「別に言いたくなければ、
無理には聞かないさ」

「――――！

いえ、別にそういう訳じゃないんです。

大した事ではなかったので……何となく」

向けられたまっすぐな視線から
条件反射のように目をそらしながら、
紫音は少し間を置いてから
今日のできごとをぽつりぽつりと話した。

紫音の語るつまらない話を
最後までじっくりと聞いた遊星はしばし考えた後、
少し待っていてくれ、と突然席を立った。

リビングを出てどこかに行ってしまった遊星に、
紫音は少しだけ安堵の溜め息をついた。

やはり紫音は、
彼の意志の強いまっすぐな視線が苦手だった。

遊星にそんなつもりはないだろうが、
紫音の本質を見透かしてしまうかのようなあの視線には、
どこか恐れにも似た感覚が体を支配する。

紫音はそれを振り払うように一つ伸びをして、

ほとんど中身の減っていないコーヒーを勢いよく飲み干した。
ミルクも砂糖も入っていないコーヒーは、
その独特の風味と張り付くような苦みを口内に残した。
やがてその苦みもひいてきた頃、
奥の廊下で扉の開閉音がしたかと思うと、
待たせてすまない、と遊星が姿を現した。
彼は再び紫音の向いの席に座ると、
手に持ったカードの束を紫音に差し出した。
「もしよければ使ってもらえないだろうか」
そういう遊星からカードを受け取った紫音は、
目を見開いて彼を見た。
はたして彼が手渡したのは、
紫音が数時間かけて探し歩いた『縮退回路』であった。
驚きで瞬きも忘れた紫音だったが
本当に受け取っていいのかどうか迷っていると、
「俺のカードプールの中にたまたまあったんだ。
ストレージの中でずっと眠っていたものだから、
遠慮なく受け取ってくれ」
微笑む遊星に、紫音は迷うのをやめて頭を下げた。

「ありがたく使わせてもらいます」

かしこまる紫音に
遊星は普段通りの調子でああ、と力強くうなずいた。

「うまくできたら、今度是非俺とデュエルしてくれ」

そう言う遊星に、こちらこそお願いします、
と答えて、紫音はようやく顔をほころばせたのだった。

遊星と少しだけ話をして、紫音はガレージを後にした。

彼の事を知り、紫音は少しだけ遊星と親しくなれた気がした。

7

２０１０年６月１日　火曜日

午前の授業を終えた紫音は、
梅雨空を窓越しにぼんやりと眺めつつ
やや遅めの昼食をとっていた。

しとしとと絶えず降り注ぐ雨粒をその身に受けて、
中庭一帯を埋め尽くすほどに咲き乱れた紫陽花だけが
灰色の空の下で生き生きとした姿を見せている。

数百席も用意されたこの広大な食堂はしかし、
初等部から高等部まで共通のため、
今日の紫音のように少しでも出遅れると
昼休み中頃まで空いた席を探してうろうろする羽目になる。

特にこれから雨の多い季節に突入していくにあたって
テラスや屋上が使えなくなる事が多くなるだろう。

今後はもしかしたら昼休みが終了するまで
席が空かないことさえあるかもしれない。

ただでさえ憂鬱な天候だというのに
さらに面倒な事になってしまったな、と
紫音はＡ定食とうどんとカレーと、
デザートにデュエルアカデミア名物の

日替わりドロー・パフェを口の中に詰め込みつつ、
自分の力ではどうしようもないこの現状を嘆いたのだった。

ところで紫音が今食しているドロー・パフェとは、
ドロー力が鍛えられるという謎のふれこみ付きの代物で
パフェの中に入っているものが出されるたびに違うという、
変わった趣向のデザートである。

今回紫音食べたチョコレートパフェには
とりわけ変わった物は入っていなかったが、
食したクラスメイトの話では
とんでもない高級品やありえないキワモノなど
具体的には聞き出せなかったが、
その中身は多種多様であるらしい。

パフェの触れ込みに則るならば、
自分のドロー力は平凡なのだろうか
などと紫音がどうでもいい想像にふけっていた時だった。

「わー、紫音いっぱい食べるんだなぁ！」

窓の外の紫陽花に負けないほどいきいきとした声が、
近くで弾けた。

一心不乱にチョコレートパフェと格闘していた紫音が視線を上げると、
同じく昼の戦争に出遅れたのだろう双子たちが

それぞれのお昼ご飯を持って物珍しそうにこちらを見ている。

「お向かいの席、いい？」

双子の妹、龍可に問われて
紫音は無言でうなずいた。

がたがたと椅子を引いて席に着いた二人は、
手を合わせて大きな声でいただきますをしてからご飯に手をつけた。

ちゃんと三角食べしないとダメだからね、という妹に、
兄は少し煩わしそうに、わかってるよ！と返しつつも
その箸はおかずだけをひたすら口へと運んでいた。

紫音は双子のそんな微笑ましい光景を眺めつつ、
チョコレートパフェの最後の一口を口にした。

双子にならってごちそうさまでした、
と手を合わせた紫音に、
そういえば、と兄、龍亜は
口の中の物を急いで飲み込んでこう切り出した。

「紫音はゆーれーとか信じる派？」

唐突なその質問に、
紫音はとっさに答えられずに顔をしかめた。

しばしの黙考の後、
考えるのを放棄した紫音はどうでもいい、
とお決まりのセリフを返した。

いつもならここで
ちゃんと考えてよ！などどいった抗議が入る所だが、
今日に限って龍亞は何故かにこにことして、

「じゃあ大丈夫だね！」

よかった、と嬉しそうにうなずいた。

話について行けない紫音が怪訝な顔を向けると、
龍亞はその反応が欲しかったとばかりに身を乗り出して話し始めた。

「あのさ、今度みんなで心霊スポットの探検に行くんだ！
廃寮になって放置されている建物らしいんだけど、
誰もいないはずのその寮の一室に明かりがついてるんだってさ。

その寮には昔から開かずの間があって、
明かりはなんとその部屋から漏れているんだ。

午前0時過ぎになると、
その開かずの間から人の話し声が聞こえてくるんだって。

クラスの間で噂になっててさ。

その噂がホントかどうか確かめに行く事になったんだ」

意気込む龍亞に、紫音は頬杖をついて
ふぅん、と適当に相づちを打った。

この時期によく出回る安っぽい噂である。
内容も使い古されており、
特別興味のわくようなものは何もなかった。

それにしても心霊スポットの探検など、
よっぽど暇を持て余しているか
その手の物好きだけがすることと思っていた紫音は
龍亞の言う事を少し意外に思った。

だが龍亞たちの年頃といえば、
有り余るほどの体力を発散するため
常に退屈な現状を覆すようなことを探しまわっているものだ。

そういった話題に興味を示すのも、
無理はないのかもしれない。

紫音が龍亞の話をそっちのけにして
そんな事を考えていると、
先程から話し通しだった龍亞は一呼吸おいて、

「で、紫音も行くよね！」

その言葉に紫音はひたりと動きを止めて、
フリーズした思考を急激にフル回転させた。

遅ればせながらようやく彼の言う事を理解した紫音は、
「は？」
と、思わず間の抜けた声を出して聞き返した。
一体いつからそんな話になったのだろう。
紫音は記憶を辿ったが、
しかしその記憶は少し前から割り込んだ思考によって
ぷっつりと途切れており全く役に立たなかった。
龍亞はきちんと話を聞いていなかった事にふくれたが、
律儀にもう一度説明した。
「だから、紫音もオレたちと一緒に
噂の真偽を確かめに行くんだって！
その心霊スポットまではちょっと遠いから、
オレたちだけじゃ危ないだろ。
それに紫音ならもし何かあっても
この間のすごい力で守ってくれるしさ！」
もちろんいいよね、と期待の眼差しを向けてくる龍亞に、
紫音は困った顔をして龍可を見た。
すると彼女は食事を続けながらも呆れたような表情を浮かべて
ゆっくりと首を横に振った。

龍可という最後の砦が崩れ去った今、
こうなった龍亞は最早誰にも止められない。
話は紫音の返事を待たずに、
とんとん拍子に進んで行く。
「決行日は来週水曜の放課後だからね！
ちゃんと予定空けておいてよ」
忘れないでね、と念を押してくる龍亞に、
紫音ははあ、と曖昧に返事をした。
紫音から一応の返事をもらえたことで安心した様子の龍亞は、
がたりと席について昼食を再会した。
紫音はしばらく目を点にしたまま固まっていたが、
結局は子供のお遊びだと言い聞かせてつき合う事にした。
人間諦めが肝心である。
「ところでその寮って？」
紫音が問うと龍亞は視線を上に向けて記憶を辿った。
「えーっと、確か『ツキコー』って学校の寮だったらしいよ。
詳しい住所は心霊スポットを紹介してる
サイトの掲示板に書いてあるって
テンペーが言ってた。

紫音にも送るよ」

そう言って龍亞は懐から取り出した携帯で
何事か操作してすぐに元通りしまうと、
残ったごはんを口にかき込んだ。

龍亞が食べ終えるのとほぼ同時に届いたメールには、
彼の言うサイトのＵＲＬが添付されており、
紫音はすぐにそのサイトにアクセスした。

食事を終えた彼らは時計を見ると
食器を手に慌ただしく食堂を後にしていった。

ぱたぱたと駆けて行く双子の背中を見送ると、
ようやくつながったサイトの掲示板をクリックした。

おどろおどろしいフォントで書き込まれた
数々の心霊体験談や心霊スポットの紹介文を
スクロールさせていくと、
ほどなくして龍亞の言っていた内容とほぼ一致した書き込みを見つけた。

何とはなしに内容を目で追った紫音は、
目を見開いて驚愕した。

内容は先程の龍亞の言っていた通り、
特筆することもないありきたりなものだ。

だが驚いたのはそこではなく、

その建物の名称と住所である。
曰く。

＊＊県＊＊＊市巌戸台　＊＊＊＊－＊＊
元『月光館学園　巌戸台分寮』

それは紛れもなく
紫音が月光館学園に転校してから
仲間たちと一年間、共に過ごした寮であった。

紫音は落ちて来た前髪の下から手を入れて
自らの頭を掴むように乱暴にかき上げた。

時間上ほとんどの人影がなくなった食堂で、
ざあざあと降りしきる雨音だけが
しきりに紫音の耳を打っていた。

結局紫音は授業開始五分前の予鈴がなるまで、

微動だにせずその画面を凝視し続けていた。

……

……

Duel 2 ～The first half

ぴん、と張りつめた空気を裂いて、
紫音はスタジアム中央のデュエルゾーンへと足を運んだ。

歩きながら左腕にデュエルディスクをはめ込むと、
ディスクはかちりと音を立ててぴったりと紫音の腕にはまった。

最初は手間取ったデュエルディスクの装着も、
今では慣れたものだ。

ここに来てもう一ヶ月以上になるのか、
と思うと感慨深い物があった。

デュエルゾーンに立った紫音は、
本日の対戦相手と会釈して軽く挨拶をした。

すると肩上でそろえた桃色の髪を
細いリボンのついたヘアバンドで止めた女子生徒は、
丸く大きな瞳を無理矢理つり上げながら腕を組んだ。

「月光館学園とかって所から来たってのはあんたね。

ま、最近始めたあんたなんかが
ボクの相手になるとは思えないけど、
授業だし、仕方ないから相手してあげるわ」

彼女はそう言うとデュエルディスクを展開した。
ずいぶんな言われようだな、と思ったが
あながち間違いではないため特に言い返さなかった。
紫音はベルトに吊ったデッキケースから昨晩完成したデッキを取り出して、
静かにデュエルディスクにセットした。
デュエルディスクの自動シャッフル機能が働いて、
デッキを細かくカット&シャッフルする。
お互いの準備が整った所で、
ジャッジ兼『デッキ構築論』担当教師が授業の開始を宣言した。
「これより、デッキ構築論課題査定デュエルを開始します。
課題発表者はＩＤと名前を宣言してデュエルを始めるように」
教師の説明を受けて紫音はデュエルディスクを展開しながら
指示に従った。
「生徒ＩＤ　４８２－７ｓｋ、神無瀬紫音」
「ＩＤ　ｔｄ６３１　ツァン・ディレ」
互いに名乗った所で、いよいよデュエル開始だ。

『デュエル！』

「よーし、ボクのターン！」

先攻はあちらだ。

ツァン・ディレは腕で弧を描きながらカードをドローする。

「メインフェイズ。

モンスターをセット、

カードを一枚セットしてターンエンド」

回って来たターンに紫音はカードをドローした。

「スタンバイ、メインフェイズに入ります。

手札から魔法カード『テラ・フォーミング』を発動。

自分のデッキからフィールド魔法カードを一枚、

手札に加えます。

僕はデッキから『湿地草原』を手札に加え、

発動」

デュエルディスク脇のフィールド魔法専用カードゾーンに
『湿地草原』をセットする。

瞬間、デュエルゾーンが一面の草原へと変わった。

空は今日の天気と同じ厚い雲に覆われ、
ぽつぽつと穏やかな雨が降り始める。

足下はしっかりとしたコンクリートからぬかるんだ泥の感触に変わり、
どこからともなくカエルの鳴き声が聞こえてくる。

「手札から、『スター・ボーイ』を召喚」

紫音のフィールドに星形の頭を持った一つ目のモンスターが現れた。

『スター・ボーイ』
☆×２　水属性　水族
ＡＴＫ　５５０

「フィールド魔法『湿地草原』の効果により、
全ての水族・水属性・レベル２以下の
モンスターの攻撃力は１２００ポイントアップする。

さらに『スター・ボーイ』の効果、
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
全ての水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
炎属性モンスターの攻撃力は４００ポイントダウンする」

『スター・ボーイ』
ＡＴＫ　５５０→１７５０→２２５０

「バトルフェイズへ移行。
スターボーイでセットモンスターに攻撃」

『スター・ボーイ』が色とりどりの触手をうねらせて、
セットモンスターに襲いかかった。

『スター・ボーイ』
ＡＴＫ　２２５０
←
『エレキトンボ』
ＤＥＦ　９００

『スター・ボーイ』の触手に絡めとられた
虹色の羽を持った『エレキトンボ』は繊細なガラス細工のように砕
け散った。

それを待っていたというようにツァン・ディレは
笑って宣言した。

「『エレキトンボ』の効果発動！

このカードが相手によって破壊された場合、
自分のデッキから「エレキ」と名のついたモンスター１体を
特殊召喚する。

ボクはデッキから『エレキリン』を特殊召喚！」

『エレキトンボ』の破片がバチバチと鈍い音を立てて
火花を散らした。
その中から一筋の雷光のようにモンスターが駆け現れた。
『エレキリン』
☆×４　雷族　光属性
ＡＴＫ　１２００
全身に稲光りをまとったキリンが、
長い首を振ってこちらを見る。
「バトルフェイズを終了し、メインフェイズ２に入ります。
僕はカードを一枚セットして、
ターンエンド」
若干相手のデッキを回してしまっただけの気がしたが、
今は過ぎた事を考えても仕方がない。
それよりも、と紫音はスクリーンを展開させて、
登場した新しいモンスターを調べ始めた。
その間にもツァン・ディレは、
回ってきたターンの処理を始めた。
「ボクのターン！ドロー」
ツァン・ディレはドローしたカードを見ると満足そうに笑って、

「手札から、『エレキジ』を召喚」
現れた光の中からスパークの音と共に、
鮮やかな羽を広げた一羽のキジが飛び出した。

『エレキジ』
☆×４　雷族　光属性
ＡＴＫ　１０００

さらにツァン・ディレは一枚のカードを掲げると、
デュエルディスクにセットし宣言した。

「手札から装備魔法『エレキューブ』発動！
このカードを『エレキリン』に装備し、
さらにこのカードを墓地に送る。
対象はもちろん、『エレキリン』」

その名の通り雷が凝縮されたようなキューブが
エレキリンに合体したかと思うと、
しかしそれはすぐに外れて消えてしまった。
怪訝な顔をしてスクリーンを見つめる紫音に、
ツァン・ディレはどこか得意げに説明を始めた。
「『エレキューブ』は雷族モンスターにのみ装備する事ができる装備カード。

墓地の雷族モンスターの数×１００ポイント攻撃力をあげる。
でもボクの墓地には『エレキトンボ』一体しかモンスターがいないから、
このカードの第二の効果を発動したのよ。
その効果はこのカードを墓地に送ることで、
自分フィールド上に表側表示で存在する雷族モンスター一体の攻撃力を、
１０００ポイント上昇させる」
ツァン・ディレが説明を追えた瞬間、
『エレキリン』のまとう雷が激しくなった。
『エレキリン』
ＡＴＫ　１２００→２２００
その攻撃力の高さに、紫音は息を飲んだ。
こちらのフィールドにはＡＴＫ　２２５０の『スター・ボーイ』がいたが、
『エレキリン』そして『エレキジ』の効果の前ではそんなものは関係がない。
ツァン・ディレは口許を引き結ぶと、
勇ましいという言葉が似合う表情でバトルフェイズへの移行を宣言した。
「バトル！

『エレキリン』の効果を使って、
プレイヤーにダイレクトアタック！」

そう。

『エレキリン』および『エレキジ』の効果は
フィールド上のモンスターの有無に関わらず、
『相手にダイレクトアタックができる』ことである。

さらに『エレキリン』が直接攻撃によって相手、
つまり紫音のライフポイントに戦闘ダメージを与えた時、
このターンのエンドフェイズ時まで紫音は
魔法、罠、効果モンスターの効果を発動する事ができなくなる
というおまけつきである。

二体の合計　３２００ポイントの戦闘ダメージ。

考えただけでもぞっとする。

紫音はデュエルディスクのボタンを押して、
リバースカードをオープンさせた。

「速攻魔法『月の書』

フィールド上の表側表示モンスター一体を裏側守備表示にする。

対象は『エレキリン』！」

紫音が宣言すると、

こちらに向かって突進して来ていた
『エレキリン』の姿がふ、とかき消えた。

相手の妨害がなかったことに、
紫音はほっと息をついた。

エレキリンが裏側守備表示になったことにより、
先程の『エレキューブ』の効果もなくなったはずだ。

ツァン・ディレはうぐ、と悔しそうに顔を歪めたが、
気を取り直して『エレキジ』でダイレクトアタックを仕掛けて来た。

神無瀬　紫音
ＬＰ　８０００→７０００

「『エレキジ』の効果発動。

このカードが直接攻撃によって相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、
フィールド上に表側表示で存在するモンスター一体を選択して、
このターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。

『スター・ボーイ』を除外」

紫音のフィールドの『スター・ボーイ』の輪郭が
ぐにゃりと歪み消え去った。

「バトルフェイズ終了。

メインフェイズ２で裏側守備表示になった『エレキリン』を

反転召喚させてターンエンド。

エンドフェイズ時、除外されたスターボーイはフィールドに戻る」

やや不満そうにこちらを見るツァン・ディレから
目をそらして紫音はカードをドローした。

自らの手札とドローしたカードを見比べながら、
紫音は相手フィールド上のモンスターの属性を再度確認して、
次の行動をためらった。

こちらは攻撃力で上回ってこそいるが、
一番の問題は彼女のフィールドに並んでいるモンスターが
『光属性』で統一されていることだ。

彼女の手札を見ても三枚とやや多く、
その中に前に紫音も使った
『オネスト』を抱えている可能性は十分にある。

できることなら戦闘以外の方法で
相手モンスターを除去したい所である。

だがここで足踏みをしていても仕方がないことはわかっていた。

そして何より人間諦めが肝心である。

腹をくくった紫音は顔を上げるとフェイズの移行を宣言した。

「スタンバイ、メイン、バトルフェイズに入ります。
『スター・ボーイ』で『エレキリン』に攻撃」
『オネスト』は確かに怖いが、
モンスターが減らない事には状況は変わらない。
それどころかさらに悪化するのが目に見えている。
紫音の号令で『スター・ボーイ』が『エレキリン』に襲いかかった。
「させないよ！
罠発動、『くず鉄のかかし』
相手モンスター一体の攻撃を無効にする」
『エレキリン』の前に立ちはだかったかかしにより、
『スター・ボーイ』の攻撃は『エレキリン』まで届かない。
「発動後、『くず鉄のかかし』は墓地に送らず、
そのままセットする」
ある意味オネストよりも厄介なかわされ方をしたな、
と紫音は唇を噛みつつメインフェイズへ移行した。
「モンスターをセット、カードを一枚セットして、
ターンエンドです」
「ボクのターン、ドロー」

ツァン・ディレは先程の紫音と同じように
ドローフェイズ後すぐにバトルフェイズに突入する。

「『エレキリン』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

再びせまる『エレキリン』に、
紫音はセットしたカードをリバースさせた。

「罠発動、『魔法の筒＜マジック・シリンダー＞』

相手モンスター一体の攻撃を無効にし、
そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える」

紫音の前に現れた巨大な筒が突進して来た『エレキリン』を飲み込むと、
砲台のように反転してツァン・ディレに向けて『エレキリン』を発射した。

弧を描いて迫る『エレキリン』が、
ツァン・ディレをすり抜けてぬかるんだ地面に突っ込んだ。

「きゃあ！」

ばしゃ、と盛大に跳ねたソリッドビジョンの泥しぶきから
ツァン・ディレは顔を腕でかばった。

ツァン・ディレ
ＬＰ　８０００→６８００

顔を上げた彼女は羞恥に顔を真っ赤に染めて、
恐ろしい顔でスクリーン越しに紫音を睨んだ。

「よくもやったわね！

『エレキジ』で、ダイレクトアタック！

『エレキジ』の効果でエンドフェイズまで『スター・ボーイ』を除外」

彼女が叫ぶと同時に『エレキジ』が同じく紫音へ突進する。

神無瀬　紫音
ＬＰ　７０００→６０００

「そうやって余裕そうにしていられるのも今の内だよ！

がんばってしのいでるみたいだけど、
一杯一杯なのが見え見えなんだから」

ターンエンドした彼女の瞳を見据えて、
なかなか痛い所をついてくるな、などと思いながら、
紫音はデッキに指をかけた。

紫音に比べてツァン・ディレは
ボードアドバンテージもハンドアドバンテージも、
全く失っていない。

何故なら紫音がこれまで使ったカードが
相手から直接アドバンテージを取るカードではなく、

すべてその場しのぎのカードだったからだ。

しかし。

「でも、一杯一杯なのはお互いさまじゃないかな」

ドローしたカードと彼女の手札を見つめて、

紫音はぽつりとつぶやいた。

To be continued…

Duel 2 ～The latter half

紫音は彼女の手札の変動を、
ずっと不思議だと思っていた。

彼女が出した『エレキ』というのモンスターの
ダイレクトアタック能力は確かに強力だ。

だがそれはあくまで自分のターンの話である。

素の最大攻撃力が１２００というステータスの貧弱さを考えれば、
相手からの攻撃に備えてもっと伏せカードが増えてもいいはずだ。

そして今、ツァン・ディレの手札には
まず『オネスト』はないと考えていい。

もしも手札に『オネスト』があるなら、
先の戦闘でライフアドバンテージを稼ぐためにも
そちらを優先させるはず、
わざわざ伏せカードを晒す必要はない。

さらに先程のターンではモンスターをセットすらしなかった。

ここから推測できることは二つ。

彼女が現在持っているのあの四枚の手札には
モンスターは一枚もなく、
セットしても意味のない速攻魔法以外の魔法カードである。

早い話が手札事故を起こしている可能性が高いということだ。
ならば今のこのフィールドを一掃してしまえば、
紫音にも勝機があるはず。
紫音は手札から一枚のカードを抜き取ると、
デュエルディスクにセットした。
「永続魔法『縮退回路』発動。
そしてモンスターを反転召喚」
紫音のフィールドが光り、
反転させることによって正規に召喚されたモンスターが現れる。
それは紫色の毛並みをしたペンギンだった。
肩には赤いショルダーガードをつけている。
それは、くわあ、と可愛らしく鳴いて、
小さな剣を構えた。
『ペンギン・ソルジャー』
☆×２　水族　水属性
ＡＴＫ　７５０→１９５０→２４５０
「リバースされたことにより、
『ペンギン・ソルジャー』の効果が発動。
フィールド上のモンスターカードを二枚まで

持ち主の手札に戻すことができる。
戻すのは『エレキリン』と『エレキジ』。
そしてこの時『縮退回路』の効果発動。
フィールド上から手札に戻るモンスターカードは、
手札に戻らずゲームから除外される」
「え？！ちょっ…」
驚き慌てるツァン・ディレの前で、
ニ体のモンスターの輪郭が歪み消えていく。
ぽかん、とした彼女を置いて、
紫音は自ターンの処理を進めた。
「チューナーモンスター『氷結界の術者』を召喚。
レベル２『氷結界の術者』に、レベル２『スター・ボーイ』と
レベル２『ペンギン・ソルジャー』をチューニング。
我は汝　汝は我
我が心の海にたゆたいし永劫の氷河よ
凍れる月満つる今　契約に従いて現れよ！
シンクロ召喚！

風花(かざばな)散らせ！

『氷結界の龍　ブリューナク』」

勢いに任せて紫音は、
前に龍亞と決めた『カッコイイセリフ』を詠唱した。
これについて教師を含め周りは何も言わなかったが、
内心少し気恥ずかしかった。

『氷結界の龍　ブリューナク』
☆×６　海竜族　水属性　シンクロモンスター
ＡＴＫ　２３００

光の中から現れた氷の龍は、
湿地草原の雨を雪に変えながら長い体躯をうねらせていた。

「『氷結界の龍　ブリューナク』の効果により
手札の『裏ガエル』を捨て、『くず鉄のかかし』を手札に戻す。

フラッター・フレーク！」

凍れる龍がその首をもたげると、
白い靄が立ちこめた。

やがてそれが晴れると、

ツァン・ディレの伏せカード『くず鉄のかかし』は
フィールドから消えていた。

この効果を使ったことによりこちらの手札は尽きてしまったが、
相手のフィールドはがら空きだ。

紫音はバトルフェイズに移行した。

「『氷結界の龍　ブリューナク』で、ダイレクトアタック。
スノー・ミストラル！」

氷の龍はばさりと翼をはためかせると、
雨粒を霰に変えながらその凍える息を吹きかけた。

ツァン・ディレ
ＬＰ　６８００→４５００

「僕はこのままターンエンドします」

「ボクのターン、ドロー」

紫音が宣言するとツァン・ディレは険しい顔つきで、
しかし何かを考えるようにこちらを伺いつつフェイズをすすめた。

「『エレキツツキ』を召喚」

ツァン・ディレのフィールドに、
長いくちばしを持った鳥が現れた。

その鳥は草原の中に一本だけ生えた木の枝に止まると、
激しく頭を動かして幹をつついた。

『エレキツツキ』
☆×３　雷族　光属性
ＡＴＫ　１０００

「魔法カード『エレキー』を発動。

自分フィールド上に表側表示で存在する
「エレキ」と名のついたモンスターは、
このターン相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

さらに装備魔法『エレキューブ』を装備し、
墓地に送って『エレキツツキ』の攻撃力を１０００ポイントアップ
させる」

『エレキツツキ』にキューブのエネルギーが吸収されていく。

『エレキツツキ』
ＡＴＫ　１０００→２０００

「バトルフェイズ。

『エレキツツキ』は自身の効果のより、
二回攻撃することができる。

『エレキツツキ』で相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

ばさばさと羽ばたく音を響かせて、
『エレキツツキ』は紫音と距離をつめると、
目にも止まらぬ早さでその鋭いくちばしを二度振り下ろした。

神無瀬　紫音
ＬＰ　６０００→４０００→２０００

紫音は奥歯を噛み締めて、
自分のライフポイントを睨んだ。

なんと一気に４０００ものライフポイントが飛んでしまった。

これでは彼女が何もせずとももの数ターンで
『縮退回路』にライフポイントを吸われて敗北が決定してしまう。

救いは『エレキツツキ』自身が
ダイレクトアタックする力を持っておらず、
『氷結界の龍　ブリューナク』の方が攻撃力で勝っている点か。

だがそれも彼女がダイレクトアタックできるモンスターか、
魔法カード『エレキー』を引くか、
『氷結界の龍　ブリューナク』を除去するか、
いずれかを行えばあっさり瓦解するだろう。

「カードを二枚伏せてターンエンド」

彼女の宣言と同時に紫音はカードをドローした。

一体どんなカードを引けばいいのかさっぱりわからない。

手札は０枚、何を引けばこの状況を打開できる？

その迷いが伝わったのか、
ドローしたカードはモンスターですらなかった。

そしてスタンバイフェイズ、
紫音は『縮退回路』のコストにより５００ポイントのライフを削られる。

神無瀬　紫音
ＬＰ　２０００→１５００

そろそろライフポイントの後がない。

紫音は表情を消して考える。

相手の伏せは一枚は確実に『くず鉄のかかし』だが、
もう一枚は正体のわからないリバースカード。

頼みの綱は『氷結界の龍　ブリューナク』の効果だが、
手札がなければ意味はないし、
もう一枚のリバースカードで
モンスターの効果そのものを封じてくる可能性がある。

できれば安全に取り除きたいのだが…。

「このままターンエンド」

ツァン・ディレがターンを進める。

彼女が毎ターンドローしたカードによって、
紫音の命運が決まると言っても過言はない。
彼女の引いたカードは果たして。

ツァン・ディレは引いた手札をじっと見ている。
「……ボクはモンスターをセットして、ターンエンド」

どうやらどちらも膠着しているのは同じらしい。
おそらくこの状態が解けたときが、
決着の時となるのだろう。

デッキに指をかける。
せめてモンスターカードを引きたい所だ。
紫音は意識を集中させた。

「僕のターン」
腕を大きく振って、

紫音はカードを引き抜くようにドローした。
その瞬間、どうしてか体が軽くなったような錯覚を覚えた。
しかしドローしたカードを見た瞬間、
それは錯覚などではなかったことを確信した。

ついに紫音は、
この状況を一気に打開するカードを手にしたのだった。

『ファイナルターン』

土曜日に見たアニメのキャラクターのセリフが、
脳裏をよぎった。

「スタンバイフェイズ、
『縮退回路』の維持コスト５００が支払われる」

神無瀬　紫音
ＬＰ　１５００→１０００

「メインフェイズ、
手札から通常魔法『ハリケーン』を発動。
フィールド上の魔法、罠カードを全て持ち主の手札に戻す」

突風が吹いて、フィールドに存在していた魔法、罠カードが
それぞれの手札に吸い込まれていく。

これで『氷結界の龍　ブリューナク』の効果のコストはそろった。

「『氷結界の龍　ブリューナク』の効果発動。

手札に戻った『縮退回路』を墓地に捨て、
『エレキツツキ』をバウンス。

フラッター・フレーク！」

ツァン・ディレは怪訝な顔をして紫音を見た。

彼女の疑問も最もだ。

『氷結界の龍　ブリューナク』の攻撃力だけでは、
『エレキツツキ』を倒し、３００ポイントのダメージを与えるのが
精一杯。

次のターン『くず鉄のかかし』を張り直し、
ダイレクトアタックのできる『エレキリン』か
『エレキジ』を召喚すればこちらの負けだ。

だがそれも次のターンが回ってくればの話である。

「手札から通常魔法『シンクロキャンセル』を発動！

フィールド上に表側表示で存在する
シンクロモンスター一体をエクストラデッキに戻し、
エクストラデッキに戻したこのモンスターのシンクロ召喚に使用した
モンスター一組を墓地から自分フィールド上に特殊召喚する！

僕は自分フィールド上の『氷結界の龍　ブリューナク』を
エクストラデッキに戻し、
墓地からシンクロに使用した『氷結界の術者』、
『ペンギン・ソルジャー』、『スター・ボーイ』を特殊召喚」

「なんですって！？」

そう、これこそが紫音の切り札。

もともとこのカードは自分のモンスターではなく、
相手のシンクロモンスターを潰す意味でデッキにピン投入してあった
ものだ。

このデッキの弱点は
バウンス効果がリバースでしか発動しないという点と、
こちらの『縮退回路』を相手にも利用させてしまう点である。

従って必然的にそういったことができ、
かつ出しやすいシンクロモンスターが仮想敵になってくる。

具体例をあげるなら、
自分と相手フィールドのカードを
一枚ずつ割ることのできる効果を持った『スクラップ・ドラゴン』
や、

同じ『氷結界の龍　ブリューナク』、
シンクロ召喚成功時に相手フィールド上に存在するカードを
３枚までバウンスすることのできる『ミスト・ウォーム』だろうか。

『シンクロキャンセル』は速攻魔法でこそないが、
相手のシンクロモンスターに使っても
相手の墓地のシンクロ素材は特殊召喚されない、とされている。

つまり相手に使えば確実な一、一交換ができる優秀なカードになり、
自らに使えばこういったことも可能となるのだ。

光の塊に変わった『氷結界の龍　ブリューナク』から、
三体のモンスターが紫音のフィールドに舞い戻った。

『スター・ボーイ』
☆×２　水族　水属性
ＡＴＫ　５５０

『ペンギン・ソルジャー』
☆×２　水族　水属性
ＡＴＫ　７５０

『氷結界の術者』
☆×２　水族　水属性
ＡＴＫ　１３００

「そしてフィールド魔法『湿地草原』を発動。

これにより、レベル２以下の水族、水属性モンスターの攻撃力は１２００アップ、
さらに『スター・ボーイ』の効果と合わせて１７００アップする」

『スター・ボーイ』
☆×２　水族　水属性
ＡＴＫ　５５０→１０５０→２２５０

『ペンギン・ソルジャー』
☆×２　水族　水属性
ＡＴＫ　７５０→１２５０→２４５０

『氷結界の術者』
☆×２　水族　水属性
ＡＴＫ　１３００→１８００→３０００

「バトルフェイズに移行。

『スター・ボーイ』でセットモンスターを攻撃！」

『スター・ボーイ』の長い触手がセットモンスターを捕らえ、
その姿を浮かび上がらせた。

『スター・ボーイ』
ＡＴＫ　２２５０
←
『エレキツネザル』
ＤＥＦ　１００

このカードが相手によって破壊された場合、

次の相手のターンのバトルフェイズを行わせない効果だ。
だが最早、彼女にターンは回ってこない。
『スター・ボーイ』が『エレキツネザル』を撃破すると、
しましまの尻尾が特徴的な『エレキツネザル』は
悲しそうな声を残して消え去った。

「『ペンギン・ソルジャー』、
『氷結界の術者』でダイレクトアタック！」

ニ体のモンスターが守る術のないツァン・ディレに襲いかかる。

ツァン・ディレ
ＬＰ　４５００→２０５０→０

ピーという乾いた音が、
決着がついたことを両者に知らせた。

デュエルを見届けた教師の声がこだまする。

「ここまで！

以上でデッキ構築論課題査定デュエル、
神無瀬　紫音ならびにツァン・ディレの審査を終了する」

教師の終了宣言を聞き終えた紫音たちは
同時にデュエルディスクを外した。

見学していた生徒による盛大な拍手を受けて、
紫音はツァン・ディレと向かい合った。
紫音が挨拶すると、ツァン・ディレはふん、と鼻をならして、
「偶然とはいえ、たいしたものじゃない。
まあ、次はこうはいかないけどね」
デュエル前よりもどこか穏やかに言う彼女に
紫音がありがとう、と言うと、
ツァン・ディレははっと気づいて頬を染めた。
「な…か、勘違いしないでよね。
ボクはあんたを認めたってわけじゃないんだから！
で、でも……今後はどうしてもって言うんだったら、
ボクが暇な時だけ相手してあげないこともないけど」
慌てて目をそらしてそう言う彼女に、
紫音は一瞬きょとんとしたが
表情を戻して、今度是非、とだけ言っておいた。
そんな紫音の言葉にツァン・ディレはちらりとこちらに目をむけると、
ほんの一瞬だけ笑ったがすぐに元の表情に戻して
恥ずかしそうに背を向けたのだった。

紫音のデュエリストとしての評判が、
『全くの無名』から『クラスで噂される』程度になった。

Strength　Rank2

２０１０年６月２日　水曜日

先週末、生徒会で話し合われた新企画は、
千尋の希望通り『合唱コンクール』となり、
本日６限目の高等部全校集会にてその告知を行った。
生徒の反応は紫音の予想通り大半が面倒だといったものだったが、
集会後の自由曲選びの際のクラスメイト達は
何だかんだ言って楽しそうにしていた。

役目を終えた紫音は後の事をクラス委員に任せると、
机に頬杖をついてうつらうつらと夢の世界に旅立ったのであった。

２０１０年６月３日　木曜日

梅雨の晴れ間となった今日は、
８月の平均気温を軽く越す記録的な猛暑となった。
刺すようなじりじりとした陽光が容赦なく注がれる大地は、
昨日までの雨で地中に溜まった水分を根こそぎ蒸発させたせいで、

カラッとした気候のわりに肌にまとわりつくような蒸し暑さを感じさせた。
衣替えの移行猶予期間に突入していたデュエルアカデミアでは、
紫音を含めほとんど全ての生徒が夏の装いをしていた。

重い上着を脱いで身軽になった体は、
しかし昨日より動かすのが億劫に感じる。
外に出た紫音は、校舎の中との明度の差に瞳をすがめた。

完全に真夏の顔をした太陽は、
十七時を過ぎても一向にその輝きを衰えさせる気配を見せず
目を閉じてもなお、瞼の裏にその姿を白く焼き付けた。
ただ立っているだけでも肌の上にじわりと浮いてくる汗を拭いつつ、
紫音は意を決して校舎の影から日の当たる道へと足を踏み出した。

紫音が待ち合わせの喫茶店に着いたのは、
デュエルアカデミアを後にしてから約３０分後のことだった。
前回と同じ席で、
しかし立場は逆に紫音を待っていた龍可は

こちらを見つけると顔をほころばせた。
遅れる旨は事前にメールしていたが、
クラスメイトの岳羽ゆかりによれば
男はどんな状況にあろうとも女性を待たせてはならないらしい。
その教えに則って紫音が遅れた事を念入りに謝ると、
龍可はふるふると首を横に振った。
同時に左右に括った髪の束が、
まるで蝶の触覚のように揺れる。
「そんなに謝らなくても大丈夫よ。
それより、近くに美味しいアイスクリーム屋さんがあるの。
一緒に行ってくれる？」
龍可はにっこり笑って、紫音の手を引いた。
子どもながらに気を使う龍可の姿に
紫音は自分の不甲斐なさにそっとため息をついて
時間の許す限り彼女に付き合おうと心に決めたのだった。

龍可のオススメのアイスを食べた後、
紫音は珍しくはしゃいだ様子であちらこちらを転々とする龍可の行く先へ、
ただひたすらついて歩いた。

普段は兄に隠れて大人しい印象の彼女であったが、
今日の様子を見るとあながちそうでもないようだ。
そのことにどこか安心しつつ、
紫音は笑顔で手を振る龍可を小走りで追いかけた。

夏の日差しを全身で浴びつつ街を歩く龍可は
あどけない表情を紫音に向けて
学校のことや兄のことなどを話していたが、

「……あ！」

小さく声を上げた龍可は唐突に、
何かに心を奪われたように一点を見つめて
道の真ん中で唐突に立ち止まった。

紫音はそんな龍可の様子に首を傾げて
彼女の視線を追って左へと目を向けた。

龍可の視線を釘付けにしたそれは
ゲームセンターだった。

やや薄暗い店内は派手な色のネオンがちらつき、
様々なゲーム機の発する音が店の外まではっきりと聞こえてくる。

もの珍しそうにじっと見つめる龍可に、
紫音が入ってみる？と問うと
彼女は驚いて弾かれたようにこちらを見た。

「……いいの？」

何故か疑問形のその言葉に紫音が不思議そうに見返すと、
龍可はしまった、というようにうつむいた。

紫音がうつむくその訳を尋ねると、
彼女はどこか具合が悪そうに話し始めた。

「あ、あのね。

龍亞は友達とよく遊びに来てるみたいなんだけど、
私は入っちゃだめ、って言われてるの。

あぶないから、って」

悲しそうにしゅんとする龍可に、
紫音は口許に手を当てて考えた。

確かにゲームセンターに入り浸る者の中には邪な考えを持つ若者や、
スリなどの犯罪に手を染める輩もいる。

だが基本的には純粋にゲームを楽しみたい人々が大半ではあるし、
最近は１９時以降の未成年の入店の規制や
防犯などがしっかりしている店も増えてきているため、
あながちそうとも言えないとは思うのだが。

紫音はもじもじとしている龍可の前に立つと、
す、と手を差し伸べた。

目を丸くして差し出された手とこちらを交互に見る龍可に、
紫音はそっと彼女の手をとると穏やかに微笑んで言った。

「行きたいところに行けばいい。
今日は僕もついてるから、大丈夫」

紫音がそう声をかけると、
龍可はしばし気持ちを落ち着かせるように目を閉じていたが、
やがて先程までのように屈託なく笑ってみせた。

「うん、そうね。
今日は私ひとりじゃなくて、紫音も一緒だもんね」
行きましょ、と手を引く龍可に連れられて、
紫音は久々のゲームセンターへと足を運んだのだった。

日の光がようやく衰えてきた十八時半過ぎ、
紫音と龍可はゲームセンターを後にした。
ゲームセンターを出てからというもの、
龍可はいつになくご満悦な顔をしていた。
今は休憩がてら寄った公園のベンチに座って
足をぶらぶらさせている。

紫音が自販機で購入したジュースを差し出すと、
龍可は満面の笑みで受け取って勢い良くのどに流し込んだ。
冷房の利いた店内は空気が乾燥している為、
汗は出ずとも特にのどが渇くものだ。
十分に水分を補給したらしい龍可は、
ようやく落ち着いたというように一息ついた。
「それにしても、紫音は本当に色んなゲームができるのね」
少し意外かもと言う龍可に、
紫音は去年順平に誘われて足しげく通ったゲームセンターのことを話した。
すると龍可は妙に納得したようにうなずいて、
「紫音の周りには色んなお友達がいるのね」
楽しそうに言って龍可は、
鞄から先程撮影したプリクラを取り出した。
その中には緊張で体を強ばらせた龍可と、
妙に写りのいい紫音が並んでいる。
龍可は自分を指して変な顔、
と言って苦笑を漏らした。
「紫音ってとっても写真写りが綺麗ね。

何かコツでもあるの？」
不思議そう聞いてくる龍可に、
紫音は短く慣れだよ、と答えた。
……本当はゆかりに誘われて撮った時に
幽霊みたいと言われたのがショックで、
バイト帰りにゲームセンターでひたすら研鑽を積んだ末の賜物なのだが、
そこは伏せておいた。
すると龍可はうらやましそうな表情をして、
ぽつりとつぶやいた。
「いつも龍亜と一緒だったから、
龍亞の興味のないこういうことをしたのは初めてだったの」
だからとても楽しかったわ、
と龍可は終わり行く一日を残念そうに見つめた。
ゆっくりと薄暗くなっていく世界と同時に
表情を翳らせる龍可に、
紫音は無意識の内にまた来よう、と声をかけていた。
紫音の言葉に龍可はゲームセンターに誘った時と同じように
驚いてこちらを見たが、
やがて嬉しそうに表情を緩めた。
「うん、また一緒に来ようね」

そう言うと元気を取り戻したように
ぴょんと勢い良く地面に降り立って紫音に向かい合った。

「そろそろ帰らなくちゃ。

龍亞も心配するだろうし」

そう笑って龍可は紫音に手を差し出した。

紫音はベンチから立ち上がって彼女の小さな手を取ると、
並んで帰路についた。

龍可の悩みを知って、
また少し彼女のことを理解した気がした。

8

２０１０年６月４日　金曜日

本日から始まった合唱コンクールの練習で、
放課後、紫音のクラスは音楽室に集められた。

始めは気乗りしない様子だったクラスメイトたちも、
この頃には下級生や他のクラスにつられて
次第にやる気をみせるようになっていた。

他の生徒たちとともに音楽室に入った紫音は
事前に受け取っていた伴奏用の楽譜をピアノの譜面台に並べた。

伴奏を希望したはいいが、
最後に演奏した日からは随分とブランクがある。

まだ指が動くだろうか？と多少の不安を抱えながらも、
紫音は鍵盤に指を這わせた。

試しにハノン（指の運動練習）を弾いてみる。

すると自分の想像以上に硬直して動かない指に、
紫音は衝撃を受けた。

特に利き手ではない左手の劣化が激しく、
指先にうまく力が入らない。

指こそ完全に独立しているものの、
これでは初心者に毛が生えた程度である。

しかし代役も居ない以上、
今更伴奏を降りるわけにはいかない。

そんな紫音の内心の葛藤に周囲が気づくはずもなく、
クラスメイトたちは皆、教師が来るまでのんびりと談笑して過ごしていた。

とりあえずまずは今日を乗り切らなければ。

紫音は焦りを無理矢理腹の底に押さえ込んで、
練習が始まるまでハノンとツェルニーの１００番を
ひたすら繰り返し練習していた。

幸い今日の練習はクラスの声質調査とパート分けをしてお開きとなった。

当面は各パートのみで組まれた練習メニューに、
紫音はほっと胸をなでおろしていた。

紫音は絶対音感などといった特別なスキルは持ち合わせていないが、
普通程度には音がわかり、
譜面も読めるためパート練習につき合うには問題がない。

だがそれだけでは伴奏者は勤まらない。

今後は部屋にキーボードでも買って練習しようか、
などと考えつつ残りの時間を伴奏の練習に費やしたのだった。

曲の前半部を大まかに掴んだ所で、
紫音は練習を終了して寮に帰った。

その途中、珍しく遊星からメールが届いた。

６／４土１９：４９
　不動遊星
件（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
ーーーーーーーーーー

唐突にすまない。

明日の昼、
予定を空けられないだろ
うか。

実は『アイギス』という
少女について、
不審な点が出てきたんだ。

例の事件に関係している

かはまだわからないが、
明日までにもう少し
詳しく調べてみようと思
う。

学校の授業や用事が終わ
った後で構わないから、
ＰＯＰＰＯ　ＴＩＭＥのガレージ
まで来て欲しい。

緊張感漂うその内容に、
紫音は口許を引き締めるとメールを返した。

返信メールの内容は語るまでもないだろう。

ざあ、と吹いた湿った風に、
紫音は暴れる髪を押さえて空を仰いだ。

近づいた夜闇の向こうに見える厚い黒雲が、
何かの予兆のように音もなく不気味に近づいていた。

２０１０年６月５日　土曜日

天からバケツをひっくり返したような雨が、
ざばざばと降り注いでいる。

窓を伝う雨粒は最早『粒』状ではなく、
ホースで直接水をかけているかのように
凄まじい量と早さで地面へと流れ落ちていた。

そんな豪雨の中、紫音が遊星たちの住むガレージについた時には、
すでに全員が集まっていた。

全く役に立っていない傘を下ろして
全身ずぶぬれで玄関に立ち尽くしている紫音に、
二階からクロウがタオルを投げた。

「シャワーでも浴びてくるか？

何だったら、風呂でもわかすぜ」

気さくに声をかけてくるクロウに、
キャッチしたタオルで髪の毛の水分を拭き取りながら
紫音はその申し出を丁重に断った。

今日はそんな悠長なことをしている時間はないだろう。

「だがそのままでは風邪を引くぞ。

着替えくらいはした方がいい」

さらに横手からかかった声にタオルを被ったまま、

紫音はのそりとした動作でそちらに顔を向けた。
浅く椅子に腰掛けた遊星は、
パソコンを操作する手を止めずに
視線だけをこちらに投げかける。
「明日は学校も休みだろう。
洗濯機に入れておいてくれれば、
後で洗っておく」
「着替えは…そうだな。
お前の身長なら遊星の服でちょうどいいだろ」
な、とクロウが言うと、
遊星もうなずいて着替えを取りに部屋を出て行った。
紫音は幼なじみ同士の隙のない会話に割って入ることなど到底できず、
結局断る機会を完全に逸してしまった。
そんなこちらの内心などお見通しだったらしいクロウは、
階段を下りて呆然とする紫音の肩を叩いた。
「まー、そんな遠慮すんなよ。
時間はたっぷりあんだからな、
焦ったってしょうがねえ。

着替えてさっぱりしてからゆっくり話し合おうぜ。
それにウチの洗濯機は遊星のお手製だから、
そこらのコインランドリーの洗濯機なんかより高性能だぜ？」
にやり、と笑うクロウに、
紫音は敵わないなと肩をすくめた。

窓を叩く風と雨がさらに激しさを増した頃。
集まったメンバーは、前回遊星に招かれた際に通された
二階のリビングルームに集合した。
妙にぴったりな遊星のジーンズとTシャツをまとった紫音を見て、
クロウなどは尻上がりな口笛を吹いたが、
紫音が適当な椅子に腰を下ろすと
他のメンバー同様一切の表情をかき消した。
そろったようだな、と遊星は全員の顔を確認すると、
書類を片手にいよいよ話し始めた。
「前に巌戸台でみんなと集まった日から、
言っていた通りアイギスという少女についてさらに調べてみた。
そしてわかったことがこれだ」
言って遊星は持っていた書類をばさりと広げた。

紫音を含めた仲間たちは一斉に机に並べられたその書類をのぞき込む。

それはアイギスの戸籍抄本と住民票だった。

どうやって手に入れたのかは知れないが、
そこにはアイギスの生年月日、年齢、性別などを始め、
出生その他まで細かく記載されている。

紫音はどこか後ろめたい思いでそれに目を通していたが、
特に不審な点は見当たらなかった。

これが一体何だというのだろう。

紫音がちらりと他のメンバーを見ると、
彼らも同様の表情を浮かべている。

「どういうことだ、遊星。

さっさと話を続けたらどうなんだ！」

相変わらずの気の短さでイライラと声を荒げるジャックに、
しかし遊星は慣れているのか落ち着いた調子で、

「その戸籍は、よくできてはいるが全くの偽物だ」

こともなげに言い放つ彼に、
一同は目と口をOの字型に広げた。

「一体どういうことなの？」
いち早く立ち直ったアキが問うと、
遊星はついに結論を口にした。

「アイギスという『人間』は実在しない。
彼女の戸籍なんかどこにもない、そもそも用意されていないんだ」

「んなバカな！
今のこの日本においてそんなことあり得るかよ！」
泡を食って叫ぶクロウに、遊星はじっと黙ったままだ。
全員が混乱の渦に飲み込まれる中、
しかし紫音だけはずっと胸の中にあった違和感が
解消されたように穏やかな心持ちをしていた。
紫音がふと遊星を見ると、
彼もこちらを見つめていた。
それはまるで紫音自身を試しているようであり、
また全幅の信頼を寄せているかのようにも見える複雑なものだった。
紫音は遊星に向き合うと今の視線のやりとりで

最早確信に変わった一つの疑問をぶつけた。

「アイギスという『人間』は実在しない、

ということはもしかして、

彼女は『人間』じゃない『何か』、

ということですか？」

紫音の言葉に、場が一斉に静まり返った。

それは驚きか戸惑いか、それとも呆れか、

はたまた単に思考がついていけていない所以によるものなのかは

紫音にはわからなかった。

だが少なくとも、遊星は冷静であることは間違いなかった。

遊星は一聞には馬鹿馬鹿しい紫音のその考えに、

ゆっくりと、しかし確かにうなずいた。

「そうだ。

彼女は『人間』じゃない。
対『人間』戦ではない、ロボット兵器であることが判明した」
にわかには信じがたいその事実に騒然とするメンバーに背を向けた
遊星は、
窓際のパソコンを操作して一枚の画像をディスプレイに映し出した。
それはどうやら何かの文書らしい。
らしい、というのは、
その文書のほとんどが意味のわからない記号と数字の羅列となって
おり、
日本語として読める箇所がまばらだったからだ。
内容も日常的にはまず使わないような単語が多く、
謎の多い文章となっているが…。

「闇市場で出回っていた文書だ。
暗号化されていてほとんどの箇所がまだ解読できていないが、
重要なのはこの部分だ」
遊星がディスプレイを指し示す。
それは文書の一番下、
どこかの企業の名前が連ねられている部分だ。
遊星はこの兵器とやらを共同で開発している企業名だろう、と言う。
遊星が指したのはその中の一番上に載っている、大元の企業だ。

紫音はゆっくりと目で追っていた文章を飛ばして、
彼の指す企業を見た。

瞬間。

心臓が文字通り跳ね上がった。

目はきちんとそれを映しているのに、
頭が理解するのを拒んでいる。

言葉もなくして立ち尽くす紫音を、
遊星はただじっと見つめていた。

旧式だが明るいパソコンのディスプレイにくっきりと表示されている
、
その文字は

『桐条グループ』

と書かれていた。

「心当たりがあるんだな」

遊星の声がどこか遠くから聞こえるように、

耳の奥で反響していた。

暗い窓の外からフラッシュを焚いたような稲光が差した。

まるで今の紫音の心を表しているように、

空はどんどん荒れていった。

8（後書き）

いつもご愛読ありがとうございます。

さて、突然ですが

明日は新パックの発売日！

ですね。

作者も例によって何パックか買ってデッキの調整をしたいと思います！

明日はデュエル日和だ！！

話は変わりまして、
最近仕事がとても忙しくなり、
正直毎日更新するのが難しくなってきました。

そのため本日をもちまして、
この小説は不定期更新とさせていただきます。

誠に勝手な都合で大変申し訳ありませんが、
皆様のご理解とご協力のほどよろしくお願い致します。

歌音

9

２０１０年６月６日　日曜日

どこからともなく聞こえてくる、
小鳥のさえずりで目を覚ました。

厚いカーテンの隙間から差し込む
朝の光のまぶしさに目がくらむ。

紫音は寝ぼけ眼をこすりつつ
眠っていたソファから身を起こして、
ぼんやりと辺りを見回した。

自分の部屋ではない内装を見て、
ここはどこだろうと回らない頭で考え、
紫音はゆっくりと昨日の記憶を辿った。

浮上した事実はまさに衝撃的なものだった。

同級生の少女、アイギスが人間型の兵器で
それを開発したのがどこであろう、
あの巨大企業『桐条グループ』ーーー前生徒会長、桐条美鶴の実家
が取り仕切っている企業であり、
紫音の通う月光館学園の母体である。

銀色の銃の出所を追って、
とんでもない事実に辿り着いたものだ。

しかし今の所は『桐条グループ』がこの事件に
何らかの関わりを持っているだろうという推測だけで、
元凶であるという具体的な証拠は見つかっていない。

唯一の手がかりは複雑に暗号化されたあの文書だけだが…。

その後の話し合いでは大した進展もないうちに夜になり、
スコールのような集中豪雨に帰るに帰れなくなった紫音たちは
遊星たちのリビングを借りて一夜を明かすこととなった。

龍亞などはお泊まり会みたいだと喜んでいたが、
それまでの暗雲がたれこめるような話の後では
皆、無邪気に喜ぶ事ができなかった。

紫音はとりあえず手元にあった携帯を開いて時刻を確認した。

携帯右上に小さく表示された時刻は、
午前７時４８分を指している。

隣のソファでは双子たちが向かい合って毛布の中にくるまり、
まだすやすやと寝息を立てていた。

ひっそりと静まり返ったリビングで、
紫音は彼らを起こさないようにそっと床に降り立った。

廊下の突き当たりのガレージへと出ると、
一階では既に起きていたらしい遊星が
コーヒーを片手にパソコンの画面を見つめていた。
紫音が階下の彼に声をかけると、
遊星はこちらを見上げて微かに笑った。
「おはよう、紫音。
昨日はよく眠れたか？」
紫音はその問いにうなずきながら、
階段を下りて青く光るディスプレイを覗き込んだ。
ディスプレイには複雑な計算式とコードが画面一杯に書込まれており、
ずっと見つめていると目がチカチカとしてくる。
「すまない。
あれから色々と試しているんだが、
まだ全文の解読には至っていないんだ」
「『あれから』……ですか？」
遊星の言葉に紫音は思わず声を漏らした。
見れば彼の顔には疲労がありありと現れており、
目の下には色素定着一歩手前の色濃いクマが浮かんでいた。

どうやら遊星はこの時間には『目を覚ましていた』のではなく、
この時間まで『起きていた』ようだ。

紫音の記憶が確かならば
昨夜は１９時くらいに話し合いを一段落させ、
その後遊星は『あの文書を調べてみる』と言って一人ガレージに下りていった。

その後眠りにつくまで紫音たちは一度も彼の姿を見ていない。

紫音が少し咎めるような視線を向けると、
遊星は居心地悪そうに身じろぎして苦笑する。

「つい没頭してしまってな。

そう睨まないでくれ、こういう性分なんだ」

だが、と遊星は別のウィンドウを開くと、
そこにはほとんど文章として
差し支えなく読めるほどになった『あの文書』があった。

「とりあえず、大まかに形にはなってきただろう」

そう言う遊星とともに、
紫音は画面を食い入るように眺めた。

専門用語が多く、肝心な部分が解読できていないため
不明瞭な部分がかなりあるものの、

それは何かの研究のレポートのようだった。
その内容の一部には、次のように記載されている。

『……＊＊年＊月＊

『＊＊＊』の探索の最中不慮の事故で溢れ出した＊＊＊の襲撃を受けた調査隊はしかし、
そこで初の『＊＊＊使い』としての自然覚醒者を目の当たりにすることによって、
その後の調査、研究は飛躍的な進歩をみせることとなった。
その後、初の『＊＊＊』を搭載した『機械乙女』の開発に成功したが、
飛び散った『＊＊＊』の最後の欠片回収の際にほとんどが大破し、
残ったのはラストナンバー『アイギス』だけとなった。

（中略）

＊＊年＊＊月

大いなる根源を封印した彼ら（ラストナンバーのアイギスを含む）は、
しかし事件解決後『＊＊＊使い』としての能力を失ってしまった。
どうやらこの能力は思春期の少年少女の中でも
特別な素養を持った者の能力であるらしいことが判明した。

２０１０年５月

突如何の前触れもなく、
再びこの現実世界に＊＊＊が溢れ出した。
その原因究明のためにも新たな『＊＊＊使い』か、
それに代わる能力を持ったものたちの研究と発見を急いでいた我々は、
ネオドミノシティ方面にてこの状況を打破できる反応をキャッチした。
現在『桐条』の所有地の中でネオドミノに最も近い
『辰巳ポートアイランド』付近にて＊＊＊の動向と
『＊＊＊使い』に代わる新たな能力者の調査を行っている』
紫音は再び現れた見知った単語に顔をしかめた。
『辰巳ポートアイランド』
それは紫音の通う『月光館学園』のある人工島である。
「だがやはり最も重要な単語だけはプロテクトが厳しくてな。
この文書も断片的なことしか書かれていないし、
これ以上の情報を得るにはやはり
この文書に書かれた研究所に直接行ってデータのコピーを取るしかなさそうだ」
「直接行くというのは……？」

紫音が問うと遊星は珍しく一瞬口ごもったが、
深く息を吸うと短く、だが重い言葉をつむいだ。

「ーーー強行突破だよ」

遊星の見せる固い意志に、
紫音はしばし言葉もなく彼を見つめた。

彼の瞳は星のように小さくも、強い輝きを放っていた。

紫音はその目からやはり目をそらしながら、

「遊星さんが正しいことだと思っているのなら何をしようと咎めませんし、
非難したりはしませんよ」

紫音ができるだけそっけない態度で突き放すように言うと、
彼は少しだけ安心したようにああ、と短く答えた。

その時だった。

「こんにちはー！

ジャックいる〜？」

朝のさわやかな空気を裂いて
底抜けに明るい声がガレージ内に響き渡った。

遊星と紫音が同時にそちらを向くと、
勢いよく扉を開けて入ってきた女性と目があった。
年の頃は２０代前半だろう。
長い黒髪を腰で揃え、
ジーンズにＴシャツとラフな格好をしている。
整って顔はしかし肝心の目元を牛乳瓶の底のように分厚い眼鏡が覆っていた。
「あ、遊星……と、お客さん？」
一段高いガレージの入り口を降りてこちらに近づいてくる彼女に、
紫音は無言で一つ会釈した。
「カーリー。
ジャックなら部屋に居ると思うが…、
こんな朝早くからどうしたんだ？」
不思議そうに問う遊星にカーリーと呼ばれた彼女は、
そうそう、と興奮したように話した。
「ジャックったら何と、履歴書の書き方を教えて欲しいって言うの！！
もうびっくりなんだからー！」

その言葉に思わず紫音と遊星は
お互い同じような苦笑いを浮かべていた。

しばし彼女はゆくゆくは
ジャックと結婚して夫婦デュエリストになる、
などといった自信の夢と言うよりは妄想を嬉しそうに語っていたが、
ふと思い出して、
大きめのショルダーバックから
パンパンに膨らんだノートを取り出した。

「そうそう。

昨日ジャックから『桐条グループ』の資料が欲しい、
って連絡があったの。

はい、これ。

カーリー渚、直筆のマル秘取材ネタスクラップ帳なんだから！」

遊星はカーリーからスクラップ帳を受け取ると、
断りを入れてぱらぱらとページを捲っていく。

スクラップ帳には桐条グループの年商や全関連企業の他に、
評判やその他事実かも定かではない噂話に至るまで細かに記されている。

紫音は遊星の肩越しにその内容を覗いていたが、
ふと見覚えのある写真にページをめくる彼を制止した。

「どうした？紫音」

合点の行かない様子の遊星に、
紫音はノートに張り付けられた写真を指してカーリーに問う。
「この写真はあなたが撮られたものなんですか？」
紫音の問いにカーリーは瓶底眼鏡を直しつつスクラップ帳に顔を寄せてじっとしていたが、
やがて思い出したようにぽん、と一つ手を打って、
「ああ、そうそう。
ネットで広がっている噂の真偽を体当たり取材！
って企画で、少し前に撮ったものの一つね。
一応『桐条グループ』の所有地の一つだし、
それ関連ってことでここに張ってみた……」
「ということは、あの噂は本当だったということですか」
言葉を遮って矢継ぎ早に問う紫音に、
カーリーは少し気圧され気味な様子だ。
だが今の紫音にそれに構っていられる余裕はない。
するとカーリーは突然きょろきょろと辺りを見回すと、
声のトーンを落として話し始めた。
「そうなんだから！

今年の４月頃から噂になり始めたらしいんだけど、
廃寮になったはずの月光館学園巌戸台分寮で深夜、
人魂みたいな明かりが窓から見えるらしいの。
付近に住んでいる人たちにも取材したんだけど、
ホントだって言ってたんだから！
他にも寮の窓に人影を見た、とかの情報もあがってて、
取材のためとはいえ怖くなって、
寮の外観だけぐるっと回って中には入ってないの。
あ、でも他の人には言わないでね！
編集長にはちゃんと取材した、って報告してて、
バレたりしたらクビになっちゃうんだから！」
絶対なんだから！、ずい、と近づいて念を押すカーリーに、
今度は紫音が一歩退きながら首を縦に振った。
紫音が遊星を見ると、
彼はスクラップ帳を机に置いて神妙な面持ちでうなずいた。
どうやら彼も紫音とカーリーとの会話で、
こちらの言いたいことを理解したようである。
「今度の水曜の夜に全員でその寮に行こう。
俺はそれまでに準備を進めておく。
紫音、道案内を頼めるか？」

遊星の言葉に紫音はわかりました、
と了承の意を示した。

一人話の見えないカーリーを置いて、
紫音と遊星はうなずき合った。

The Magician Rank2

２０１０年６月７日　月曜日

強い海風が自らの長めに切りそろえた前髪をばたばたと騒がせた。
夕日で赤く染まる波間はこちらに近づくほど影を増し、
赤と黒のグラデーションを作っている。
寄せては返す波が足下で弾けるたびに、
濃い潮の香りが鼻孔を満たした。
紫音は暴れる髪を押さえて対岸を見据えた。
一面をくず鉄と工場跡地が覆うここ、旧サテライト区から見る旧シティ区は、
まるで宝石箱の中をひっくり返したかのように
さまざまな彩りがごちゃごちゃと組合わさっているようだった。
今でこそダイダロスブリッジという巨大な架け橋でつながれているものの、
それまではきっと夢の国のように遠い世界だったに違いない。
紫音は雑然としたこの旧サテライトの地を踏みしめて、
そんなことを考えた。
「おーい！こっちだぜ」

背後からかかった声に、
紫音はその景色に背を向けて歩き出した。

紫音にとって悩みの種は尽きない。

昨日浮かび上がった事実も確かに重大だが、
それと同様に刻一刻と迫り来る合唱コンクールの伴奏の練習も、
日常を安穏に送るための重要事項の一つだった。

せめてブランクで固まってしまった指の練習だけでも毎日行いたい。

思い、立ち寄った大型電気店の電子楽器売り場には
キーボードや電子ピアノが大量に陳列してあった。

紫音はその中の幾つかを試してみたが、
やはりピアノとは違って軽い鍵盤のタッチに納得がいかず
結局購入にはいたらなかったのだった。

その後は街の楽器店のショーウィンドウを覗いたりしていたが、
ウィンドウショッピングなどといったものはやはり紫音の性に合わず、
すぐに飽きてしまう。

早くも目的を失ってあてもなくぶらぶらと街をさ迷っていた時、
聞き覚えのある呼び声が聞こえてきた。

最初は雑踏に紛れるほど遠くから響いていたその声は、

低いエンジン音と共に徐々にこちらに近づき、
やがて見覚えのあるDホイールが路上に停まった。
くい、とヘルメットのウィンドウを上げた彼は、
にかっと人懐っこい笑みを浮かべた。
「よう、紫音。
昨日ぶりだな」
今日もセキュリティーの制服に身を包んだクロウは、
そう言って片手を上げたのだった。

「『合唱コンクール』か。
アキからたまに聞くけど、
学校ってのも色々面倒なことが多いんだな」
頭の後ろで腕を組んで、
この旧サテライト地区まで紫音を連れてきた張本人である彼はそう
言った。
街で会ったクロウに世間話の一環として街をうろついていた理由を
話すと、
彼は少し考えて、だったらいい場所があるぜ、
と紫音をここまで案内したのだった。

シティよりもやや薄暗い印象のある道を並んで歩きながら、
紫音はそんなクロウの言葉を聞いていた。

「ま、今から行く場所なら
遅くなるまでは好きなだけ練習できるからよ。

……ただしちっとガキどもの声が
うるせえのが難点かもだけどな」

ぽつりと聞こえた言葉に紫音は首を傾げたが、
クロウはにやにやとしているだけでこちらの疑問に答えるつもりはなさそうだ。

そんなクロウの思い出話を聞きながら歩いて数分、
一軒の家の前で立ち止まった。

茶色がかった壁と屋根のその建物は
よく言えばシックな雰囲気、
悪く言えば古ぼけた印象を与える。

木製の低い柵と低木に囲まれたその入り口には、
子供の手書きだろう癖のある文字で『マーサハウス』と書かれていた。

紫音がクロウを見ると彼はどこか人の悪い笑顔で、

「この間話してた俺らの育った場所さ。

ちょうどガキどもの新しい遊び相手を探しててよ。

それまでは俺や遊星やジャックが定期的に顔を出してたんだが、
定職についちまって最近はなかなかそれもできなくなっちまってな
……」

いやぁ、助かったぜ、と言いながらポンポンと肩を叩くクロウ。

彼の笑顔から何か裏があるとは予想はしていたが、
想像以上の大役に紫音は思わず肩をすくめた。

紫音は昨年近所の神社に定期的にやってくる小学生の少女にせがまれて
遊び相手をしていたことがあるが、
あれは同年代で遊ぶのとはまた違う疲れを伴う。

だが月光館学園の音楽室が決められた時間と日にちしか使えない今、
他にあてもない以上紫音はここに頼るしかない。

紫音は息を吐いて腹をすえると、
無駄とは知りながら少しだけ恨めしげにクロウを見た。

彼は両手を合わせつつもこれまでにないほどの笑顔で
紫音に一つウィンクを投げかけた。

「あ、クロウ兄ちゃんだ！！」

どこからともなく振ってきたそんな声に、

紫音とクロウは足を止めた。
途端、建物や遊具の影からわらわらと出てきた
大勢の子どもたちに取り囲まれてクロウは満面の笑みを浮かべ、
逆に紫音はその迫力に一歩後じさった。

「よお、ガキども。
元気にしてたか？」

クロウの声に子どもたちは
耳が割れんばかりの声でそれぞれ返事を返した。

その威勢のいい声にクロウは腰に手を当てて、
子どもたち一人一人に声をかけたり頭をなでたりしている。

それはまるでテレビのヒーローが子どもたちとふれあっているかのようで、
なんとも微笑ましい雰囲気が漂っている。

だが普段と違う顔があることも気になるのか、
やがてこちらに興味を示す子どももちらほらと出てきた。

同年代からの警戒の視線にさらされるのも居心地が悪いが、
こういった無垢な子どもから発せられる純粋な興味もやはり落ち着かない。

だが自分でもたまに嫌になるほどコミュニケーション能力の低い紫音には、
彼らにどう声をかけていいものやら見当もつかなかった。

そんな紫音の雰囲気を察したのか、
はたまた子どもたちの興味の対象がこちらに向いていることに気づいたのか、
クロウはとっておきだと言うようにやおら紫音を子どもたちの真ん中に押し出した。

「今日はお前らに俺たちの新しい仲間を紹介するぜ！
神無瀬　紫音、ネオドミノシティの外からやってきた新米デュエリストだ。
今後はちっと用があってちょくちょくここに顔を出す予定だから、仲良くな！！」

はーい、と声をそろえる子どもたちは、
いつかの龍亞を彷彿とさせる動きで弾丸のように紫音へと飛びかかってきた。

元々逃げ場もなかった紫音はあっという間に
子どもたちにまみれてもみくちゃにされてしまった。

髪は引っ張られるは、制服は皺になるは散々な目に遭いつつも、
紫音はクロウの助けもあってようやく彼らの包囲網から抜けることができた。

紫音がぼさぼさになった髪を手グシで整えている所を見て、
子どもたちをけしかけた当の本人であるクロウは
先程の様子を思い出したのか腹を抱えて笑っている。

紫音はそんなクロウに半ば憮然とした視線を投げたが、
やはり彼は気づかなかった。
未だに笑っているクロウに紫音が大げさに溜め息をついたその時。
「おやまぁ、騒がしいと思ったら珍しいお客さんを連れてるじゃないか」
横手からかかったどっしりと落ち着いたその声に、
紫音とクロウは同時にそちらに顔を向けた。
ゆったりとした服に身を包み、
健康的な褐色の肌をした婦人の姿がそこにはあった。
クロウは婦人に軽く挨拶をすると、
紫音との間に入った。
「この人がマーサ。
俺や遊星やジャックの育ての親さ。
マーサ、こいつがこの間話してた紫音だ」
紫音が初めまして、と頭を下げると、
強い天然パーマのかかった長い髪をゆらして
マーサは大きく丸い瞳を優しげに細めた。
「いつもクロウたちがお世話になっているんだってね。
三人ともやんちゃな子たちだけど、

これからも仲良くしてやっておくれ」
にっこりと笑ってそう言うマーサに、
クロウはどこか照れくさそうに頭をかいて、
「マーサ、いつまでも子ども扱いはやめてくれよ！」
「何言ってるんだい。
私にとってあんたたちはいつまでも子どもだよ。
昔から三人そろうと決まって問題ばかり起こして、
私が育てた中でも一番手のかかる子たちさ」
腰に手を当てて言うマーサには、
さすがのクロウも頭が上がらないようだ。
ちぇ、と決まりが悪そうにそっぽを向くクロウに、
その場にいた彼をのぞいた面々は大きな声を上げて笑った。
クロウが恨めしそうにこちらを見たが、
紫音は無視して滅多に見られない彼を遠巻きににやにやとしながら
観察していた。
マーサや子どもたちの笑い声が収まるまで待っているようだったが、
すぐにしびれを切らしたらしいクロウはその声を打ち払うような声
を上げて、
強引に話題を切り替えた。
「それよりも、マーサ！

連絡してあったピアノの準備、できてるか？」
まだ少し頬を赤らめているクロウに、
マーサは笑いを収めて一つ大きくうなずいた。
それを確認したクロウは紫音の腕を掴んで
半ば引きずるように建物の中へと入っていった。
クロウに連れられて入った建物のやや奥まった場所に
件のピアノは鎮座していた。
そこは物置のような場所で埃とカビのにおいがしたが、
部屋自体はぞうきんがけもされて綺麗に片付いていた。
紫音がピアノに近づくと、
真っ黒い蓋の表面に幽霊のような自らの姿が黒い影となって浮かんだ。
しかしその姿の中央には白い傷がはしっている。
紫音がその傷を指でなぞると隣に立ったクロウが鼻をこすりながら
昔を思い出すように部屋の窓の向こうを見つめながら言う。
「懐かしいな。
ガキの頃、遊星たちとここで拾ったカードを投げて遊んでたんだ。
この部屋、ピアノ以外にもそこら中に傷があるだろ。

全部その遊びで俺らがつけた傷なんだよ。
流石にピアノ傷つけた時はこっぴどく叱られたなぁ」
ひっぱたかれたケツの痛みも蘇ってくるようだぜ、
などと笑いながら言うクロウに
紫音は思わずピアノの傷の深さを確認した。
それはとても投げたカードでつくような傷ではない気がしたが、
何でもありのこの街だ。
そういうことが起こっても不思議ではない。
紫音は蓋を開けて鍵盤に指を滑らせた。
長い間調律されていないからだろう、
音のうねりが激しいがそれほど練習に差し支えはないだろう。
紫音がうなずくとクロウはにっと笑って戸口に向かった。
「んじゃ、練習の間ガキどもの相手でもしてくるからよ。
帰るときまた声をかけてくれよな」
立て付けの悪いドアが大きな音を響かせて閉まる。
途端訪れた静寂をかき消すように、
紫音は伴奏の練習に励んだ。

陽が西の空に完全に沈む頃、
紫音はマーサハウスを後にした。

帰り際、またおいで、と朗らかに笑うマーサに、
紫音は深々と頭を下げた。

紫音の両親が他界してもうすぐ八年。

紫音の中の両親の記憶は長い年月で摩耗し
薄れてほとんど残ってはいなかったが、
それでも心の奥底にわずかに残っていたぬくもりが
うっすらと思い出されたような気がしたのであった。

紫音はこんな機会を与えてくれたクロウに感謝しつつ、
月明かりに照らされた道を駅に向かってゆっくりと歩いた。

マーサと子どもたちを通して、
紫音はクロウのことを少しだけ理解したような気がした。

Lesson2 ～The first half

２０１０年６月８日　火曜日

「準備はいい？」

弾むような龍亞の声に、
紫音やアキたち５Ｄ'ｓの面々は一様に真剣な顔でうなずいた。
全員の視線はテーブルの上に積まれた７つの箱に注がれている。
龍亞はメンバーの中で最も気の短いジャックがしびれを切らす一瞬前に
腕を振り上げて高らかに宣言した。

「よーし！
これより本日発売の新パック、
『ＰＨＯＴＯＮ（フォトン）　ＳＨＯＣＫＷＡＶＥ（ショックウェーブ）』
の開封式を始めるよ！！」

龍亞の宣言に全員は待ってました、
と言わんばかりに一斉に人数分おかれた新パックの箱を手に取った。

遅刻ぎりぎりに登校した紫音は、
クラス全体の浮き足立った空気に首を傾げた。

自分の席に鞄を起きながら本日の授業科目をざっと思い返してみたが、
やはりクラスメイトがはしゃぐような予定は思い当たらない。

誰かに尋ねてみようかと思ったが、
直後に入室してきた教師によってうやむやになってしまった。

席に着いた紫音は担任教師が淡々と連絡事項を告げる間、
机に頬杖をついて眠い頭を支えながら暇つぶしに彼を観察した。

普段はあまり感情を表に現さないその教師も
今日はどことなく機嫌がよさそうである。

本当に一体どうしたというのだろう。

しかし紫音のその疑問はホームルーム後すぐに始まった授業で
配られたパックとその解説によって明かされた。

これを皮切りに今日のデュエルの授業は、
全てこのパックに収録されたカードやそれに関連した講義となった。

……ただし配られたパックを開けて間もなく襲い来た眠気にあっさりと屈した紫音は、
それらの授業を全て睡眠学習としてしか聞いていなかったが。

そして放課後、紫音は校門前で待ち伏せしていたらしい龍亞に捕まり、
半ば強制的に遊星のガレージに連行されたのであった。

紫音が箱を開けると、
中には大量のパックがつめられていた。

一箱の値段が４５００円であることから
つめられた数は３０パックなのだろう。

だろう、というのも紫音はこれまでカードは
ショップでシングルでしか購入したことがなく、
こうしてパックを買って開けるのは初めての経験だった。

切り口を引いてパックを開けると、
五枚のカードが顔を覗かせた。

中身はレアが一枚とノーマルが四枚だ。

龍亞が言うには今回の収録カードは、
ウルトラ（レリーフ、ホログラフィック含む）五種類、
スーパー九種類、ノーマルレア四種類であるという。

そしてその中で一箱に収録されるのはレリーフ一枚、ウルトラ二～
三枚、

スーパー二～三枚、ノーマルレア一～二枚の構成となっているそうだ。

しかしそういった打算的なことよりも、
パック開けの作業は紫音が思っていたよりもずっと楽しいものだった。

遊戯王ではグレード落ちといった物がないため、
新しいパックには新カードしか収録されていない。

そういったカード一枚一枚を見て新しいギミックやデッキを考えることで
自然と戦術は広がっていくのだということを、今紫音は実感していた。

そしてそれは古参ユーザーの彼らならば、
なおさらそうなのであろう。

その証拠に５Ｄ’ｓの面々はまるで蟹を食べている時のように、
黙々と手元のパックを開封していた。

何パック目かの開封したパックから顔を覗かせた黒い枠のモンスターカードに、
紫音は目を見開いた。

「？」

シンクロモンスターが白い枠でレベルを表す星が右寄せで記載しているのに対し、
その黒い枠のモンスターは星が左寄せで記載されているなど、

何もかもがシンクロと対照的なカードとなっていた。
自らのパックから現れたそのカードを凝視していると、
パックを開ける手が止まっているのに気づいた龍可が、
紫音の手元を覗き込んで口を開いた。

「新しいエクシーズモンスターね」

「エクシーズモンスター？」

龍可の声に紫音がおうむ返しに問うと、
彼女の横でパックを開けていたアキが
今日の紫音の授業態度を見ていたからか
苦笑しつつも優等生らしく丁寧に説明した。

「今年の3月に発売したスターターデッキで初めての収録されたモンスター群で、
その召喚にはシンクロのようにチューナーが必要なく、
同じレベルのモンスターが二体、あるいは三体いれば
すぐにエクストラデッキから召喚できるモンスターなのよ。

エクシーズモンスターの素材となったモンスターは墓地に送らず、
エクシーズ素材となってエクシーズモンスターと重ね合わせて使うの。

そしてエクシーズモンスターはその素材を取り除いて墓地に送ることで
様々な効果を発揮するのよ」

「さらにエクシーズモンスターのもう一つの特徴として、

遊戯王史上初めての『レベル』が存在しないモンスターだ。
レベルとは逆側に記載されている星は『ランク』という読み方をするんだ。
現時点では必要となるエクシーズ素材のレベルと同値になっていて、
まだそのランクの数値を参照するカードは出ていない」
シンクロ同様に新しい戦術の一つとして期待されているモンスターだ、
とアキの説明を引き取った遊星はそう締めくくった。
紫音はへぇ、としばしまじまじとそのカードを見つめてから
積まれたカードの山の上に重ねると、
箱に残っている新しいパックに手を伸ばしたのだった。

やがて全てのパックの開封が終了したところで、
皆はようやく降りていた沈黙を破ってそれぞれの感想を口にした。
「前回に引き続きエクシーズの強化が大半だな。
チューナーやシンクロモンスターは一枚も収録されてないし上に、
シンクロ召喚に使用できないモンスターや
シンクロ召喚メタとしか思えないカードが増えたな。
『漆黒の落とし穴』や『エクストラゲート』なんてモロだし」
やりにくい環境になっちまったぜ、
そう言って頭の後ろで腕を組んだクロウはソファに体を深く沈めた。

『漆黒の落とし穴』
通常罠
レベル５以上の効果モンスターが特殊召喚に成功したときに発動することができる。
そのレベル５以上の効果モンスターをゲームから除外する。

『エクストラゲート』
速攻魔法
１から１２までの任意のレベルを宣言して発動する。
相手はエクストラデッキに存在する宣言されたレベルを持つモンスター１対をゲームから除外する。
宣言したレベルを持つモンスターが相手のエクストラデッキになかった場合、
自分の手札を一枚選択して捨てる。

確かにこの効果は特殊召喚扱いとなり、かつ
出しやすいシンクロモンスターメタと言ってよいだろう。

しかもエクシーズと違いシンクロの場合はチューナーモンスターを必要とする分、
相手にも次の行動が読まれやすい。

悲観的なクロウの感想にジャックもうなずいて同意を示し、
龍亞もこれらのカードが使われた時を想像してか顔色が優れない。

だがそんな中遊星だけはどこか嬉しそうに笑って、

「いいじゃないか。
少なくともこれでＺｏｎｅが言っていた
シンクロが引き起こす破滅の未来からは遠ざかったことになる。
シンクロ以外のデュエルの可能性、
これからが楽しみじゃないか」
心の底から楽しそうな遊星のその一言が、
彼らの表情から影を打ち消した。
重く沈みかけた空気も払拭され、
皆はほっと安堵ともとれる息をついていた。
しかし紫音だけがその突拍子もない話についていけず首を傾げていると、
雰囲気を察したらしい遊星はどこか遠い目をして、
機会があれば話そう、とだけつぶやいた。
「それよりも、みんなは気になったカードはあったか？」
遊星のその言葉に最も早く反応を示したのは龍亞だ。
「オレは前回のパックで登場した
『ゼンマイ』シリーズの強化カードだな！
特に『ゼンマイニャンコ』は使いやすくて強いよ」

『ゼンマイニャンコ』
☆×２　獣族　地属性
ＡＴＫ　８００　ＤＥＦ　５００
自分のメインフェイズ時に発動することができる。
相手フィールド上に存在するモンスター一体を選択して持ち主の手札に戻す。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り一度しか使用できない。

嬉しそうにカードをかかげる龍亞に、
ジャックは腕を組んでふん、と鼻を鳴らした。

「バウンスが強いのはすでに周知だからな。
昨日今日始めた奴でもわかることだ」

「まあな。

しかも使いきりとはいえノーコストだしな。

特に相手がシンクロやエクシーズなら尚更だ」

初歩だ、というジャックにクロウも同意する。

子ども相手に胸を張る若干大人げない二人に、
龍亞は頬を膨らませて突っかかった。

「じゃあジャックたちは何がオススメなんだよ」

すると彼らはそれを待っていたように
ふんぞり返って高らかに宣言した。

「エクシーズがいくら台頭しようとも、
我が魂には遠く及ばん！

素早くシンクロ召喚を行い、華麗に勝利をもぎ取るものだ。

だが勿論、キングたるもの『エンターテインメント』を忘れてはならん。

俺が選ぶのは、通常魔法『モンスター・スロット』だ」

『モンスター・スロット』
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター一体を選択し、
選択したモンスターと同じレベルの
自分の墓地に存在するモンスター一体を選択してゲームから除外する。
その後、自分のデッキからカードを一枚ドローする。
この効果でドローしたカードをお互いに確認し、
選択したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、
そのモンスターを特殊召喚する。

ドロー効果に加えてうまくいけばモンスターの特殊召喚が可能となる。

カードゲームにおいて手札の補充がいかに重要なことかなど、

今更語る必要もないだろう。
「『キャントリップ』だな」
「『キャントリップ』？」
遊星のその聞き慣れない単語に、
紫音はともかくアキまでが目を見開いて彼を見た。
遊星は首肯して、
「メイン効果とは別についている、カードを引く効果のことだ。
『Ｍａｇｉｃ：　Ｔｈｅ　Ｇａｔｈｅｒｉｎｇ』というカードゲームではよくある効果なんだが、
遊戯王は特にドローに厳しいカードゲームだからな。
このカードがおそらく初めてなんじゃないか？」
「『Ｍａｇｉｃ：　Ｔｈｅ　Ｇａｔｈｅｒｉｎｇ』、聞いたことがあるわ。
世界初のトレーディングカードゲームで、
遊戯王もこのカードゲームの影響を強く受けているって」
アキと遊星の会話を聞いて紫音も
そういえば前に順平がそれらしい話をしていたのを
ぼんやりと思い出した。
もっともその頃の紫音はカードゲームに興味がなく、

右から左へ聞き流していたが。

「どうだ！

一見扱いづらい無意味なカードに見えるが、その実無駄がない。

これぞキングの選ぶカード！」

「はいはいジャック、もういいだろ。

次は俺だぜ！」

ソファに片足をのせてポーズをとっているジャックを押しのけて、クロウは一枚のカードを手に取った。

「今回の目玉と言えばやっぱ新種族の『エヴォルド』、『エヴォルダー』だろ。

その切り札の『エヴォルカイザー・ラギア』は絶大な力を持っていると思うぜ」

『エヴォルカイザー・ラギア』
ランク４　ドラゴン族　炎属性　エクシーズモンスター
恐竜族レベル４モンスター×２
このカードのエクシーズ素材を２つ取り除いて発動する。
魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・特殊召喚のどれか一つを無効にし破壊する。

「素材が恐竜族ニ体だからちっと出すにはデッキを選ぶが、
こいつはなんとスペルスピード2の『神の宣告』を内蔵しているんだぜ！」

『神の宣告』
カウンター罠　（制限カード）
ライフポイントを半分支払って発動する。
魔法・罠カードの発動、
モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか一つを無効にし破壊する。

有名なパーミッションカードであるが、
その絶大な効果からコストは決して軽くはない。

だが『エヴォルカイザー・ラギア』は
エクシーズ素材を外すだけでその効果を発動できる
非常に画期的なモンスターと言えるだろう。

メンバーは得心顔で一様にうなずいていたが、
紫音だけはそれとは関係のないところで首を捻っていた。

順平のいうところの『空気読み人知らず』であることを自覚しつつ、
紫音は今日何度目かの質問を口にした。

「あの、『スペルスピード』とは何ですか？」

ぴしり、と空気が凍り付く音が、
紫音にははっきりと聞こえた。

一様に目を点にして一斉にこちらを見る彼らの顔を、
紫音はこの先忘れないだろう。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

Lesson2 ～The latter half

そう。

おそらくあまりにも初歩のことのため、
誰もその点について触れなかったが、
遊戯王の基礎を飛ばし飛ばしにここまで来ている紫音には
そういった常識がしばしば抜けていることがあった。

その間抜けな紫音の質問に、
フリーズ状態から復帰した遊星は
しかし呆れることなく丁寧に説明した。

「『スペルスピード』とはカードの効果のスピードのことだ。
『チェーン』については知っているか？」

紫音が考える間もなくあっさりと首を横に振ると、
さすがにクロウも心配そうに眉根を寄せる。

「おいおい、そんなんでよくデュエルしてこれたな……」

しかし遊星は特に気にした様子もなく説明を続けた。

「『チェーン』とは、魔法や罠カードの応酬をスムーズに解決する
ためのシステムで、
一枚のカードの発動に対応して別のカードを発動させることさすん
だ。

カードが効果を発動したとき、
始めにカードをプレイした側から見て相手プレイヤーは
それに対して必ず『チェーン』するチャンスがある。

相手が『チェーン』した場合、
今度は自分が『チェーン』することができるようになる。

相手が『チェーン』しなかった場合は
自分自身のカードでさらに『チェーン』することもできる。

こうやって可能な限り積み重ねることができて、
お互いに『チェーン』をしなくなったとき、
最後に『チェーン』発動されたカードから順に効果処理をしていくんだ」

「最初に発動したカードを『チェーン1』とし、
『チェーン』発動するたびに『チェーン2』、『3』と
『チェーンブロック』を積み上げていくんだぜ。

具体例を挙げるなら、
俺がモンスターを召喚して、
紫音が『エヴォルカイザー・ラギア』の効果を使って無効にしたとするだろ。

そんで俺がその効果に対して

『天罰』
カウンター罠
手札を一枚捨てて発動する。
効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

を発動する。
さらに紫音が『神の宣告』を発動。
この場合の『チェーンブロック』は
まず『チェーン1』が『エヴォルカイザー・ラギア』、
『チェーン2』が『天罰』、『チェーン3』が『神の宣告』となる
訳だ。
んで、効果処理は最後に発動したカードから処理していく訳だから、
『神の宣告』の効果から処理し、『天罰』の効果が無効になる。
次は『天罰』の効果処理だが、
さっきの『神の宣告』で無効になっちまってるから不発。
最後に『天罰』で無効にされるはずだった
『エヴォルカイザー・ラギア』の効果が無事に発動して、
俺のモンスターの召喚は無効にされちまった、ってなるわけだ」
なるほど、と紫音は感心してうなずきかけて、
ふとクロウのあげたその例に疑問を抱いて質問を重ねた。
「『チェーンブロック』についてですが、
本当の最初は『モンスターの召喚』だったはずですよね。
だったら、『モンスターの召喚』が『チェーン1』になるのでは？」
紫音のそのもっともらしい問いを、
しかしジャックは鼻で笑い飛ばした。

「『チェーン』とは、カードやカードの効果の発動に対して行うもの！

『モンスターの各種召喚』、『リリース』、『コスト』はカードやカードの効果の発動ではなくルールによるものだ。

よってこれに『チェーン』することなどできん！」

ジャックの説明に紫音は今度こそ納得して深くうなずいた。

「『チェーン』の仕組みが理解できたところで話を戻すが、『スペルスピード』とはその『チェーン』を組む際に必要なカードの効果の速さなんだ。

発動したカードに対応するには、そのカードよりも速い『スペルスピード』のカードでなくては『チェーン』発動できない。

『スペルスピード』には一から三まであって、魔法や罠、効果モンスターの効果にはそれぞれの速さが設定されている。

まず『スペルスピード1』に当たるのが、通常魔法、装備魔法、フィールド魔法、儀式魔法、永続魔法、効果モンスターだ。

この『スペルスピード1』が最も遅く、他のどの効果の発動にも自発的に『チェーン』できない。

『スペルスピード2』に当てはまるのが、
速攻魔法、通常罠、永続罠、『誘発即時効果』をもった効果モンスターだ。

『スペルスピード1』、同じ『スペルスピード2』に対して『チェーン』ができる。

これらを簡単に記憶したいなら
『タイミング』を選ばずに発動できるカードや、
相手ターンでも発動できるカード、といった覚え方でいいだろう。

そして最も速く、どのスピードに対しても『チェーン』できる
『スペルスピード3』に当たるのが、
カウンター罠だ。

このスピードに対応できるのは同じ『スペルスピード3』だけとなる」

遊星の説明に、紫音はさらに目を白黒とさせた。

クエスチョンマークが飛び交う頭を何とか沈めて、
紫音はそろそろ申し訳なく思いながらも現れた新しい単語についておずおずと質問した。

「すみません、その『誘発即時効果』って、何ですか？」

「効果モンスターの『効果』を処理の方法によって、
大きく五つのタイプに分けた場合の内の一つだ。

『リバース効果』、『永続効果』、『起動効果』、『誘発効果』、

『誘発即時効果』。

『リバース効果』と『永続効果』はわかるだろう」

遊星の問いに紫音はこくりとうなずいた。

『リバース効果』は、カードが裏側表示から表側表示になった時に発動する効果だ。

以前使用した『ライトロード・ハンター　ライコウ』や『ペンギン・ソルジャー』がこれにあたる。

『永続効果』は読んで字のごとく、そのモンスターがフィールド上に表側表示で存在する限り、継続される効果で『コマンド・ナイト』などがそうだ。

紫音がうなずいたことを確認してから、遊星は説明を続ける。

「まず『起動効果（きどうこうか）』は、発動を宣言して使用できる効果だ。

テキストには指定がないことがほとんどだが、この効果は基本的には『自分のターン』の『メインフェイズ』にしか発動できない。

ただしメインフェイズ以外や相手ターンでも発動できる、と記されている場合は例外的に使用することができる。

紫音の持っている『氷結界の龍　ブリューナク』なんかがそうだな。

『誘発効果（ゆうはつこうか）』はスタンバイフェイズ時やモンスターが破壊されたときなど、
モンスターが指定した条件を満たした時に発動する効果のことだ。
具体的には『巨大ネズミ』などだな」

『巨大ネズミ』
☆×４　獣族　地属性
ＡＴＫ　１４００　ＤＥＦ　１４５０
このカードが戦闘破壊され墓地に送られた時、
自分のデッキから攻撃力１５００以下の地属性モンスター一体を
自分フィールド上に特殊召喚することができる。

「そしてモンスターの効果の中で唯一『スペルスピード２』の効果である、
『誘発即時効果』は使用タイミングが限定されているものの、
相手ターンでも任意に発動させることが可能な効果のことだ。
『誘発即時効果』は大きく分けて三種類の具体例がある。
手近なところでまずは『エヴォルカイザー・ラギア』の効果を見てくれ。
『魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・特殊召喚のどれか一つを無効にし破壊する』というこの効果は、
モンスターが指定した条件を満たす必要はあるが、
相手のターンでも自分のタイミングで発動できるだろう。

この効果は『誘発即時効果』の中でも、
『任意のタイミングで発動できる任意効果』の一例だ。

『オネスト』のダメージステップ時に発動する効果などは
『特定のタイミングで発動できる任意効果』だな。

そして『光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）』の一つ目の効果、
『このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
このカードの攻守を５００ポイント下げて
効果モンスターの効果、魔法、罠カードの発動を無効にする』が、
最後の一つ『特定のタイミングで発動する強制効果』だ」

息もつかせぬその説明に、
紫音は自分でも気づかない内に強く眉根を寄せていた。

それでも大雑把にではあるもののとりあえず理解したと伝えると、
遊星は表情を緩めて、

「今ので全てを完璧に理解するのは難しいだろう。

それに先程あげたのは基本的なことだけで、
例外も沢山ある。

何となく『そういったものがある』、
と頭の片隅に置いておくだけで構わないさ」

遊星のその言葉に、
紫音は胸の内でほっと安堵の息をついた。

そのとき今まで黙って遊星の説明を聞いていたアキが、
思い出したように口を開いた。

「最後にちょっといいかしら。

『チェーン』に関連したことだし、
『優先権』も一緒に説明した方がいいと思うわ」

アキの言葉に周りが、確かにそうだな、とそれぞれ同意を示す中、
龍亞だけが何だっけ、と同じように首を傾げていることだけが
紫音にとって唯一と言っていい救いだった。

……勿論、それが非常に情けないことだとは自覚している。

説明しようとこちらを見据えた遊星は
どんなに難解なことかと再び身構える紫音を見て、
場を和ますように小さく微笑んだ。

「そんなに難しいことじゃないさ。

各フェイズやステップでカードを最初に発動する権利は、
常にそのターンを進めているターンプレイヤーにある、
という当たり前の事象のこと。

これをターンプレイヤーの『優先権』というんだ。

相手プレイヤーは、ターンプレイヤーが『優先権』を持っている限り、
自動的に発動する『誘発効果』や『リバース効果』以外は

先にカードを発動することができない。
『優先権』を行使してカードを発動した場合と、
『優先権』を放棄した場合は『優先権』は自動的に相手に移る。
『優先権』の放棄、というとわかりにくいかもしれないが、
普段何気なくやっているフェイズやステップを進めることもこれに当たるんだ。
フェイズやステップを進める前にはターンプレイヤーは必ず『優先権』を放棄し、
相手のカードの発動を確認しなければならない。
といっても、普通はデュエルを円滑に進めるため、
フェイズやステップの移行宣言に『優先権』の放棄の意が含まれている。
たまに言うだろう、
『フェイズ、ステップの終了前に、カードを発動します』、と。
これはターンプレイヤーが『優先権』を放棄したため、
相手プレイヤーが『優先権』を得てカードを発動した、
ということなんだ」
なるほど、と紫音はつぶやいた。
確かにこれらは全て当たり前にデュエル中に行われるやりとりだ。
だが空気のようにあってないようなそれを、
何故わざわざ『優先権』などと難しい表現を用いているのか。

紫音のそんな心中を読んだかのように、
遊星は説明を続ける。
「『優先権』にはこの権利が相手に移る行為と移らない行為とがある。
例えば『チェーン』。
カードを発動した時、次に『チェーン』を積む権利は、
もう片方のプレイヤーに移るんだ。
そこで相手は『優先権』を使ってカードを発動するか、
『優先権』を放棄するかを選ぶ。
どちらかの後、再び権利はターンプレイヤーに戻り……、
後は同じやりとりを繰り返していく。
つまり『チェーン』とは厳密に言えば
『優先権』のやりとりでもあるんだ。
この時『優先権』がどのタイミングで相手に移っているのかというと、
スペルスピードに関わらず、魔法、罠のカードの発動と効果の発動時、
およびモンスターの『起動効果』、『誘発効果』、
『誘発即時効果』、『リバース効果』の発動時になるんだ。
『優先権』の放棄は先のフェイズ、ステップ以降の他に、

メインフェイズで何らかのカードをプレイした後、
新たにモンスターの各種召喚、表示形式の変更や
カードのセット、スペルスピード１の魔法カードの発動をしようとする時に発生する。

逆に『優先権』が移らない行為は、
各フェイズ、ステップの始まりや開始宣言の時、
そして直後にクイックエフェクトを発動できるタイミング、
つまりモンスターの各種召喚が成功したときや表示形式を変更したとき、
攻撃宣言をしたとき、カードのセットをしたとき、
処理の終わった直後やドローフェイズでのドロー時、などだ。

しかし何故こんなことをわざわざ定義しているのか。

それはデュエルではこの優先権を巡って、
トラブルが発生する場合があるからなんだ。

わかりやすい例を挙げると
カードをプレイした直後ターンプレイヤーが
何も言わずにモンスターの召喚などを引き続き行おうとした場合は、
相手は異議を唱えてその行為の開始前までデュエルを巻き戻し、
魔法、罠、モンスターの効果ーークイックエフェクトを発動することができるんだ。

ただし同一チェーン上でお互いのプレイヤーがカードの発動および
効果の発動を行った場合の効果処理直後の『優先権』がどちらに移

行するかは
未だに調整中らしいが……」

「ま、『調整中』は遊戯王じゃお家芸だからな。
もちろん、悪い意味でだけどな」

クロウが肩をすくめて言うと、
遊星たちもそれに苦笑しながら同意する。

しかし遊星はすぐに表情を戻してこちらに顔を向けると、

「もちろんこれは誰しもが必ず持っている権利だから、
普段のデュエルで『優先権を行使して～』なんて言わなくてもいい。

だが、『優先権』を意識したデュエルは重要なことだ。

お互いルールを守って楽しいデュエルをするためにな」

「そういうことだ」

ジャックがうなずいてようやく、
全ての説明が終了した。

紫音が丁寧に頭を下げると、
何故かジャックが尊大な態度でそれに応じた。

すかさずクロウがそれを指摘すると、
ジャックと言い争いを始めた。

アキや双子はまた始まった、とうんざりした様子で息をつき、
遊星は穏やかに仲間たちのじゃれ合いを見守っていた。

紫音のデュエルの知識が『全くない』から『聞きかじり程度』になった。

こうして全く緊張感がないまま、
紫音たちは明日という運命の日を迎えることになる。

Full moon2 ～The first half

２０１０年６月９日　水曜日

月が天上で煌々と輝く今日は、
いつかと同じ完璧な満月をしていた。
星明かりをかき消す程に明るい月の光が、
街灯の少ないこの道をくっきりと浮かび上がらせている。
昨年何度となく通った、
この月光館学園巖戸台分寮前の道を。

月の光が作り出す濃い影に身を潜めながら、
紫音たちは巖戸台分寮の建物の前に集合した。
時刻は間もなく２２時を回ろうとしている。

「ねえねえ、紫音。
何かが現れる噂の時刻は大体午前零時なんでしょ。
何で二時間も前からここに来たの？」
紫音の制服の裾をちょんちょんと引っ張り小声で問う龍亜に、
耳聡く聞きつけた龍可が半ば呆れながら答えた。

「もう龍亞ったら、みんなの話聞いてなかったの？
あの事件に関わる研究データをコピーする為に潜入するのよ。
誰かが来る前に済ませなきゃ」
「でもさぁ、ここに来た奴が事件を起こしてる犯人かもしれないんでしょ。
そんな遠回りなことしないで、
ここにやって来た怪しい奴を捕まえちゃえばいいじゃん」
彼らしい率直な意見に、
しかし彼以外のメンバーは苦笑気味に首を横に振った。
「残念ながらそれはできない。
こちらがつかんでいるのが
桐条グループが何らかのの関わりがあるだろう、
という推測の域を出ないもので、
しかもその根拠が非公式に入手した
今一つ内容の不透明な文書だからな。
彼らにしらを切られたら、
大人しく引き下がらざるを得ない。
さらにここは桐条の私有地だ。
不法侵入が見つかれば、
逆に俺たちが捕まってしまう。

迂闊な事はできない」

ふーん、と龍亞はやはり納得できない様子で、
それでも何とかうなずいた。

そんな龍亞にクロウは声を抑えながら笑うと、

「ま、確かにそれができりゃあ
苦労しねぇけどな」

その言葉はメンバーの緊張に強張った表情を少しだけ緩めた。

やがて口元を再び固く結びなおして、
遊星はメンバーに作戦の指示を出した。

「アキと龍亞と龍可は外で待機して
建物周辺に近づく怪しい人影がないか、
見張ってくれ。

建物内部へは俺とジャックとクロウ、
そして紫音で行く。

紫音、寮内の案内を頼む」

視線をこちらに向けられて、
紫音は黙って首肯する。

「よし。作戦開始だ！」

今ここに、遊星は作戦の決行を宣言した。
メンバーは声を低めつつ、
しかし勢い良くそれに応じた。
「遊星、くれぐれも気をつけてね」
「紫音、みんなをよろしくね」
「ジャックとクロウも頑張ってよね！！」
アキ、龍可、龍亞の励ましに送られて、
紫音たちはクロウが鍵を開けた裏口から寮内へと足を踏み入れた。

薄暗がりにぼんやり浮かび上がったラウンジは、
一昨年と全く変わらない様相を呈していた。
カウンターの反対側に設置された
ソファやテーブルの配置も去年のままだ。
外の街灯の光が曇りの一つもない正面玄関のガラスを、
きらきらと輝かせている。
「妙だな」
「ああ」

ぽつりとつぶやいた遊星に、
ジャックが同意を示す。

しかしクロウはその意図が掴めなかったらしく、
辺りをきょろきょろと見回して、

「そうかぁ？

前に行った月光館学園の女子寮も
こんな感じじゃなかったか」

逆立てた明るいオレンジの髪に手を入れて後ろ頭をかくクロウに、
紫音は声のトーンを抑えて話した。

「……ここが廃寮になってから数ヶ月経ってる。

でも、人がいないにも関わらず、
よく手入れされている」

そう。

室内は少し埃くさいものの、
蜘蛛の巣が張っていたり
床やカウンターに埃が堆積していたりする様子はない。

「建物は誰もいなくなるとすぐに荒れてしまうからな。

誰かが定期的に足を運んでいるのは間違いない」

それまで推測でしかなかったことが

確かな事実となっていくことに、
紫音はもちろん遊星たちも胸を高鳴らせているようであった。
紫音は改めて気を引き締める。
「とにかく、慎重に行こう」
遊星の言葉に、
紫音たちは一様にうなずいた。

一階を一通り調べ終えると、
紫音は奥にある階段へと彼らを誘った。
二階、三階にはずらりと部屋が並び、
廊下の奥の窓からは闇夜に浮かぶ満月が顔をのぞかせていた。
その白い静謐な光を避けるように、
紫音たちは闇から闇へと移動を繰り返す。
しかし立ち並ぶどの部屋からも
不審な点は見つからなかった。
「残るは四階と屋上だけか……」
いよいよだ、と紫音は遊星と顔を見合わせた。
ジャックとクロウもごくりと音をたてて息をのむ。
紫音が龍亞に教わった心霊サイト、

そしてカーリーのスクラップ帳には共通する点が記されていた。
四階付近の窓から漏れた明かり。
午前零時過ぎに目撃された怪しい人影。
そして四階の開かずの間。

「開かずの間ってのは、
またベタな話だがホントにあったのか？」

重い雰囲気を打ち消そうとするようにわざと明るい調子で問うクロウに、
紫音は肯定を示すべく首を上下に振って
この寮に住んでいた時のことを話した。

「僕がこの寮にいた時は
誰もそんなふうには呼んでいませんでしたが、
確かにありましたね。
ただ友人たちはあまり気にしていなかったようですし、
桐条グループのご令嬢である先輩も
ただの物置だ、と言っていましたので……」

「ちょ、ちょっと待て」

紫音の話を遮って、
クロウはいぶかしげに顔を歪めた。

「寮っていやぁ、普通男女別だろ。

ここは女子寮だったのか？」
転校してきた際に自らも思ったこととを指摘され、
場違いだと思いながらも紫音はどこか懐かしさを感じた。
紫音はしかしそれを表に出さないように
少しだけ歯を食いしばって表情を消し、首を横に振った。
「いえ。
僕が昨年の四月にここに転校してきた時に
理事長に同じことを伺った際には、
突然のことで男子寮の手配ができなかったため
応急処置でここに配属した、と説明されました。
その後やってきた転校生も同じようにここで過ごしていたので、
当時は特に気に留めていませんでしたが……」
言葉を詰まらせた紫音に、
敏感に何か感じ取ったのだろう遊星は静かに問う。
「……その転校生というのは？」
「ーーアイギスです」
その名前に全員の双眸がす、と細められた。
途端降りた静寂の帳に、
耳の奥がきんとし始める。

気づけば窓の外に浮かぶ月が中天に近づこうと高度を上げ、
窓から差し込む光が先程より少しだけこちらに近づいていた。
遊星は眉間に刻んだしわを深めて、
重い口を無理矢理こじ開けるようにして語る。
「今日までカーリーのスクラップ帳の情報とあわせて
月光館学園について少し調べてみたんだが、
その理事長は現在行方不明となっていることがわかった」
『ーーーーー！！』
ジャックやクロウ、
そして紫音にも衝撃が走る。
確かに今年度の始めに学園の全校集会で
急遽理事長が交代になったとは聞いていたが、
まさか行方不明になっているなど露ほどにも思わなかったのだった。
遊星はそれらの反応を意図的に無視し
淡々と話を続ける。
「昨年の十一月頭から行方をくらませているそうだ。
原因は不明。
それらしい素振りも見せなかったらしい。

だが世間ではそのことはほとんど問題にされなかった。
何故なら同時期に母体である桐条グループの総帥が急逝したためだ」
当時のことを紫音は克明に記憶していた。
桐条グループ内は蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、
娘である美鶴は悲しみに暮れる間もなく
事態収拾とグループの今後について宗家と寮、学校を頻繁に行き来していた。
あの時の美鶴の今にも自殺してしまいそうな
青白く生気のない顔は誰もが目を背けたくなるほどであった。
「偶然にしてはでき過ぎている気もするな」
「ってなりゃあ、ますます『桐条グループ』が
黒幕って線が濃厚になってくるな」
ジャックとクロウの感想に、
紫音はそっと唇をかんだ。
彼らにその気はないのだろうが、
やはり知り合いが疑われているというのはいい気分ではない。
「ここであれこれ詮索していても仕方がない。
研究証拠を見つけて解析すれば、おのずとわかることだ」

「だな。
気合い入れていくぜ」
「フン。
ならばさっさと行くぞ」
それぞれ意気込みを見せて
彼らは一斉に紫音に顔を向けた。
紫音は彼らの視線に一つうなずいて、
階段の方へと足を運んだ。
目指すは噂になるほどのいわくを秘めた、
四階の開かずの間。
様々な思惑が交差するこの夜の輪郭を、
目を焼くような白い月が煌煌と照らし出していた。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

Full moon2 〜The second half

階段を上ると、そこはこれまでとは違い
開けた場所になっていた。

廊下はなく、
代わりに鎮座しているのは
両開きになった重厚な作りの扉だ。

「ここが開かずの間か」

腕を組んだジャックがその扉を睨む。

クロウが扉に近づいて軽くノックすると、
くぐもった高い音が響いた。

「中は結構広そうだぜ」

振り向いたクロウはそう言って
無造作にドアノブに手をかけようとしてーーー

「待て、クロウ！」

少し強いその声に、
クロウは驚いて手を引っ込める。

それまで念のため、とこの場所を見て回っていた遊星は
大股で扉に近づいて肩に下げた鞄を床に下ろし、
屈んでノブの周りを調べ始めた。

やがて遊星は鞄から取り出した安全ピンの針を、
ノブの下側に差し込んで小刻みに動かし始めた。

一分、二分ほど経過した後、
遊星は差し込んだ針を引いて
ノブの金具の隙間から細いコードを引っ張り出した。

「すまない、紫音。

鞄からペンチを取ってくれないか？」

紫音は慌てて遊星の鞄を探ってそれらしい工具を探す。

小さくないものとはいえ
暗がりの中ではペンチ一本探すのにも思った以上に時間がかかる。

もどかしくなって手についたそれらしいものを
鞄から取り出す作業を繰り返して三本目、
ようやく紫音は目当ての工具を引き当てた。

身動きのとれない遊星に急いで差し出すと、
遊星はありがとう、と受け取って
片手だけで器用にペンチを構え直した。

ぱちり、とコードを切る音が空間に響く。

遊星は細く息を吐き出すと、
立ち上がって鞄の中に安全ピンとペンチをしまいながら
先程の作業の内容を説明した。

「この扉は一般的な鍵と
指紋認容によるセキュリティシステムとの
二重のロックが施されていたんだ。
壁の隅に観葉植物が置いてあるだろ。
あの後ろに指紋認証の装置が設置してあった。
クロウがあのままノブを回していたら、
セキュリティシステムが作動していたことだろう」
遊星の示す先を見ると、
ドアの前からは丁度死角になった観葉植物の影に隠れるようにして
それらしい機械が壁に設置されている。
「だが言い換えればそれは
ノブにその配線が直結していることを示している。
だからその配線を切らせてもらった」
後は普通に鍵を開けるだけだ、
と言う遊星に今度はクロウが一歩進み出て、
「よし。
後はこの俺に任せとけ！」
言ってサテライトに住んでいた頃からの愛用品だ
というピッキングツールを取り出した。

「セキュリティの保管庫にも侵入していたこの俺様にかかれば、
こんな鍵ちょちょいのちょいだぜ」

「さすがは元コソ泥だ」

ジャックの補足にクロウはツールを
鍵穴に差し込んでガチャガチャとやりながら、
うるせー！と額に青筋を立てた。

ジャックはそのクロウの反応に小首を傾げて
誉めたつもりだが、と小さくつぶやいていた。

もはやお決まりのようなやりとりを繰り広げたジャックは、
しかしすぐに気を取り直すと
遊星の隣に並んで扉を見つめた。

「それにしてもセキュリティ・システムが作動しているということは、
ここには継続的に電気が通っているという事だな」

「ああ。

最早この奥に何かある事は間違いない」

ジャックの見解に遊星が同意し、
紫音は表情を険しくした。

思い浮かぶのは一月ほど前に会った美鶴の顔だ。

彼女は一体いつからこんな事をしていたのだろうか。

クロウが鍵を開けるため
ガチャガチャと音を立てるごとに動機が激しくなる。

まだ確かな証拠はないものの、
紫音はこの先に何か見てはならないモノがある予感がしていた。

そこまで考えて、紫音はようやく
自分が引き返せないところまで来てしまっていることに気がついた。

この先にある真実を知ってしまったら
もう二度と彼女と正面から向き合えなくなってしまうかもしれない。

そう考えると胸の辺りがかっと熱くなって、
紫音はそれを押さえるように自身の服をくしゃり、とつかんだ。

紫音は表情を消すのがうまいと言われる。

確かに何も考えていないフリは得意だ。

しかしそれはどこまでいってもフリでしかない。

知ってしまった真実を
やはり、と知らないことにできる訳でも、
まして最初からなかったことにできる訳でもない。

まみえる真実にもよるかもしれないが、
少なくともただの先輩と後輩としての関係ではなくなる。

紫音はこの鍵が開くまでのほんの数分でもその考えから逃れたくて、
作業を続けるクロウの背から目をそらした。

そらした視線の先にあったのは、
屋上へと続くもう一つの扉だ。

その扉もまた、この寮で生活していた頃には
ついぞ開けたことのなかった扉だった。

扉に貼り付けられたラミネート加工された紙には
赤い文字で『許可なく屋上に立ち入ることを禁ず』と記されている。

その貼り紙の文章を目で読み上げた瞬間、

「？？？？？つぅっ」

キン、とした痛みが頭を打ちつけた。

がんがんと激しく脈動するその痛みに、
めまいと幻覚が襲ってくる。

時折ノイズを伴いながらぼんやりと見えたその光景は、
入った事のないはずの分厚く冷たい屋上の扉の向こう側だった。

いつか見た狂ったような巨大な月が、
遮蔽物もなく開けた屋上一杯にかかっている。

その奥から現れたのは、
真っ黒い??

ザッと激しいノイズが走り、
画面が切り替わる。

景色はやはり屋上だ。

その景色の中にゆらりと立っている人物が居る。

髪の長い、フリルの塊をそのまま
まとったかのような白いドレスに身を包んだ少女だ。

狂った月を背にして、
少女は狂気的な美しさを醸している。

少女はゆっくりと、
どこか虚ろな目をして自らの形のいい顎に、
鈍い色をした銀色の銃を押し付けた。

少女の唇が微かに動く。

「おいで。

?.?.?.?.?.?.?.?.?.」

「紫音！」

静かな水面に落とされた一滴の波紋のように、
その声はゆっくりとしかし確かに頭に広がった。

知らずうずくまっていた紫音が痛む頭を抑えて顔を上げると、
怪訝そうにあるいは心配そうに
こちらを見下ろしている三組の瞳と視線がぶつかった。

「大丈夫か？」

遊星に問われて、
脈打つように襲っていた
頭痛が引いていることに気づいた紫音は
小さく一つ首肯した。

頭を軽く振って立ち上がると、
霧に覆われたように
ぼんやりとしていた意識が少しだけ晴れた。

「そんじゃ、行くぜ」

クロウが親指で背中越しにあの扉を指し示す。

紫音は先ほどまでの弱々しい考えを意識から追い出して、
巨大な門のように整然と立ちはだかるその扉の前に立った。

ノブに触れるとひやりと氷を掴んだかのような感触がして、
紫音はびくりと手を離したが
落ち着いて息を吸うと気を取り直してノブを回した。

がちゃり、と音を立てて、
紫音の手から離れた扉はゆっくりと奥に開いていった。

真っ暗なその部屋から漂ってきたのは、
寮のこれまでの部屋と同じ埃のにおいと
ノブと同じくらいに冷えた空気だった。

顔に当たる冷気が緊張により汗ばんだ紫音の肌を

つ、と撫でる。
唾を嚥下した喉の立てる音が
遊星たちに聞こえてしまいそうなほど
大きく耳の中で木霊する。

紫音らは言葉もなく、その暗闇を凝視した。

そしてまみえた広がるその光景に、
紫音はただ、立ち尽くした。

暗闇に慣れ始めた目が映し出したのは、
広い空間の中央に置かれた応接セット、

ーーーそして巨大なスクリーンと操作パネルだった。

これが文書にあった研究機器なのだろうか。

頭の中で再び美鶴の顔がちらついて、
紫音の足はその場に縫い止められたかのように微動だにしなかった。

そんな紫音とは正反対に
遊星たちは戸惑う素振りもなく
足踏みばかりしている紫音を追い越して室内へと踏み込んでいく。

彼らの後ろ姿を目の当たりにした紫音は
内心に生まれた焦燥感に突き動かされて、
ようやく数歩遅れて彼らに続いた。

噛み締めた奥歯ががり、と口の中で不快な音をたてた。

操作パネルの前に立った遊星が電源を入れると、
その機械は鈍い作動音を立てた。

スクリーンに様々な数字が浮かんでは消え、
やがて何かのグラフや研究文書などが所狭しと浮かび始めた。

それとほぼ同時に遊星は鞄から取り出したノートパソコンを
その機器とつないでデータのコピーをとり始めている。

作業をする彼の隣で紫音は次々と展開していく研究文書を
することもなく呆然と見つめていたが、
やがてほとんどの文書に二つの単語が頻繁に使われていることに気づいた。

『シャドウ（Ｓｈａｄｏｗ）』、

『ペルソナ（Ｐｅｒｓｏｎａ）』

開いては埋もれていく研究ファイルの中で、
一際異彩を放つその単語の意味は紫音にはわからない。

しかしそれはざらりとした感覚を胸に伝えていた。

「もう時間が来るぞ、遊星。
いつまでかけているつもりだ」
時計を確認したジャックの焦りを含んだその声に、
画面の文書を注視していた紫音もはた、と我に返る。
携帯の画面を開くと零時まで後十数分である。
かたかたとパソコンのキーボードを叩いている遊星が、
「後三十秒だ」
そうつぶやいた時だった。

「そこで何をしている」

鋭い声が、開かずの間に木霊した。

To be continued…

Full moon2 ～The third half

静寂を切り裂いて響いた聞き覚えのあるその声に、
紫音たちは一斉にそちらに顔を向けた。

闇の中でも鮮やかな深紅の髪をかきあげて、
彼女は紫音たちの前に立ちふさがった。

その様は優美で、妖艶ささえ漂わせる。

しかしそんな仕種とは裏腹に
彼女の切れ長の瞳はまるで氷を削ったように冷たく、
そして鋭く光っている。

こうして予想よりもずっと早く、
紫音は彼女と対峙することとなった。

月光館学園前生徒会長であり、
桐条の令嬢ーーーーー桐条美鶴。

「この扉を開けるとは、
ただの賊ではないとは思っていたが……」

ちらりと彼女がこちらに顔を向ける。
紫音はぐっと腹に力を入れて、
彼女の視線を真正面から受け止めた。
見返した彼女の顔は学園の生徒会長でも
まして彼女個人としてでもない、
『桐条グループ』の一員としての顔をしている。
紫音の知らない美鶴の顔。
まるで得体の知れない何かを相手にしているようで、
知り合いを相手取るのとはまた別のやりづらさを感じる。
だが今美鶴と正面から向かい合うことができているのは、
皮肉にも彼女の醸すそんな雰囲気ゆえであることを
紫音は理解していた。
「数日前からグループのサーバーに、
頻繁にアクセスしている者がいる事は知っていたよ。
ただし海外のサーバーをいくつも経由し、
なおかつこちらの探知が行き届く直前にアクセスを解除していたため、
こちらからは一向にその素性を掴むことはできなかった。
だがアクセスのあった文書を見れば、
今後その賊どもがどう動くかなど簡単に推測できる」
「なるほどな。

そんで俺らをおびき寄せるため、
毎夜張ってたってワケか。
そりゃ、ご苦労なこった」
案外、桐条グループも暇してんだな。
クロウのあからさまな挑発に、
しかし美鶴はふふ、と妖艶な笑いを漏らした。
「私自身が大学生という
ある程度の自由が許されている立場だからな。
心配してもらうほどのことではないさ。
ーーークロウ・ホーガンさん？」
組んでいた腕を組み替えて美鶴はクロウに視線を送る。
名を言い当てられたクロウは一瞬驚きの表情を見せたが、
すぐに不敵な笑みを顔に張り付かせた。
「へっ！
こっちのことは調査済みってか」
「先月、とある銃の出所についての調査で
女子寮を訪れたことがあっただろう。

その時にあらかたのことは調べさせてもらったよ」
言って美鶴は懐から小さく折り畳まれた数枚の紙を取り出すと、
こちらに投げて寄越した。
美鶴に促されて、
紫音は足下に落ちたその紙をそっと拾い上げると
警戒しつつ慎重に四つ折りになったそれを広げた。
興信所を使ったのだろう、
紙にはクロウ、そして遊星の住所などの基礎情報から
生まれてから彼らが歩んできた道のりが事細かに記されていた。
「特に君の存在には驚いたよ。
ーーー不動遊星。
ネオドミノの画期的な新世代エネルギー供給システム
『モーメント』開発の第一人者、天才不動博士の一人息子で
君自身類い稀な天才的頭脳の持ち主。
そして数ヶ月前、仲間とともにネオドミノシティを救った英雄。
しかし表舞台でこれほど有名な君のことだ、
一連のハッキングの犯人の目星もすぐについたよ」
「それなら話が早い」
その美鶴の言葉にこれまで黙って
ことの成り行きを見守っていた遊星が始めて口を開いた。

「俺たちは俺たちの街を守らなければならない。
あの研究文書を見る限り、
お前達が何らかの関わりを持っていることは明白だ。
できれば素直に知っている限りを話してもらいたい」
声のトーンを抑えたそれは穏便にも聞こえたが、
実質内容は脅迫に近かった。
冷静に見える彼の内に秘められた激情が、
最早爆発の一歩手前であることが
付き合いの短い紫音にも容易に想像できた。
それを知ってか知らずか、
遊星の言葉を美鶴は鼻先で一蹴した。
「君たちに素質があるかわからない以上、
今ここで真実を伝える訳にはいかないな」
す、と遊星の瞳が細くなる。
瞬間、遊星、ジャック、クロウの三人は示し合わせていたように、
一斉に構えをとる。
膨れ上がる殺気は、
誰のものか。
「ならば力づくで聞き出すまでだ！」

宣言と共に遊星が地を蹴った。
弓から放たれた矢のように、
遊星は瞬間的に美鶴との距離を詰めていく。
しかし美鶴は弾丸のように迫り来る遊星に対し
迎撃の体勢もまして回避する気配さえない。
その赤く瑞々しい口元に浮かぶのは、余裕の笑み。
「『力づく』で、か。
ふふ、悪くない。
だが『これ』を見てもそれが言えるかな？」
美鶴は軽く手を伸ばすと
半開きになった扉をさらに押し開けた。
ぎぎ、と軋んだ音を立てて開いた扉の影から、
複数の人影が現れた。
「ーーーーーー！」
人影を見た遊星は表情を変え、

体をのけぞらせて動きを止めた。
現れた人影の内の一人が、
震える声で彼の名を呼ぶ。
「……遊星」
「ーーーアキ！」
叫んだ遊星の逼迫した声音に、
紫音たちはそれぞれ
驚きや焦りの感情をあらわにして瞳をすがめた。
目を凝らした闇の中、
新たに現れた人影はアキを入れて四人。
残りの内二人は、
アキとともに外で待機していた双子。
彼らは言葉もなく、
一様に脅えた視線をこちらに投げかけている。
見た所怪我などはしていないようだが、
これからのことを考えると安心はできない。
そして現れた最後の一人は、
こちらも紫音の見知った人物。
「正直、女子どもを人質に取るのは趣味じゃないんだが、
……悪く思わないでくれよ」

短く刈った銀髪が
スクリーンの光を反射して、
暗闇を背景にその輪郭をはっきりと縁取っている。
低く、だがはっきりと響いたハスキーボイスに、
紫音は反射的にその人物の名をつぶやいていた。
「……真田先輩」
紫音の声に明彦はこちらに顔を向けると、
何とも言い表せない複雑な表情をした。
「神無瀬か。
まさか次の再会がこんな形になるなんてな……」
うつむく明彦、そして訪れる沈黙。
明彦も紫音と同じく何か思う所があるようだ。
床を見つめる彼の姿は、
無敗のボクサーにしては小さく映った。
しかし彼はそんな迷いを一瞬で収めると、
未だに心の不安定な紫音を強い眼差しで射抜く。
「だが誰を敵に回そうとも、
俺には守らなければならないものがある。

そのためにはどんな手段もいとわない。
俺はここにきて、
ようやくその覚悟を決めた。
神無瀬、先輩として最後の忠告だ。
これ以上この件に関わるな」
「私の方も君たちをどうこうする気はない。
幸い今夜の件を知っているのは私と明彦だけだ。
今この場で君たちがコピーしたデータを消去し、
今夜のことを忘れる、
というのなら全てを水に流そう」
明彦の忠告、そして間髪入れずに淡々と続けられた
美鶴の言葉に紫音はひるむ。
勿論全てを投げ出すことに意味などないことくらい、
紫音にもわかっている。
真実の探求をやめることも、
ここまで来てしまった以上おそらくできはしまい。
それは遊星たちのようにネオドミノシティを救う、
といった英雄として完璧に訓練された正義感からのものでは決して
なく、
自身の持った能力に振り回された結果による成り行きの延長上、

そんな実に都合のいい理由だ。
それでもいやだと首を横に振れないのは、
紫音の弱さゆえであった。
ただの先輩だった頃の姿が脳裏にちらつく度、
紫音の気力を著しく削り取り決断力を鈍らせる。
そんな紫音とは裏腹に
遊星たちは勢いを失うことはなかった。
「ふざけるな！
黙って聞いてりゃいい気になりやがって。
こっちにだって譲れねえモン沢山抱えてんだ。
覚悟ならお前らにも負けねぇ！！」
「キングたるもの、
どんな相手にも真っ向からぶつかり
華麗に勝利をもぎ取るものだ！
戦わずして相手に背を向けるなど、
ジャック・アトラスの辞書にはない！」
「そうだ。
俺たちは俺たちの街を、
そこに住む全ての人たちを守らなければならない。

たとえお前達にどんな理由があろうとも、
ここで立ち止まることも
まして引き返すことなどできない！」

クロウ、ジャック、そして遊星。

彼らは口々に内に秘めた正義感を吐露するとともに、
自然にお互いの意思の統合を確認し合う。

それは長年の付き合いだけではない、
『絆』という言の葉の精確な体現であった。

そんな彼らの姿を美鶴はまぶしそうに、
そしてどこか羨むように見据えていた。

「どんな状況にも怯まず、
真っ直ぐ前を見つめ続ける。

……かつての私たちにはなかったものだ。

まったく、敵にしておくのが惜しいよ」

それは一体どういうことなのか。

遊星たちはその言葉の真意が掴めず、
いぶかしそうに表情を歪める。

そんな中紫音は一人、
胸の辺りに妙なざらつきを感じていた。

遊星たちと同じく、
その意味は紫音にはわからない。

だがどうしてか、
彼女のその言葉は紫音の中に実感として確かにあった。

『自らの思いの弱さによって未来が閉ざされてしまった』ことが。

デジャビュとも言うべきそれは、
しかし紫音の記憶にはない。

だが胸に残った『しこり』は、
じわりと紫音の不安を煽った。

「だがだからといって、
現状が変化することはない」

先程とは打って変わって強い調子の言葉に、
紫音は延々と彷徨っていたありもしない幻影の迷宮から現実に引き戻される。

言葉とともに美鶴が取り出したのは、
フェンシングで使われる競技用の突剣だった。

柔軟な四角い剣針（ブレード）を持ったそれは、
剣先（ポアン）に三つ又の部品がついている。

「不動遊星、君たちが動けば
ここにいる彼女らが痛い目を見ることになるぞ」

言って、彼女がアキの細い首筋に得物を向ける。
切っ先を向けられたアキがひっ、と息をのむのを見て、
唇を噛みながらそれでも紫音が腰を落として構えをとった、その時。

……りん、……ごーん……

かすかに聴覚を刺激したそれは、
静寂の中落とされた小さな鈴の音のように
頼りなくもはっきりとその場にいる者の耳を打つ。

リン…ゴーン……

教会の鐘の音のような厳かな響きをもったそれは、
耳を澄ませば澄ますほどより鮮明に知覚できるようになっていく。

リーン、ゴーン……

「……何だ？」

「……この音は…」

ほろりとこぼれた、
そのつぶやきは誰のものだったか。

荘厳で美しいその鐘の音は、
しかし聴く者の心を激しくかき乱した。

心の底から沸き上がってくるような不安に、
紫音たちだけでなく美鶴たちまでもが構えを解いてぽかん、と天井を、壁を、
その向こう側を透かすように見回して――――

「しまった！明彦！」

突如上がった濃い焦りの色を滲ませたその声に、
アキたちの背後に控えていた明彦も激しく顔をしかめた。

「くっ！

こんな時に限って…、
タイミングの悪い！」

虚空を睨みつけて悪態を着く明彦。

紫音たちにはそれが何のことだか、
全くわからない。
ただ一つだけわかるのはそれに気を取られた美鶴たちが
ほんの一瞬こちらとアキたちから目をそらしたこと。
生まれたその隙はこちらにとっては最高の好機であり、
恐らく最後の逆転のチャンス。
瞬間、紫音は迷わず床を蹴った。
気づいた美鶴が慌ててエペを構え直し、
迎撃の体勢をとる。
伸ばした手がアキたちに届くまで、後数センチ。
だが。
「甘いぞ、神無瀬！！」
即座に紫音の意図を見抜いた美鶴が、
気合いの声と共にエペを突き出した。
ぎらりとした光の軌跡を描きながら迫り来る剣先を
しかし紫音に避けるすべはない。
相応の痛みを紫音が覚悟した時。
ずん、と建物全体が揺さぶられているような横揺れが

その場にいる者たちを襲った。

「なっ？！」

その揺れにより体勢を崩した美鶴のエペの切先は大きくずれて、
紫音の体をうまくすり抜けていく。

目の当たりにしたそんな奇跡に感謝しながら
勢いのまま飛び込んだ紫音は、
アキと双子らと共に明彦の横をすり抜けて
もつれながら部屋の外へと転がり出た。

二転、三転と転がって
もはや床と天井の区別もつかなくなった頃、
対面の壁にぶつかったことによりようやくその動きを止めた。

壁に強打した肩と未だに回る目を押さえながら半身を起こした紫音は、
同じように床に倒れている双子とアキの身の安否を確認した。

「うう、目が回る～…」

「私は……大丈夫…よ」

「……大丈夫。

助かったわ、紫音」

それぞれの様子からしばらくは立ち上がれそうにないようだが、
どうやら三人とも無事なようだ。

紫音はほっと安堵の息をついて胸を撫で下ろしーーーー

「危ない、神無瀬！！」

そんな美鶴の鋭い声が響くのと、
紫音の背後にあった屋上への分厚い鉄扉が
内側に弾けとんだのは同時だった。

すさまじい破砕音と共に弾けたその扉が、
床に座り込んだままの紫音を襲う。

迫り来る鉄扉の影が紫音をすっぽりと覆い、
視界一杯にそれが広がり…、

ーーーーああ。

唐突に紫音は理解する。

ーーー僕は、死ぬのかーーー

誰かの悲鳴が遠くから聞こえていた。

To be continued…

Full moon2 〜The fourth half

つむった瞳の生み出す暗闇の中を、
紫音は現実を忘れて漂っていた。

地に着いていたはずの足は、
すっかりその感覚を失っている。

何も感じない、
全てが閉ざされた闇。

ふと、誰かが呼ぶ声が聞こえた。

聞き覚えのないその声。

声はやわらかく告げる。

ーーどうしたんだい、

簡単に諦めるなんて君らしくないね。

知らないはずのその声は、
どうしてかひどく紫音の心を揺さぶった。

誰？

自らの唇からこぼれたそんな問い。
しかしそれには答えず、
声は静かに続ける。

こわがらなくていい。
ただ全てを信じて前に進むんだ。
そう、仲間とともに僕に追いついてきた
『あのとき』のようにーーーー

それを最後に、
声は遠ざかっていった。
同時に聞き覚えのある沢山の声が、
堰を切ったようになだれ込んできた。
ふわふわと浮いているような感覚はなくなり、
確かな重みが自分の二本の足に戻ってくる。

「紫音！」

流れ星のように耳を駆け抜けたその声に、
紫音ははっと目を開いた。

光、音、風の感触。

全てを取り戻した紫音が最初に見たものは、
真っ赤な花弁を広げた巨大な薔薇だった。

視界一杯に広がったその花は、
紫音を守るようにふんわりと肉厚の花弁で包み込んでいる。

「大丈夫、紫音？」

近くで聞こえた龍可の心配そうな問いかけに
咄嗟に首を縦に振りながら、
紫音はこの花は一体、と言葉を発した時。

「ありがとう、
『ブラック・ローズ・ドラゴン』」

やはり近くで聞こえたその声に、
美しいその龍は花弁の形をした翼を広げて
中央から突き出た頭をもたげ、
どこか嬉しそうに鳴いた。

それが合図だったように
龍はきらきらと光の花吹雪を散らしながら、
その姿をゆっくりと虚空に溶かしていった。

しん、とした静寂を取り戻した踊り場で、
間を置いて次に響いたのは
ぽかんとした明彦の声だった。

「今のは……。

まさか、『ペルソナ』使いか？！」

聞き慣れないその単語。

それは先程開かずの間の端末に収められていた研究資料に、
頻繁に出てきていた単語の一つだ。

気づいた紫音が
明彦に問おうと口を開きーーー

「気を抜くな！

来るぞ！！」

鋭く響く美鶴の声。

その声の余韻が消え去らぬ内に、
ソレはついに姿を現した。

最初に現れたのは、黒い髪の束だった。

開かれた屋上の扉、

その向こう側に見える景色を覆うように
するすると降りてくる長い髪。

それはまるで、
舞台の終わりを告げる緞帳のようだ。

やがて髪の先からぬらり、と現れたのは、
またしても虚ろな仮面だった。

前とはデザインの違うそれは、
蝶が羽を広げたような形をしている。

大きく空いた瞳の向こう側は、
やはり何も見えない。

ただただ虚ろで空虚に空いた、
『穴』というべきものだった。

そんなひたすらに空虚な穴を通して
しかしソレはじぃ、とこちらを見ていた。

ぞく、と肌が粟立つ感覚。

それは先月、
双子のペントハウスで味わったものと酷似していた。

ごくり、と、
誰かが空気の塊を飲み下す音が聞こえた。

そんな紫音たちを虚ろな目で見下ろしつつ、

ソレはさらにするすると音もなく
その全貌を現さんと降り始める。

目鼻を覆った仮面の次は口だ。

濡れたように艶やかな唇は、
背後から注がれる強い月の光を受けて
逆光になっているにも関わらず、
赤色だと知覚できるほど鮮明な色をしていた。

半開きになった口許からは、
ひゅうひゅうと呼吸らしき音が漏れている。

整った輪郭、その下から現れる細い首。

白く長い、首。

その下にあるだろうと誰もが想像していた肩は、
しかし存在しなかった。

かわりに現れたのは、
樹木の根のように何又にもなった足であった。

首の根元についた触手のようなものを蠢かして、
ソレは建物内部へと這い入った。

動くたびにだらりと垂れ下がった漆黒の髪が、
頭とともに生き物のように揺れ動く。

誰もがそのおぞましい姿に

言葉もなく釘付けになっていた。
どういう原理なのか器用に天井を移動するソレを、
息をするのも忘れて紫音らはただ見つめていたが、
次の瞬間。

ざざざざざざざざ！

何本もの足が地面を蹴っているような、
そんな音をさせてソレは激しく首を左右に揺らしながら
信じられない速度で天井を移動した。

虚ろな視線をこちらに投げかけて、
ソレは一直線に紫音目がけて迫り来る。

完全に予想外なその動きに、紫音は固まった。

まるで根が張ったように、足が床から離れない。

ソレとの距離が目算で一メートル以内にまで迫ったその時。

それまで無表情だったソレが突如、

にぃ、

と笑った。

まるで久しく会っていなかった恋人に再開できた少女のように、
あどけない表情。

三日月型に歪んだ口から、
真っ白い歯がのぞいている。

おぞましい姿と対照的に
どこまでも穏やかで無邪気なその笑顔とのギャップに、
紫音は心の底から湧き上がってきた恐怖に叫び出しそうになる。

凍りついた視線は紫音の意図とは裏腹に、
ソレから目を離せない。

見つめ合ったままのソレが、
一際激しく頭を振った。

ひゅ、と風を切る音が耳をかすめた。

ぞわり、と全身の毛が逆立つその感覚に、
紫音は反射的にそばに居た双子を胸に抱えて身を屈めた。

瞬間、背後の壁が弾けた。

突然の襲撃に驚いた双子の悲鳴が上がる。

双子を強く抱きしめながら
破砕音とともに降り注ぐ埃と破片の中、

おそるおそる紫音はうつむかせていた頭を上げて
自らの頭上を過ぎて壁を砕いたモノの正体を確認した。

そして、紫音は見た。

あのおぞましい生首から垂れ下がっていた髪が、
紫音の後ろの壁にめり込んでいる様を。

ソレは伸ばした髪を壁から引き抜くと、
同じ攻撃を仕掛けようと
再び頭を振りかぶるように大きくのけぞらせる。

襲撃の合図である風の音が複数回鳴るのを、
紫音は確かに聞いた。

咄嗟に紫音は胸の双子を突き飛ばすと、
重いその足を床から引きはがすように動かして
突き飛ばした方向とは逆側に走った。

少し遅れて、
紫音が蹴った床を抉る音が追いかけてくる。

走りながら紫音は自らの腰に手を伸ばした。

そこにはあの銀色の銃が、
ガンベルトに静かに収まっている。

紫音はその冷たい感触を確かめながら引き抜くと、
闇に包まれて鈍色になった銃をこめかみに宛てがった。

「『ブリューナク』！！」
叫んで引き金を引いた。

ぱぁん、と自らの内で
花火が弾けたような感覚が駆け抜けた。

反対の腰に吊ったデッキケースに収められたカードが、
闇の中仄かに青く発光してカードから抜け出した龍が
紫音の横手に現れる。

氷の結晶の形をした頭から細く白い息を吐き出して、
龍は異形のソレを威嚇する。

「スノー・ミストラル！！」

紫音の声に呼応して、
氷を司るその龍は
ありったけの寒気が凝縮された息を吐きかけた。

触れる全てを氷の内に閉じ込めるその息は、
突き刺さった髪の何束かを
そのまま床に縫い止めた。

「任せろ！」

叫んで紫音の横から弾丸のごとく飛び出した美鶴が、
怒号とともにソレに迫る。

「やあああああぁぁぁぁっ！」

気合い一線、振り下ろされたエペが、
縫い止められた髪とソレを半ばから切り離した。

途端、ソレの口から凄まじい悲鳴が溢れ出す。

黒板を爪で引っ掻いたような耳障りな音をまき散らすソレに、
顔をしかめながらもアキが追い打ちをかけた。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』を召喚！
ヘイト・ローズ・ウィップ！！」

ブリューナクと同じように実体を持った
『ブラック・ローズ・ドラゴン』から放たれた茨の鞭が、
容赦なくソレを打ちすえた。

悲鳴を振りまきながらごろり、と床に転がるソレに、
今度は明彦の拳が襲いかかる。

だが。

「ーーーっ！」

床を転がったソレはしかし素早く起き上がると、
首の根元から生えた触手を動かして明彦の拳から逃れ、
くるりと方向転換すると一目散に逃げ出した。

ソレの向かった先には、

静謐な輝きを投げかける望月の下へと
誘うようにぽっかりと口を開けた、
ーーー屋上への扉。

「くっ、逃がすかっ！！」

「待て、明彦！

深追いするな！！」

叫んで追いかける明彦に、
慌てた調子で制止の声を飛ばす美鶴。

しかし聞こえていないのか、
意図的に無視しているのか、
明彦は振り向きもしない。

やがて吸い込まれるように
扉の向こうへと消えていく明彦に、
舌打ち一つ美鶴もすでに見えなくなった背を追いかけていく。

同じように扉をくぐる美鶴の背を、
紫音も追いかけようとして、

「紫音っ！」

背中からかかった声に肩越しに振り向けば、
遊星たちが足をそろえてこちらに駆け寄ってくるのが見えて、
紫音は踏み出した足を戻した。

機材を収めた鞄を肩にかけ、
遊星が真っ直ぐに紫音を見つめてきた。

「行くのか、紫音」

静かな、しかしどこか重いその問いに
紫音は目を伏せた。

そう。

開かずの間の真相の解明と研究資料の回収、
これら全てが終了した今、
遊星たちにはここに用はない。

冷静に行動するならここで美鶴たちの後を追いかけず、
このアクシデントを利用して寮から脱出するべきである。

だがーーー

「ーーーはい」

紫音は遊星を真正面から見つめると、
はっきりとうなずき、深く頭を下げた。

これがどういうことか、
紫音にもわかっていた。

美鶴たちの加勢に行くというのは同時に、
遊星たちを裏切るということだ。

美鶴たちと共にここで命を落とす、
というなら話は別だろう。

しかし全員が生き残ってしまった場合、
紫音自身は美鶴のーーー桐条グループの手に落ちるだろう。

そうなった時、紫音が自分の身の可愛さに
遊星たちとともに犯したことを少しでも話してしまったならば、
遊星たちに危害が及ぶことになる。

だがそれでも、紫音には
彼女らに危険が及ぶかもしれないこの状況を放置して、
遊星たちとともに逃げることなどできなかった。

それはもしかすると良心の呵責などといった、
ひどく安っぽく、自分勝手な衝動に
突き動かされた結果からかもしれない。

しかし今はそれでも構わない、と思った。

それに紫音はまだ、
美鶴本人からこの事件にどのように関わっているのか、
はっきりとした答えを聞いていなかった。

それならせめて全てが明確になるまでは、
美鶴たちを信じたかったし、
少しでも力になりたかった。

「すみません。

これがどういうことか
よくわかっているつもりです。

でも僕はやはり、
先程の事を全て見なかった事にすることはできません」

彼らに理解されなくとも構わない。

紫音はただ、こんな自分の事を気にかけて
親切にしてくれた人たちを一人でも守りたかった。

紫音は遊星たちに背を向けると、
屋上への扉を見据えた。

同じように紫音に親切に接してくれた遊星たちを、
これ以上自分のわがままにつき合わせる訳にはいかない。

少なくとも紫音はそのつもりだった。

「ーーなら、俺たちも行こう」

思いがけないその言葉に驚いて紫音が振り向くと、

強い意思を秘めた遊星の瞳とぶつかった。
その瞳の中には彼の名のように、
明星のごとく強く輝く星が見えた。
遊星は表情を緩めるとこちらに一歩、歩み寄る。
「紫音は俺たちの仲間だ。
仲間が危険を冒そうとしているのに、
俺たちだけ逃げるわけにはいかない」
「少し怖いけど、
せっかく紫音と同じような力を持っているんだもの。
私も力になるわ！」
言ってアキも決意の眼差しを投げかけて、
遊星の隣に並んだ。
「そうだぜ！
俺たちだって、
仲間を見捨てて帰れねえよ！
な、ジャック」
明るい声で言うクロウに水を向けられたジャックは、
しかし腕を組んでそっぽを向いた。

「フン。
ただわざわざ調べるよりも、
奴らから直接聞き出した方が早いと思っただけだ」
冷たく言い放つジャックに、
双子たちはそろって肩をすくめた。
「素直じゃないなぁ、ジャックも」
「ホントね」
くすくすと響く子どもたちの笑い声が、
皆の、そして紫音の心を確かにつないだ。
重なる心。
一体感。
それは紫音たちの心を、
新たな段階へと進ませた。
ー ー我は汝。汝は我。

汝、”愚者”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

「行こう、紫音」

差し出された手を、
紫音は迷わず握り返した。

強い星々の輝きに照らされて、
月は夜空への舞台を登る。

色とりどりの仲間(ほし)に囲まれて、
紫音(つき)はようやく彼らとともに
夜を渡る決心をしたのだった。

To be continued…

Full moon2 ～The latter half

くぐり抜けた扉の先でまみえたのは、
壮絶な光景だった。

今にも落ちてきそうなほどに接近した、
巨大な月。

誇張表現の当たり前な
イラストの世界などではよく見る巨大な月は、
幻想的というよりは不気味という方がしっくりくるほどで
見る者の心に不安感を植え付ける。

光量を極限まで絞った
もう一つの太陽のように白く発光する月、
その狂気的な光に群がる異形の群れ。

闇から生まれ落ちたようなそれらは、
どろどろと不定形な体を揺らしながら
こちらへと、そして屋上の中央に居る美鶴たちへと
波のように迫っていた。

「くそっ…！」

一切の光さえ届かない深海色の波間から、
にょき、と生えた真っ黒に腐食した腕のようなものを
美鶴は必死に切り落としている。

しかし半ばから切り落とされたそれは、

水面を叩くような音をさせて迫り来る闇の中に沈むと
また別の場所から同じ腕を生やす。
暖簾に腕を押すような攻防に、
美鶴たちは少しずつではあるが
じりじりとこちらへと後退している。
紫音は迷わず腰の銃を引き抜いて、
自らの額に当てて引き金を引いた。
「『ブリューナク』！」
「『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」
同じように横に追いついたアキの声と、
紫音の声がはもる。
狂った月の下、冷気をまとった龍と
火の粉のような熱気を孕んだ花弁をまとった龍が
それぞれの目の前に現れる。
轟くニ体の龍の声にも、
ソレらはおののくどころか
どこか嬉々とした様子でこちらへと前進を始めた。
「スノー・ミストラル！」
「ブラック・ローズ・フレア！」
凍れる吐息と炎の息が同時に吐き出された。

それらは互いを打ち消す事なく、
襲い来る闇の脅威をあるいは氷の中に閉じ込め、
あるいは炎の舌で焼きつくす。

「おしっ！

効いてんじゃん！」

紫音の肩越しに覗いていたクロウの弾んだ声。

たなびく雲のように蒸発していくソレに、
紫音もこの調子で少しずつ除去していけば、
と考えていたのだが。

「神無瀬、後ろだ！」

突然の加勢にこちらを振り返った美鶴が
警告の声を飛ばした。

紫音はこめかみに銃口を押しあてながら振り返る。

しかし結果的にそれが仇となった。

どす、

と鈍い音がした。
何だろう、と
紫音が音のした方を見る。

銃を握った腕を、
黒い槍が貫いていた。

そして反転する世界。

腕を貫かれた衝撃で
受け身もとっていなかった紫音は、
気づいた時にはバランスを崩して
床に仰向けに倒れ込んでいた。

倒れた際に打ち付けた右手から離れた銃が、
がしゃん、と重い音を立てて
コンクリートの床に転がった。

一瞬、紫音には何が起こったのかわからなかった。

声はのどの奥で凍り付いた。

腕を貫かれる、という現実にはまず起こり得ない事象に、
理解がついていかない。

その理解の遅れは痛みさえも遮断した。

違和感といえば、ただ一つだけ。

貫かれた右腕が床に固定されているかのように、
ぴくりとも動かせないことだけだった。

「紫音！！」

横手で上がった誰かの悲鳴が、
それまで静止していた時を動かした。

同時に貫いた長い黒い槍が悲鳴に呼応したかのように、
突如動き始めた。

槍は水から引き上げられたばかりの
生きのいい魚のようにびちびちと跳ねて、
貫いた腕の肉を抉り、
傷口を広げるように暴れ回る。

みちみちみちみち。

神経の糸を断ち切りながら血と肉をこねる音が、

耳の奥にこびりつく。
むせ返るような濃い血の臭いがむっと鼻を刺激した時、
紫音はそのおぞましさに堪えきれず、ついに声を上げた。

「――あああああああっ！！！！」

口から溢れたその声は、
これまでの人生で一度として上げた事のないようなもので、
最初、紫音はそれが自らの口から溢れているものだと気づかなかった。

同時に遮断されていた神経がようやくまともに機能し、
痛みが脳髄を駆け抜ける。

それは例えるなら真っ赤に熱した鉄の塊を
強く押しつけられているかのようだった。

加えて貫いた槍が動くたび、
花火が弾けるように新たな痛みの火種が
後から後から沸き上がっては破裂していく。

「このっ！」

駆け寄った遊星が未だに暴れ回る槍に飛びつくと、
力の限り引き抜いた。

ずるり、と濡れた音を立てて引き抜かれた腕から、

大量の血液が噴き出した。

床に咲いた赤い花、
その中心で紫音は体をくの字に曲げて
傷口を押さえてもがき、悶(もだ)えた。

後から後から無限にわき上がる叫びは、
肺の中身が空になっても延々と口から溢れ、
とうとう限界を振り切って酷使し続けた喉が潰ると、
終いにはひゅうひゅうと情けない音を立てるばかりとなった。

しかし内に押さえきれない叫びは、
喉が壊れると同時に今度は激しい痙攣と化して
未だ紫音の体から溢れていた。

その鬼気迫る光景に、
周囲から息をのむ声が漏れる。

ややあって我に返ったアキが紫音の腕に飛びつくと、
懐から取り出したハンカチで肩を縛り始めた。

しかし今なお溢れ出る血と脂でぬめり、
うまくいかない。

腕から引き抜かれた槍は
遊星の手から離れると、
ワイヤーで引っ張られているかのように
どこかへ戻っていった。

紫音は痛みによる混乱でぐるぐると回る目で、

それでも辛うじてその槍の行く先を追っていた。
槍の行き着く先には、
真っ白い満月を背に宙を漂う生首があった。
しなやかでほっそりとした首から生えた
触手のようなものをなびかせて、
ソレは穏やかな笑みをたたえてこちらを見下ろしている。
腕を貫いた槍に見えたソレは、
取り逃がしたあの生首から伸びた髪の束だった。
風に揺れる髪の一部に戻った黒い槍は、
その束だけが紫音の血を吸って重く垂れ下がっている。
ソレはまた唇だけで世にも嬉しそうに微笑むと、
激しく頭を振った。
風の中、ひゅ、とかすかに聞こえる襲撃の合図。
「また来るぞ！」
美鶴の鋭い警告の声。
しかし気が狂いそうな痛みに呻く紫音は、
それに反応することができない。
そして止血を試みているアキも同様だ。

先程とかわらず無様に床でのたうち回る紫音の目を、
白い満月の光が焼いていたがーーー

それまで煌煌と注がれていた月光が、
ふ、と遮られた。

生首の襲撃からアキと紫音を守るように立ちはだかる彼の手には、
紫音の手から離れた銀色の銃が握られている。

「ゆう、せい…さん……」

はっきりと動かしたはずの唇からは、
掠れた声しか出なかった。

遊星は紫音の声に振り向かなかった。

代わりに握った銀色の銃をゆっくりと額に当てると、
ためらいなく引き金を引いた。

『集いし願いが』

ーーーずがん、

と。

銀の銃は遊星の額を打ち抜いた。

『新たに輝く星となる』

「光差す道となれ！！」

瞬間、呼応するように遊星たち５Ｄ’ｓのメンバーの腕に、
不思議な痣が浮かび上がり、赤い光を発した。

光は中空で一つに合わさると
高く高く天へと駆け上り、夜空を貫いた。

甲高い何かの声が、
空気を震わせ夜空に轟いた。

『赤き龍』

誰かがぽつりと呟く声が、
朦朧とした意識の端で聞こえた気がした。

「飛翔せよ！
『スターダスト・ドラゴン』！」

遊星の力強い声に、
紫音ははっとして視線を空に向けた。

そして、紫音は目にした。

夜空に舞い上がる星のかけらとも言うべき、
その龍の姿を。

龍は薄い膜を幾重にも重ねた繊細な翼を羽ばたかせるたびに、
星くずのような光のかけらを振りまいた。

それはこの狂気と混沌の闇を、
明るく照らし出す。

夜空を彩る星の化身のようなその龍を、
紫音はただ瞬きすら忘れて見つめていた。

ふと気づけば、先ほどまで脈打つごとに
気が狂いそうな痛みを発していた右腕からは、
ほとんど何も感じなくなっていた。

抜け落ちてしまった痛覚に
一抹の不安さえないと言えば嘘になるが、
まるで降り注ぐ星くずに勇気づけられているようにも思えた。

「迎え撃て！スターダスト！」

遊星の叫びに反応して、
星くずの龍が体をのけぞらせた。

それまで穏やかに舞い降りていた星くずが、
龍の口許に集まり渦を巻き始めた。

同時にまるで電車が
トンネルの中に入った時のように耳鳴りがし始める。

やがて周囲に影響を及ぼす限界まで
空気が集まり凝縮された時。

「響け！
シューティング・ソニック！」

遊星の号令に従い、
それは目標へと解き放たれた。

圧縮された空気が音速の速さで空間を駆け抜け、
その衝撃波で屋上の床や壁を巻き込みながら
一瞬の内に敵を呑み込んだ。

轟音と爆音が代わる代わる夜の中で木霊する。

吹きすさぶ風と吹雪のように舞い荒れる星くずに、
紫音は思わず目をつむった。

風に弄ばれた長い前髪が、
しきりに頬を叩いた。

台風のただ中にいるような激しい風は、
しかし次第におさまり、
元の静寂が戻りはじめる。

やがて完全な静寂が辺りに落ちた頃、
紫音は固く閉じていた瞳をうっすらと開けた。

まず目に入ったのは、
変わり果てた屋上だった。

局地的で小規模なハリケーンでも通過したかように、
明らかに人為的ではない荒れように絶句して
紫音は気づかぬうちに止血処理の済んでいた腕を庇いながら
ゆっくりと上体を起こして辺りを見回した。

コンクリートタイルは根こそぎ吹き飛び、
屋上の手すりは半ばから外へとねじ曲がり、
さらに中央の床には人一人楽に入れるほどの大きさの穴が空いている。

これほどの被害が出たにもかかわらず、
誰一人として傷ついていない所を見るに
最早一種の奇跡と言っても過言ではないだろう。

「お…終わったの…？」

同じように隣で様子をうかがっていたアキが、
呆然とつぶやく。

大挙し波のように押し寄せていた闇の分身たちは、
先の衝撃波で全て吹き飛んでしまったのか、

始めから存在していなかったように姿を消していた。

そんなありとあらゆるものが破壊され尽くし、
沈黙した世界の真ん中に、
彼は立っていた。

彼の端正な横顔がすでに消え去った龍からこぼれ落ちた、
奇跡の残照のようにきらきらと輝く星くずに照らされている。

「ゆうせい…」

アキが彼の名を囁く。

ほっとした拍子に目の前にまで迫っていた脅威を思い出したのか、
その声はこみ上げる涙で震えている。

ーーーそして同じように紫音も
耳鳴りがするほどの静寂(しじま)に、
完全に気が抜けてしまっていたのだろう。

くらり、と不意に襲いきためまいに、
意識を持っていかれてしまった。

血を失い過ぎた為か、
ぐるぐると回る視界が吐き気を催し

ひどく気分が悪い。

たまらず閉じた瞳の中で
むき出しの冷たいコンクリートの感触を全身で感じながら、
紫音は静かに本物の静寂の中へと落ちていく。

瞼の裏の闇には、
最後に見上げた夜空が張り付いている。

遙か彼方にぽつんと浮かんだ月。

先ほどまであれほど大きく
丸々としていたと思っていた月は、
今は細々と尖り
頼りない光を投げかけるばかりだった。

Full moon2 ～The latter half（後書き）

みなさん、こんばんは！

満月戦、楽しんでいただけたでしょうか？

これで第二章はおしまいです。

そして次回より第三章へ突☆入！

……といいたいのですが、その前に。

これより一週間ほどお休みを頂きたいと思います。

勿論、打ち切りなどではけしてございませんので、

ご安心下さい。

お休みの理由は、この小説の『表紙イラスト』を制作したいからです。

前々から表紙イラストが欲しいなぁ、

とは思ってはいたのですが、

それに時間を取られて

楽しみに待っていて下さる皆様をあまり長くお待たせするのもなぁ、

という思いもあり、

なかなか制作を決意を固められないでいたのですが……。

数週間前から読者アンケートを設置しているのですが、
その中では『遊戯王５Ｄ'ｓ』、『ペルソナ３』の内どちらかをご存じない、
という方もいらっしゃることが判明しまして、
それでも読んでいただけていることに嬉しさを感じる反面、
少し寂しさを感じていました。

もちろんどちらかの作品を知らないでも
楽しんでいただけるように努力しておりますし、
これを機に双方の作品を知っていただける機会になればとは思っていました。

ーーーが。

それより何より、

双方の主人公のイケメン度合いを知って欲しい！

という気持ちが強く出てきました。

遊星と紫音（キタロー）、
どちらもタイプは違えどクールなイケメン。
その姿を間接的にでも見てもらえればなぁ、
と思った事が『表紙』の制作を決めた所以です。

……とはいえ、私の画力は
イマイチどころの騒ぎでないのも事実。

もしも私のイラストを見てイメージを
壊してしまったら本当に申し訳ありません！
何とぞご理解ご協力をお願い致します。
歌音

二章　あとがき

皆さん、こんにちは！歌音です。

今回も応援して下さった皆さんのおかげで
第二章を無事に完結させる事ができました！

感想を下さったり、お気に入り登録などして下さっている方には、
特に感謝しています！

いつもお世話になっています、
そして本当にありがとうございます！

コミュも本格的にスタートして、
本編も徐々に盛り上がりってまいりました。

今後もどんどん増えていきますので、お楽しみに！

そして、扉イラストがついに出来上がりました。

イラストは序章の一番下に掲載していますので、
お時間のあるときにチェックして見て下さい。

さて、今回はお話もページも前回の二倍ほどにふくれあがってしまいましたので、
各パートにわけて解説させていただきます。

☆コミュ編

ついにやってきました、コミュニティーです。

この小説を執筆するにあたって最もやりたかったことの一つなので、ここまでこぎつけられてとても嬉しいです！

ただそれだけに最も苦悩している部分でもあります。

どれもいいお話にしたいですから。

これからも一つ一つ、大切に書いていきたいです。

ちなみに私はアキコミュが一番書いていて楽しいので好きです。

私自身アキさんが好きですし、遊星との仲をとても応援している一人です。

逆に毎回書くのに苦労しているのは、遊星コミュです。

紫音と遊星、二人の対比には毎回悩みますし、

遊星って普段はアニメの通りですから取っ付きにくいんですよ……。

逆にジャックコミュはとても書きやすいです。

最近は就職活動で苦労されている方が沢山いらっしゃるかと思いますが、

がんばるキン……ジャックの姿を見て少しでも勇気づけられれば、

と思っています。

そして私自身も今年の春にようやく就けた仕事をがんばりたいです！

それでお金ためて、カード買って、デッキつくって、

また皆さんに楽しんでもらえるよう努力したいです。

ところで、少し前からアンケートを置かせていただいているのですが、

現在最も人気のコミュは、やはりというか遊星コミュでした。

……がんばります！

それから、アンケートにご協力下さった皆さん、

アンケート最後の項目で温かいご声援を下さった皆さん、

本当にありがとうございます！

アンケート欄ではお返事は返せないのですが、

一つ一つ丁寧に読ませていただいていますし、

とても大きな心の支えとなっています。

アンケートの質問はちょくちょく変わっていきますので、

もしよろしかったらまた何度でもお答え下さい。

☆デュエル　バウンス（除外）デッキＶＳエレキ

前回がビートデッキ対決だったので、
今回はロックデッキ対決、
と少しテクニカルな対決になったのではないかと思っています。

バウンスは最近の環境ではとても強いですよね。

シンクロもエクシーズもまとめてデッキに返してしまえば、
もう何も怖くない！状態ですよ。

今年春の優先権ルール改定（詳しくは今後また本編で解説していきたいです）で
さらに強化されましたし、
現環境に割と刺さるのではないかと思います。

ただ、戻すと厄介な奴もいるので注意が必要ですが……。

トリシュ＜　あれ、効果もう一度使わせてくれるんですか

霧虫＜　同じく

……うん、君らには使わない。絶対にだ！

それから今回は手札事故というものを再現したかった回でもあります。

手札事故ってつらいですよ。

特にロックデッキで手札事故は致命的です。
ロックデッキはロックできなければ話にならないですから。

9月の制限改訂前のこの環境では、
ロックデッキがものすごく使いやすかったのですが、
『大嵐』が帰ってきた環境ではどうなっていくのか少し不安です。
前回発売のパックでせっかくエレキも強化されたのになぁ。
それにしても今回の制限改訂で遊戯王もかなり変わりましたね。
具体的ことはまた本編で言及していきますので、
このお話はまた次回に。

☆日常編

今回の日常パートは、
主に前述のデッキ構築がメインでしたね。
後はタッグフォースで遊んでいたくらいですか。
5ではかなり初期パックにライロが入っているのですが、
軒並みレア度が高く集めるのが大変でした。
今年の秋に発売される6ではどうなっているか、少し不安が残りますね。

あ、後６ではあの新登場なのに
遊星を昔から支えていたカードがおまけでついてきますね！
キャラクターも一気に増えますし、とても楽しみです。
買ったら、また紫音にもやらせようかな。

そうそう、ゲームと言えばモンハンについてですが、
今後もわりとキーアイテムとして出てきます。

それにしてもモンハンはＰ３ｒｄになってからは
謎の亜空間攻撃がなくなるし、モンスターのスタミナが出てきたので攻撃チャンスが多くなるしで、
ご新規さんはやりやすくなったかな、と思いますが、
その分ヌルゲーになってしまいましたね。

……といってもかく言う私も２ｎｄＧからのユーザーですので、
あんまり言えないのですが。

なので、今度はＭＨＰを貸してもらってやる予定です。

何でもその時代は、ディアブロに弱点がなかった、とか、
黒ディアやガノトトスが如何に強かったか、とか、
フル装備でないとスキルがつかない、可愛い装備がキリン以外にあんまりない、
農場がない、肉も蜂蜜も定期的にとれないから素材ツアーが生命線、
お供もいない、
ラオシャンロンに会うのがいかに大変か、ランス最強時代、大剣に溜めモーションがない、

武器が少ない、双剣は乱舞専用、片手剣弱小時代、ｅｔｃ……。
といったＭの人専用（訳：とどのつまり君はすばらしい）だそうで楽しみです。
長らく３ｒｄしかやっていなかったので、
まずは２ｎｄＧに回帰するところからまた始めて行きたいと思います。

それから今章ではペルソナメンバーの真田、ゆかりも登場しました。
特にゆかりパートはやや本編よりでしたね
彼女の発言の意味とは？
次回から語っていきたいと思っています。

☆本編＆ａｍｐ；満月戦
ついに相対する５Ｄ’ｓメンバーとペルソナメンバー。
今回の満月戦はもう一人の主人公たる遊星の覚醒編でした。
楽しんでいただけたでしょうか？
そして次回からは新章突入。

ようやく明かされた敵の正体、そして新たにふくれあがる謎。

またまた急展開していきますので、
次回もどうぞよろしくお願い致します！

The Moon Start

それはプールに飛び込んだような感覚だった。
全身を包み込むざわざわとした音と、
擬似的な浮遊感。

耳の中で反響する雑音だらけのその中で、
しかし微かに聞こえた声があった。

――君にも、協力してもらいたい。

……何？

思わず発したつぶやきのような問いかけにも、
声はしかし答えない。

――君専用の召喚機もすでに用意されている。

何のことだ……？

――『影時間』の中にのみ現れる、
これが『タルタロス』だ。

交わされる、ひどく一方的な会話。

しかしそれはざわざわと、
あるはずのない記憶を刺激した。

胸の辺りにもやもやしたものが広がる。

まるで喉をつまらせたような気持ちの悪さを抱えたまま、
紫音は落ちていく。

記憶という名の暗闇の中へ。

青い空にぽっかりと浮かんだ月。

水面の下で揺れるネオドミノシティ。

この世界を訪れるのは一体何度目だろうか。
足元で揺らぐネオドミノの街を見下ろしながら、
紫音がぼんやりと考えたが、
すぐに面倒になって思考を放棄した。

わかるのは、ここが夢の中だということだけだ。

最初こそ美しくもどこか恐ろしい
巨大な月昇るこの世界に
畏怖とも称するべき感情を抱いた事もあったが、
変化のない世界は今やただただ退屈なだけとなっていた。

早く覚めないかな、
などと思ったその時。

柔らかい声とともに、
変化は突如訪れた。

「やあ。

ようやく会えたね」

背後からの声に紫音は驚いて振り返る。

紫音の動きに長く伸びた前髪が勢いよく跳ね、
その隙間から垣間見えた先に声の主はいた。

年の頃は十歳前後だろうか。
短く刈られた柔らかい黒髪、
その年の少年の特徴的な丸く整った輪郭、
チャームポイントは左目の下の泣きぼくろだろうか。
同じような年頃の龍亞や龍可とはまた違った
品の良さそうな雰囲気をした子どもだ。
「ーーー誰？」
紫音は怪訝な顔で、
現れた少年から一歩距離を取りながら問う。
すると少年は少し唇を尖らせて、
「つれないなぁ。
せっかくまた会えたっていうのに」
丸々太ったどんぐりの形をした黒めがちな両の目で、
少年はこちらを見すえる。
その人懐っこいというよりは
馴れ馴れしい少年の態度に半ば辟易としながらも、
紫音はしかし暇つぶしにはなるか、と軽く考えて会話を試みた。
「君は誰？いつからここに？」
すると少年は何が嬉しいのか満面の笑みを浮かべて、

「僕はいつも君のそばにいたよ。
今までも。そして、これからも」
普通ならば背筋がぞっとなるようなセリフのはずのそれは、
しかしこの子どもが言うと何故だかうなずいてしまいそうになる。
この不可思議な空間で出会った、不思議な子ども。
少年の真っ黒な瞳を、
紫音は言葉もなく見つめ返す。
めまいさえ覚え始めるような、
長いのか短いのかもわからない硬直したこの時間。
しかしこの少年との間に、
言葉といった簡略化された安っぽい意思疎通はいらない。
ただこうしているだけで
全てがわかり合えているかのような錯覚。
それはまるで鏡と向き合っているような不思議な感覚だ。
何故そんな感じがするのか理由はわからなかったが、
胸の奥から沸き上がる親近感がただ紫音にそう伝えていた。
ーー我は汝。汝は我。

汝、”月”のカードを選び取りし時、
我ら、更なる力の祝福を与えん…

頭の中で響いた声は、
どこかこの少年のものに似ていた気がした。

どれくらい、こうしていただろうか。

少年はふと紺碧の空を見上げて、あ、と呟くと

「あーあ。もうお別れの時間みたいだ」

唇をつり上げて少年は
ひどくがっかりとした表情でこちらを振り向いた。

何ごとか問おうとした紫音の声を遮って、
彼は少し首を傾けた。

「次に会う時はもっと思い出しておいてね。

君が無くしてしまった色んなこと。

ーーそして、僕のことも」

す、と少年が天上を人差し指で指し示す。

紫音が目でそれを追うと、
ちょうど最も高い位置まで上がった月があった。

ひとかけらの欠けもないーー望月。

目を焼くような白さが視界一杯まで広がり、
やがてぐるり、と視界が反転した。

月の模様が上下左右、裏返る。

反転世界の真ん中で、
催眠術にでもかけられたかのように唐突に襲い来た眠気に
紫音はただ身を任せて瞳を閉じた。

……。

……

1

水面から顔を出した時のように、
意識は唐突に浮上した。

いつか見た真っ白い天井に壁、シーツ。

ここはどこだろう、と以前はかなり動揺したものだが、
今回は意識もはっきりとしており
前ほど慌てることはなかった。

仰向けのまま視線を天井に固定したまま瞬きを繰り返し、
紫音はゆっくりと過去の記憶を遡る。

紫音の中で最も記憶の新しい日、
――あれは確か満月の日だ。

巨大な月がかかった空の下、
紫音らは遊星たちと廃寮になったはずだった月光館学園の巖戸台寮
に潜入した。

そして紫音たちは見えた。

立ちはだかる桐条の令嬢と、
再び現れたあの影のような異形のモノに――――

「おお、気がついたみてーだな」

病室の引き戸が開く音とともに響いたその声に、
紫音は上体を起こしてそちらに顔を向けた。
明るい顔で入室してきた５Ｄ－ｓのメンバーを、
紫音は軽いデジャビュを感じつつも会釈して迎えた。
「見たところ、顔色はよさそうだな」
遊星の言葉に、紫音は少し考えてからうなずいてみせた。
熱っぽい感じも無ければ、気分も悪くない。
知り合いの先輩ではないが、
むしろ凝り固まったこの体をほぐしたいくらいだった。
「そうか。
もう腕は動かせるか？」
ーーー腕？
一瞬考えて紫音ははたと思い出す。
そうだ、自分がここにいる一番の理由は、
あの満月の夜に腕を貫かれたことによる失血が原因だったのだ。
聞かれるまで完全に忘れていた自分の間抜けさを呪いながら、
紫音はおそるおそる右腕を持ち上げた。

しかし紫音の思惑とは別に
右腕は拍子抜けするほどひょい、と軽快に上がった。
そのままゆっくりと握ったり開いたりを繰り返したが、
貫かれたという事実など存在しなかったように
腕は紫音の意思通りスムーズに動いた。

それを見た紫音を含めた一同は、
ほっと安堵の息を漏らしたのだった。

「よかった〜、紫音。

オレどうなっちゃうかと思ったよ。

腕が動かないとデュエルしづらくなっちゃうもんね」

「アキさんの止血処理が早かったのだってあるわ」

「そ…そんなことないわ。

近くに大きな病院があったから、
処置が早かっただけよ」

続いて飛び出した安堵の声に
病室はにわかに騒がしくなったが、
突如がらり、と開いた扉の音に
皆は示し合わせていたかのようにひたりと口をつぐんだ。

同時に彼らの顔に

先程とは打って変わった険しい表情が浮かぶ。

「そろっているようだな」

すでに聞き慣れた彼女の低い声に、
紫音は知らず口を引き結んだ。

戸口に立っていたのは
あの夜に再会を果たしたばかりの先輩
ーー桐条美鶴だった。

美鶴はサンダルのヒールを
上品に鳴らして入室してきた。

そんな美鶴の優雅な挙動の中の不審な点を見逃すまいと、
遊星たちは警戒心も露に睨(ね)めつけている。

そして美鶴も無言でこちらに視線を送っている。

それは遊星たちを飛び越えて真っ直ぐ紫音へと注がれていた。

絡み合う視線。

一触即発の空気。

限界までふくれあがったそれは、
後は爆発するのみとなる。

ーーーなにをしにきた

口火を切って落とすべく
そんなふうに遊星の唇が震える、
一瞬前。

「あら？あなたたち……」

「ん？お前ら、何でこんな所に？」

聞き覚えのない新たな声が、
病室に木霊した。

２０１０年６月１３日　月曜日

遊星たち５Ｄ'ｓの面々に、美鶴、
そして突如現れた大柄でがたいのいい男と、
かっちりとスーツを着こなした細身の女性。

四日ほどの眠りから覚めた紫音のさして広くもない病室は、
訪れた来客であっという間に一杯になった。

遊星たちと美鶴との間を

割るようにして入室してきた見知らぬ顔ぶれに、
最初に声をかけたのはクロウだった。

「牛尾じゃねーか！

何だってこんな所に……」

目を見開いて心底驚いた様で指を指すクロウに、
牛尾と呼ばれたがたいのいい男は顔をしかめて近寄ると、

「クロウ！

テメー、上司を呼び捨てにすんなって、
何度言わせんだよ！」

遠慮なくクロウの頭をはたいた。

すぱん、と聞いていて
気持ちのいい音が辺りに響き渡る。

「あ、痛ってぇ。

きったねーぞ！権力を笠に着た横暴だぜ」

「できの悪い部下を叱るのも上司の努めだってな。

それよりお前ら、何でこんなところに……」

頭を抑えてさらに訴えるクロウを無視して、
牛尾は病室を見渡した。

その呟きに反応したのはジャックだった。
「俺たちは紫音の見舞いに来ただけだ」
「，，紫音，，？」
隣に並んだ女性と顔を見合わせる牛尾に
ジャックがあごでこちらを示した。
ふいに向けられた二組の視線に
紫音はどうしていいかわからず、
結局無言で彼らを見返しただけだった。
「…それで、牛尾たちは何故こんな所へ？」
横手から上がった遊星の問いに答えたのは、
しかし彼らではなかった。
「私がお呼び立てしたんだ」
かつん、とヒールの音を響かせて、
それまで静観していた美鶴がこちらに歩み寄って来た。
そして牛尾たちと向き合うと優雅な仕種で一礼した。
「本日はお忙しい中ご足労頂きまして、
ありがとうございます。
申し遅れました。

私は桐条グループ代表の代理を務めさせていただいております、
桐条美鶴です」

年齢に似つかわしくない圧倒的な雰囲気をまとった美鶴の挨拶に、
クロウの上司二人は慌てて居住まいを正した。

「治安維持局特別捜査課長の
狭霧　美影＜さぎり　みかげ＞です」

「お……同じく治安維持局特別捜査課長補佐の、
牛尾　哲＜うしお　てつ＞だ」

彼らの手帳を確認した美鶴は再び小さく会釈を返すと、
目を白黒させている紫音たちにも顔を向けて、

「そう警戒しないで欲しい。

今日は君たちと神無瀬に、
頼みがあって来たんだ」

「頼み、だと」

おうむ返しに問う遊星に、
美鶴はすっと瞳を細めてうなずいた。

「先日対面した時の様子を見る限り、
現時点でお願いできるのが君たちしか居なくてね。

この間の非礼は詫びる。この通りだ」

素直に頭を下げる美鶴に、
アキや双子たちは顔を見合わせる。
ジャックはいささか鼻持ちならない様子だったが、
クロウは困ったように頭をかいて遊星を見た。
そして遊星は、
「わかった、話を聞こう」
「遊星！！」
その決断に声を荒げるジャックを無視して、
遊星はゆるぎない声で続ける。
「そのかわり、その件についての全ての情報を
余す事無く話して欲しい」
真っ直ぐに注がれる
遊星の真摯な眼差しを全身で受け止めながら、
美鶴も深くうなずいてはっきりと告げる。
「もちろんだ、君たちは知る権利がある。
余す事無く全て伝えよう。
『シャドウ』のこと、『影人間』との関連性。
そして『召喚機』の引き出す君たちの潜在能力、

ーーー『ペルソナ』のことも」

美鶴の口から流れ出てくる聞き覚えのある単語に、
５Ｄ'ｓの面々はそろって表情を険しく歪めた。

そして紫音はそれらに妙な既視感を覚えて、
やはり表情を硬くした。

つっかえたように胸を刺す
その小さな痛みに鼓動を高鳴らせて、
紫音は言葉を無くしてただ美鶴を見つめ返していた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

＊

この小さな病室ではつもる話もしづらかろう、
と言う美鶴に素直に従って
遊星たちは病室を後にしていった。

彼らの後ろ姿を見送った紫音は、
備え付けのクローゼットの中にかかっていた制服に着替えた。
羽織った制服はどうやら全て新品で、
着慣れない感覚が初めてこの街に来た日のことを思い出させた。

あの日は転校の手続きの不備や交通機関の遅れなど
あらゆる様々なトラブルに見舞われ、
この街に着いたのは深夜だった。

降り立った駅の天窓ごしに見上げた空には、
星明かりをかき消すほどに
強い光を放つ月が浮いていたのを覚えている。

雨でも降ったのか外は所々水たまりができており、
地図との照合に集中していた紫音は
うっかり踏んでしまったのだった。

跳ねた泥水が裾に散り、
浸ったブーツの先が波紋を広げる。

広がる波紋がやけにとろりとしていて、

まるで血溜まりのようだーーーなどと考えたものだ。

首元のリボンタイを結び終えると、
紫音は回想を打ち切った。

少ない荷物を整理し鞄に詰め込むと、
紫音は遊星たちの背を追って病室を後にした。

誰もいなくなった病室の扉は、
去っていく紫音の背後で音もなく閉じられた。

病院の待合室で皆と合流を果たした後、
紫音たちは美鶴に促されてさらに移動を開始した。

美鶴の用意した車に揺られて約１０分ほど、
着いたのは紫音が入院するに至った事件の現場である
『月光館学園巖戸台分寮』だった。

夜間はあれほど不気味に映った寮も、
こうして陽光の下で見れば別段何の変哲もない建物だ。

レンガ造りのシックな外観が、
建物周辺の風景に重厚さを醸しだしている。

玄関をくぐると日の光に照らされたロビーが広がっていた。

壁紙や調度品などは紫音がこの寮を出たあの時と全く同じで、

一年前の幻影さえ見える気がして
紫音は思わずその場に立ち尽くした。
胸の奥に仕舞われていた記憶が、
陽光に照らされて綻んだ花びらのように開き、再生される。

かつて毎日一緒だった友人たちの明るい声が、
ロビーの奥のラウンジから聞こえてくる。
笑い声、呆れ声、怒り声、
そして、泣き声。

ーーーどうして。

いつかの記憶の中で、誰かが泣いている。
込み上げる涙にしゃくり上げ、
押し寄せる悲しみに随分とひしゃげた、声。

ーーーどうして、おいていっちゃうのーーー？

耳の中で木霊する、幻。

「ーーー神無瀬」

背後から響いた声に、
紫音はびくりとして振り向いた。

そこには怪訝そうに
こちらを見つめる美鶴の姿があった。

「どうした、具合でも悪いのか」

「……いえ、すみません」

美鶴の言葉に反射的に謝りながらも
忙しく視線を巡らせて
紫音はようやく自らの状況を把握した。

どうやら過去との邂逅に耽って、
入り口に立ち尽くしてしまっていたらしい。

紫音は慌てて脇に下がって美鶴へ道を譲った。

回想に沈んで周りが見えなくなるのは、
最近の悪い癖だ。

そんな紫音に美鶴は困ったように少し笑うと、
緩く頭を振った。

「謝ることはない。
君が病み上がりなのを承知しながらも、
こんなところへ連れ出したのは私だからな。
むしろそのセリフは私の方さ。
もし気分が悪くなったら、
遠慮なく声をかけてくれ」
美鶴の気遣いに恐縮しながら、
紫音は少しだけ笑みを浮かべてうなずいた。
通り過ぎる美鶴の姿をぼんやり見つめて、
紫音は少しだけ再び先の回想に思考を沈ませた。
未だに紫音の耳の奥で悲しげに反響しているその声は
こんなに鮮明であるのに、
その声が誰のものなのか、何を悲しんでいるのか、
いくら回想を巡らせても思い出せなかった。
やがてラウンジから響いた仲間たちの声に呼ばれ、
紫音は頭を振って無理矢理に思考を現実に向けると
返事を返して足早にそちらに向かった。
「それで、俺たちへの頼み、
というのは一体何なんだ」

全員がラウンジのソファに腰を落ち着けたのを確認して、
遊星は開口一番、険しい口調でそう問うた。

真剣な遊星の問いに紫音や５Ｄ'ｓメンバーは勿論、
セキュリティから来たという二人の捜査官も
一斉に美鶴に視線を向けた。

アキや双子たちの不安そうな視線、
遊星やクロウ、ジャックの敵意の見え隠れする厳しい視線、
若干話についていけないといった
牛尾と美影の不思議そうな視線、
そんな様々な視線を真っ直ぐ受け止めて
美鶴はその艶やかな唇を開いた。

「それについて話す前に、
君たちには知っておいてもらいたいことがある。

まずはそうだな、先日君たちが見えた怪物
ー一我々は『シャドウ』と呼んでいるのだが、
そもそもこれが『どういったもの』か
君たちは知っているか？」

美鶴の問いに皆はそれぞれ顔を見合わせた。

解答は勿論のことだが、
どちらかというと美鶴のそんな問いの真意を掴めず
戸惑っている風でもあった。

やがて視線を戻した遊星が
いや、と短く首を横に振るのを確認すると、
美鶴は話を続けた。

「端的に言うと『シャドウ』とは、
抑圧された人間の精神が何らかの要因で
本人の支配から離れた状態となったもののことだ。
そして『影人間』とは精神が『シャドウ』化して抜け出し、
残された体――抜け殻のことなんだ」

『――――!』

突きつけられた予想外の事実に、
紫音は絶句した。

あのおぞましいものが人間の精神の塊であるなど、
すぐに認められるはずもない。

それは『シャドウ』を目の当たりにした者は誰しも考えは同じらしく、
皆一様に驚きと戸惑いに表情を強ばらせている。

「ちょ、ちょっと待てよ!!
あの怪物が人間の精神体だってんなら、

俺たちは『影人間』になっちまった人々
『そのもの』と戦ってたってことかよ?！」

「そうだ」

ソファから身を乗り出して問うクロウ。

しかしいかなる反論も許さないとでも言うように、
美鶴は短くうなずいた。

「精神が『シャドウ』化してしまう人間の共通点は不明だが、
『死』を強く望む者は『シャドウ』化しやすい傾向にあることが
最近の研究で徐々に解明されてきている。

完全に『シャドウ』化して抜け出してしまった者の精神は、
二度とは人の精神に戻れない。

しかも『シャドウ』化してしまった精神は自我を失って暴走し、
同時に周りの人間の精神を犯し、
『シャドウ』として取り込もうとするため
極めて危険な存在だと言える。

そこでだ」

美鶴は自らの膝に向けていた視線を上げ
言葉を区切ると集まった5D' sのメンバー、
そして紫音を見つめた。

その眼差しにははっきりとした意志が灯っており、
美鶴の誠意が伺えた。

彼女は口を開く。

「君たちに、この『シャドウ』の討伐を依頼したい」

ついに言い渡されたその言葉に、
メンバーの表情に戸惑いの色が濃くなった。

……

……

To be continued…

Conference 1 ～The first half

皆がお互いの顔を見合わせる中、
双子の片割れの龍亞が眉根を寄せながら口を開いた。

「で、でもさぁ。

そんなこと何でわざわざオレたちに頼むんだよ。

怪物が暴れ回っていること知ってたんなら、
あんた達がやればいいんじゃないの？」

なるほど最もなその問いに、
しかし美鶴は完璧なポーカーフェイスを崩さなかった。

「もしも私たちの中に『シャドウ』と戦える力を持った者が居たならば、
私たちで解決しようとしただろう。

だが『シャドウ』と対等に戦うには、
『力』と『素質』を持っていなければならない。

そして残念ながら私たちの中に
それらを持ち合わせ人材は居なかった」

「だから俺たちにその厄介事を押しつけようと言うのか」

ジャックの容赦のない一言に、
美鶴はやや自嘲気味に唇をつり上げると

やはり飄々とした様子であるがままの事実を淡々と告げる。

「否定はしない。

だが誰かがやらなければ、
ネオドミノシティはおろか
世界中がシャドウと影人間だけになってしまう可能性もある。

月並みな表現だがそれを食い止められるのは、
素養を持っている君たちだけだ」

『君たちだけ』

美鶴の言葉が、
紫音の両肩に重くのしかかる。

漫画などではよく聞くそのフレーズは
ありきたりで陳腐なものだと思っていたが、
いざ自分に向けられると
何と表現していいかわからない複雑な気持ちになった。

先月、そして先日の件からして、
命の保証などありはしないのだろう。

だがーーーー

「わかりました。

引受けます」

紫音は美鶴にはっきりと、
そう告げた。

紫音には自分の死を悼む家族はいない。
よくしてくれた人たちが居ない訳ではなかったが、
いづれも他人の範疇から抜きん出ているとも思わない。
記憶などすぐに風化してしまうものだ。
『現在』が『過去』のものになってしまえば
それまでだとも思っていた。
不安に心乱されることも寂しいという感情も
このたった数年ですっかりすり切れてしまっていた。
孤独と静寂には慣れ親しんですらいた。
戦いの中でたとえ命を落としたとして
死んで後悔するほどのことなど、
紫音には何一つなかった。
別に死にたがっている訳ではないが、
意義のある死ならば受け入れられる。
ただ、そう思った。

紫音の宣言にほんの一瞬
美鶴は初めて驚きにも似た表情を浮かべたが、

「そうか。

君が自身で決断したことなら、
喜んでお願いしよう」

そう言って美鶴は何かを懐かしむように
ほんの一瞬、虚空に視線を彷徨わせた。

「君たちはどうだ」

虚空から戻された美鶴の視線を受けた遊星は、
一度ぐるりとメンバーの顔を見回すと、
す、と深く息を吸って、

「俺たちも強力しよう」

至極当然のことのように問いに答えた。

その目にはやはり一片の迷いはない。

まるで最初から自らの使命だった、
とでもいうかのように
彼らは遊星がいつか紫音に話したことを
あの時よりも熱く訴えた。

「これまで俺たちはどんな困難も乗り越えて来た。

俺たち皆との『絆』という名の力に勇気をもらって。
ネオドミノシティはそんな俺たちを出会わせ、
俺たちとともに成長して来た街だ。
どんなことがあっても必ず守ってみせる」
「そうだぜ。
俺らはもう何度も
ネオドミノシティを危機から救ってんだ。
今更怖じ気づいてなんていられねぇぜ！」
「フン、暇つぶしには丁度いい。
つき合ってやらんこともない」
「あの街にはパパやママ、クラスメイト、
大切なみんなが居る。
何があっても守ってみせるわ」
「怖くない訳じゃない。
でも私たちには
『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』たちがついてる」
「オレたちは『赤き龍』に選ばれた戦士なんだ！

この『力』と『絆』があればきっと大丈夫だ！！」

消極的な紫音とは対照的に
彼らは意気込んで頷き合うと、
徐に右の袖を捲り上げた。

その下から現れたのは、
不思議な紋様だった。

紋様はそれぞれ違った形をしていたが、
入れ墨ではないその鮮やかな赤い色味が
同種のものだと主張していた。

「……！」

突然、フラッシュバックするように
先日の戦いのことが脳裏をよぎった。

腕に空いた風穴のせいで朦朧とした視界の中、
夜空を切り裂き鮮烈に輝いた赤い光の柱を
彼らの痣は強く思い出させた。

「『赤き竜』の伝説ーーー

３０００年前プレ・インカ文明時代の
南米アンデス高地に存在した
『星の民』が崇めていた神の星のアストラル体のことだな。

５０００年前には『赤き竜』とその僕の５体の竜とともに
邪神をナスカに封印し、

自身も５つに分かれ人間界に封印されたと聞いたことがある。
邪悪な戦乱が起こったときには呼応するように姿を現し、
『赤き竜の戦士＜シグナー＞』にその力を宿した『竜』を使わし、
ともに世界に平安をもたらす。

……お伽噺だとばかり思っていたが、
まさか存在するなんてな。

『赤き龍』の使わした僕たち。

それがそのまま君たちの『ペルソナ』の形というわけか」

詠うように言って、美鶴は長く息を吐いた。

突如美鶴の口から語られた伝説に、
しかし改めて驚く者は誰もいなかった。

特に紫音はに至っては美鶴の話の内容について
全くと言っていいほど理解できていなかったが、
少なくとも彼らが有している
特別な力のことだろうとだけは想像がついた。

何千年も前からの伝説がこの現代で生きているなど
一聞には信じられない話ではあったが、
先日それらしい『力』の具現を目の当たりにしている以上、
紫音に反論の余地などなかった。

といっても、紫音自身が信じられない能力を有している時点で、
反論する気などないのだが。

今重要なのはそれよりも……。

「ぺるそな…？」

繰り返されるその単語を、
龍可が恐る恐る聞き返す。

すぐにも虚空に溶けてしまうようなそのつぶやきを、
しかし美鶴は聞き逃すことなくすくい上げた。

「そう。

それが君たちの素養であり、
『力』の代名詞だ。

自らの抑圧された心、
トラウマとも言うべきそれを自由に飼いならす『才能』。

ーーーー『ペルソナ』使い」

「ちょっと待って、
それって……」

美鶴の説明に、アキは顔色を変えた。

「ああ、君の想像通りさ。

状態の違いこそあれ、
『シャドウ』と『ペルソナ』は元々は同じもの。

だからこそ、『ペルソナ』使いにしか
『シャドウ』は倒せない。
そして逆を言うと『シャドウ』を相手にした時にしか
その効果を現実のものとすることはできない」
今日何度目かのそんな衝撃的な事実に
紫音は最早疲れさえも感じるほどである。
そんな紫音たちの表情を
美鶴はむしろ面白そうに眺めて、
「だが何はともあれ、
君たちからいい返事が聞けてよかった」
言うと美鶴は静かに席を立つ。
その様子に怪訝な顔をする一同の脇をすり抜けた美鶴は、
玄関脇の受付カウンターの裏に回ると、
カウンターの下から銀色のアタッシュケースを引っ張りだした。
陽光を鋭くはね返すアタッシュケースは、
紫音の持っているあの銀色の銃と同じ輝きをしていた。
がたん、と重量のある音を立てて、
それはテーブルの上に鎮座する。
アタッシュケースには傷一つついておらず、
ぴかぴかに磨き上げられたその表面に

覗き込んだ皆の顔を鮮明に映し出した。
皆の注目を浴びる中、
美鶴はケースにいくつもつけられた
旧式だが頑丈な錠を一つずつ丁寧に外していく。
そうしてついに最後の錠を外した美鶴が
重いその口の中身をこちらに向ける。
中に収まっていたモノが光に晒されて、
ぎらりとした照り返しを放った。

「君たちに託そう。
受け取ってくれ、これが君たちの『召喚機』だ」
そういって美鶴は腰を落ち着け直した。
果たして中に収まっていたのは、
先月まで紫音たちが血眼で探し回っていた
あの銀色の銃であった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

Conference 1 ～The latter half

遊星たちはケースの中にずらりと並んだ冷たい質感の銃を
神妙な面もちで眺めていたが、
やがておずおずと手を伸ばしてそれぞれの手中に収めた。

「使い方は神無瀬がしていたように、
心眼で対象を捕らえて自らに向けて引き金を引く。

擬似的に銃で打ち抜くことによって
『死』という恐怖を体験し、
その恐怖に打ち克つことで初めて
ペルソナは自我の外に現れる」

「なるほど。

だから弾が出ない作りの割に、
本物同等の精密な作りだった訳か」

技術者の観点と実戦での使用、
双方の面で実感のこもった遊星の言に、
ああ、と美鶴はどこか誇らしそうに頷いた。

「ところで、その敵ーー『シャドウ』とかいう
怪物はいつ現れるものなの？」

手に馴染まない銀色の銃を
不安顔で見つめていたアキが、
ふと問いかける。

重要なその問いに、
うむ、と美鶴はうなずいてーー
「それが、わからない。
そもそも奴らを察知できる人間自体が少ないため、
奴らの生態に関してはほとんど解明されていないんだ」
「はぁ？
じゃあどうやって退治するんだよ！」
露骨に顔を歪めるクロウに、
しかし美鶴は涼しい顔で話を続ける。
「まぁそう焦らないでくれ。
さっきも言ったように『シャドウ』は元は人間の精神体、
それ自体は普遍的なものだ。
それゆえにいつどこにでも現れる可能性はある。
だがその力の強弱は一定の周期で
変動しているんだ。
その力が最大になった時、
他とは違う巨大な力を持った『シャドウ』が現れる。
その周期は目下調査中だが、

現在それらが現れたのが先月始め、
そして君たちと出会ったあの夜だ」

「さて、こっからは俺たちの出番だな」

待ちくたびれたぜ、と肩をならして
セキュリティーから来たという大人二人が身を乗り出した。

「私たちが把握している限り、
ネオドミノシティでの『影人間』の出没および
『シャドウ』の目撃、そして被害報告があがったのは
『5月10日』と『6月10日』の未明のみ」

言いながら美影は
ファイリングされた資料をテーブルに広げていく。

紫音は広げられた資料を手前から順に目を通していった。

資料には事件が起きた日の深夜の事、
そして『影人間』となってしまった人々の
その後などが克明に記録されていた。

「『影人間』化の発症報告が
始めてセキュリティーに寄せられたのが、
5月9日から10日へ日付の変わった深夜0時半頃。

更にその数分後にはネオドミノシティのあちこちから
原因不明の意識不明者の通報が届き始めたの。

そしてその報告が唐突に減り始めたのが、

同日の午前二時。
６月１０日も先月とほぼ同じ時刻に
集団昏睡の通報が寄せられ、
一時半頃には収拾がついたわ」
「紫音や俺たちが『シャドウ』と対峙、
倒した時刻とほぼ一致するな」
資料の一枚を手に取って、
遊星がぽつりとつぶやいた。
美影の言葉を引き継ぐように、
今度は牛尾が口を開く。
「病院に搬送された意識不明者の内
比較的病状の軽い連中については、
個人差はあるものの
二日後には意識を取り戻してる。
そいつらに詳しい話を聞いてみた所、
影みたいな化け物に襲われたことや
そういった夢を見たってのは全員共通していた。
だが、その内の数人が、
ちょっと妙なことを話していてな……」
「妙なこと？」

顔をしかめるクロウに、
牛尾は言うべきか逡巡していたが
紫音や遊星たちの強い眼差しに負けておずおずと口を開いた。

「何人かが言うんだ。

襲われた日は、満月だった、と」

牛尾の報告に、紫音ははっと目を見開いた。

満月。

そう、確かに満月だった。

紫音は記憶を辿る。

遊星たちと廃寮に忍び込んだ日も、
龍亞に呼ばれて双子の家を訪ねた時も
夢に見る青と白の空間にも、
そして一年前、紫音がこの街を訪れた夜も、
欠けのない月はまんまると白く輝いていた。

そうして思い返せばまるで何かの因縁のように、
月はいつも紫音と共にあったのだった。

紫音はそれを告げようと口を開こうとして――

「だが事件のあった日は
いずれも満月とは関係ない日だった」

後に続いた思いもよらない一言に、
紫音は吐き出そうとしていた言葉をとっさに飲み込んだ。

唐突に飲み込まれた空気が喉にからみ、
軽く咳き込む。

一体どういうことだ？

考えるも答えなど出るはずもない。

「俺たちも最初は気に留めなかったんだ。

医者は意識不明から回復した直後で
記憶の混乱がおこっているとかって言ってるんだが、
この事件自体が普通じゃねえとわかっている分
何だか気になってな。

つっても、こっちじゃこれ以上のことは
何もわかっていないんだがな……」

お手上げだという牛尾に、
遊星たちも顔を見合わせる。

「……月か」

「月の様子はさすがに覚えてねーな。
両日とも月を見る余裕なんてなかったしよ」
一通りの話を聞いたジャックとクロウは
口々に言って顔を見合わせた。
紫音はちらりと他のメンバーの顔を伺ってみたが、
彼らの表情からしてどうやらあの巨大な満月のことを
はっきり認知しているのは紫音くらいのものらしい。
「『シャドウ』と月の満ち欠けの関連性は何かあるのか？」
ふと隣から上がったそんな疑問に、
美鶴は口許に手を当てて考え込んでいたが
「……いや、わからない」
言って首を横に振った。
全員の間に降りる重い沈黙。
紫音は自らの膝に視線を落とした。
奇妙な食い違い。
これが一体何を示すのかはわからなかったが、
その認識の違いは紫音と遊星たちとの間に深い溝を築いた。
まるで自分だけが彼らと外れているような、

そんな訳のわからない、不安。

「ともかく、次の戦いの際には、
気にかけておこう」

「そうしてもらえると助かる」

遊星と美鶴のそんなやりとりを、
紫音は全くの人ごとのように聞き流していた。

頭の中ではあの鮮烈に輝く月が
記憶という名の深い闇の中静かに昇っていく。

ありふれたその光景はしかし、
今の紫音にはとてつもなく不気味なものに映った。

紫音は結局、自身が見た月のことを
彼らに言い出せなかった。

Justice Rank2

２０１０年６月１４日　火曜日

図らずも久々の登校となった紫音は、
教材の詰まった鞄を手に普段通り教室の前に立った。

白い引き戸の向こう側からは、
すでに登校している生徒達の気配と話し声が
ざわめきとなって押し寄せてきていた。

そんな何気ない生活音を聞いていると、
裏で『シャドウ』などといった怪物が
はびこっているなど嘘のようだ。

考えながら紫音は教室の扉を引く。

途端、しん、とした静寂と
物珍しい動物でも見ているかのような
好奇の視線が紫音を出迎えた。

「……」

教室を間違えただろうか、とか
自分の顔にでも何かついているか
などといった考えが一瞬の内に頭を駆け巡った。

しかし教室の顔ぶれは普段と変わりなく、
今朝覗いた鏡の中を思い出すに身なりに異変はないはずだ。

ぼんやりと立ち尽くしている紫音を尻目に、
皆一様にこちらから視線を外すと
ひそひそと小声で話し始めた。

その光景は四月の終わりに
初めてここへ来た日のことを思い出させた。

付近で交わされる悪意さえ見え隠れしているような会話の中、
紫音は強ばった体を無理矢理に動かして自分の席へと進んでいく。

何が理由かはわからないが教室の様子からして
自分の席はもしかしたら少しくらいは荒らされているかもしれないな、
などといった根暗な想像が膨らんだが、
それは幸いにも外れ席は普段通りの有様であった。

教室の後ろの方に用意された
まだあまり使い込まれていない机と椅子。

鞄を下ろした紫音は
教科書等を机の中に適当に突っ込むと、
肩にかけたイヤホンを掴んで耳元まで引き上げながら
再び教室の入り口へと踵を返した。

電車の時間の都合上
普段から少し早めの登校を心がけている紫音だが、

今日ばかりは若干後悔していた。

ホームルームまではまだ時間がある。

普段なら机に伏して二度寝でもするところだが、
この雰囲気では流石に安心して眠れそうにない。

天気がよければ給水塔の付近で
寝そべることもできただろうが、
梅雨まっただ中のこの時期である。

外では今日もしとしとと降り注ぐ細かい雨粒が
絶えず窓を叩いていた。

ホームルームまでの３０分をさて、
どこでどう過ごしたものやら。

考えながら再び教室の入り口に立った時。

「神無瀬君」

異様な雰囲気の教室の奥から突如響いたその声に、
紫音は内心でどきりとして立ち止まると
ゆっくりと振り向いた。

振り返った先には女生徒が２名。

クラスメイトではあった気はするもののの
どちらもこれまで交流がないため、
何故このタイミングで話しかけてきたのか

全く見当がつかない。
紫音は内心でやや警戒しながら、
普段通りの声音を心がけて問い返した。
「何？」
すると彼女らは瞳に
好奇心という名の輝きを灯して
矢継ぎ早に質問をぶつけてきた。
「ねえねえ、最近休みがちだけど
どうして？」
「先生からは入院とか聞いたけど、
何かの病気？
それとも事故とか？」
「十六夜さんがお見舞いに行ってたって言ってたけど、
詳しいこと話してくんなくってさぁ。
てかさ、最近十六夜さんと一緒に居ること多いよね」
「学校でもよく二人で居るとこ見るし、
この間も二人で繁華街に居たよね。
二人ってどういう関係？
もしかして……」

彼女たちの口から無限に溢れ出してくる質問に、
紫音は思わず唖然としてしまった。

最初こそそれらの問いをどうはぐらかそうか悩んだものだが、
彼女たちの話が脱線して行くにつれて
考えるのも馬鹿馬鹿しく思えてしまうほどだ。

そんなことを考えている間にも
脈々と続いている会話になっているかも怪しい会話を止めたのは、
横手から上がった声だった。

「神無瀬さん」

朝のだらけた空気を割いた背筋が伸びるような折り目正しいその声に、
彼女たちはあからさまに不機嫌そうに顔を歪める。

しかし現れた第三者はそんなことには構わず、
紫音の隣に並んで、

「神無瀬さんがお休みしている間に
進路希望調査が行われました。

その時のプリントをお渡ししますので、
放課後までに記入して私か先生に提出して下さい。

詳しい説明をしますので、
少しつき合ってもらえますか？」

女生徒たちと紫音の間に闖入(ちんにゅう)してきた彼女は、
いつも通り背筋を伸ばしはきはきとした調子でそう告げた。
そのやんわりとした、しかし有無を言わせないその声音に
逆らえるものなど誰もいない。
女子生徒たちも現れた彼女を不服そうに睨みはするもののそれを彼女にぶつけるようなことはしなかった。
紫音は胸の内でほっと安堵の溜め息を漏らし、
彼女の誘いを受け入れ並んで教室を後にした。
彼女たちの視線が更に険しさを増したのを背中で感じていたもののあのままマシンガントークを浴びせ続けられるほうが
紫音にとって何倍も億劫であった。
ぴしゃりと隙間なく閉めた扉の向こうに
女子生徒たちの姿が消えたとき、
紫音は胸の内でそっと安堵の溜め息をついたのであった。

アカデミアの西端のアトリウムは
休み時間や放課後ならば
教師や生徒の憩いの場として賑わっているが、
後数分でホームルームも始まろうかといったこの時間には
紫音と彼女の二人だけであった。
紫音をここまで先導して来た彼女は

手近なベンチに腰を下ろしながら
一枚の用紙を差し出した。
「これが先程言っていた進路調査のプリントです。
放課後までに記入して提出して下さい」
彼女に倣ってベンチに腰を落ち着けた紫音は
簡素なその説明に惚けた顔を彼女に向けてしまった。
「え、と。
それだけ、ですか？」
思わず問う紫音に
彼女はにっこりと微笑んで、
「ええ。
必要なことは用紙に書かれていますので、
設問に従って記入して下さい」
あっけらかんと言い放たれて、
紫音は逆に戸惑いながら用紙を見つめた。
すると何がおかしかったのか、
彼女はふふ、と楽しげな吐息を漏らした。
笑い声に紫音が顔を上げると、
彼女は顔の横でぱたぱたと手を振った。

「ごめんなさい。
わざわざこんな所までお呼び立てした深い意味はないの。
ただ、神無瀬さんがお困りのように見えたので、つい」
ね、と言ってぺろりと小さく舌を出す彼女に、
紫音はぎこちなく、精一杯の微笑んでみせた。
「助かりました、委員長」
紫音の言葉に委員長こと麗華も微笑み返してくる。
紫音はアトリウムの壁に設置された時計をちらりと盗み見た。
少し話すだけの時間があることを確認すると、
いつも通りの無表情を作る。
すっと息を深く吸って胸の内で思い切りをつけると、
麗華にクラスの様子の変化について
戸惑っていることを告げた。
ほんの少しだけ逡巡の間があったものの、
今後のことを考えると
あの何とも居心地の悪い教室に一年間居続けるのは
正直勘弁願いたい所だった。
聞くは一時の恥、と呪文のように唱えて
紫音はこうしてクラスメイトの麗華に向き合っているのだった。

内心でがちがちに身構えていることなど知る由もない麗華は
ぱちぱちと眼鏡越しにその大きな瞳をしばたたかせていたが、
再び表情をほころばせて、

「ああ、皆に悪気はないんですよ。

むしろ逆でアカデミアに来てから
休みがちなあなたを心配しているんです」

人気者ですからね、と軽く付け足す麗華に、
今度は紫音が目をしばたたかせる番だった。

人気者。

聞き慣れないその単語に、
紫音は会話の流れを見失った。

それが自分のことを指しているのだと
どうしても思えなかったからだ。

こんなに空虚な自分が？

「え、と、……僕が、ですか」

戸惑いつつもたどたどしく問い返したそれは、
言葉として発してみるとどこまでも間抜けであった。

だが麗華はそんな紫音の問いにも
至って真面目にええ、とうなずいた。

「神無瀬さんは顔立ちが整っていますからね。
主に女性から人気があるようですよ」
「からかわないで下さい、
人気者は委員長もでしょう」
咄嗟に返したその言葉は、
決してただのお世辞でも嘘でもなかった。
いつも周りから頼られている、
信頼を寄せられ期待をされている
そんな意味を込めての言葉だ。
しかし麗華は瞳を伏せると寂しそうに呟いた。
「いいえ、恐らく残念ながら。
私は、こんな性格ですから、
周りの人を疲れさせてしまうことが多いようで……」
その言葉の後半の抑揚は妙に明るい、
というよりもむしろ諦めの境地だとでも言うように
彼女らしからぬ捨鉢な心持ちが滲んでいた。
だがその顔は投げやりな口調とは裏腹に
晴れ渡る空のように清々しい。
声とはちぐはぐな表情のまま、

彼女は語る。
「ですがクラス委員をするには向いている性格のようですから、
けして嫌いではないですよ。
もちろん、嫌になったり
面倒だと思うこともたまにはあります。
この間のように作業に時間を追われることも多いですし、
疲れもします」
でも、と続けながら
麗華はガラス越しに覗く空を見上げた。
麗華は厚い雲の間から雨粒とともに落ちてくる
弱々しい光を全身で浴びようと葉を伸ばす植物のように、
生き生きした様子を紫音に印象づけた。
「クラス委員としての責務を果たすことでみんなの役に立てて、
クラスの一員として受け入れてもらえている。
みんなとつながっていられる。
そう実感できるから、面倒でもこの役割が好きなんです」
屈託のない笑顔とようやく合わさった麗華の言葉に、
紫音はしかし無理はしないように、と短く返した。
大丈夫ですよ、と少しむっとして返してくる麗華に、
紫音はふっと安堵を吐息にのせて吐き出すと

足に力を込めて立ち上がった。

そのまま振り向かずに歩き出した紫音の背に、
麗華は『プリント、くれぐれも出し忘れないで下さいよ』
といつも通り律儀に念を押した。

紫音は肩に下げたヘッドフォンを耳まで引き上げざま、
ついでに片手を上げてそれに応えてアトリウムを後にした。

麗華と話をして、
彼女のことがまた少しわかったような気がした。

2

２０１０年６月１５日　水曜日

時計の長針が短針を追い越して
終わりなき円周の頂点に辿り着いたその直後、
紫音はふと息を吐いてそれまで下を向いていた頭をもたげた。

二十一時となった月光館学園男子寮一号館ロビーに
人影はほとんど見られない。

身の周りの支度とそれぞれの雑用に追われるこの時間、
こんなところで漫然と過ごしているのは
よほど日々の生活に余裕を持っている者か、
未だに有効な時間の使い方を見出せずにいる者かのどちらかだが、
少なくとも紫音が前者に分類されることは
この先一度として無いだろうと予測している。

現に頭の片隅では、もうこんな時間か、
などといった月並みな台詞が響いていた。

丸まっていた背と腰に溜まった疲労を追い出すように一つ伸びをして、
紫音はロビー脇のテーブルに広げたカード全てを
一枚の画面として当てはめるように遠目に見つめる。

別段それで何かが変わる訳ではないだろうが、
一種の簡単な気分転換のようなものだ。

そうしてテーブルの上に無造作に広げたカードを弄くっていた手を止め
投げやり気味にソファの上に投げ出すと、
ようやく目の前のカードから
完全に解放されたような気がした。

カードに記載された細かな文字に集中していたせいだろう、
上げた顔につられて天上を仰いだ視界は
ひどくおぼろげな世界を瞳に宿した。

乾いた目の表面にはしる
ちりちりとしたどこかむず痒いような痛みに、
紫音が反射的に閉じた瞳を右腕の背で覆った時。

「珍しいですね。

今日は出歩かれないんですか？」

はっきりとしたボーイソプラノ。

意図的に声音の抑揚を抑えたその喋りに、
紫音は瞳を覆った腕はそのままにぼそぼそと口を開く。

「……深夜徘徊も結構気力と体力を使うからね。

気分ののる時じゃなければ無闇に出歩いたりしないよ」

紫音がありのままに伝えれば、
短い嘆息が閉じた瞳の作り出す闇の中で木霊した。

三年生になっても相変わらずなんですね、
などという年不相応な斜に構えたその言葉を
しかし紫音は否定はせずにまぁね、とうなずいて、

「そういう君はこんな時間に何の用？

初等部の『児童』のロビーの使用は十九時まででしょ」

「トイレの帰りに通りがかっただけですから、
こんなのノーカウントですよ」

我ながら気のきいた冗談混じりの返しに、
少しだけ感情を高ぶらせながら
それでも負けじと減らず口を叩きかえす彼に、
紫音は瞳を覆っていた腕を下ろして目を向けた。

潤った瞳がぼやけた視界の中で捕らえたのは、
眉根を寄せてこちらを見下ろす
おおよそ可愛げという要素を
どこかに落として来てしまったような少年だ。

月光館学園初等部の制服にオレンジのサマーパーカーを羽織った
昨年と全く代わり映えのしない格好をした彼、
天田　乾<あまだ　けん>はおもむろにテーブルに目を向けると
その冷めた表情とは裏腹に子どもらしいふっくらとした唇を動かした。

「あなたこそ、こんな時間に一体何をしているんですか？」

問われて紫音は、んー、と少し記憶を遡って、
「手持ちのカードの整理。
元々は明日の授業で使うカードを探すだけだったんだけど、
ストレージをひっくり返してみたら
思ってたよりカードが溜まってたから
何か新しいデッキでも作れないかな、と考えてただけ」
紫音がありのままを伝えると、
乾は、ああ、と蔑むようにどんぐり型の瞳を細めた。
「そういえば今はデュエルアカデミアに
交流生として出向いているんですっけ。
カードゲーム主体の授業なんて
おふざけの過ぎる学校もあったものなんですね」
創設したのは順平さんみたいな人なんでしょうかね、
などど身も蓋もなく扱き下ろす乾に
紫音は心底苦笑を禁じ得なかった。
紫音が浮かべた曖昧な笑みに
乾は不振そうに眉根を寄せ、
「何がおかしいんですか？」
唇を硬く引き結んで珍しく感情的に嫌悪感を露呈させる乾に、
紫音は別に、と首を横に振ってテーブルに広がったカードをかき集めた。

真摯ではない紫音の態度に
乾はそれ以上何も言わずにしかし不服そうに
一つの束になって行くカードに視線を落としていたがーー

「あ、それ…」

突如上がった棘のないその声に、
紫音は黙々と動かしていた手をぴたりと止めた。

今度は何事かと顔を上げれば
先程とは打って変わって瞳をまん丸に開いて
何かを期待するようにこちらを見つめていた。

その視線の意図する所がわからなかった紫音が
とりあえず、といった調子でうなずいてみせれば、
乾はおそるおそる手を伸ばして集めたカードの内の一枚を引き寄せた。

『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン』
☆×３　戦士族　風属性
ＡＴＫ　１０００　ＤＥＦ　１０００
風を操り空を舞う翼をもったＥ・ＨＥＲＯ。
天空からの一撃、フェザーブレイクで悪を裁く。
Ｅ・ＨＥＲＯシリーズの通常モンスターの一つだ。

Ｅ・ＨＥＲＯのモンスターはそのほとんどが戦士族で、
現在の所全部で５９種類ものカードが存在しており、
カテゴリの中では断トツの一位であるとのことらしい。
専用のサポートカードも非常に多いため、
とかく扱いやすく人気のあるカテゴリだが……。
紫音は食い入るように見つめているカードと乾とを
しばし交互に見つめていたが、
ふっと一つの結論が頭に思い浮かんだ。
「ああ、そういえば同じ名前だね。
天田が毎週見てる特撮ヒーローの……」
「『不死鳥戦隊フェザーマンＲ』、
毎週日曜の朝９時放送です」
「……そう、それ」
予想よりも素早い返答に若干たじろいだが、
いつになく真剣な乾の様子に
紫音は前髪で隠れた頬の筋肉を少しだけ緩めると、
「それ、気に入ったんならあげようか？」
「え！いいんですか？！」
瞬間、乾はぱっと表情を輝かせた。

きらきらとした年頃の少年の瞳の中には
期待と喜びが無数の星となって瞬いている。
……が、それもわずかな間のことで、
はたと我に返った乾は慌てて普段通りの仮面を被り直すと
わざとらしく一つ咳をして、
「……あ、いや。
紫音さんに必要ないものなら、
その…、貰ってあげてもいいですよ」
動揺に上擦る言葉を何とか抑えて必死に取り繕う乾だが、
白い頬に浮かんだ紅色の濃さが彼の興奮具合を如実に現している。
素直じゃないなぁ。
瞳をふせて胸の内でそっと笑うと、
紫音は完璧なポーカーフェイスで
広げたカードの回収作業を再会しながら
お好きにどうぞ、と返した。
「――――っ！
あ、ありがとうございます」
言って乾は紫音に背を向けると、
カードをためつすがめつしていた。
後ろ姿からもわかるその喜びようといったら

もう小躍りしそうなほどで、
紫音はネオドミノで会った緑の髪の少年を思い出していた。
何もかもが正反対の性質を備えている彼らだが、
こうしてはしゃぐ乾を見ているとあながち根底は同じなのかもしれない。

だったら。

紫音はカードに意識を集中させている乾の背中に向かって、
何の気なしというふうに、

「どうせならそのカードでデッキを組んでみたら？」

「――――へ？！」

紫音の言葉にびくり、と面白いほどの反応を示して、
乾はまた素っ頓狂な声を上げた。

突然だったからか、
『デッキ』というものの意味が伝わらなかったからか、
こちらを向いてぱちぱちと瞬きを繰り返す乾に
紫音は更に言葉を続ける。

「コレクションとして大切にしてもらえるのもいいけどさ、
せっかくだしそのカードを使って遊んでみたら？ってこと。

そのほうがこっちとしても
渡した甲斐があるし」

予想だにしていなかったのだろう。
乾はしばらく惚けたように口を開けていたが、
遅ればせながら理解したらしい紫音の言にその表情を曇らせた。
「え、あ……でも僕は……」
先程までの勢いはどこへやら、
うつむいてもじもじし始める乾に
紫音はじゃあ、と重ねて、
「こっちの学校の勉強の手伝いって事で。
空回しよりも相手が居た方がはかどるし」
「それなら僕なんかよりも
順平さんにでも手伝ってもらった方がーー」
「ああ、アレはダメ。
今そんなもの持たせたら、
浪人どころか留年しかねない」
「でも……っ」
そんな子供っぽいことなんて。
そう動きかけた乾の口を、
紫音は大きなため息で遮った。

「まぁ、本当に嫌なら無理強いはしないけどさ。
『Ｅ・ＨＥＲＯ』シリーズは沢山カードが出てるから、
組み方によっては『ヒーロー大集合』、
なんてこともできたかもしれないんだけどな」

ぴくり、とまるでうさぎのように乾の耳が動いたのを
紫音は見逃さなかった。

そして何事か考える素振りの後、
乾はやれやれ、といった風に肩をすくめると、

「……あなたがそこまで言うのなら、
つき合って上げなくもないです」

それはどうも、と紫音が返せば、
乾は仕方ないなぁ、とぼやいたが
顔にはありありとした喜色が浮かんでいる。

そして同時に張っていた乾の肩から、
少しだけ力が抜けているようにも見えた。

乾は渡したカードを胸の前で大切そうに握りしめると、
ちらりと横目でロビーの時計を確認した。

つられて紫音もそちらを見やれば
早いもので長身は再び円周の頂点を過ぎようとしていた。

そろそろ部屋に戻って明日の準備をしなければ。

そう考えたのは自分だけではなかったようで
行動を起こす一瞬前に振って来た、
僕ももう行きますね、と言う声に紫音が一つうなずけば
乾はここを訪れた時よりも足取り軽く階段を上って行った。

紫音はテーブルの上で再び束になったカードを
ストレージの中に収めると、
乾に続くように階段の一段目に足を踏み出して、

「最近は色々物騒ですから、
危ないことはしないで下さいよ」

突如頭の上から振って来たその言葉に、
紫音は螺旋階段を振り仰いだ。

階段と同じように連なる手すりに隠れてか
こちらから乾の姿は見えないが、
声の響き具合から察するにそう距離は離れていないように思えた。

「……深夜徘徊なら、ほどほどにしておくよ」

いつもの軽口でそう言えば、
すぐに返ってくると予想していた反論は
しかしいつまで経っても返ってはこない。

訝しげに眉をひそめて、
歩き出そうしたその時。

先程のカードを握った白い手が、
連なる手すりの隙間からにゅ、と突き出した。

「危なくなったときはこのヒーローみたいに、
僕はいつでもあなたを助けますから。

ーーー今度こそ、必ず」

それじゃ、おやすみなさい。

それを最後にぱたぱたと慌ただしい足音を響かせて、
乾は走り去っていった。

何の前触れもなく発せられた乾の言葉に
紫音はしばし呆然と首を傾げた。

彼の好きな特撮ヒーローの台詞かとも思ったが、
先程の乾の声音は恐ろしいほど真剣で
演技や冗談ではない、
実感をともなうほどの確かな重みを持っていた。

そしてその重みは不安という名の巨石となって
紫音の心に大きな波紋を広げた。

静まり返った寮の廊下の奥で閉まった扉の音は、
紫音の耳にいやに大きく響いた。

The Magician Rank3

２０１０年６月１６日　木曜日

学校帰りに通りかかった繁華街は、
平日の今日も人で溢れかえっている。

祭りのような喧騒をヘッドホンで塞いだ耳の向こう側に感じつつ、
紫音は信号が変わるのを待っていた。

ネオドミノシティの人口が一体どれくらいなのかは知らないが、
このスクランブル交差点で信号待ちをしている人々を見る限り
首都である東京にも劣らないように思えた。

日本最大の産業都市、ネオドミノシティ。

一介の地域都市だったこの街がここまで発展した一因がいちカード
ゲームだなど、
一体誰が想像できるのだろうか。

しかしながら都市の『発展』が、
必ずしもいいことだけをもたらすとは限らない。

車やバイクの流れが止まり、
立ち並ぶ歩行者用信号の色が一斉に移り変わる。

それを脳が認識し、
体が動くまで若干のタイムラグがあるものだが、

今日ほど紫音はその一瞬の間に感謝したことはなかった。
白い線で囲われた時間制限つきの歩道を、
一台のD・ホイールが勢いよく横切った。
一瞬車かと見間違えるほど明らかに違法な改造を施した大型のそのD・ホイールは
横断歩道を渡ろうとしていた紫音のすぐ近くを行き過ぎた。
耳障りなエンジン音に周りから遅れて上がる悲鳴と怒号。
D・ホイールに切られた風が八つ当たりのように、
紫音の首元のリボンと髪を乱暴になぶる。
吸い込んだ排気ガスがツンと鼻の奥を刺激して、
紫音はむせ返りそうになる口元を押さえて
暴走するD・ホイールが走り去った方向を見た。
D・ホイールは直後に赤に変わった次の信号にも
スピードを緩める気配を見せない。
放置すれば大きな事故になることは必至だろう。
と。
「悪ぃ、ちょっと通るぜ！！」
聞き覚えのあるそんな声と共に、
一陣の黒い風が横断歩道を横切った。

黒い特徴的な飾りのついたD・ホイール、
その隣には黒と白の翼を持った一匹の龍が
銀色の尾羽をはためかせながら並走している。

D・ホイールに跨った人物は、
取り付けられたデュエルディスクから
一枚カードをドローすると、

「バトルだ！！

『ブラックフェザー・ドラゴン』でダイレクトアタック。

ノーブルストリーム！！」

高らかに下されたその命に、
龍は真っ黒い羽を散らして大きく羽ばたいた。

ばさりと音を立てて龍が羽ばたくたびに
まるで使い手の感情の高ぶりを現すかのように
先程まで白かった龍の翼の色が赤く染まっていく。

その色がたぎる血潮のように真っ赤に染まったとき、
鳥のように鋭い嘴から翼と同じ色の呼気を吐き出した。

呼気は前方を走るD・ホイールを違うこと無く射抜いた。

直後、情けない悲鳴が大通りに木霊し、
暴を続けていたD・ホイールは
煙を上げてみるみる速度を落としていく。

勢いを失い信号の手前で停まったD・ホイールの主は、
乱暴にヘルメットを取ると癇癪を起こした子どものように
悪態をついて太い拳をデュエルディスクに叩き付けた。
その音に付近の通行人が驚いて後ずさる。
「こら！
一般人ビビらせてんじゃねえよ」
ややあって暴走していたD・ホイールの横に停車した
黒いD・ホイールの乗り手が、
被ったヘルメットの下からくぐもった声で叫んだ。
「ったくよぉ、あんたも懲りねえよな。
いい加減そのごてごてした改造パーツ取っ払って、
まともになってくれよな」
セキュリティの制服に身を包んだその人物は
跨がっていたD・ホイールから軽快な動作で地面に降り立つと、
未だに煙を上げ続けるD・ホイールの上で
地団駄を踏んでいる大柄な男の肩を一つ叩いて
諭すような口調で言う。
「うるせぇ！
ちくしょう！今日こそ逃げ切れると思ってたのによぉ…」
肩に置かれた手を乱暴にはね除け

がっくりとうなだれる暴走D・ホイールの主に、
彼はへっ！と鼻先で笑うと、
「ハイウェイパトロール随一の腕前を持つ
このクロウ様から逃げきれるわけねえだろ」
頭を覆っていたヘルメットを脱ぎ捨てると、
得意そうにそう言った。

このネオドミノシティにおいて
このような事はままあるものだ、と、
前に誰かが言っていた。

日本のどこよりも様々な文化が入り混じるこの場所では、
交通法規を守らない車両の暴走など日常茶飯事なのだそうだ。

とはいえ大抵それはデュエル専用のハイウェイでの事で、
一般歩行者が巻き込まれることは少ないのだが。

普段はモニター中継でしか見ることのないライディングデュエルの
決着に、
最初の内こそ物珍しそうに見ていた通行人たちも
時間が経つごとに一人、また一人と散っていく。

結末を見届けた紫音も
そんな見物人たちに紛れ、静かにきびすを返そうとして――――

「！

おーい、紫音！！」

見物人の輪の中心からかかった声に
紫音はひたり、と動きを止めた。

足元に向けていた視線をあげれば、
人ごみをかき分けて懸命にこちらに向かい来る人影が見える。

傾いた陽光が同系色をした彼の逆立った髪を、
鮮やかに照らしている。

紫音は肩にかかったヘッドホンから手を離すと、
いつものように制服のポケットに両手を収めて
ようやく正面に立った彼へと向き直った。

「よう、数日ぶりだな。

学校帰りか？」

この場の話題の中心人物の一人である彼、クロウは
片手を上げていつもの軽い調子で喋りかけてきた。

紫音はこの人ごみの中から
よくピンポイントでこちらを見つけられたものだ、
と内心で少しだけ感嘆しつつ、
こくり、と一つうなずいてみせる。

「そっか。

こっちは……まぁ、見ての通り一仕事片付いたトコだ。
まったく、毎度毎度いい加減にして欲しいモンだぜ」
「そんなに多いんですか？」
「ああ。昼夜問わず、暇な連中だぜ。
ま、奴らの面倒を見るのも
ライディングデュエルの相手探しの手間が省けるから
俺としちゃあながち悪いことでもないかもしれねぇけどな」
からからと陽気に笑うクロウに、
紫音はやれやれと肩をすくめる。
当事者同士にとってはそれもいいかもしれないが、
ルールに則って慎ましく生きている善良な一般市民としては、
他人の火遊びに巻き込まれて危険な目にあうのは
ごめん被りたいところだった。
不満そうに吐息を漏らす紫音からそんな雰囲気を察したのか、
クロウは少しだけばつが悪そうに手をぱたぱたと振ると、
「いやいや。今のは、そう。
『言葉の綾』って奴だよ。
それに普段はデュエルレーン上でサシでの対決になるから、
こういう事故一歩手前の状況は少ないからさ……っと。

そういや紫音は怪我とかなかったか？
ちらっと見えた限りじゃ接触はしなかったはずだけど」
そのあからさまな話題の切り替えに
紫音は数秒じと目でクロウを見つめたーーが、
それだけで不満の言葉が口から漏れることはなかった。
クロウの不謹慎な先の言葉に
言いたいことが無いわけではなかった。
直接には彼のせいではないにせよ、
紫音の身に危険が迫っていたのは間違いないのだから。
言いたい『言葉』は、ある。
だがその言葉に乗せる『感情』がないのだった。
感情というのは鮮度が落ちやすいもので、
特に恐怖から来る怒りはそれが顕著である。
危険を感じた直後ならばともかく、
あの瞬間から随分と時間が経っている。
加えて紫音自身があまり一つの物事に頓着できない性格だ。
自分の中の興味心が薄れていくにつれて
その直後にあった苛つきなどすでに霧散してしまっていた。

どうでもいい、か。
いつも通りの言葉を胸に、
紫音は軽く両腕を広げて見せる。
「見ての通り擦り傷一つありません」
ついでにぎこちなく笑ってみせれば、
クロウはほっとしたようにそっか、と笑った。
……のもつかの間。
すぐにその笑みを引っ込めると、
クロウはいつになく真剣な表情で
そうそう、と切り出した。
「ところで紫音。
この写真に映ってるモンに心当たりないか？」
差し出されたのは一枚の写真。
紫音は少し首を傾げながらそれをのぞき込んだ。
セキュリティの彼が問うのだ。
写真に写っているものはてっきり人か、
探し人などの個人が特定できるようなものかと考えていたのだが。
「……カード？」

そう。
写真に映っていたのは、一枚のカードだった。
白い枠に金字でカード名が記されている。
シンクロモンスター、『蘇りし魔王　ハ・デス』。
一見には何の変哲も無い、ただのカードだ。
そしてそのカードにも心当たりはない。
紫音は覗き込んでいた写真から顔を上げると、
一つ緩く頭を横に振った。
「そっか……」
落胆したような、しかしその答えをわかってもいたような、
様々な感情が入り交じったクロウの声。
紫音が説明を求めるように無言で見つめると、
クロウは珍しく少し口ごもりながら
ぽつりぽつりと答える。
「こいつは……、普通のカードとは少し違ってさ。
デュエルで使用すると実際のダメージが発生するんだ。
俺らセキュリティの間では『闇のカード』って呼ばれてる。

昔、どっかの研究所が開発したらしいんだが、
ンな危ねぇモンを世の中に出す訳にもいかねえ。
研究は凍結されたんだが、
試作カードの何枚かは既に流出しちまった後でさ。
そいつは最近になって目撃情報が上がったカードなんだ」
クロウの口から語られる物騒な話に、
しかし今ひとつ実感のわかない紫音は
ただ無表情で首を傾げるばかりだ。
そんな紫音の反応にクロウは
はは、っと乾いた笑いを立てて、
「ま、そうだよな。
都市伝説でしか語られねぇような話だからな。
けど、『闇のカード』の効果は本物なんだ。
……昔、俺に大切なことを教えてくれた人も、
『闇のカード』を使ったデュエルに負けて……」
言葉を切ったクロウは
何かを耐えるように唇を噛み締めている。
その演技とは思えない様子から、
クロウのこのカードに対する思いの強さが伺えた。

紫音はもう一度写真のカードをしっかりと記憶に焼き付けると、

「もし、見かけたら報告します」

そう伝えるとクロウは
雲間に差し込んだ光を見るように
瞳を眇めながら微笑んだ。

「ああ！

でも、本当に危険なモンだから、
絶対に深追いはすんなよ」

真剣に紫音の身を案じる彼の言葉に、
クロウなりの思いやりを強く感じた。

少しだけ世間話に興じた後、
紫音はクロウと別れて寮に帰った。

3

２０１０年６月１７日　金曜日

ネオドミノシティ最寄りの駅で電車を降りて改札をくぐると、
駅から出てすぐ目の前の地下への階段を下りた。

白い明かりが煌煌と照らす地下街は、
通行人の多さといい真昼の地上と変わらないにぎわいを見せている。

人の流れに逆らって歩く事数分。

それまで弾幕のように流れてきていた人々は、
進んで行くごとに段々とまばらになり
遂には誰も居なくなってしまった。

広い通路に一人分の足音だけが空しく響き渡る。

心なしか照明も薄暗いような気もする。

人々から忘れらてしまったようなこの通路の突き当たりで
紫音は地下鉄の切符を買うと、
改札をくぐり長い階段を下り更に地下へと潜っていく。

すでに停まっていた電車に乗り込むと、
やはり車内は紫音の貸し切り状態となっていた。

紫音が扉に一番近い座席に腰を下ろすと、

電車はまるでそれを待っていたかのように動き出した。
電車といってもモノレールであるため、
発車時の揺れも地下鉄特有の耳障りな轟音もしない。
滑らかに走り出した電車はややもすると地上へと上昇し、
そのまま正面の海の上を走って行く。
１８時を過ぎてなお燦々と降り注ぐ陽の光を照り返す海面の先に、
紫音の目指す地はあった。
かつてネオドミノ全域から迫害され、
忌まわしき地と呼ばれた対岸の孤島ー旧サテライト。
その昔起こったという旧モーメント暴走による未曾有の大災害、
その爪痕は大地にもそして人々の心にも大きく穿たれ、
富裕層のネオドミノと貧困層のサテライトは大きな確執を抱えていたという。
その格差は表向きには改善されたと言われているが、
長年に渡って染み付いた因習や認識は簡単には取り除けないものだ。
ダイダロスブリッジを通じて
互いを自由に行き来できるようになったとはいえ、
その数はと言えばご覧のありさまだ。
自分以外に誰ものっていない車内を見渡して、
紫音は再び車窓へと視線を戻した。
遊星たちの言う通り、

この街でもまだまだ問題は山積みのようだ。

伴奏の練習もいよいよ大詰めだった。

このひと月の間、紫音は固まった指をほぐす作業から始め、
メトロノームのテンポに合わせて右手、左手、そして両手での演奏
練習を経て、
音楽記号による注意を意識し、音の強弱をつけるところまでこぎ着
けていた。

昔の勘が完全に戻った訳ではないが、
それでもひと月前より随分まともになった。

後はせめてクラスメイトには付け焼き刃を悟らせないよう、
いかにそれらしい演奏をするか、だけである。

ふと、紫音が顔を上げると窓の外は完全に陽が落ちていた。

ここに来る紫音のために
マーサが用意してくれた時計を見れば、
二十時をとうに回っていた。

一応寮に門限はあるが元々破った所で大した罰則などはなかったし、
今の紫音は交流生として遠方へ通う身であるため、
理由を話せば咎められる事はあまりない。

ただこの時間になると食堂が閉まってしまうため、
帰りに食料を調達して帰らなければならないくらいか。

今日は少し長居し過ぎたな。
思いながら帰り支度をしていると、
部屋の戸がノックされた。

はい、と返事して扉を開ければ
そこにはこのマーサハウスの住人である少年が居た。

名前はわからないが、
特にクロウを慕っている子どもの一人だったように思う。

つんつんと元気よく外に跳ねた髪をしたその少年は
紫音を見上げて、

「マーサがもう遅いから晩ごはん食ってけって。
連れてくるように言われたんだ」

そう言って少年は紫音に背を向けると
さっさと廊下を歩き出す。

紫音はノックに出るためにとりあえず携えた鞄を抱え直すと、
少年について廊下を歩いた。

少年は玄関から入ってすぐ脇の扉に差し招くと、
部屋の中央に据えられた多人数用のテーブルの向かいに腰を下ろした。

入り口に立ち尽くして程なく、
奥の扉からマーサが食器を手に現れた。

「おや、そんなとこで何してるんだい。
遠慮せずにお座りよ」
席を勧められて、紫音はありがとうございます、
と一礼して席に着いた。
食卓に並べられた料理はどちらかと言えば質素だったが、
顔にかかる湯気はそれまで忘れていた食欲を呼び覚ます香りであった。
「大したものはないけど、
栄養と愛情はたっぷりこもってるからね、
沢山お食べ」
にっこりと告げるマーサに、
紫音は両手を合わせるといつもより大きな声で言った。
「いただきます」

「それにしても今日はまた集中してたようだね」
紫音の前に食後のお茶のカップを置いて、
マーサは言う。
紫音は少し気まずそうに表情を歪めて、
「すみません、長居してしまった上に

ごちそうになってしまって」
するとマーサはきょとんと目を丸めて直後、
少し顔を上に向けると豪快に笑った。
「いいんだよ。
わざわざ遠い所から来てるんだからさ、
気の済むまで練習しておいで」
「恐縮です」
重ねて頭を下げる紫音。
「練習の方は順調に進んでるかい？」
「おかげさまで、概ね完成しました。
後は当日まで微調整と繰り返し練習するだけです」
そうかい、と返してマーサは、
す、と優しげに瞳を細めた。
そして思いもよらない事を口にした。
「紫音、あんたは何だか遊星に似ているね」
その言葉に紫音は自分でも驚くほどびくり、と体を震わせると、

弾かれたように顔を上げた。

一瞬、マーサが何を言ったのか紫音には理解できなかった。

耳から捕らえた情報、

そして脳に刻まれた言葉は間違いなく

『紫音』が『遊星』に似ていると言っていたが、

感情が、理性が、それを激しく否定した。

あの、誰からも絶対の信頼を寄せられ、

そして彼自身もその期待に余す事無く応えている、

夜空にぼんやりと浮かぶ月よりも明るく輝く星のような彼。

自分を卑下する訳ではけしてないが、

明らかに次元が違いすぎる。

「僕が、ですか？」

震える唇で、紫音はおそるおそる問い返す。

できれば聞き間違いであって欲しい。

しかしマーサはこちらの動揺など全く気にしていない様子で、

一つ大きくうなずいた。

がつん、と金槌で頭を殴られたような衝撃が走った。

同時に胸の奥からふつふつと沸き上がる疑問の数々。

何故？

己の中で激しく繰り返されるその問いかけを、
しかし紫音はすぐに口にすることができなかった。

何故だかはわからないが
それを知れば紫音は自分自身を、
『神無瀬　紫音』という人物像を
見失ってしまいそうな気がした。

動揺に揺れる瞳を隠そうと
紫音はカップに注がれたお茶を見つめる。

俯いた拍子に落ちて来た
いつもは少しうっとうしくさえ思う長い前髪が、
今だけは紫音に小さな安心感をもたらした。

「おい」

不意に横手からかけられた別の声に、
紫音は沈んでいた暗い考えから顔を上げた。

同時に紫音はそれまで浮かんでいた表情を消し去ると、
普段通りの無表情を張り付ける。

声をかけたのは先程紫音をこの部屋まで案内した少年だった。

向かいの席でこれまで黙ってゲームをしていた彼は、
ＰＳＰをテーブルに置くとじっと紫音を見つめた。

「モンハン、」

少年の口からこぼれたその単語に、
紫音は何の気なしにＰＳＰの画面に視線を向けた。
画面に映っていたのは果たして先月末に発売された
『モンスターハンターポータブル３ｒｄ』の舞台、ユクモ村であった。

設定では湧き出た温泉による観光で栄えた村で、
美しい紅葉とこれまでの村々にはない
観光地らしいにぎわいのある村だ。

そういえばいつだったか順平に頼まれていたこのゲームを
クロウに譲ったことがあったっけ、
と紫音はぼんやり考えた。

その考えを読んだ訳ではないだろうが、
少年はそのことについてぽつり、とこぼした。

「……クロウ兄ちゃんが、
前に紫音に譲ってもらったって言ってた」

言ってこちらの様子をちらちらと伺う少年に、
紫音はどう返していいか悩んだが
そのこと自体は事実であるため
ああ、とうなずいた。

そのことについて紫音自身は何の感慨もないが、
少年はびくり、と小さく体を震わせるとおそるおそると言った様子で、

「その後、紫音は買えたの？」
問われて紫音は首を横に振る。
すると少年はショックを受けたように、
気まずそうに俯いた。
お互いの間に渦巻き始めた重い空気を、
しかし紫音はあえて無視して少年に話しかけてみた。
「そのシリーズの前作はやってたの？」
「ううん、初めて」
「武器は何使ってるの？」
「大剣」
「どこまで進んだ？」
「まだ村の下位ランク。
どうしても倒せない奴が居て……」
「ふーん……そのモンスターって？」
「『クルペッコ』」
『クルペッコ』……３（ｔｒｉ）初出のモンスターだ。

順平に勧められて始めた紫音は２ｎｄＧしか遊んでいないため、
実際にそのモンスターと戦った経験はないが、
プレイ動画や情報で知る限りでは
『イャンクック』の代わりとして登場しており、
初心者の第一の壁となるモンスターとしてデザインされているようだ。

大型モンスターとしては小柄な方で、
動きも『イャンクック』とそう大して変わらないため
基本の動きを把握すればそこまで苦戦する相手ではないはずだが、
少年は今作から始めたばかりだ。

恐らくまだ操作や作中での武器の扱いに不慣れなのだろう。

『気長にがんばれ』という月並みな励ましを返そうとした時、
先程の会話で少し打ち解けられたのか、
今度は少年が紫音に問う。

「紫音はモンハンうまいの？」

「……普通程度には」

紫音はたどたどしく答えた。

そう、普通だ。

２ｎｄＧ時代はメイン武器以外にも一応全武器の基本動作はできたし、
村の最難関クエスト『モンスターハンター』もクリアした。

とはいえF(フロンティア)に居るような猫火事場ノーダメクリアが普通の、
最早プロのハンターと呼ぶにふさわしい腕前をしている訳では決して
てない。

G級で運良く回復薬を使わずに済む時もあれば、
何を血迷ったか村下位で三落ちしてクエストに失敗することもある。

「ふーん……」

期待通りの返答では無かったのか、
少年はそう返すと再び俯いてゲーム画面を見つめた。

そして再び部屋に響くかちゃかちゃというボタンの音。

その様子に紫音はふっと息をついて、
がたりと席を立つ。

彼の後ろの時計が示すには時刻は九時半過ぎ。

何だかんだと、
今日は本当に長居しすぎてしまった。

「そろそろ帰ります。
長い間お邪魔してしまいました」

「そうかい、気をつけて帰るんだよ」

『またおいで』と笑顔を浮かべるマーサに、
紫音は会釈で返して玄関をくぐった。

街頭の少ないサテライトの真っ暗な夏の夜空を見上げながら
帰路につこうとした紫音の背中に『おい！』と先程の少年の声がかかった。

紫音が振り向くとリビングの窓から身を乗り出した少年は、

「モンハン、買えよな。
今度、一緒に狩りに行こうぜ！」

そう言って大きく手を振った。

紫音は『そのうちに』と、
小さく手を挙げて応えた。

紫音は誰もいない帰り道を一人歩きながら、
伴奏の練習の息抜きにならつき合ってもいいかな、などと考えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7273t/

遊戯王5D's×ペルソナ３　Episode yourself ～ Half moon

2012年1月11日02時54分発行